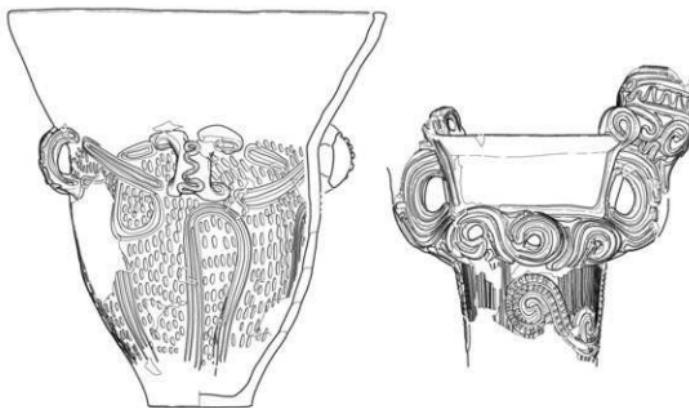


# 酒呑場遺跡 (第5次)

SAKENOMIBA SITE

—畜産酪農技術センター長坂支所施設等整備事業に伴う発掘調査報告書—



2019. 3

山梨県教育委員会  
山梨県農政部



# 酒呑場遺跡（第5次）

SAKENOMIBA SITE

－畜産酪農技術センター長坂支所施設等整備事業に伴う発掘調査報告書－

2019. 3

山梨県教育委員会  
山梨県農政部





酒呑場遺跡第5次調査区遠景（八ヶ岳方面を望む）



酒呑場遺跡第5次調査区 正面俯瞰写真

卷頭写真 2



5号住居跡埋設土器出土状況



56号土坑遺物出土状況



7号住居跡出土遺物 集合写真



出土曾利式土器 集合写真

# 酒呑場遺跡第5次調査のあらまし

**酒呑場遺跡**とは、北杜市長坂町長坂上条にある、今から約4000年～6500年前（縄文時代前期から中期）を中心とした集落遺跡です。山梨県埋蔵文化財センターでは、1994年度から1996年度までの第1次～第3次調査、2000年度に第4次調査を実施しており、2017年度に第5次となる発掘調査を実施しました。



第5次調査区 東側から撮影



● 前期前半 ● 前期後半 ● 中期初頭 ● 中期中葉  
● 中期後葉 ● 中期末 ● 晩期不詳

**大**集落を形成する酒呑場遺跡ですが、時期ごとに集落の中心を変えていることが分かりました。左の図は、現在の航空写真に調査区を重ねたものになります。縄文時代前期の集落が中心付近で形成されたのち、北側を中心に縄文時代中期中葉の環状集落がつくられ、中期後葉になると南側を中心に同じく環状の集落がつくられるようになります。

今回の調査区は、バスケットコート1個分くらいの面積でしたが、前期後半の住居跡2軒、中期後半の住居跡10軒、前期後半と中期後葉を中心とした土坑89基、前期後半の竪穴状遺構2基が見つかりました。

**出土**した土器や石器などの遺物は、プラスチックの箱で 70 箱以上となりました。474 m<sup>2</sup>の面積ながら、たくさんの遺物が発見されたことが分かります。実は、酒呑場遺跡の過去の調査で出土した遺物は、八ヶ岳南麓で育まれた豊かな縄文文化を示す資料として、2013 年度に 683 点が国の重要文化財に指定されています。

日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」は 2018 年に認定されたもので、酒呑場遺跡の過去の出土遺物も構成文化財となっています。今回の出土遺物にも、これまでのものに匹敵するような、縄文世界を映しだした魅力的な資料があります。その一つが、11 号住居跡から出土した水煙文土器です。土器の把手や表面に描かれた渦巻文などが、舞い上がる水煙をイメージさせます。



4号住居跡 石囲炉

今回の発掘調査で発見された、特徴的なものについて、4つだけ紹介したいと思います。一つ目は、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡から発見された石囲炉です。

縄文時代の人々は様々な目的で、竪穴住居の中で火を燃やして生活していました。石囲炉は、地面を掘りこんだところに、石と石を組み合わせて造るもので、現代の“掘りごたつ”に似た造りです。

今回見つかった石囲炉のうちには、炉の外側隅部に小型の土器を置く、珍しいタイプのものもありました。また、1号住居跡の石囲炉には、炉石の縁に沿って黒い付着物があり、今回の報告ではこの付着物についての化学的分析も試みています。



1号住居跡 石囲炉

**次**は、竪穴住居跡の入口付近に埋められた土器、いわゆる埋甕が挙げられます。巻頭写真2に掲載した5号住居跡のものは、大きな土器を逆さまにして埋めていました。同じ場所から、穴があけられた底の破片も出土しました。



7号住居跡 埋甕

また、7号住居跡では、2個の埋甕が並んで見つかりました。こちらは、そのままの向きで、底をくり抜いて埋めていました。



**3**つ目に、お墓と思われる土坑が見つかりました。巻頭写真2の下段に、56号土坑の調査時の写真がありますが、この土器を復元したものが左の写真です。3つの土器が、土坑の中に納められていたようです。

これらの土器のうち、1つは底に、1つは胴部に、わざと割ったような痕跡がありました。曾利式期の最終段階の特徴をもつ土器で、貴重な事例となりました。

**最**後に、貴重な石製品の発見もありました。住居跡を探しているときに出土したものですが、硬玉（ヒスイ）で作られた垂飾が見つかっています。ヒスイは新潟県の糸魚川で産出したものを獲得したのだと思われます。第1次調査時にも出土はありますが、今回、改めて酒呑場遺跡の重要性を裏付けることとなりました。



今回の調査によって、酒呑場遺跡の資料はますます充実し、縄文のムラの様子が解明されつつあります。本書が多くの方にご利用いただければ幸いです。

## 序 文

本書は、平成 29 年度（2017 年度）に発掘調査が行われた酒呑場遺跡第 5 次調査の発掘調査報告書です。この発掘調査は、山梨県農政部畜産課の畜産酪農技術センター長坂支所施設等整備事業に伴って実施されました。この事業は、畜産酪農技術センター長坂支所に新しくバイオテクノロジー研究棟を建設するもので、施設建設予定地点および電気配管・水道配管理設地点等の外構工事地点において発掘調査を行いました。

畜産酪農技術センター長坂支所は、施設のほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地である酒呑場遺跡であると考えられています。埋蔵文化財センターでは、畜産酪農技術センター長坂支所（旧酪農試験場）の施設増改築に伴って、1994 年度から 1996 年度まで第 1 次～第 3 次調査、2000 年度に第 4 次調査を行いました。その際に、縄文時代の竪穴住居跡 220 軒、土坑 5800 基以上が発見され、縄文時代前期～中期の大規模集落遺跡であると分かっております。出土した土器や石器などの遺物については、八ヶ岳南麓で育まれた豊かな文化を示す一括遺物として、2013 年度に 683 点が国の重要文化財として指定されています。

今回、第 5 次調査として、約 474 m<sup>2</sup>が発掘調査の対象となり、縄文時代の竪穴住居跡 12 軒、竪穴状遺構 2 基、土坑 89 基、礫集積遺構 1 基が検出され、土器や石器などの遺物がプラスチック箱にして 80 箱以上出土しました。調査地点は、酒呑場遺跡のこれまでの調査区の南西部にあたり、今から 4300 ～ 5000 年ほど前の縄文時代中期後半（曾利式期）の集落の中心域で、6000 年前～ 6500 年ほど前の縄文時代前期後半（諸磯式期）の遺構も多く見つかっています。今回の発掘調査によって、酒呑場遺跡の集落が徐々に場所を変えて変遷していく様子を確認出来るようになりました。特に曾利式期の住居跡からは、立派な石窯炉や埋設土器が見つかり、縄文人の精神世界の片鱗を垣間見ることができます。

酒呑場遺跡は、畜産酪農技術センター長坂支所内に位置しており、遺跡と施設が上手に付き合っていかなければ、埋蔵文化財の保存・活用という目的を達成することができません。今回の発掘調査にあたっては、施設関係者・関係機関の皆様に多大なるご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

最後に、本書が地域における歴史学習や研究等のために、多くの方にご活用いただければ幸いです。

2019 年 3 月

山梨県埋蔵文化財センター  
所 長 馬 場 博 樹



## 例　　言

- 1 本書は酒呑場遺跡第5次調査の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の調査原因是、畜産酪農技術センター長坂支所施設等整備事業に伴うものである。原因者は山梨県農政部畜産課である。
- 3 遺跡は山梨県北杜市長坂町長坂上条 621-2 に位置している。
- 4 発掘調査・整理作業・報告書刊行は教育庁学術文化財課からの依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センター（甲府市下曾根町所在）が実施した。平成 29 年度・30 年度の調査体制は次の通りである。  
調査主体 山梨県教育委員会　調査機関 山梨県埋蔵文化財センター  
所長 中山誠二（平成 29 年度）・馬場博樹（平成 30 年度）　次長 高野玄明  
調査研究課長 今福利恵（平成 29 年度）・笠原みゆき（平成 30 年度）  
史跡資料活用課長 保坂和博（平成 29 年度）・今福利恵（平成 30 年度）  
調査研究課リーダー 笠原みゆき・吉岡弘樹（平成 29 年度）・吉岡弘樹（平成 30 年度）
- 5 発掘調査は、熊谷晋祐（文化財主事）、浅川一郎（主幹・文化財主事）が担当し、基礎的整理作業は熊谷、浅川、本格的整理作業は熊谷、岩永祐貴（文化財主事）が担当した。  
作業員については次の通りである。  
発掘作業員 雨宮信次 オルドネス・ミヤヒラ・アダ・ファニー 柿澤勇 川住たまみ 功刀せつ子  
功刀千秋 小松千賀子 進藤美紀 中川恵美子 中山ひとみ 新田史男 前川三樹夫  
整理作業員 雨宮信次 猪股順子 長田良二 川住たまみ 越山敏子 小松千賀子 進藤美紀  
新田史男 外薗椋
- 6 本書の第2章1節を浅川一郎、同章2節を岩永祐貴が、第4章については、分析を委託したパリノ・サーヴェイ株式会社が執筆した。その他の文章執筆および全体の編集は熊谷晋祐が行った。
- 7 遺構・遺物の写真については熊谷晋祐・浅川一郎が撮影した。
- 8 発掘調査の期間は、建物建設予定地点について平成 29 年 5 月 9 日から 9 月 22 日まで実施し、追加調査として平成 29 年 10 月 17 日、18 日、24 日、11 月 29 日、12 月 1 日、20 日、平成 30 年 3 月 2 日に工事立会による調査を実施した。基礎的整理作業は平成 29 年 10 月 23 日から平成 30 年 3 月 30 日まで実施した。平成 30 年度本格的整理作業ならびに報告書作成を平成 31 年 3 月 15 日まで実施した。
- 9 出土遺物の整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターで実施した。
- 10 本書にかかる記録図面・電子データ、写真、出土遺物などは山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 11 発掘調査に係り山梨県教育庁学術文化財課が調整機関となり、埋蔵文化財担当久保田健太郎が担当した。
- 12 発掘調査及び整理作業にあたって、以下のように業務を委託した。
  - ・国土座標による基準杭の測量…株式会社テクノプラニング
  - ・RC ヘリによる遺跡全体、遺跡景観の航空空中写真の撮影…株式会社シン技術コンサル
  - ・採集炭化材および土壤、炉石付着物の化学分析…パリノ・サーヴェイ株式会社
  - ・一部の検出遺構および遺物出土状況のデジタル図化作業…株式会社テクノプラニング
  - ・出土遺物（一部の土器・石器）の図化およびデジタルトレース作業…株式会社アルカなお、遺構の測量及び図化システムとして、株式会社 CUBIC の「遺構くん」を使用した。
- 13 調査にあたり、次の方々からご教示・ご協力をいただいた。記して謝意を表する。（敬称略）  
櫛原功一 佐野隆 長谷川誠 保坂康夫 村松佳幸 北杜市教育委員会

## 凡　例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は、各図中に示した。原則として、遺構は竪穴住居跡 1/60、土坑・ピット・炉跡 1/40 とし、遺物は土器 1/3、1/4、1/6、土製品 2/3、石器・石製品 1/1、2/3、1/2、1/3、1/4、1/6 とした。
  - 2 遺物の注記は全て「サケ 5 次」を冠して、例えば光波番号がある住居跡出土のものについては「サケ 5 次 ○住 P△△」などとし、グリッド一括遺物（例：E 4 グリッド一括の場合）については「サケ 5 次 E 4」などとした。
  - 3 遺物実測図は口径および底径が復元できるもの、時期が推定できる文様をもつものを基準に選定した。
  - 4 遺構図版中のドットマークは遺物を示しており、付された番号はそれぞれの遺物に対応している。なお、「S—○○」とするものは、石器図版の番号に対応している。
- ドットマークは、土器●、石器・礫▲、黒曜石★、土製品☆、採取サンプル◇を基本とする。一部の住居跡や土坑においては、土器の帰属時期を細分し、□諸磯式、■五領ヶ台式、○中期中葉、●中期後葉で示している。
- 5 遺構断面図の左側基点に付した数字は標高（m）を表す。
  - 6 土器観察表中及び土層注記の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1990 年度版による。
  - 7 遺構の写真はニコン D 7200 デジタル一眼レフカメラ及び 35mm フィルムカメラで撮影した。
  - 8 本報告書中遺跡分布図は、国土地理院発行の 1/25,000 地図を利用した。
  - 9 発掘調査時および『年報』等に使用した遺構名・番号から、下記表のものは変更及び欠番とした。

新旧対応表

名称変更（旧→新）			欠番
2 号住居跡	→	1 号竪穴状遺構	8 号土坑
3 号住居跡	→	2 号竪穴状遺構	13 号土坑
5 号住居跡 2 号炉跡	→	5 号住居跡 vi 土坑	20 号土坑
5 号住居跡 3 号炉跡	→	8 号住居跡炉跡	

- 10 石圓炉の法量については、長径・短径を炉石の頂点間、深さは床面からの掘り込みで計測した。

## 目 次

巻頭写真図版

あらまし

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の目的と課題	1
第3節 発掘調査の経過	2
第4節 室内調査等の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 遺跡の概要と研究略史	6
第3章 調査の方法と成果	12
第1節 発掘調査の方法	12

第2節 基本層序	12
第3節 遺構と遺物	13
第4節 土製品・石器等の遺物	23
遺構図版	27
遺物図版	54
遺物観察表	107
第4章 自然科学分析	125
第1節 炭化物の分析	125
第2節 炉石付着物の分析	127
第3節 埋設土器等の土壤の分析	130
第5章 総括	134
第1節 酒香場遺跡の集落変遷	134
第2節 石開炉について	136
第3節 その他の遺構・遺物について	138

写真図版

報告書抄録・奥付

## 図 版 目 次

第1図 過去の調査区及びグリッド設定図	4	第22図 10号住居跡	42
第2図 周辺遺跡分布図	7	第23図 11号住居跡	43
第3図 遺跡詳細分布図	9	第24図 11号住居跡(2)・1号・2号竪穴状遺構	44
第4図 調査区設定図	9	.....	44
第5図 基本土層図	13	第25図 外構B区・C区遺構分布図	45
第6図 グリッド設定図	14	第26図 外構B区・C区	46
第7図 本調査区遺構分布図	27	第27図 外構B区・C区(2)	47
第8図 1号住居跡	28	第28図 土抗	49
第9図 1号住居(2)	29	第29図 土抗(2)	50
第10図 4号住居跡	30	第30図 土抗(3)	51
第11図 4号住居跡(2)	31	第31図 土抗(4)	52
第12図 5号住居跡・8号住居跡	32	第32図 土抗(5)	53
第13図 5号住居跡・8号住居跡(2)	33	第33図 1号住居跡出土遺物	54
第14図 5号住居跡・8号住居跡(3)	34	第34図 4号住居跡出土遺物	55
第15図 5号住居跡・8号住居跡(4)	35	第35図 5号住居跡出土遺物(2)・5号住居跡出土遺物	56
第16図 6号住居跡	36	.....	56
第17図 6号住居跡(2)	37	第36図 5号住居跡出土遺物(2)	57
第18図 7号住居跡	38	第37図 5号住居跡出土遺物(3)	58
第19図 7号住居跡(2)	39	第38図 6号住居跡出土遺物	59
第20図 7号住居跡(3)	40	第39図 7号住居跡出土遺物	60
第21図 9号住居跡・外構E区	41	第40図 7号住居跡出土遺物(2)	61

第 41 図	7 号住居跡出土遺物 (3) .....	62	第 67 図	石器 3 (石匙) .....	88
第 42 図	7 号住居跡出土遺物 (4) .....	63	第 68 図	石器 4 (石匙) .....	89
第 43 図	7 号住居跡出土遺物 (5)・8 号住居跡出土遺物・9 号住居跡出土遺物 .....	64	第 69 図	石器 5 (楔形石器・二次加工剥片・搔器) .....	90
第 44 図	10 号住居跡出土遺物 .....	65	第 70 図	石器 6 (石錐) .....	91
第 45 図	11 号住居跡出土遺物 .....	66	第 71 図	石器 7 (横刃型石器・原石・石核・打製石斧) .....	92
第 46 図	11 号住居跡出土遺物 (2)・12 号住居跡出土遺物 .....	67	第 72 図	石器 8 (打製石斧) .....	93
第 47 図	12 号住居跡出土遺物 (2)・13 号住居跡出土遺物 .....	68	第 73 図	石器 9 (磨製石斧・尖頭器) .....	94
第 48 図	14 号住居跡出土遺物 .....	69	第 74 図	石器 10 (磨石類) .....	95
第 49 図	1 号豎穴・2 号豎穴出土遺物 .....	70	第 75 図	石器 11 (磨石類) .....	96
第 50 図	土坑出土遺物 (3 土・31 土) .....	71	第 76 図	石器 12 (磨石類) .....	97
第 51 図	土坑出土遺物 2 (31 土・33 土) .....	72	第 77 図	石器 13 (磨石類) .....	98
第 52 図	土坑出土遺物 3 (34 土) .....	73	第 78 図	石器 14 (磨石類) .....	99
第 53 図	土坑出土遺物 4 (34 土・41 土) .....	74	第 79 図	石器 15 (磨石類) .....	100
第 54 図	土坑出土遺物 5 (43 土・53 土) .....	75	第 80 図	石器 16 (磨石類・石皿) .....	101
第 55 図	土坑出土遺物 6 (53 土・56 土) .....	76	第 81 図	石器 17 (石皿・礫石皿) .....	102
第 56 図	土坑出土遺物 7 (56 土) .....	77	第 82 図	石器 18 (礫石皿) .....	103
第 57 図	土坑出土遺物 8 (57 土) .....	78	第 83 図	石器 19 (礫石皿・大型磨石) .....	104
第 58 図	土坑出土遺物 9 (58 土・65 土) .....	79	第 84 図	石製品 .....	105
第 59 図	土坑出土遺物 10・遺構外出土遺物 .....	80	第 85 図	石器・礫平面分布図 .....	106
第 60 図	遺構外出土遺物・外構 C 区出土遺物 .....	81	第 86 図	暦年較正結果 .....	126
第 61 図	調査区一括出土遺物 .....	82	第 87 図	FT-IR スペクトル .....	128
第 62 図	土製品 (土偶・ミニチュア土器) .....	83	第 88 図	測定結果と食材の比較 .....	130
第 63 図	土製品 (土製円盤・獸面把手) .....	84	第 89 図	炭化物顕微鏡写真 .....	133
第 64 図	土製品 (その他) .....	85	第 90 図	酒呑場遺跡の集落変遷 .....	135
第 65 図	石器 1 (石鍬) .....	86	第 91 図	酒呑場遺跡台地南部域の土坑分布 .....	136
第 66 図	石器 2 (石鍬) .....	87	第 92 図	石圓柱の諸例 .....	137
			第 93 図	56 号土坑出土遺物に表現される "数の認識" .....	139
			第 94 図	酒呑場遺跡の屋内土器埋設遺構 .....	140

## 表 目 次

第 1 表	酒呑場遺跡周辺遺跡一覧表 .....	8	第 6 表	放射性炭素年代測定結果 .....	126
第 2 表	土坑一覧表 .....	48	第 7 表	樹種同定結果 .....	126
第 3 表	出土遺物一覧表 (土器) .....	107	第 8 表	安定同位体分析結果 .....	129
第 4 表	出土遺物一覧表 (土偶・土製品) .....	120	第 9 表	土壤化学分析結果 .....	131
第 5 表	出土遺物一覧表 (石器・石製品) .....	121			

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

酒呑場遺跡は八ヶ岳南麓に位置する我が県を代表する縄文時代の集落遺跡で、過去に1～4次の発掘調査が実施されている。この度、畜産酪農技術センター長坂支所の施設等整備事業に伴い、第5次となる発掘調査が実施されることになった。

山梨県教育庁学術文化財課では、平成28年10月と平成29年1月および3月に、事業主体である農政部農業技術課と協議を実施し、平成29年度中に発掘調査を実施することで調整をおこなった。事業は国庫補助金による緊急的な開発であったため、開発予定地点はこれまでの調査地点から推定される遺構の分布域と判断された。なお、建物基礎工事および電気配管・上下水道配管の埋設工事については、いずれも掘削深度が想定される遺構面の深度よりも深くなることが推測されたことから、検出遺構については原則として記録保存を目的とすることが協議された。

平成29年度からは、事業主体が農業技術課から畜産課へ変更となり、平成29年4月11日に学術文化財課、埋蔵文化財センター、畜産課、畜産酪農技術センター長坂支所職員の間で現地協議を実施、発掘調査における留意点等を確認した。同年4月14日、5月8日には県土整備部営繕課を加えて協議を行い、研究棟本体以外の外構工事地点に係わる調査を含めて、留意点等を相互に確認し、調整をすすめた。5月8日に事業課立会のもと現地の墨出しを行った後、5月9日から発掘調査を開始した。

なお、今回の埋蔵文化財調査に係わる法的手続き等は以下のとおりである。

- ・ 平成29年3月3日 文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が山梨県知事から山梨県教育委員会教育長宛に提出される（農技第2939号「埋蔵文化財発掘の通知について」）。
- ・ 平成29年3月13日 文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知についての返答が、山梨県教育委員会教育長から山梨県知事宛に提出される（教学文第3251号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」）。
- ・ 平成29年4月3日 畜産酪農技術センター長坂支所施設等整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書を山梨県農政部畜産課と山梨県教育委員会学術文化財課とで交換。
- ・ 平成29年5月10日 文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出（教理文第59号「埋蔵文化財発掘調査の実施について」）。
- ・ 平成29年9月28日 文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ提出（教理文第495号「埋蔵文化財の発見について」）。
- ・ 平成29年12月21日 追加調査で出土した埋蔵文化財について、文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ提出（教理文第586号「埋蔵文化財の発見について」）。
- ・ 平成30年4月16日 畜産酪農技術センター長坂支所施設等整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書（本格的整理作業、報告書作成・刊行）を山梨県農政部畜産課と山梨県教育委員会学術文化財課とで交換。

## 第2節 調査の目的と課題

酒呑場遺跡は、中部高地における代表的な縄文時代前期～中期の集落遺跡とされ、出土した遺物のうち土器・土製品463点と、石器・石製品220点の計683点は2013年度に国の重要文化財として指定されている。集落遺跡としては、計6,200m<sup>2</sup>が発掘されたC区（第2次調査）やI区（第3次調査）では、縄文時代中期初頭から中葉にかけての環状集落の存在が明らかとなり、大規模な集落を形成する点でもたびたび議論にあがる。このように酒呑場遺跡はこれまで行われてきた4次の発掘調査によって、集落構成や出土遺物の価値が評価され、県あるいは国レベルでの縄文時代の代表的な遺跡となっている。発掘調査された遺構・遺物の記録を正確に記録保存し、地域に還元し将来へつなげることが第一の目的である。

さて、今回の発掘調査地点は、先述の縄文時代中期初頭～中葉の環状集落域中心部から南に約120m離れた位置に所

在する。これはむしろ、縄文時代前期後半・中期後葉の遺構が主体的に発見された第1次調査のA区やB区に近く、B区から西に約70m離れた地点である。このことから、調査着手前より、調査地点からは縄文時代中期初頭～中葉の遺物よりも、前期後半あるいは中期後葉の遺構・遺物の発見が見込まれた。

縄文時代前期後半及び中期後葉の遺構・遺物については、A区やB区、I区の東南側にほぼ限定的に分布するが、調査面積の制約もあるため、その集落分布の範囲については限定的な解釈に留まっていた。発掘調査を開始すると、想定されたとおり前期後半・中期後葉を中心とした遺構群がみつかった。これにより、中期初頭～中葉の環状集落の南側には、前期後半と中期後葉の2時期の大規模な集落が広がることが確定し、当該集落域の機能、細別した土器型式による集落変遷など、集落構造を解釈するための課題が挙げられるようになった。また、中期後葉の竪穴住居跡から、良好な状況で地中に埋設していた石器炉や、土器埋設遺構などがみつかり、これらの構造・機能について、測量および化学分析を用いた科学的な手法による解明を目指した。

### 第3節 発掘調査の経過

調査の計画については山梨県埋蔵文化財センター調査研究課が主体となり、熊谷・浅川が担当し調査計画案を作成した。発掘調査区は、研究施設の建設予定地点である本体部分約400m<sup>2</sup>のほか、外構工事に係わる地点も本調査の対象とした。外構工事の施工位置と工法については、調査着手直前の5月8日の協議において決定したため、調査期間中の7月13日に学術文化財課と畜産酪農技術センター長坂支所とで打ち合わせを行い、外構工事地点の調査期間について再度調整を行った。外構工事地点については、外構B区～外構E区までを設定した。

発掘調査は平成29年5月9日より着手した。5月9日～12日、15日の5日間で、オベ付バックホウによるトレチ確認調査を伴う表土剥ぎを実施した。トレチは調査区内2箇所に設定し、遺物包含層および遺構確認面を観察した後に全面的な表土剥ぎを行った。なお、調査区脇には堆土を十分に置く場所がなく、オベ付ダンプにより場内の保管場所へ土砂を運搬・整地した。5月15日からは発掘作業員を8名雇用し、随時遺構の検出及び精査を実施した。5月16日は4級基準点測量及びグリッド杭打設を、株式会社テクノプランニングに業務委託し実施している。調査時における堆土の運搬、整地を目的として、6月5日よりミニバックホウとクローラーダンプ等を借用した。また、発掘作業員は5月24日より1名、6月26日より3名を増員している。なお、荒天により現場の調査が不可能な場合は、現場プレハブにおいて土器の洗浄を実施しながら、天候が回復するまで待機した。

遺構の調査は西側から実施していく、検出された順に遺構の番号を付し、竪穴住居跡および遺物の出土量が多い土坑を優先しながら精査していく。7月26日、5号住居跡のピット精査中に、逆位埋設した大型深鉢を発見する。8月4日、5号住居跡の建て替えた柱穴の相關関係について、ピットの深さや位置からa～cを想定した。7号住居跡は遺物の出土量が多く、8月23日には遺物集中としてブロックごとに写真測量用の遺物出土状況を撮影した。調査区東端にある56号土坑は9月6日から調査を開始し、ほぼ完形の3個体の深鉢が出土した。

外構工事地点については、職員・家畜の通路として使用している地点もある事から、7月13日の打ち合わせ後、畜産酪農技術センター長坂支所と調整をし、8月9日～8月24日まで外構E区（給水管埋設地点）、8月9日～9月22日まで外構D区（電話線埋設地点）、8月17日～9月22日まで外構B区（電気配管地点西側）、8月24日～8月30日まで外構C区（電気配管地点東側）の調査を実施した。0.15m<sup>2</sup>クラスのバックホウを8月9日、17日、24日の計3日間賃借し、外構工事地点の表土剥ぎ、埋め戻しをおこなった。外構工事地点については、狭小な調査区ながらも、住居跡や土坑などの遺構が確認出来たため、本調査区と同様に遺構を精査し記録をとった。

9月8日はシン技術コンサルに空中写真撮影を委託した。9月11日～14日まで、石器炉掘りかたや埋設土器、外構B区地点などの調査を実施し、9月14日に作業員雇用を終了した。9月15日に作業員休憩棟・トイレなどの設備を撤収し、9月20日～22日にオベ付バックホウ及びオベ付ダンプにより土砂の運搬と整地を行い、調査区を埋め戻した。なお、調査区壁に一部が突出していた土器について、9月20日に取り上げようとしたところ、水煙文土器である事が判明したため、急遽一部を50cm×50cmの範囲で拡大し、土器の平面図および縦断面図を作成した。

本調査終了後、追加調査として、外構工事地点の立会調査を数回実施した。これは、県内遺跡分布調査事業とは区別し、あくまで当事業の一環として位置づけ、物品の借り上げを行い調査している。給水管埋設地点（外構E区）における

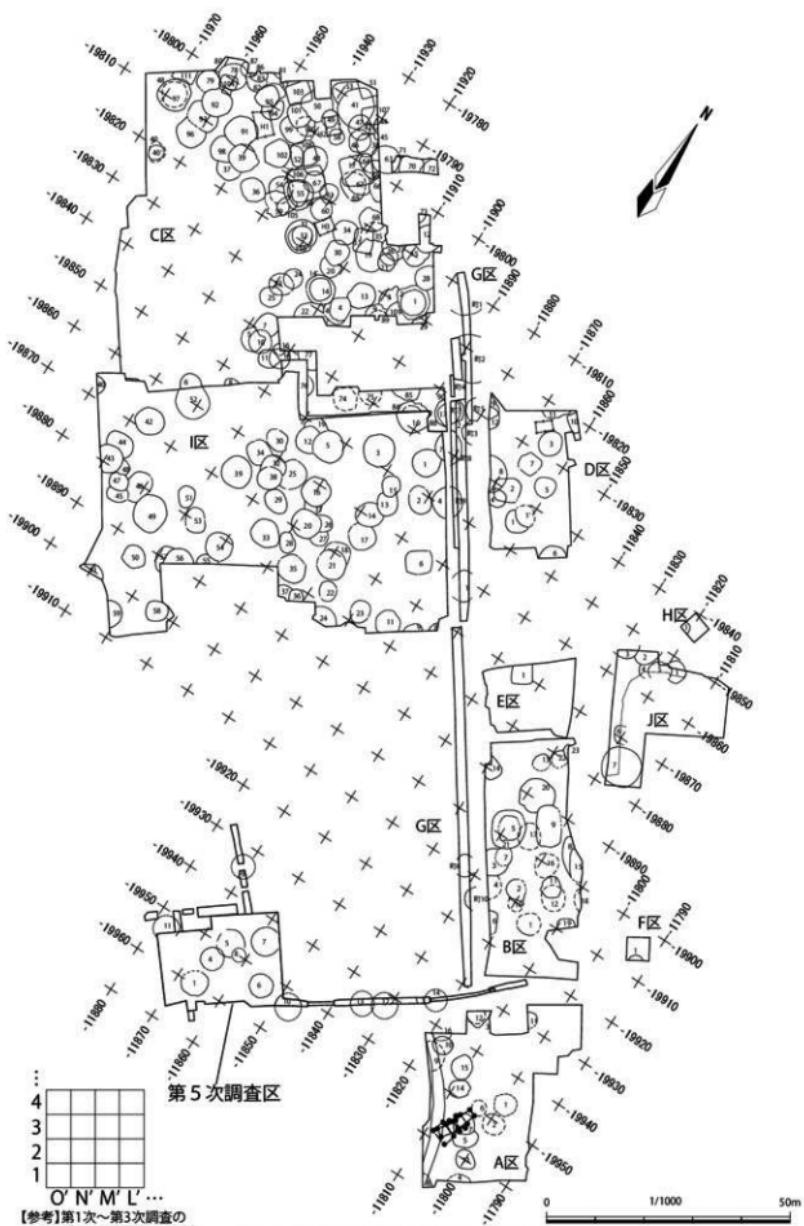
る立会調査は10月17日、18日に実施。発掘調査では調査できなかったマンホール周辺の切り回し部分で新規掘削範囲が僅かに拡大したが、大きな影響は認められない。10月24日には本調査区の北側にあるケヤキの抜根作業の立会調査を実施、ケヤキは全5本で、範囲は約20m<sup>2</sup>。ケヤキは巨木が多く、引き抜きではなく幹の周囲を掘り下げて太い根を切断した後にバックホウバケットで抜根し、その際遺物包含層に相当する層から遺物の出土があった。電気配管埋設地点（外構B区）については、施設内道路のため本調査できなかった2地点において、11月29日、12月1日に立会調査を実施した。外構B区と外構C区の中間地点では、遺構の覆土と思われる黒褐色土のプランが検出されたため、精査をしたところ遺物とピット状の遺構が確認された。よって、本調査地点から連続する番号で14号住居跡として記録をとった。下水道管理設地点については、12月20日に2m程度立会を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

12月20日の追加調査をもって、当初予定していた範囲は一度調査を終了した。しかし、平成30年1月17日に段差解消を目的とした最大30cmの掘削を伴う整地を実施したい旨の連絡を受け、2月6日に現地において営繩課等と協議を実施した。協議の結果、保護層30cm以上を確保することを前提として、立会調査で対応することとし、3月2日に施工された。立会調査の結果、表土の掘削に留まり、埋蔵文化財への影響はなしとした。

発掘調査に伴って、考古博物館・埋蔵文化財センターの職場体験で平成29年7月6日に中学生2名を受け入れ発掘調査体験を行った。7月8日土曜日には発掘体験セミナーを実施し、一般参加者36名が発掘調査を体験した。9月9日土曜日には遺跡見学会を実施し、参加は定員制として、計25名に遺跡の調査状況や出土遺物について説明を行った。また、埋蔵文化財センターHPには、酒呑場遺跡の発掘調査状況や整理作業状況を計6回に渡って更新をおこなっている。平成30年3月10日に、2017年度下半期遺跡調査発表会において一般参加者約100名の前で報告を行い、遺物の一部については「山梨の遺跡発掘展2018」において展示を行った。

#### 第4節 室内作業等の経過

今回の発掘調査において出土した遺物は、プラスチック収納箱にして75箱と、プラスチック箱に入りきらなかった大型の土器および石器数点である。平成29年度の基礎的整理作業では、平成29年10月23日から平成30年3月30日まで、遺物の洗浄・注記・接合作業及び遺構の図面整理・デジタルトレース、写真整理等を実施した。また、出土炭化物や炉石に付着した黒色物質、採取した土壤の理化学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託している。平成30年度は、平成30年4月16日に畜産酪農技術センター長坂支所施設等整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書が交わされ、平成30年5月28日より、遺物の実測・拓本、実測図のデジタルトレース、遺物の写真撮影、報告書図版の作成などの本格的整理作業を実施し、平成31年3月15日に発掘調査報告書を刊行した。



第1図 過去の調査区及びグリッド設定図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

酒呑場遺跡は山梨県北西部、北杜市長坂町長坂上条に位置し、地形的には当地は第四紀火山である八ヶ岳の南麓にある。遺跡とその周辺の地形は、小丘状の高所と幅の広い谷が入り組み、大きく緩やかに起伏した形状を呈する。この地形は約20万年前に八ヶ岳の山体崩壊によって流下した葦崎岩屑流の堆積面が侵食されたものであり、南方の七里岩台地へと連続する。

酒呑場遺跡の指定範囲は、畜産酪農技術センター長坂支所から山梨県立農業大学校に広がる小高い平坦面の頂部からその北・東・南の幅の広い谷底部までである。標高は、平坦面の頂部で710m、谷底は北部では700m、南部では680mである。遺跡の西線は大深沢川左岸の急崖となっており、遺跡と大深沢川河床との比高は約60mである。なお、埋蔵文化財センターによる酒呑場遺跡の発掘調査は今回を含めて5回実施されているが、調査位置はいずれも畜産酪農技術センター長坂支所の敷地内の平坦面部分である。

次に、周辺地域の調査に基づき表層地質について記す。地表から1m前後は降下テフラを起源とする腐植土や耕作土といった表土であり、一部には盛り土が施されていた。表土の下は5m前後の降下テフラである。テフラの最下層は茶褐色を呈する古期ローム層で、その上位にPm-I（御岳第一軽石：約10万年前降下）が認められた。Pm-Iの層厚は最大約1.5mで下部は白色に変色している。降下テフラの下位は葦崎岩屑流堆積物である。葦崎岩屑流は大深沢川河床でも確認できることから、その層厚は崖の比高である60m以上となる。

### 第2節 歴史的環境

酒呑場遺跡が位置する北杜市は、八ヶ岳南麓と茅ヶ岳西麓地域に、縄文時代や古代・中世の遺跡が濃密に分布する。本節では八ヶ岳南麓と茅ヶ岳西麓周辺において、本遺跡で遺構・遺物が多く確認できる縄文時代の遺跡を中心に概要を述べる。

本地域において縄文時代草創期～早期の遺跡は、前期・中期に比べ遺跡数が少ない。押取遺跡や中込遺跡、丘の公園内遺跡群が代表的な遺跡として挙げられる。

大規模な集落は、縄文時代前期から出現し、本遺跡においても遺物・遺構が確認できる。前期を代表する遺跡として、天神遺跡（28・30）がある（新津・米田1994）。前期に該当する住居跡は49軒あり、これらの住居跡は環状集落の形態を示し、集落の中心には墓坑が密集している。

縄文時代中期は本地域において遺跡数が最も多く、本遺跡周辺では、上条宮久保遺跡（170、村松2005）、段道遺跡（198、長谷川2004）、大深沢川対岸の清春白樺美術館南遺跡（138、村松2003）で、中期後半の小規模な集落跡が見つかっている。旧長坂町内にある原町農業高校前遺跡は、縄文時代中期の住居跡が103軒検出されており、中期中葉から後期初頭にかけての大規模集落として知られる。同じく旧長坂町内の柳坪A遺跡・同B遺跡（102・104、米田1986）・同北遺跡（103、柳原2002）、頭無遺跡（189、山梨県教育委員会1975）、頭無A遺跡（196、村松2008）でも、曾利式期の集落が調査されている。北杜市域に広げると、甲ヶ原遺跡は83軒の住居が中期に存在し、岩手県産の琥珀で製作されたと考えられる垂飾が出土しており、東北地方とのかかわりが伺える。諏訪原遺跡は住居跡が100軒以上検出された環状集落である。梅之木遺跡は約150軒の住居跡から成る環状集落であり、縄文時代の道状遺構と水場遺構が検出され、平成26年には国の史跡に指定された。縄文時代の生活空間が明確に残っている貴重な遺跡である。また、同時期の甲府盆地では駿迦堂遺跡や、一の沢遺跡が大規模な集落遺跡として知られる。

縄文時代後・晚期になると遺跡数が減少するが、酒呑場遺跡の南東約400mに位置する長坂上条遺跡（167）が学史的に著名である。1940年に史前学研究所の大山柏氏を中心に調査が行われ（大山・竹下・井出1941）、後・晚期の加曾利B式や佐野式等の土器や配石遺構等が確認されている。また、昭和58年に史跡指定された金生遺跡（75）も後・晚期を代表する遺跡である（新津1989）。後・晚期にあたる住居跡は42軒確認された。立石が伴う配石遺構が確認され、石棒や耳飾り等の祭祀遺物が出土していることから、祭祀性のある集落遺跡として理解されている。

弥生時代には、頭無A遺跡において、弥生時代後期の方形周溝墓群が見つかっている（村松2008）ほか、長坂上条遺跡から弥生中期の土器が確認されている。古墳時代では、宮尾根C遺跡（211）や柳坪遺跡（102・104）等で住居跡が確認されるが（佐野2009、米田1986）、縄文時代の遺跡に比べ遺跡数は少なくなる。平安時代から北杜市周辺で再び遺跡数が増加する。柳坪遺跡や金生遺跡、梅之木遺跡などで平安時代の住居跡が確認される。規模の大きい遺跡としては寺所遺跡（82）が知られ、これまで3次に渡って調査が実施されており、竪穴住居跡71軒・掘立建物跡55棟が確認されている（佐野2018、新津・八巻1987）。

城館跡には、国指定史跡である谷戸城跡（36）や深草館跡（76）などがある。平安時代以降では、北杜市周辺に城館跡・集落跡が多く認められ、土地開発が活発に行われていた。

### 参考文献

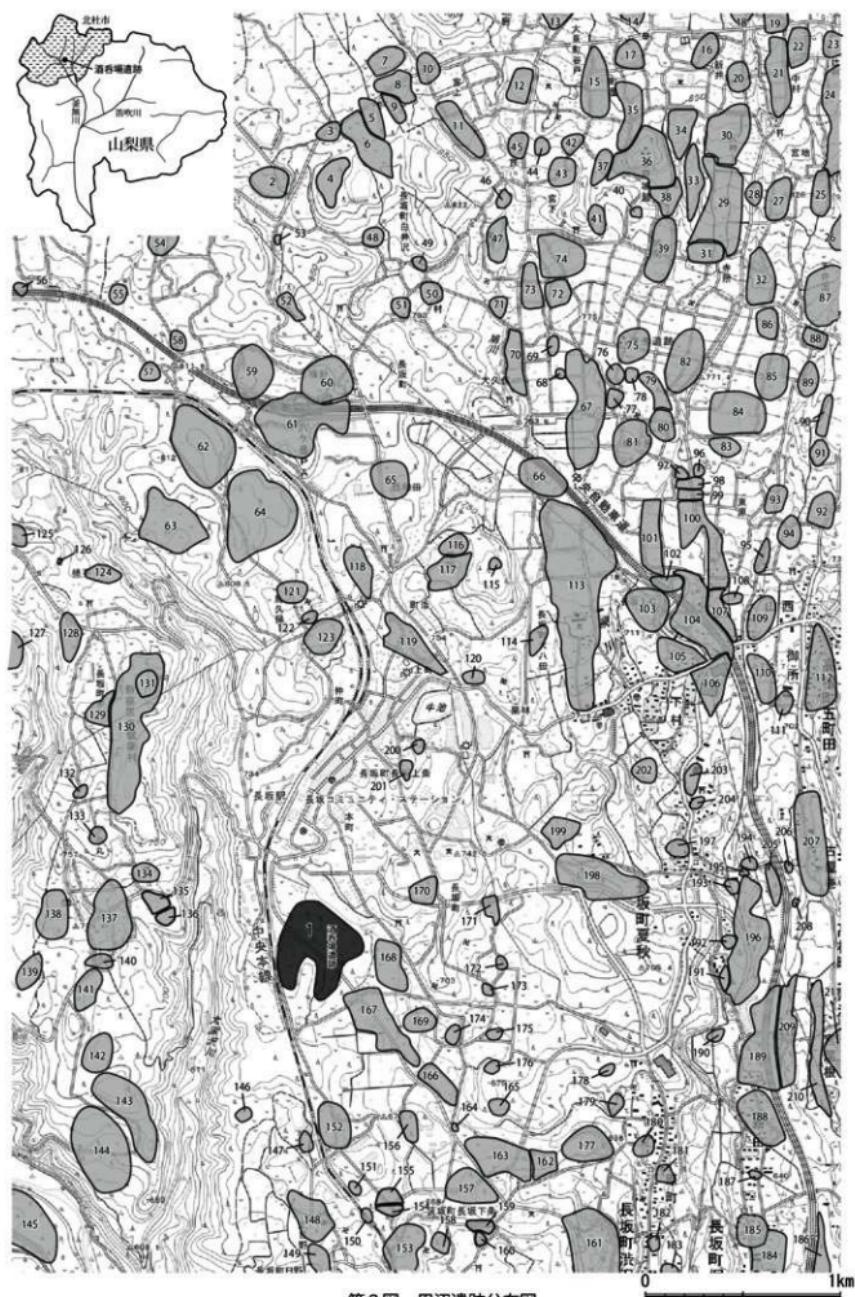
- 大山 柏・竹下次作・井出佐重1941『山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告』『史前学雑誌』13-3 史前学会  
柳原功一2002『柳坪北遺跡』柳坪北遺跡発掘調査会  
小宮山隆1997『長坂上条遺跡』長坂町教育委員会  
佐野 隆2002『梅之木遺跡I』明野村教育委員会  
佐野 隆2008『梅之木遺跡VII』北杜市教育委員会  
佐野 隆2009『宮尾根C遺跡』北杜市教育委員会  
佐野 隆2014『勘訪原道路・屋代氏館跡』北杜市教育委員会  
佐野 隆2018『寺所遺跡』北杜市教育委員会  
新津 健1989『金生遺跡II(縄文時代編)』山梨県教育委員会  
新津 健・八巻与志夫1987『寺所遺跡』山梨県教育委員会  
新津 健・米田明訓1994『天神遺跡』山梨県教育委員会  
長谷川誠2004『段道遺跡』  
保坂康夫1986『八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書』山梨県教育委員会  
村松佳幸2008『清音白樺美術館南遺跡』長坂町教育委員会  
村松佳幸2005『上条宮久保遺跡』北杜市教育委員会  
村松佳幸2008『頭無A遺跡』北杜市教育委員会  
米田明訓1986『柳坪遺跡』山梨県教育委員会  
山梨県1998『山梨県史 資料編 I 原始・古代I』  
山梨県教育委員会1975『山梨県中央迫害文化財埋蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡長坂・明野・並崎地内一』  
山本茂樹・野代幸和1994『甲ヶ原遺跡(第5次)I』山梨県教育委員会  
山本茂樹1996『甲ヶ原遺跡II(第3次・第4次調査)』山梨県教育委員会  
山本茂樹1997『甲ヶ原遺跡III(第2次・第3次調査)』山梨県教育委員会  
山本茂樹1998『甲ヶ原遺跡IV(第1次・2次・3次・6次・7次調査)』山梨県教育委員会

## 第3節 遺跡の概要と研究略史

酒呑場遺跡はこれまで数回に渡り発掘調査が実施されている。さらに、埋蔵文化財センターの調査で検出された遺構・出土遺物は膨大な量があり、追跡的に研究論文が発表されている。本節ではこれまでの調査履歴や研究事例についてまとめる。

酒呑場遺跡は、1931（昭和6）年『史跡名勝天然記念物調査報』第5輯に、「長坂上条字酒呑場」に位置する遺跡として発見遺物が写真等により報告されている。1940（昭和15）年、大山史前学研究所の大山柏を筆頭に、地元出身の井出佐重らによって「長坂上条遺跡」が発掘調査された。この調査は山梨県内初とされる学術的な発掘調査であり、学史的にも重要な位置を占める。長坂上条遺跡からは縄文時代後期・晩期を中心とした出土遺物、配石遺構と考えられる「石塊群」という遺構が見つかっている。

酒呑場遺跡の発掘調査は、旧酪農試験場の増・改築工事に伴って実施されている。1993（平成5）年度に試掘調査、1994（平成6）年度に第1次調査（A区・B区）、1995（平成7）年度に第2次調査（C区～H区）、1996（平成8）年度に第3次調査（I区）を実施し、竪穴住居跡や土坑が重複しながら検出され、縄文時代前期～中期を中心とした大量の遺物が出土した。2001（平成13）年度には屎尿発酵施設の建築に伴って第4次調査（J区）を実施してい



第2図 周辺遺跡分布図

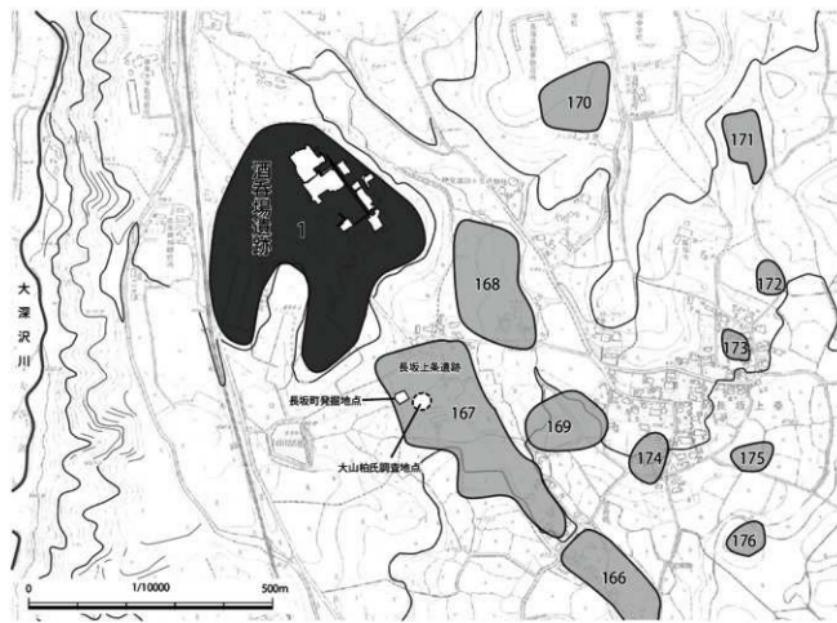
- 7 -

第1表 酒呑場遺跡周辺 遺跡一覧表

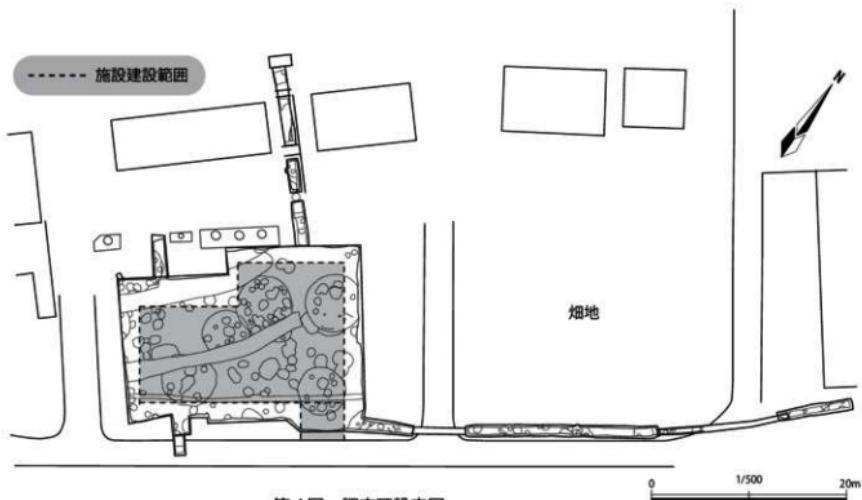
番号	遺跡名	時期
1	酒呑場遺跡	縄・古
2	沢入遺跡（菅沼氏屋敷）	縄
3	字平干遺跡	縄・中
4	字平干の土塁	中
5	久保遺跡	縄・弥
6	牛久保南遺跡	縄
7	祇屋敷北遺跡	縄
8	祇屋敷東遺跡	縄
9	祇屋敷遺跡	縄・近
10	大芦遺跡	縄
11	吉指遺跡	縄・平
12	西田第2遺跡	縄・中
13	下新居遺跡	縄・平・中
14	方城第2遺跡	縄
15	町屋第2遺跡	縄・平・中
16	城上第2遺跡	縄
17	城上第3遺跡	縄・平
18	疋神遺跡	縄・弥
19	東姥神遺跡	縄・平・中
20	新井遺跡	縄・平
21	新井第2遺跡	縄・弥・平
22	中村遺跡	縄・中・近
23	中村第2遺跡	縄・中
24	宮地第1遺跡	縄・平・中
25	宮地第2遺跡	縄・平・近
26	宮地第3遺跡	縄・平・中
27	宮地第4遺跡	縄・平・中
28	天神遺跡（A・B地区）	縄・平
29	寺所第2遺跡	縄・平
30	天神（C地区）	縄・平
31	寺所跡	中
32	清水遺跡	縄・平・中
33	山崎第4遺跡	縄
34	城上第1遺跡	縄・平・中
35	町屋第1遺跡	縄・中
36	谷戸城跡	中
37	御所遺跡	縄・中
38	城下第2遺跡	縄・平・中
39	城下遺跡	縄・平・中
40	城下屋跡	中
41	前林山十三塚遺跡	中
42	御所第2遺跡	縄・中
43	御所第3遺跡	中
44	谷戸氏館跡	中
45	西田遺跡	縄・中
46	油川第1遺跡	縄
47	屋敷遺跡	縄・中
48	横手遺跡	縄・中
49	十郎林遺跡	縄・中
50	阿原遺跡	平
51	中屋根遺跡	縄
52	横針宮久保遺跡	縄・平
53	横針・宮久保遺跡	縄・平
54	東下屋敷遺跡	縄
55	葛原遺跡	縄・弥
56	下ノリ平遺跡	縄・中
57	西下屋敷南遺跡	縄
58	新田森遺跡	縄
59	横針中山遺跡	弥・古
60	横針前久保遺跡	旧・縄
61	米山遺跡	縄・近
62	越中久保遺跡	縄・平・中・近
63	竹原遺跡	縄・中・近
64	久保遺跡	縄
65	米山東遺跡	縄
66	小和田館址	縄・平・中
67	小和田遺跡	縄・平・中
68	別当十三塚	中・近
69	別当遺跡	縄・中
70	別当西遺跡	縄
71	内城遺跡	縄・中

番号	遺跡名	時期
72	豆生田第1遺跡	縄・平・中
73	豆生田第2遺跡	縄・平
74	豆生田第3遺跡	縄・平・中
75	金生遺跡	縄・平・中
76	深草館址	中
77	深草遺跡	平
78	南新居北遺跡	縄・平・中
79	南新居敷數址	平・中
80	南新居遺跡	平
81	南新居西遺跡	縄・平・中・近
82	寺所遺跡	縄・平
83	堰田遺跡	古・平
84	木ノ下・大坪遺跡	平
85	原田遺跡	縄・平・中
86	原田第2遺跡	平
87	下井手遺跡	縄・中
88	下井手豊跡	中
89	卯ノ遺跡	縄・弥・中
90	和田第2遺跡	縄
91	土岐地A遺跡	平
92	土岐地B遺跡	平・近
93	沢田遺跡	平
94	竹の内遺跡	平・中
95	洪田遺跡	弥・平・中
96	東原遺跡	中・近
97	東原の土塁跡	中
98	弥右衛門塚1	中・近
99	弥右衛門塚2	中・近
100	豈田遺跡	縄・古・奈・平
101	柳原屋敷遺跡	縄・古・奈・平
102	柳坪A遺跡	縄・弥・古・平
103	柳坪B遺跡	縄・弥・平
104	柳坪B遺跡	縄・弥・古・平
105	柳坪C南遺跡	平
106	石畠田北遺跡	縄・平
107	境原遺跡	弥・平
108	馬越遺跡	縄・平
109	神明遺跡	平・中・近
110	柳田遺跡	縄・平・近
111	柳田A遺跡	平
112	柳田遺跡	縄・平
113	小屋敷遺跡	平
114	久保地遺跡	縄
115	成岡・藤塚	縄・平
116	成岡遺跡	縄・弥・平
117	成岡新田遺跡	弥・平
118	河野敷遺跡	縄
119	大林遺跡	縄・近
120	曲田遺跡	平
121	下久保久保遺跡	縄
122	鳥久保遺跡	縄・近
123	高松山跡	縄
124	和田山東遺跡（砦）	中
125	池の平遺跡	縄
126	天白堀址	中
127	東無4遺跡	縄・平
128	小原平遺跡	旧・縄
129	間の原遺跡	縄
130	健原村遺跡	縄・平
131	柿平・藤塚	縄
132	和手遺跡	縄・平
133	鹿春遺跡	縄
134	城山北遺跡	縄・平
135	城山北遺跡	縄
136	中央1砲址	戦
137	周久保遺跡	縄・平
138	清瀬白桜美術館南遺跡	縄・中
139	祭の神2遺跡	縄・平・中
140	細2・3保遺跡	縄
141	祭の神1遺跡	縄・平
142	中原遺跡	縄・平

番号	遺跡名	時期
143	深沢岩跡	中
144	押野遺跡	縄・弥・平・中
145	屋敷平遺跡	縄・古・平・中・近
146	池之平北遺跡	縄
147	池平昭和北遺跡	縄
148	池之平A遺跡	縄・平
149	向井丹下屋敷址	中
150	西久保遺跡	縄
151	北村北遺跡	縄・弥・平・中
152	反田遺跡	縄・平・中
153	新居遺跡	縄
154	三井氏屋敷址	中
155	北村遺跡	縄・弥・古・中
156	北村東遺跡	縄・古
157	御舟遺跡	縄・平
158	植松氏屋敷址	中
159	相吉氏屋敷址	中
160	相吉遺跡	平
161	山本遺跡	縄
162	龍角遺跡	古・平
163	龍角西遺跡	縄・古・平
164	長坂下条・藤塚	中・古・平
165	和田遺跡	弥・古・平
166	長坂上条・藤塚	古・平
167	長坂上条遺跡	縄・平
168	酒呑場東遺跡	縄・弥・平
169	中反遺跡	縄・平・近
170	上条宮久保遺跡	縄・平・近
171	蜂塚遺跡	縄・古・平
172	東村遺跡	縄・平
173	東村A遺跡	古・奈・平
174	西村遺跡	古・奈・平
175	鎌田遺跡	平
176	長坂氏屋敷	古・平・中
177	西屋敷遺跡	古
178	大久保遺跡	縄・中
179	寺前遺跡	縄
180	沢尻・上町遺跡	縄・奈
181	原町北遺跡	平・中
182	原町遺跡	平・近
183	上久通北遺跡	縄・平
184	下村遺跡	縄・平・中
185	塙川の土塁	中
186	塙川十二塙群	縄
187	塙之越遺跡	中
188	新田遺跡	縄
189	頭無（二木木）遺跡	縄・古
190	古屋敷遺跡	縄
191	塙川・柳坪遺跡	縄・近
192	程木遺跡	弥・古・平
193	大久神B遺跡	古・平
194	大々神A遺跡	平
195	大々神B三塚	中
196	頭無A・B遺跡	平
197	上ノ屋敷遺跡	縄・平
198	段道遺跡	縄
199	池之窪遺跡	縄・平
200	上町遺跡	縄・平
201	上町南遺跡	縄
202	塙原遺跡	縄・平・中・近
203	石原田南遺跡	縄・平
204	白山神社前遺跡	平
205	治郎田遺跡	古・奈・平
206	治郎田北遺跡	縄
207	沢田遺跡	平・中
208	天王塚古墳	古
209	西久保遺跡	縄
210	富尾根G遺跡	縄・平
211	宮尾根G遺跡	縄・弥・平・近



第3図 遺跡詳細分布図 (1/10,000)



第4図 調査区設定図  
(工事用図面をトレースし合成)

る。一方、旧長坂町教育委員会では、旧長坂町環境課の下水道敷設事業に伴って1995年度に発掘調査を実施している（町G区：埋蔵文化財センター第2次調査G区に隣接する）ほか、1996年度には宅地造成に伴って「長坂上条遺跡」の発掘調査が実施されている。埋蔵文化財センターにおける試掘・立会調査では、2006（平成18）年度、2010（平成22）年度に旧酪農試験場内の試掘調査または立会調査、2008（平成20）年度、2010（平成22）年度、2014（平成26）年度に近接地点である農業大学校内での試掘調査を実施している。これらの試掘・立会調査の結果は、埋蔵文化財に影響が無いと判断されており、本調査には発展していない。

第1次調査から第3次調査の発掘調査報告書は、遺構編と遺物編に分けて刊行された。遺物編については山梨県教育委員会の単独事業によって報告書を作成している。まとめると以下の通りである。

#### <本調査>

長坂町教育委員会 1996 『酒呑場遺跡G区』長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

山梨県教育委員会・山梨県農務部 1997 『酒呑場遺跡（第1・2次）遺構編』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第135集

山梨県教育委員会・山梨県農務部 1997 『酒呑場遺跡（第3次）遺構編一前編』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第136集

山梨県教育委員会・山梨県農務部 1998 『酒呑場遺跡（第3次）遺構編一後編』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第169集

山梨県教育委員会・山梨県農務部 2003 『酒呑場遺跡（第4次）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第209集

山梨県教育委員会 2004 『酒呑場遺跡（第1～3次）遺物編一図版編』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第216集

山梨県教育委員会 2005 『酒呑場遺跡（第1～3次）遺物編一本文編』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第216集

#### <試掘・立会調査>

山梨県教育委員会 2008 『山梨県内分布調査報告書（平成19年1月～12月）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第257集

山梨県教育委員会 2010 『山梨県内分布調査報告書（平成21年1月～12月）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第266集

山梨県教育委員会 2011 『山梨県内分布調査報告書（平成22年1月～12月）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第280集

山梨県教育委員会 2016 『山梨県内分布調査報告書（平成27年1月～12月）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第309集

このように酒呑場遺跡は周辺地点（「長坂上条遺跡」地点・農業大学校地点）を含め、試掘・発掘調査によって埋蔵物の情報がある程度把握できるようになっている。しかし、遺跡範囲の規模は大きく、未だ馬蹄形状の台地において、未調査地点が多い。また、第1次～第3次調査において検出された遺構・出土した遺物は極めて膨大な量であった。そのため、報告書に掲載できなかった資料については、「研究紀要」で補完的に発表されている。さらに、2008年には中山誠二らによる研究グループにより、酒呑場遺跡出土土器からレプリカ・セム法による植物種子压痕分析が行われ、当時では最古となる縄文時代中期の栽培ダイズが発見され話題となった（保坂ほか2008）。以下に酒呑場遺跡に係わる論考も含めまとめたい。

#### <当センター「研究紀要」にて報告した論考>

保坂康夫 2006 「縄文時代の剥片剥離手法—酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析から—」『研究紀要』22 pp.27-34 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

野代幸和 2008 「北杜市（旧長坂町）酒呑場遺跡の土坑について—第1～2次調査（A～E区）を中心にして—」『研究紀要』24 pp.35-47 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

保坂康夫・野代幸和・長沢宏昌・中山誠二 2008 「山梨県酒呑場遺跡の縄文時代中期の栽培ダイズ Glycine max」『研究紀要』24 pp.23-34 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

保坂康夫 2012 「酒呑場遺跡の石皿と石棒」『研究紀要』28 pp.19-28 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

三田村美彦・保坂康夫 2013 「酒呑場遺跡出土の未発表資料について」『研究紀要』29 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

保坂康夫 2015 「打製石斧の石材と形態—山梨県酒呑場遺跡I区の資料分析—」『研究紀要』31 pp.53-60 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

#### <酒呑場遺跡にまつわる論考（その他の学術誌・研究報告）>

野代幸和 1996 「山梨県長坂町・長坂上条遺跡と酒呑場遺跡における学史的・学術的意義と関連性について」『考古学論究』第4号 pp.28-36 立正大学考古学会

野代幸和 2001 「酒呑場遺跡の集落変遷」『山梨県考古学協会誌』第12号 pp.33-34 山梨県考古学協会

保坂康夫 2002 「酒呑場遺跡 I 地区における台形土器と機能」『土器から探る縄文社会』2002 年度研究集会資料集 pp.91-96 山梨県考古学協会

村松佳幸 2006 「酒呑場遺跡の集落変遷について」『縄文集落を分析する』2006 年度研究集会資料集 pp.92-97 山梨県考古学協会

中山誠二・長沢宏昌・保坂康夫・野代幸和・柳原功一・佐野隆 2008 「レプリカ・セム法による圧痕土器の分析（2）—山梨県上ノ原遺跡、酒呑場遺跡、中谷遺跡」『山梨県立博物館研究紀要』2 pp.1-10 山梨県立博物館

中山誠二・長沢宏昌・保坂康夫・野代幸和 2009 「レプリカ・セム法による圧痕土器の分析（3）—山梨県天神遺跡、酒呑場遺跡」『山梨県立博物館研究紀要』3 pp.1-22 山梨県立博物館



調査前状況



調査前状況 2



調査後の施工状況



整理作業状況

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 発掘調査の方法

酒呑場遺跡の第1次～4次調査において、多数の遺構・遺物が発見されていたことから、これらの埋蔵文化財を正確かつ迅速に記録することを目的として調査計画を立案した。一方で、今回の調査地点では事前の試掘調査を実施していないこともあり、遺構の残存状況は不明であった。発掘作業員についてはこのような状況もあり当初8名で開始し、後に増員している。

発掘作業に当たっては、重機により遺物包含層まで掘削した後、調査区に国土座標に基づく三次元座標の基準杭を4点設置し、1辺5m間隔のグリッド杭を打設した。酒呑場遺跡の第1次～第3次調査では、旧酪農試験場の主軸に合わせて任意のグリッドを使用していたが、第4次調査では国土座標を使用している。第1次～第3次調査グリッドについても、2点国土座標値が判明しているため、国土座標値に則った第1次～第5次調査の分布図を作成した（第1図）。本調査地点のグリッド名については東西方向（X軸）にアルファベット大文字で西からA・B・C…、南北方向（Y軸）にアラビア数字で北から1・2・3…の順に記号・番号を与え、その交点（平面図上でグリッドの北西端）にA1のようにグリッド名を付し、4点に囲まれた範囲をA1グリッドのように呼称した。グリッドによる遺構・遺物の管理については原則研究棟建設予定地点のみに適用し、外構工事地点についてはそれぞれ外構B区～E区の名称を付した。

人力による遺跡の精査は、平面プランが確認出来たところで遺構の規模に応じて土層観察ベルトを設定するか半裁する方法で掘り下げていった。土層断面の観察・実測図化・写真撮影を実施したのちは、完掘して写真撮影、平面図の作成を行った。遺物の出土量に応じて、遺物の出土状況写真撮影、平面図・エレベーション図の作成を行ったが、一部の遺物出土状況や遺構平面図については、写真測量によって平面図を作成した。遺構から出土する遺物については、遺構ごとに光波による取り上げ遺物、一括遺物を管理し、竪穴住居跡については、四分法により設定したベルトに応じて“A”～“D”に分け、一括遺物を管理した。遺構外出土遺物については、各グリッドで管理した。

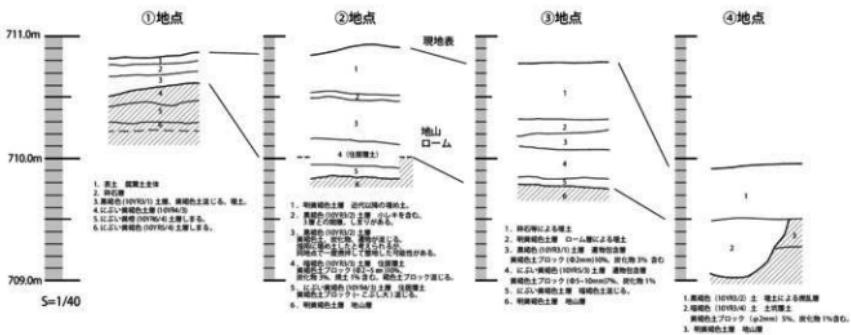
測量については、打設した基準杭を使用して、光波測距儀と遺跡管理システム（『遺構くん』）により遺構平面図の作成および遺物の取り上げを行い、位置情報の記録をとった。なお、遺物の取り上げについては1辺3～5cm以上の土器（P）と、石器あるいは径5cm以上の礫（S）、石鐵サイズ以上の黒曜石（K）として取り上げた。礫と石器の判断は困難である場合があることから、現地ではこれらを分別して管理はしなかった。また、遺物包含層を掘り下げている際に“遺構外”として光波で取り上げた遺物については、整理作業の際にコンピューター上で位置を確認し、遺構の上層だった場合は○○住居跡上層などとして管理した。

調査の進捗状況および発見された遺構や遺物の確認状況などは、デジタル一眼レフカメラ（ニコンD7200）や35mm一眼レフカメラにより撮影した。空中写真撮影については、遺構の完掘状況や位置の把握を目的とした上方俯瞰写真のほか、景観の把握を目的として八ヶ岳や南アルプスを望むアングルにより撮影した。

### 第2節 基本層序

第5次調査区から得られた層序については、第5図にまとめた。また、基本土層図を作成した①～④の地点については、第6図に位置を示している。建物建設予定地（代表として②地点）では、約60～70cmほどの表土が認められた後、遺物包含層となる。表土は分層が可能で、1層が調査着手前までに牧草地として使われていた客土、2層が整地層、3層が畑として利用していた時期の耕作土である。3層は一部で歛溝状に下層を搅乱している。なお、調査区を横断する2つの溝状の搅乱（戦時期とされるもの）は、調査区壁面で3層より下層から掘り込んでいることがわかっている。3層より下層では、縄文時代前期～中期の遺物包含層となる。一部の遺構は遺物包含層の上面でもプランを確認しうるが、原則的にソフトローム層まで掘り下げた後に遺構検出をしている。ただし、3層による搅乱は建物予定地ほぼ全域に及んでおり、多くの遺構は上層が消失していると思われる。

基本層序を取得したそれぞれの地点での比高差を確認すると、外構E区（①地点）と建物予定地（②地点）では、現地表面はほぼ同じ高さだが、旧地表面は大きく異なる。外構E区の位置する牛舎小屋付近では、平地にするためにかな



第5図 基本土層図

り削平を受けていることがわかる。②地点から東へ50mほど離れた③地点までは、現地表および旧地表においてもほぼ平坦である。施設内道路に近接する④地点では、①地点と同様、整地等により遺物包含層が削平されている。建物予定地点の旧地表については、北側から南側へ緩やかに傾斜している。

ローム層以下に関しては、既刊の報告書に詳しいが、第3次調査地点では30cmほどのソフトローム、40cmほどの暗色帶、その下位にハードロームが確認されている。第4次調査では地表下1.5mでPm-I（御岳第1バムス・8万年前頃灰）を確認している。

### 第3節 遺構と遺物（土器）

#### （1）竪穴住居跡

合計12軒の竪穴住居跡を検出した。建物建設予定地点では、いずれの遺構も後世の耕作地化によって削平されており、検出面から住居床面までは浅いものが多い。

##### ●1号住居跡（第8・9図 遺物：第33図）

<位置> C 5・6、D 5・6 グリッド

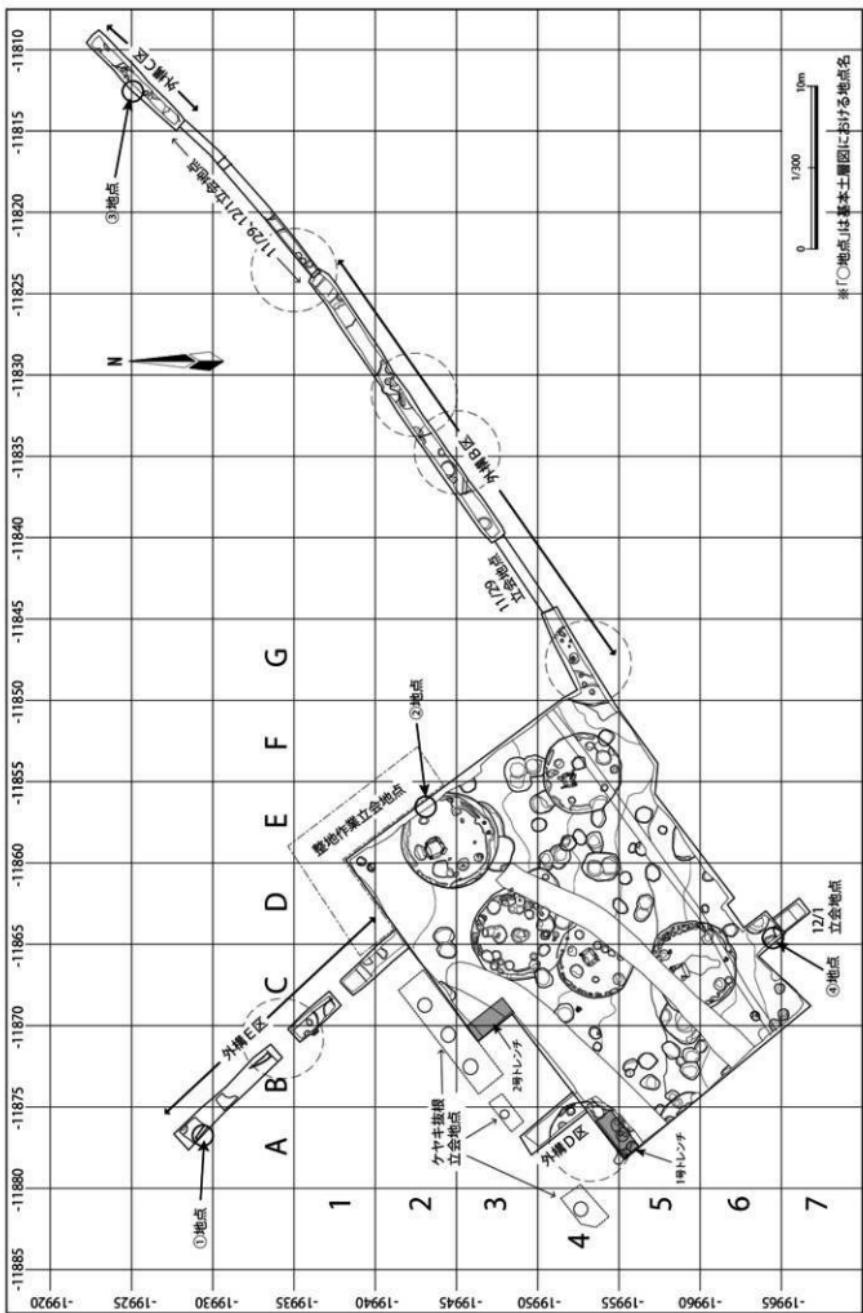
<形態・規模> 長軸5.55m、短軸推定4.0mで不整の楕円形を呈している。住居跡の北西部分、全体の約1/5程度が、調査区を横断する溝状の擾乱を受ける。この擾乱は、第1次～3次調査でもみられるもので、戦時期のものとされている。また、住居跡の南側にも東西方向へ延びる電気配管によって、床面から深さ10cm程度の擾乱が及んでいる。

<壁・周溝> 壁は緩やかに立ち上がる。遺構の確認面からの深さは10～20cm。周溝は壁沿いに全周しており、周溝内には小柱穴が認められる。小柱穴は東側では二重になる。

<柱穴> 主柱穴は3基認められる。擾乱のため確認出来なかったが、おそらく4本の主柱穴になると推定される。ビットの土層断面からは、柱根の可能性のある堆積を認める事ができる。3ビットと4ビットは複数しており、柱の建替を行っている可能性もある。

<検出状況・覆土> 上層は基本土層3層により削平されている。覆土は黒褐色土層が主体で、炭化物を多く含んでおり、場所により棒状の炭化材が認められる。他の遺構覆土に比較して明らかに黒色に近く暗い。炭化材は第5章の分析にあるように、クリ材で3,220±25BPの年代を示しており、埋設土器との年代差があることから住居跡の廃絶時によるものではないと推定される。よって焼失住居の可能性は低いと思われる。

<炉> 住居内のやや北側に1基確認された。溝状の擾乱により北側の大半が消失している。大型の礫を使用した長方



第6図 グリッド設定図

形の石圓炉で、東西軸90cm、南北軸は現存約60cm、深さ42cmとなる。南側には扁平の礫を水平に据え、東側と西側は扁平の面を斜めにして断面逆台形状に礫を組み込んでいる。南側の両端隅には、棒状の円礫をそれぞれほぼ垂直に配している。これらは大型磨石類の転用品（S-175、176）である。炉石の燃焼部側の縁には、黒色物質が帯状に付着しており、この物質については第4章で化学分析を実施した。炉の床面は焼土が認められる。

＜土器埋設構造＞ 住居内の南側に両耳鉢が1個体埋設されていた。埋設土器は正位で上半部が電気配管の搅乱により欠失している。底部全体も欠失しているが、埋設時に穿孔されたものと推定される。出土状況からいわゆる埋襲として判断出来る。

＜遺物出土状況＞ 埋設土器（1）は口縁部を欠失するが、曾利Ⅲ～IV式段階のものと想定される。覆土からは破片が主体でまばらに遺物が分布する。2は無文の鉢で、曾利式期にほぼ共通してみられるタイプの個体である。ほかに曾利式段階の土器片は3～10がみられる。3は口縁部の内縁がやや膨らむタイプのもの、4、5、7～9は縄文を地文とする胸部片で、6は条線を地文とする。1号住居跡内には諸磯式期の土器片が多く流入しており、11～13は口縁部片、15～19は胸部片、20は底部片となる。いずれも諸磯b式期が主体である。14、21は五領ヶ台式期、23は曾利Ⅰ式期、24は曾利Ⅱ式段階と推定される。

＜時期＞ 埋設土器から曾利IV式期と想定できる。ただし、覆土内から曾利IV式期の特徴をもつ土器片の出土は極めて少なく、むしろ諸磯b式期の土器片のほうが多い。覆土内炭化物も縄文時代後期の年代観を示しているなど、覆土の形成過程に不明な点が多い。

#### ● 4号住居跡（第10・11図 遺物：第34・35図）

＜位置＞ C 4・5、D 4 グリッド

＜形態・規模＞ 長軸4.83m、短軸残存3.49mでほぼ円形となる。住居跡の南東部分、全体の約1／5程度が、調査区を横断する溝状の搅乱を受ける。住居跡の北東側は5号住居跡と重複する。

＜壁・周溝＞ 壁は急角度で立ち上がる。遺構の確認面からの深さは12～18cm。周溝は明確ではなく、小柱穴が北側を中心にならって認められる。

＜柱穴＞ 主柱穴は3基認められる。搅乱のため確認出来なかつたが、おそらく4本の主柱穴になると推定される。

＜検出状況・覆土＞ 上層は基本土層3層により削平されている。表土剥ぎの段階で遺物集中が露出したため、住居跡の存在を推定できた。

＜炉＞ 住居内のほぼ中央に1基確認された。大型の礫を使用した長方形の石圓炉で、東西軸78cm、南北軸68cm、深さ40cmとなる。四方に扁平の礫を用いて、扁平な面を斜めにして断面逆台形状に礫を組み込んでいる。炉の外側北側には、小型の土器（2）が正位に埋設されていた。出土状況から、炉の利用と同時に埋設されていたと考えられるが、土器表面に煤などの付着はない。炉の床面は焼土が認められる。

＜遺物出土状況＞ 住居跡中央付近、炉内から炉外にかけて、1がつぶれたように出土している。X字把手をもつ大型深鉢で、炉の外側（南側）に底部と口縁部、炉の内部から胸部が出土している。胸部は列点文を施すが、懸垂区画文は隆帯ではなく沈線によって表されている。また口縁部の一部は、2に蓋をするような位置で出土している。住居跡廃絶後に廃棄されたと推定できるが、意図的に部位を分けて廃棄している可能性も考えられる。曾利Ⅱ式新段階。炉に添えられた2は蛇行隆帯と綾杉状の沈線で施文される小型の鉢である。4はつなぎ弧文を口縁に施す浅鉢、5は両耳鉢で把手はX字状になる。6、7は胸部片だが、唐草文系の土器系譜をひくものと思われ、沈線により渦巻文、綾杉文が施されている。このほか8～10、12、13といった曾利式土器の破片が出土している。覆土内には1号住居跡と同じく他時期の破片が流入しており、14、15、17諸磯b式、16諸磯c式、19曾利IV式といったものがある。11は縄文や器形の傾きから、早期の土器である可能性も考えられるが不明である。

＜時期＞ 出土土器から曾利Ⅱ式の新段階に推定できる。

#### ● 5号住居跡（第12～15図 遺物：第35～37図）

＜位置＞ C 3・4、D 3・4 グリッド

＜形態・規模＞ 径5.7mほどで不整の円形を呈している。柱穴の状況から3回程度の建替を実施していると推定でき

る。住居跡の北西部と南東部分は、調査区を横断する溝状の擾乱を受ける。住居跡の南西側は4号住居跡と重複し、南東側は8号住居跡と重複している。

＜壁・周溝＞ 壁は急角度で立ち上がる。遺構の確認面からの深さは20~24cm。周溝は壁沿いにほぼ全周するが、南側には周溝がみられなくなる。周溝は二重となり、建替時によるものと推定される。

＜柱穴・土坑＞ 柱穴は多数認められることから、柱穴の大きさ・深さなどから、調査時に3つの対応関係を推定し、5a・5b・5cとしてそれぞれのピット名を付した。5c→5a→5bの順で建替えたと想定し、5cが5本の主柱穴、5a・5bが6本の主柱穴と推定される。当初柱穴と想定したc5ピットは、袋状土坑となつたため、c6ピットに対応関係を求める。また、住居内より発見された土坑についてはi~vi土坑とした。

＜検出状況・覆土＞ 上層は基本土層3層により削平されている。表土剥ぎの段階で遺物集中が露出したため、住居跡の存在を推定できた。

＜がい＞ 住居内のやや北側に1基確認された。浅い長方形の掘り込みをもっており、痕跡は明確ではないが、がい石を抜き取られた石臼跡と推定できる。長軸約100cm、短軸85cm、深さ12cmとなる。がいの床面は焼土が認められる。

＜土器埋設遺構＞ 住居入口側、1土坑内に大型深鉢（長胴甕）が1個体埋設されていた。土器は逆位でやや斜位に埋設されている。住居および1土坑の覆土は擾乱等を受けている様子はなかったが、埋設土器の脇下部はほとんどが欠失している。ただし、土器の底部については埋設土器の脇から破片で出土しており、焼成前に径2cmほど穿孔している様子が分かる。出土状況からいわゆる埋甕として判断出来る。また、住居奥側、a4ピット内にも小型深鉢が横位に埋設されていた。a4ピットを柱穴として利用した後、土器を埋設したと推定でき、ピット内の覆土上層には径30cmほどの礫が認められた。ここでは広義の土器埋設遺構として報告する。

＜遺物出土状況＞ 1は埋設土器の長胴甕で、推定器高は約70cmとみられる大型のものである。土器は条線地文で刻みのある1本縦帯で区画され、要所に截手状の渦巻文を施す。口縁が一度くびれて再度開き、口縁部下段には大きめの渦巻文をもつ。甲ツ原遺跡等に類例があり曾利I式古段階とみられる。2はa4ピット内の埋設土器で、頸部に斜行する沈線を施すのみのシンプルなものである。

覆土内からは住居跡中央付近に遺物の集中が確認された。3は縄文を地文とする深鉢で、隆帯により懸垂文等を施す。埋設土器より新しい曾利II式古段階と思われる。4、5は条線小甕で、4は11号住居跡上層の破片と接合関係をもつ。7~11は浅鉢あるいは両耳鉢で、7、8は無文、9、11は縄文を地文としている。10は36号土坑の上層、5号住居覆土内から出土しており、半裁竹管により沈線文を施している。12、13は無文口縁の破片、14はつなぎ弧文とみられ、15は前段階の井戸尻式期の深鉢口縁である。このほかに16~33といった井戸尻式期から曾利I式段階と推定される土器片の出土がある。34~42は他時期と想定される土器群で、やはり諸磧式期の遺物の出土が多い。

石器も覆土内からの出土が比較的多く、磨製石斧3個、打製石斧は破片を含めると13個以上の出土があった。なお、石器についてはピット内から出土しているものも認められる。

＜時期＞ 埋設土器から曾利I式古段階に一つの定点を置くことができる。ただし、住居は3回の建て替えが想定されるもので、埋設土器が当初より存在していたかは不明である。住居跡の覆土内には井戸尻式期から曾利II式段階までの土器片が出土しているため、井戸尻式期の終わりから曾利I式期の初めにかけての所産と想定しておく。

### ●6号住居跡（第16・17図 遺物：第38図）

＜位置＞ E4、F4グリッド

＜形態・規模＞ 東西軸4.96m、南北軸4.85mでほぼ円形を呈している。住居跡の中央南側は、調査区を横断する電気配管の擾乱を受ける。

＜壁・周溝＞ 壁は急角度で立ち上がる。遺構の確認面からの深さは15~18cm。周溝は壁沿いに北側を中心に認められる。

＜柱穴・土坑＞ 主柱穴は4本認められる。住居中央には40号土坑が位置しているほか、土坑状のピットが4基ある。

＜検出状況・覆土＞ 上層は基本土層3層により削平されている。遺物包含層と比較してやや暗めの暗褐色土層が覆土となる。

＜炉＞ 住居内のやや北側に1基確認された。大型の礫を使用した長方形の石圓炉で、東西軸70cm、南北軸は推定60cm、深さ25cmとなる。奥壁及び左右の壁には、扁平な面を斜めにした礫を断面逆台形状に組み込んでいる。手前（南）側の礫については、扁平面を上面に向けて置いていたと思われるが、礫は中央で二つに分割されたまま遺存していた。南側上面から強い圧力によって分割されたと推測されるが、打撲痕は認められなかった。型式的には1号住居跡の石圓炉に類似し、同様に南側の炉石の燃焼部側の縁には、幅1cmほどの黒色物が帯状に付着していた。

＜遺物出土状況＞ 破片が主体で、覆土内からまばらに出土している。埋設土器や完形の個体は見つかなかった。土器には、つなぎ弧文系の口縁をもつ1、4や、肥厚帶口縁の5、6がみられる。2は有孔釦付土器の口縁と考えられる。また、8は唐草文系譜の土器と推定される。胸部は綾杉文(1、7、8、12)のほか縄文(5、10、11)を地文とするものがある。15は両耳鉢とみられる胸部破片である。ほかの住居跡と同様に諸磯式期を主体とした他時期の遺物17～25が出土している。

＜時期＞ 覆土内から出土する遺物の多くは曾利Ⅳ式期となることから、該期の所産と考えられる。

### ●7号住居跡（第18～20図 遺物：第39～43図）

＜位置＞ D2・3、E2・3グリッド

＜形態・規模＞ 東西軸現存5.37m、南北軸5.89mで不整の円形を呈している。東側1/8程度は調査区外のため未調査である。5号住居跡とほぼ同じ大きさで、今回の調査区では大型の部類である。

＜壁・周溝＞ 壁は緩やかに立ち上がる。遺構の確認面からの深さは30cm（調査区東壁）。周溝は壁沿いにほぼ全周する。周溝は南側の一帯で二重に認められる。

＜柱穴・土坑＞ 主柱穴は5本認められる。小柱穴である7ピット・8ピットは、住居入り口施設に関する柱穴の可能性がある。また、住居内より発見された土坑については1・2号土坑とした。

＜検出状況・覆土＞ 上層は基本土層3層により削平されている。表土剥ぎの段階で遺物集中が露出したため、住居跡の存在を推定できた。

＜炉＞ 住居内のやや北側に1基確認された。大型の礫を使用したほぼ方形の石圓炉で、東西軸108cm、南北軸90cm、深さ46cmとなる。奥壁及び左右の壁には、扁平な面を斜めにした礫を逆台形状に組み込み、手前側（南側）には扁平な面を上面に向けて置いた礫を3石配置している。炉の床面には焼土が認められる。炉の外側北西隅には、小型の土器(3)が外側に向けてやや斜位に埋設されていた。同じく南東隅は、土器の口縁の破片(4)が塙壁の一部に組み込まれて使用されており、空間を生み出している。いずれも炉に付属するものと思われる。

＜土器埋設遺構＞ 住居内の南側に、2基の深鉢が並列して埋設されていた。いずれも正位で埋設され、西から1号埋甕・2号埋甕とする。1号埋甕は胴下半部以下、2号埋甕は底部を欠失する。住居内に複数の土器を埋設するものは、酒呑場遺跡の過去の調査でも確認されている。

＜遺物出土状況＞ 埋設土器1は、口縁を梢円形の隆帯で開いて、胸部を刺突状の文様で埋めるもので、曾利Ⅱ式の列点文の変容として解釈できる。埋設土器2は口縁が欠失しているが、わずかにつなぎ弧文の隆帯が残る。櫛描条線により地文が施されるため、1よりもやや新相となる可能性はあるが、概ね曾利Ⅱ式の新段階としておきたい。3はがんに付設されたもので、土器の上半部を打ち欠いて再利用したものと考えられ、櫛描条線地文と3本の垂下する沈線が特徴である。4も3同様、土器片の再利用によりがんに付設されたものである。

覆土、あるいは遺構確認面より上層からも大量の遺物が出土し、住居廃絶後に捨て場として利用された可能性がある。床面近くでは8の出土がある。こぶし大の破片がバラバラで出土しており、口縁部のみではあるがほぼ全周する。6も比較的床面近くから出土しており、ほぼ形を保ったまま漬されて出土した。口縁部は6単位のつなぎ弧文をもち胸部はLRLの繩文地文、蛇状沈線を施す。同様の胎土による底部片が近くで出土しているが、別個体の可能性もある。覆土上層では5が出土している。長めの列点文を地文として施し、半裁竹管により整形した3本隆帯によって、胸部の満巻文、4単位のX字状把手を作り出している。曾利Ⅱ式新段階の資料である。

覆土中から出土した破片資料については、深鉢では無文の口縁部となるもの（12、13）、斜行条線となるもの（10、15）のほか、つなぎ弧文となるもの（11、14）、重弧文となるもの（18、21）、肥厚帶口縁となるもの（19、24、25）などがある。このうち11は、全体に地文として繩文を施文後、つなぎ弧文を隆帯により施してい

る。17は重弧文の可能性があるが、外面と内面両方に渦巻文がある。

胸部文様は縄文を地文とするいわゆる曾利縄文系(27、29、43、45、46)のほか、列点文を施すもの(5、32～35)がある。31は唐草文系譜の土器胸部で、隆帯を整形し渦巻文などで区画、区画内は綾杉文が施される。同じく唐草文系の40がある。また37、39、48は連弧文系譜の土器胸部で、48は交互刺突をもつなど連弧文系土器の要素が強い。ほかにX字状把手、あるいは両耳鉢の把手部分と推定される49・51～53があるほか、38は水煙把手付土器の一部と考えられる。また、櫛描条線を地文とするものに9、22、44、50、55などがあり、50は田の字区画が認められる。

混入する他時期の土器のうち、59～64は諸磯式である。

<時期> 埋設土器および炉に付設された土器から、曾利II式新段階と推定される。覆土内出土遺物も多くは曾利II式からIII式を示している。

### ●8号住居跡 (第12～15図 遺物: 第43図)

<位置> D3、D4グリッド

<形態・規模> 径およそ3.4mの、不整の隅丸方形と推測される。住居跡の中央には溝状の擾乱があり、住居跡の半分はこの擾乱によって失われている。また、住居の北西部分は5号住居跡に重複している。

<壁・周溝> 壁は急角度で立ち上がる。遺構の確認面からの深さは約20cm。周溝は確認出来ない。

<柱穴・土坑> 現状で主柱穴が1基確認出来た。他の柱穴については擾乱により失われたか、5号住居跡の土坑あるいはピットとしたものの中に、8号住居跡のピットとなりうるものがあるかもしない。

<検出状況・覆土> 上層は基本土層3層により削平されている。当初、5号住居跡が不整形で、東側に突出する可能性があるとみて5号住居跡の一部として調査にあたった。しかし、が跡の存在が認められたことから急速8号住居跡として記録することとした。検出面における覆土の土質は5号住居跡と大きく変わらない。

<が> 推定される住居の中央付近にがが位置している。浅い円形の掘り込みで、床面に焼土が認められる。おそらく地床炉と想定できる。

<遺物出土状況> 8号住居跡の重複していない部分からは、遺物の出土がまばらである。1、2は諸磯b式段階の土器片、3は諸磯式段階と推定されるが不明である。

<時期> 諸磯b式

### ●9号住居跡 (第21図 遺物: 第43図)

<位置> 外構E区

<形態・規模> 幅約1mの外構E区区間ににおいて、住居南壁の立ち上がりと、土器埋設遺構が確認出来た。形態及び規模については不明であるが、コンクリート基礎の北側にも遺構の覆土が一部で確認されることから、径5.2mほどの住居跡になることが推定できる。

<壁・周溝> 壁は緩やかに立ち上がる。遺構の確認面からの深さは20cm。

<柱穴・土坑> 2基のピットが認められたが、主柱穴かどうかは判断出来ない。

<検出状況・覆土> 上層は擾乱を受けるが、畑の耕作土による擾乱ではなく、施設の造成時に伴う擾乱と推測される。北西の一部は水道管が設置されており、住居の北側壁の立ち上がりが不明である。

<が> 調査区内には位置していない。

<土器埋設遺構> 住居内の南側に、地山を掘り込んで1基の深鉢を正位で埋設している。トレンチ壁面でも確認できた。土器の底部は焼成後に穿孔されている。上半部は擾乱により欠失するが、残存していたとすれば住居床面から露出していたと想定される。

<遺物出土状況> 埋設土器の1は、胸部にU字あるいは楕円区画後、ハの字文を施している。2はいわゆる広口壺で、低降帶で施文されX字状の把手がつく。2の出土地点は擾乱の下に覆土が数センチ残っていたのみであった。ほかに同時期の3、5、6があり、藤内式段階の深鉢口縁(4)も出土している。

<時期> 埋設土器から曾利V式古段階と判断出来る。

### ●10号住居跡 （第22図 遺物：第44図）

<位置> 外構B区（G 4 グリッド）

<形態・規模> 住居の中央からやや北よりをトレンチ状に調査している。遺構の立ち上がりについては、壁面で確認することができる。直径5.4m程度の円形の住居になると推定できる。

<壁・周溝> 壁は緩やかに立ち上がる。遺構の確認面からの深さは10cm。周溝は認められない。

<柱穴・土坑> 柱穴は複数認められるが、1ピットを除いて小型のものが多く配列は明確ではない。

<検出状況・覆土> 上層は周辺に比較してさらに深くまで搅乱を受けている。おそらく南側の道路の造成時によるものと推測される。平面図上で10号住居西側に等高線が褶曲しているのはそのためである。覆土は黒褐色で明確に検出された。

<が> 調査区内には位置していない。

<遺物出土状況> 住居中央から有孔浅鉢（1）が出土している。比較的形をよく残すものである。大半は諸磯b式で、2~7は深鉢口縁部、8~15は胴部、16、17は浅鉢の底部である。浮線文をもつものと沈線を施すものがあり、およそ諸磯b2式段階を示すものが多い。4は補修孔が穿孔されている。トレンチ状の調査範囲にしては、覆土内から黒曜石の出土が比較的多い。また、獸面把手（土製品-16）の出土もある。

<時期> 繩文時代前期後半、諸磯b式の所産と推定される。

### ●11号住居跡 （第23・24図 遺物：第45・46図）

<位置> A 4 グリッド、外構D区

<形態・規模> 推定長径5.0m、推定短径4.5m程度の楕円形プランを想定する。住居の大半は調査区外となっており、南側は溝状の搅乱によって一部が掘削されていると思われるが、表土剥ぎ時の1号トレンチと重複したため南側の立ち上がり位置については不明である。ただし、遺物の出土状況や、その時期差からも、ほぼ同じ位置に2軒の住居跡が重複していたのではないかと考えられる。外構D区の範囲で覆土内から出土した土器片は諸磯式が多く、1号トレンチ内で出土した土器は井戸尻式から曾利I式期が多いという傾向が認められる。

<壁・周溝> 遺構の確認面からの深さは20cm。周溝は東側に一部確認出来る。

<柱穴・土坑> 1号トレンチと重複していた関係から、当初は住居跡と判断することができず、1号土坑～7号土坑が11号住居跡内に位置している。このうち、1号土坑及び7号土坑は柱穴状の掘りかたとなっており、主柱穴とすることができる。外構D区範囲の1ピットも主柱穴とみると、4本ないし5本の主柱穴を想定できる。

<検出状況・覆土> 上層は基本土層3層により削除されている。本調査区は表土剥ぎに試掘をおこなった1号トレンチに重複したため、平面的にプランを検出することができなかったが、外構D区においてはプランを確認することができた。

<が> 調査区内には位置していない。

<遺物出土状況> 諸磯式段階の17~19ほか数点が外構D区地点や土坑内より出土しており、わずかに五領ヶ台（15、16）も混じる。主体を占める曾利I式は、トレンチ内からの出土が多く、座標値を与えられなかつたものが多い。水煙把手土器（1）は調査区の西壁で把手部分が露出していたもので、左右2単位の把手がつくものである。ほかに井戸尻式段階のもの（3、7~11、13）と曾利I式段階（2、4~6）などが出土している。

<時期> 前述したとおり、2時期の住居跡が重複している可能性を考えられ、諸磯b式の住居跡廃絶後に、曾利I式期の住居跡が再び建てられたと想定する。

### ●12号住居跡 （第25~27図 遺物：第46・47図）

<位置> 外構B区

<形態・規模> トレンチ状の調査区により、住居跡の一部を調査している。住居跡の北東壁はしっかりと立ち上がるが、南西側は13号住居跡と重複しており範囲は不明確である。東西軸の推定径は5.4m。

<壁・周溝> 南壁で確認出来る遺構深さは30cm。周溝は認められない。

＜柱穴＞ 調査区の制約から範囲の把握が困難であったため、12号住居跡と13号住居跡の柱穴は検出された順で番号を付している。12号住居跡は1ピット、2ピット、7ピットが主柱穴になると思われる。2ピットを主柱穴と認めることが可能であれば、主柱穴は5本ないし6本を想定しうる。

＜検出状況・覆土＞ 黒褐色土の覆土となる。本調査区と比較して、上層は搅乱を受けにくい環境にあったと思われる。

＜がい＞ 石圓炉の北側一石が検出された。炉石は平面を斜めにして配置している。左右の炉石は抜き取られたと想定される。炉石は95cmの長さがあり、炉の東西軸も同様の長さだろう。

＜遺物出土状況＞ 1は炉の覆土から出土した1単位の把手がつく鍍杉文を施す鉢形土器で、唐草文系土器の特徴を有している。2は繩文を地文とする深鉢、3も繩文地文のX字把手付鉢である。また、斜行文口縁（4、5）などが出土している。曾利期の特徴をもつミニチュア土器（土製品-6）も出土している。

＜時期＞ 覆土からの出土遺物は曾利II式～III式期が主体であることから、曾利II式期を想定する。

### ●13号住居跡 （第25～27図 遺物：第47図）

＜位置＞ 外構B区

＜形態・規模＞ トレンチ状の調査区により、住居跡の一部を調査している。北東側は12号住居跡と重複している。南西側は平面プラン確定ができず、南壁の堆積状況から推定した。東西軸の推定径は4.4m。

＜壁・周溝＞ 南壁で確認出来る遺構の深さは15～30cm。周溝は認められない。

＜柱穴＞ 3ピット、6ピットは36cm程度の深さがあり、主柱穴と考えられる。

＜検出状況・覆土＞ 12号住居跡とほぼ同様の黒褐色土層の覆土である。

＜がい＞ 調査区には位置していない。

＜遺物出土状況＞ 5ピットの上層において遺物の集中があった。1は重弧文の口縁で、胸部は繩文を地文にU字の懸垂文を施すほぼ完形の個体である。2、4、6も繩文を地文とする曾利式土器である。

＜時期＞ 12号住居跡と重複するが、出土遺物は曾利II式期が主体であり、ほぼ同時期の所産と捉えることができる。

### ●14号住居跡 （第25～27図 遺物：第48図）

＜位置＞ 外構B区

＜形態・規模＞ トレンチ状の調査区により、住居跡の一部を調査している。南西側はB区1号土坑と重複している。東西軸の推定径は約4.0m。

＜壁・周溝＞ 南壁で確認出来る深さは50cm。周溝は認められない。

＜柱穴＞ 1ピットは深さ約60cmとなり、主柱穴として想定しうる。

＜検出状況・覆土＞ 遺構のプランから推定すると、住居の中心は調査区外（北西側）に位置すると思われる。遺構の上層は今回の調査においてもっとも搅乱の影響が少ない。南壁では覆土を掘り込む土坑状の断面が確認できる。

＜がい＞ 調査区には位置していない。

＜遺物出土状況＞ 住居跡中央覆土内より逆位で1が出土している。加曾利E III式の系譜となる土器である。5は低隆帯の渦巻文に沈線で隙間を埋めるもので、曾利IV式期。ほかにつなぎ弧文の3や8がある。

＜時期＞ 曾利IV式期

## （2）竪穴状遺構

2基の竪穴状遺構が検出された。いずれも、検出時に竪穴住居跡と誤認したものだが、床面は安定しないため竪穴状遺構として報告する。

### ●1号竪穴状遺構 （第24図 遺物：第49図）

B 5・C 5 グリッドに位置している。南東側半分は搅乱を受けている。長軸2.76m、短軸は1.3m残存する。隅丸方

形の浅い掘り込みで、中央に円形の土坑状の掘り込みがあり、黒曜石原石（S86）が出土している。また、土器Iは下半部が残存する諸磯b式の深鉢であり、縄文を地文として横位の沈線で施文している。諸磯b式期の遺物が認められるが、上層からは五領ヶ台式期の浅鉢破片(5)が出土している。

#### ●2号竪穴状遺構 （第24図 遺物：第49図）

A 5・B 5 グリッドに位置している。北東側は搅乱を受け、西側は調査区外に続いている。掘り込みは全体的に浅く、床面は凸凹している。9号土坑と切り合い、覆土の様子から9号土坑に先行すると考えられる。土器の出土は上層からわずかに認められ、諸磯b式期と考えられる。

#### （3）土坑(第28図～第32図)

土坑はナンバリングしたもので72基、住居内に認められるもので17基（土坑と考えられる“pit”を含む）、合計89基を確認した。土坑の大半は検出面からの掘り込みが浅く、遺物量も少ないため用途不明だが、いくつかの土坑は土坑墓と推定しうる。

時期として特定できるものは、諸磯式期が38基、曾利式期が4基であり、なかでも諸磯b式期の土坑が多いことが特徴である。なお、住居跡の覆土内における土器型式の混在の様子に比較すると、土坑の覆土内からは比較的同時期同型式の遺物が出土する傾向にある。一覧表（第2表）にて土坑を整理しているが、ここでは特記すべきものを報告する。

#### ●18号土坑 （第28図 遺物：第50図）

B 5 グリッドに位置している。長径119cm、短径89cm、深さ45cm。出土遺物6は口縁部で、縄文を地文に集合沈線を施している。諸磯b式。

#### ●30号土坑 （第29図 遺物：第50図）

D 5 グリッドに位置している。梢円形の土坑で長径173cm、短径94cm、深さ50cm。諸磯b式期の土器片が出土。10、11は縄文を地文とせず横位の沈線のみ施文される。13や14に縄文地文の集合沈線となるものがある。同型品と思われる有孔石製品が2点出土している。

#### ●31号土坑 （第29図 遺物：第50・51図）

C 4 グリッドに位置している。長径残存部で121cm、短径115cm、深さ116cm。非常に深い土坑で、検出面から60cmほどの深さ付近で100個以上の疊の集積が認められる。疊集積下層からは、諸磯b式期の深鉢（15）の口縁波頂部が3単位分重なって出土した。この土器と疊集積の中間層を土壤サンプリングしており、第4章において土壤分析を行っている。このほかの出土遺物（16～24）も諸磯b式期となる。

#### ●33号土坑 （第29図 遺物：第51図）

F 4 グリッドに位置している。6号住居跡に重複する。円形の土坑で長径99cm、短径86cm、深さ70cm。出土遺物は少ないが、大きめの破片が多く、加曾利E IV式の系譜となる曾利V式の終末段階を示している。

#### ●34号土坑 （第30図 遺物：第52・53図）

D 4・E 4 グリッドに位置している。長径235cm、短径178cm、深さ100cm。2つの掘り込みが確認され、実際は2つの円形の土坑が重複していると想定される。北側は諸磯b式期を中心とした遺物が多数出土しており、南側は曾利II式期の遺物が中心である。ただし、北側の土坑上層にも数点曾利式土器が出土している。諸磯式期の土器は破片が多く、遺物の出土量に比較して復元可能な土器が少ない。37は縄文地文で集合沈線を施文する深鉢の上半部で、ほぼ全周する。諸磯b式の土器には浮線文（40、44、45、48、50）や沈線文（38、42、43、46、49、52）のほか、縄文のみ（39、41、47）や連續爪形文（51、53）がある。

曾利式土器では7号住居跡の36と接合した資料があり、特筆される。同じく7号住居跡の5と同一個体と思われる列点文の特徴を有し共通の胎土となる破片が10点ほど出土しているが、こちらの接合関係はない。曾利式期の資料は7号住居跡と同様曾利II式期のものが多く、諸磯式期の埋まりきっていない土坑を利用して廃棄したものと想定される。

#### ●41号土坑 （第30図 遺物：第53図）

D 1・E 1 グリッドに位置している。長径55cm、短径48cm、深さ15cm。覆土は包含層との区別がつきにくく、検

出段階で土坑の上層となる位置から、諸磯b式の有孔浅鉢破片が重なって出土した。ただし、有孔浅鉢68-70は、胎土や焼成の違いからそれぞれ別個体と判断でき、完形にはならない。

●43号土坑（第30図 遺物：第54図）

D6グリッドに位置している。調査区外へ続いている。現状の長径142cm、短径67cm、深さ74cmでやや大きい土坑となる。覆土内からは諸磯b式期の土器（72-75）が出土しているほか、土坑の上層からは土偶（土製品-2）の出土がある。土偶の年代観は曾利式期で、土偶出土位置の上層はやや焼土を含む土層が観察される。

●52号土坑（第31図 遺物：第54図）

E4グリッドに位置している。円形の土坑で長径106cm、短径92cm、深さ36cm。51号土坑、53号土坑とそれぞれ重複する。出土土器は縄文を地文に集合沈線を施すものが多く、諸磯b3式が主体だが、わずかに諸磯c式の様相を呈すものもある。

●53号土坑（第31図 遺物：第54・55図）

E4グリッドに位置している。長径推定142cm、短径131cm、深さ80cmで大きめの土坑である。52号土坑、54号土坑とそれぞれ重複する。出土遺物のうち、87は片口のつく諸磯b式の深鉢で、今回の調査では唯一のもの。縄文を地文に集合沈線を施す土器が多く、概ね諸磯b3式期の所産と推定される。

●56号土坑（第32図 遺物：第55・56図）

F3グリッドに位置している。円形の土坑で長径146cm、短径138cm、深さ54cm。南側を6号住居跡、北側は57号土坑と重複する。土坑の底からは、3個体の土器がほぼ完形で出土しており、埋納行為と捉えることができる。重なりからその順番が想定可能で、まず107、次に109、さらに109に入れ子になるように108の土器が置かれたと思われる。107は、ハの字文が特徴的な曾利V式の深鉢で、胸部が一部欠損するほかは完形である。欠損部は穿孔行為による可能性も想定できる。108は四單位の波状口縁をもつ綾杉文を地文とする深鉢で、口縁には円形刺突がそれぞれ認められる。109は櫛描条線の深鉢で大きく扁平し、作りもやや粗雑である。出土時には土圧のためか、口縁が内側から外側へ広がるように潰されていた。覆土内からは曾利V式の出土が多いが、114や118などのやや古い曾利期の土器も出土している。

●57号土坑（第32図 遺物：第57図）

E3・F3グリッドに位置している。長径215cm、短径142cm、深さ101cm。土坑の東側が深く円形になっており、西側の掘り込みと重複している可能性が高いが、西側からの出土遺物が少なく時期差を求めることが難しい。なお、南側は56号土坑に切られる。遺物の出土量は34号土坑に次いで多く、諸磯b式が主体で、縄文を地文に沈線を施すものが多い。121はキャリバー状に大きく口縁が開くもので、諸磯b2式。口縁部に退化した顎面把手をつけるものがある（121-124）。123は縄文を地文に連続刺突で渦巻文などのモチーフを施している。有孔浅鉢の破片も認められる。いずれにしても破片が多く完形になる遺物はなかった。

●63号土坑（第32図 遺物：第58図）

D6グリッドに位置している。長径93cm、短径77cm、深さ30cm。やや梢円形の土坑で縄文を地文とする諸磯式土器が出土している。146は口縁が外側へ開いていく器形で集合沈線を施すもので、諸磯b3式。石製品-4は黒色の滑石で作られたけつ状耳飾りであり、土坑の底から出土している。

●外構B区1号土坑（第25～27図 遺物：第59図）

外構B区の東端に位置しており、東側は14号住居跡と重複している可能性がある。土坑として調査したが、第1次調査A区で検出されていた“溝”遺構の直線上に位置しており、おそらく同様の遺構でよいのではないかと思う。出土遺物は混在しているが、覆土は比較的安定しているため、擾乱とは判断できない。

●外構B区2号土坑（第25～27図 遺物：第60図）

外構B区の西端に位置しており、覆土内からは土器とともにやや大きめの礫も数点出土している。出土遺物は概ね諸磯b3式期が主体である。

（4）外構C区（第25～27図 遺物：第60図）

外構C区からは、検出面を掘りこむ5基の土坑を確認したが、調査区の壁面では上層で土坑状の堆積がほかにも認め

られた。調査区の幅はかなり狭いため、住居跡の一部の可能性もあるが、隣接する第1次調査B区では当該付近に住居跡の検出はない。出土遺物（第60図）は諸磯式から曾利式まであるが、189、192-195などの曾利V式の遺物が目立つ。

#### （5）礫集積遺構 （第24図）

1基の礫集積遺構が見つかった。C 4 グリッドに位置している。10個程度の礫を集積しているもので、本来はいわゆる集石土坑とされるものであった可能性も考えられるが、検出時にプランは検出できていない。磨石状の円礫も3点認められるが、原則不整形で拳大の礫となり、一部は焼け石である。

#### （6）遺構外出土土器 （第59・60図）

本調査区の包含層掘削時に遺構外から出土したもの（166-174）、外構B区の遺構外から出土したもの（175-179）がある。166-170などの諸磯式の土器が多いほか、173や174などの曾利V式の土器も見られる。外構B区では井戸尻式期の遺物も出土している。また198-212に調査区一括となる遺物を掲載した。諸磯b式・c式、井戸尻式、曾利式などを中心に出土している。

### 第4節 土製品・石器等の遺物

遺構の覆土内において、年代差をもった土器が混在して出土していることを確認した。この状況は土器以外の遺物（土製品・石器等）においても同様であると推測される。以下では節を分け、出土遺物ごとに検討を加える。

#### （1）土偶・土製品

##### ○土偶 （第62図）

土偶の破片が2個体分出土している。

1はポーズ土偶で、右手で折りたたんだ左手を抱えている。親指は曖昧だが、人差し指から小指までの四本は丁寧に区切られている。4号住居跡の上層から出土しているが、ポーズ土偶はおむね中期中葉勝坂期にみられるもので、流れ込みによると判断できる。2は胸部から腹部にかけて、欠損する腕部はやや上方に開くと思われる。浅い正中線が中央に認められ、乳房の下から背中にかけて沈線でプラ文が施されている。形態的には曾利式期となる。

##### ○ミニチュア土器 （第62図）

3は有孔浅鉢のミニチュアと考えられるもので、1／5周ほど残存しており、口縁部の孔は等間隔に穿たれている。5号住居跡からの出土であり、流れ込みと思われる。4、5はそれぞれ諸磯期の深鉢をモチーフにしたミニチュア土器と思われ、集合沈線を施しているほか、4には赤彩が認められる。4は53号土坑、5は1号竪穴遺構で、いずれも諸磯期に帰属する。6は曾利期の深鉢をモチーフにしたもので、1単位の把手状の突起が口縁につく。曾利II式の12号住居跡からの出土。

##### ○土製円盤 （第63図）

土製円盤の出土は比較的少なく、8個体を図示した。無文となるもの（7、8、11）、縄文をもつものの（9、10、13）、浮線文をもつものの（12、14）が確認できる。

##### ○そのほか土製品 （第63・64図）

諸磯b式期に認められる猪獣面把手が2個体分出土している。15は頭部が先端につまみ出されるように整形されたもので、目・鼻・口を沈線などで施している。土器本体の胴部文様は集合沈線になる。16は頭部から鼻先にかけてが強調されているもので、同様に目・鼻・口が認められ、目の表現の上部には孔が貫通している。頭部および土器本体の胴部文様には浮線文が施されている。17は焼成粘土塊で、土鈴と同様のサイズ・整形だが、中実となっている。18、19は土製品としたが、曾利V式の土器につく把手部分の可能性が高いと推定される。

## (2) 石器

出土した石器には、石鏃、石匙、石錐、楔形石器、二次加工剥片、搔器、横刃型石器、原石・石核、打製石斧、磨製石斧、尖頭器、磨石類、石皿・砾石皿などがある。このほかに礫が多数出土している。

これらの出土分布については、各遺構で示したほか、本調査区については第85図において、全体の傾向を示している。

### ○石錐 (第65・66図)

石錐および石錐未製品と考えられるものは、61点出土しており、そのうち53点を図示した。石材はほとんど黒曜石だが、滑石(12)、チャート(34)も認められる。図示した石錐については、形状から分析を行った。分類基準は、酒呑場遺跡第4次調査報告書に依るものだが、A-1~3の細分は省略した。

A類：側縁部がカーブし、基部端が尖るもの 13点 (4・11・14・15・18~20・24・28・30・33・42・44)

B類：側縁部が直線的で、基部端が尖るもの 5点 (3・7・16・27・40)

C類：側縁部が直線的で、基部端が丸いもの 17点 (1・5・6・8~10・12・17・21~22・31・36・38・41・43・46)

D類：側縁部がカーブし、基部端が丸いもの 9点 (2・25・26・32・35・37・45・47・48)

未製品 5点 (49~53)

次いで遺構別（製品に限る）では、1号住居跡からは4点（類型順に1:1:1:1）、5号住居跡から2点（0:0:2:0）、6号住居跡から5点（1:1:3:0）、7号住居跡から7点（2:1:3:0:不明1）、8号住居跡からA類1点、9号住居跡からA類1点、10号住居跡から6点（2:1:0:2）などとなる。また諸磯式期の土坑（35土・43土・57土・61土・外構B区2土）から6点（2:0:1:1:2）が出土している。これらの傾向は、第4次調査でも所見がある通り、諸磯b式期にA類が多く、曾利式期にはC類が多くなる傾向を示している。さらに言えば、D類も諸磯式期に多く、A類との型式差が近いと考えられる。

### ○石匙 (第67・68図)

石匙は小型で横型のものが9点、縱型が1点、大型のものが3点出土しており、すべて図化した。石材別では、黒曜石が3点、チャートが3点、ホルンフェルスが4点、安山岩・珪質頁岩・流紋岩がそれぞれ1点ずつ出土している。

小型横型石匙にはいくつかの形態がある。つまみ部と対極の位置にある辺を刃部とすると、刃部を両面加工するもの（両刃）、片面加工するもの（片面）がある。さらに、つまみ部に接する側辺が直線的になるか、凸状になるか、刃部は直刃・凸刃・凹刃のいずれになるかなど様々な属性から分類が可能であるが、ここでは事実確認にとどめる。

54は直刃・側辺直線で、三角形状になる唯一のタイプ。55は凸刃で側辺は直線と凸状となり、57、58、62も同様となる。とくに62とは法量までかなり類似する。56は凸刃で側辺は凸状になり肩が張るタイプで、59も同様である。60、61は破片で全体は分からぬが、60は直刃である。

63は縱型のもので、つまみ部抉り加工部に接する辺を刃部としている。刃部はほぼ直線的である。

64~66は大型の石匙である。

遺構別では諸磯期の10号住居跡から2点、同時期の土坑から3点出土しており、比較的曾利式期の住居内からは出土が少ない。

### ○楔形石器 (第69図)

原石あるいは剥片を両極打撃した痕跡が残るもので、2点を確認した。いずれも遺構外の出土で、これまでの調査で見つかっている割合に比べて極端に少ない。

### ○二次加工剥片・微細別離剥片 (第69図)

二次加工剥片あるいは微細別離剥片については、5点のみ図示した。69は粘板岩素材で、つまみ部と刃部状の剥離を施しているが、石匙とはならない。70、71は黒曜石で表裏面に微細な剥離面をもつ。71はやや刃部状になり、搔器的な機能を持っていた可能性がある。72は同じく黒曜石で、石錐未製品の可能性がある。73は水晶製の二次加工剥片で、側面に使用痕をもつ。水晶はほかに2点出土しているが、いずれも加工が一部加えられた剥片である。

### ○ 振器 (第69図)

74は黒曜石素材で、欠損部をもつが半円形の刃部を形成している。75はチャート素材のもの。いずれも曾利Ⅰ式期の5号住居跡から出土している。

### ○ 石錐 (第70図)

石錐は14点の出土のうち、9点を図化した。図化したものでは、左右非対称のつまみを持ち棒状の石錐刃部をもつもの(77、78、80、82、84)、左右対称のつまみ部で徐々に尖る石錐刃部をもつもの(76、79、83)、つまみ部がなく棒状のもの(81)がある。断面形状は三角形(77、78、80、83、84)、四角形(81、82)、レンズ状(76、79)となり、やや対応関係もある。石材は黒曜石(76、78、81、83、84)、流紋岩(77、80)、凝灰岩(79)、チャート(82)がある。79・80は諸磯式期の10号住居跡、77・78は曾利Ⅱ式期の7号住居跡、76は曾利Ⅳ式期の1号住居跡からの出土である。

### ○ 横刃型石器 (第71図)

長辺のうち片方に刃部を形成するものを横刃型石器として、1点を図化した。頁岩製で両側から刃部を形成する。曾利Ⅳ式期の6号住居跡出土である。

### ○ 原石・石核 (第71図)

原石あるいは石核とされるものは、大形のもののみ3点図示した。86は1号竪穴遺構出土で、88gと大型のもの。87は47号土坑から出土したものである。いずれも自然剥離面(ズリ面)をもっているが、中でも88は全体的にその傾向があり、より原石的と思われる。

### ○ 打製石斧 (第71・72図)

打製石斧は剥離による整形が明瞭で形をよく残すもの19点のみ図示した。以下のように分類する。

短冊形：ほぼ長方形となるもの 10点(89-92、94、100、102、105-107)

長台形：刃部に向かって直線的に開くもの 5点(96、97、101、103、104)

バチ形：基部で一度くびれたのち、刃部に向かって開くもの 3点(95、98、99)

分銅形：中間でくびれるもの 1点(93)

石材については砂岩8点、ホルンフェルス7点、頁岩2点、流紋岩1点、凝灰岩1点である。

### ○ 打製石斧 (第73図)

小型のものと大型のもの、定角式と乳棒式がある。108～110は定格式である。108は残存する長径が2.85cmで小型の緑色岩製。109は長径6.15cmで刃部に向かってやや開く形態、緑色岩製。110は蛇紋岩製でほぼ長方形。

111は大型のもので残存長径15.2cm。緑色岩製の乳棒式である。112、113は破片だが、やや大型のものと思われる。112は緑色岩製で乳棒式か。113は硬質細砂凝灰岩製で、同じく乳棒式と思われる。

5号住居跡から108、109、111と、サイズの異なる3点が同一住居の覆土内から出土している。

### ○ 尖頭器 (第73図)

尖頭器の可能性があるものについて2点図示した。114は基部と推定されるもので、押圧剥離により側辺を調整している。115は刃部か。いずれもチャート製で、前期のものと推定され、115は10号住居跡の出土で遺構に伴うと思われるが、114は56号土坑の上層からの出土で、おそらく流れ込みだろう。

### ○ 磨石類 (第74～80図)

磨石類は多くの出土が認められた。磨石類には磨石・稜磨石・凹み石・たたき石を含むものとするが、これらは複合的な要素を多く含むため、まとめて報告することとした。

磨石類に使用される礫の素材は、円礫が主体だが、方形礫(角礫)を使用するものも認められるほか、棒状礫や不整形の礫を使用しているものもある。

凹み石には表裏両面に敲打痕が明瞭に残るものが多いが、側面にも敲打痕をもつもの(134、136、144、146、157、158)や、小口をたたき面とするもの(126、134、146、152、153)も認められる。敲打痕には径1～2cmほどのものや、1cm以下の細かい打痕を連続するものなどがある。稜磨石となるものは118、143、147、151などがあり、稜をもつ面がザラザラと摩耗している。いわゆるたたき石的な形態となるものは132、133、139、148などがあり、小口面に細かい敲打痕が認められる。なお133は蛤刃状を呈する。

遺構内からも多く出土する。1号住居跡から出土した116は、炉石の側壁の一部として再利用されていた。5号住居跡からは図示しただけでも8点の磨石類が出土し、ピット内から出土するものもある。同じく7号住居跡からも6点の出土がある。

石材は多くは安山岩であり、次に砂岩（花崗質砂岩）、花崗岩もある。

#### ○石皿 （第80図・81図）

石皿類の出土量が多いことは、既に本遺跡の特徴として知られている。完形の石皿はないものの、縁辺部をもつ破片が35点、縁辺部以外の石皿と思われる破片が20点ある。ある程度形を残している6点を図示した。いずれも敲打等により整形したものと思われる。162は5号住居跡から出土。163は5号住居跡のVI土坑からの出土で、いずれも浅い機能面を有している。164は15号土坑からの出土で、稜に沿ってススが付着している。165は諸磯式期の57号土坑のもので、窪みはほとんどない。166はデイサイト製で、深い機能面を形成し、ところどころ凹部をもつ。167は擾乱からの出土だが最も形を残すもので、側辺上面に溝状の浅い掘り込みを有している。166以外は安山岩で作られている。

#### ○礫石皿・台石 （第81～83図）

自然礫平坦面をスリ面とするものを礫石皿とした。破片を含め57点の出土があり、うち7点を図示した。168～170は4号住居跡から出土したもので、168はやや窪んだスリ面をもち、169は凹痕が表裏面に認められる。170は30kgを超える大型のもので、住居跡床面に置かれていた。表面をスリ面とし、凹痕もまばらに残されている。171は5号住居跡からの出土で、凸凹の一切ないスリ面を形成する。172は7号住居跡出土で板状のもの、173は同じく7号出土で表裏面に多数の凹痕が残るいわゆる多孔石とされるものである。外構B区出土の174は表裏面にスリ面をもつ。図示したものはすべて安山岩を使用している。

#### ○大型磨石類 （第83図）

大型の棒状礫を素材とするもので、175、176は1号住居跡の炉石として再利用されていた。石棒状の断面をもち、175には明瞭な凹痕が表面に認められる。いずれも小口面には敲き痕が残され、ハンマーとして使用していたことも容易に想像がつく。177は外構B区出土で、小口面に敲き痕が残る。

### （3）石製品 （第84図）

5点の石製品が出土した。1、2は諸磯式期の30号土坑から出土した有孔石製品で、滑石を素材に2つの小孔があけられている。類例は県内ではあまり知られていない。3はけつ状耳飾りと思われるもので、諸磯式期の31号土坑から出土。4はけつ状耳飾りで、黒色の滑石製。孔は両方向からあけられた形跡があり、片面ではもう一つ未貫通の孔が認められる。3／5程度残存し、勾玉状を呈している。5はヒスイ（硬玉）製の垂飾で、7号住居跡上層から出土している。

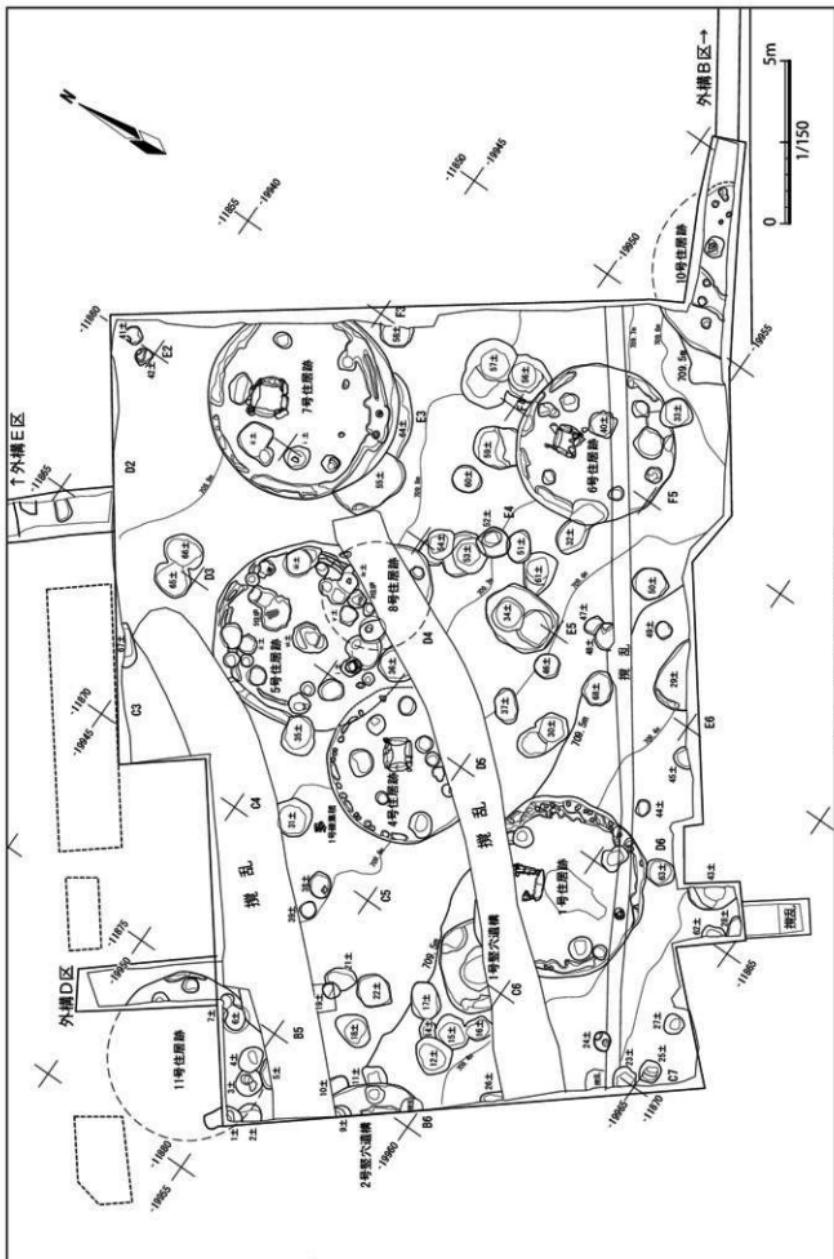
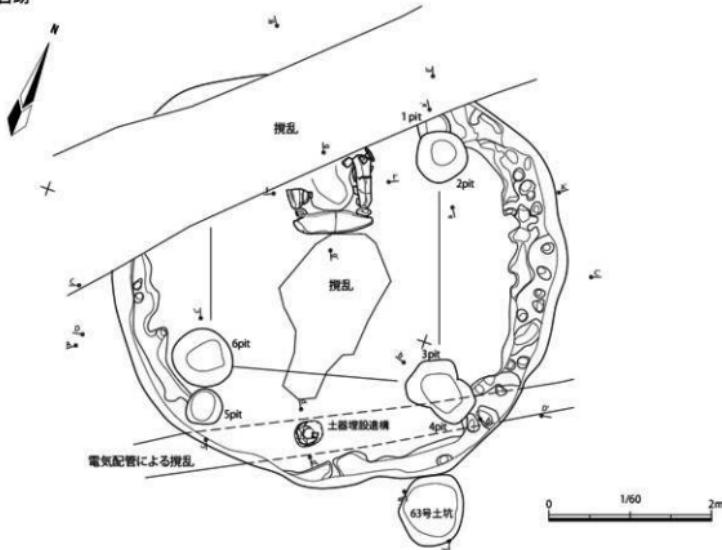


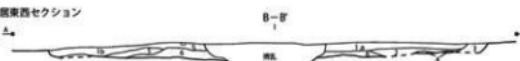
図7-本調査区遺構分布図

## 1号住居跡



1号住居東西セクション

709.6m ±▲



B-B'

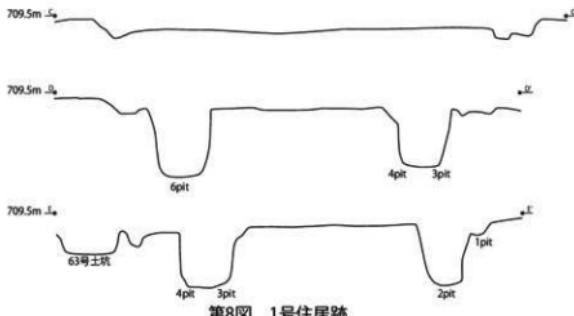
1号住居南北セクション

709.6m ±▲

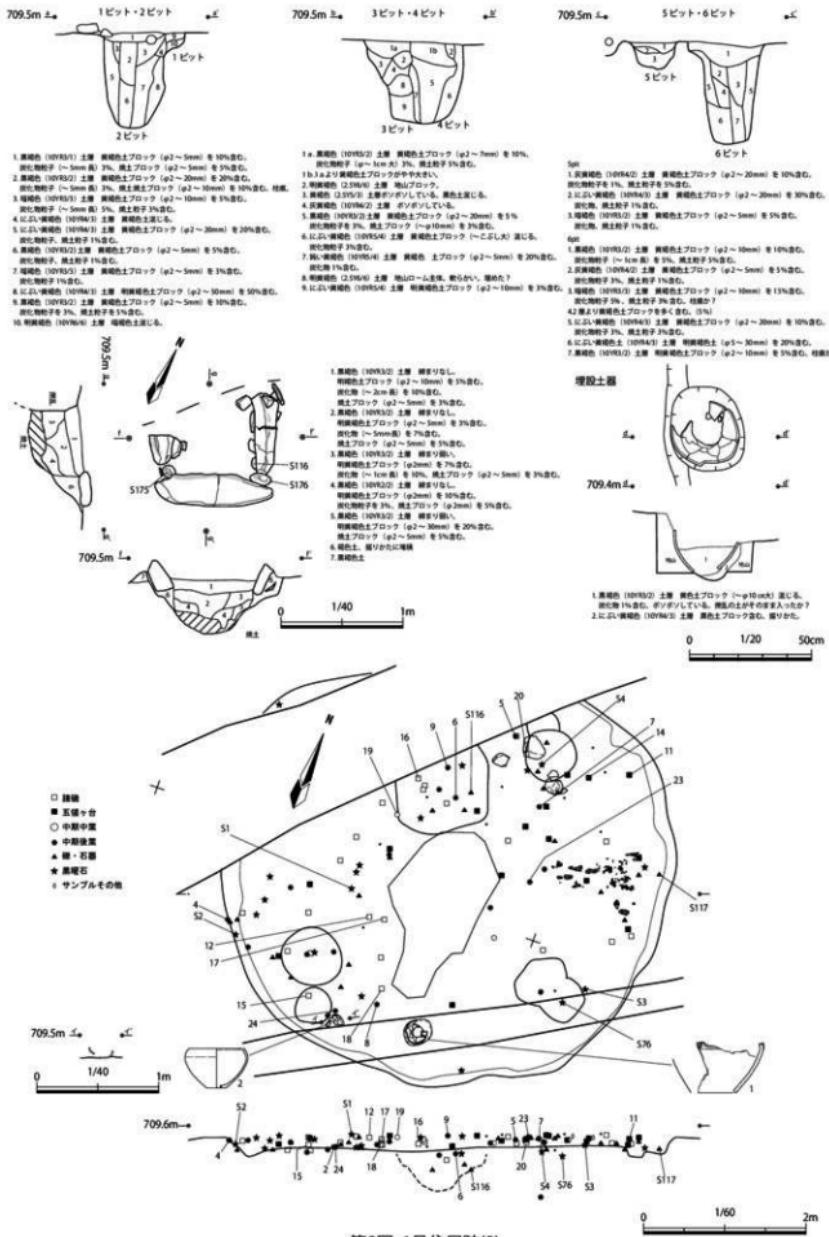


C-C'

- 1a. 黄褐色 (10YR3/3) 土層 締まりなし。黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10$ mm) を 5% 含む。炭化物 ( $\varphi \sim 1$ cm 程) を 3%、焼土粒子 ( $\varphi 2 \sim 5$ mm) を 10% 含む。
- 1b. 黄褐色 (10YR3/3) 土層 締まりなし。黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10$ mm) を 5% 含む。炭化物 ( $\varphi \sim 3$ cm 程) を 5%、焼土粒子 ( $\varphi 2 \sim 5$ mm) を 10% 含む。
2. 黄褐色 (10YR3/3) 土層 締まり弱い。黄褐色土ブロック ( $\varphi 5 \sim 30$ mm) を 10% 含む。炭化物 ( $\varphi \sim 1$ cm 程) を 3%、焼土粒子 ( $\varphi 2 \sim 5$ mm) を 3% 含む。
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土層 締まり弱い。黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 4$ mm) を 5% 含む。炭化物 焼土粒子をわずかに含む。
4. 棕色 (5YR6/6) 土層 締まり強い。焼土ブロックを含む。
5. 黄褐色 (10YR3/3) 土層 締まりなし。黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 5$ mm) を 5% 含む。炭化物 ( $\varphi \sim 1$ cm 程) を 5%、焼土粒子 ( $\varphi 2 \sim 15$ mm) を 5% 含む。
6. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土層 締まり弱い。黄褐色土ブロック ( $\varphi 5 \sim 50$ mm 大) を 30% 含む。炭化物 烧土粒子 3% 含む。
7. 黒褐色 (10YR3/2) 土層 締まりなし。黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 5$ mm) を 10% 含む。炭化物 ( $\varphi \sim 1$ cm 程) を 15%、焼土粒子 ( $\varphi \sim 15$ mm) を 5% 含む。

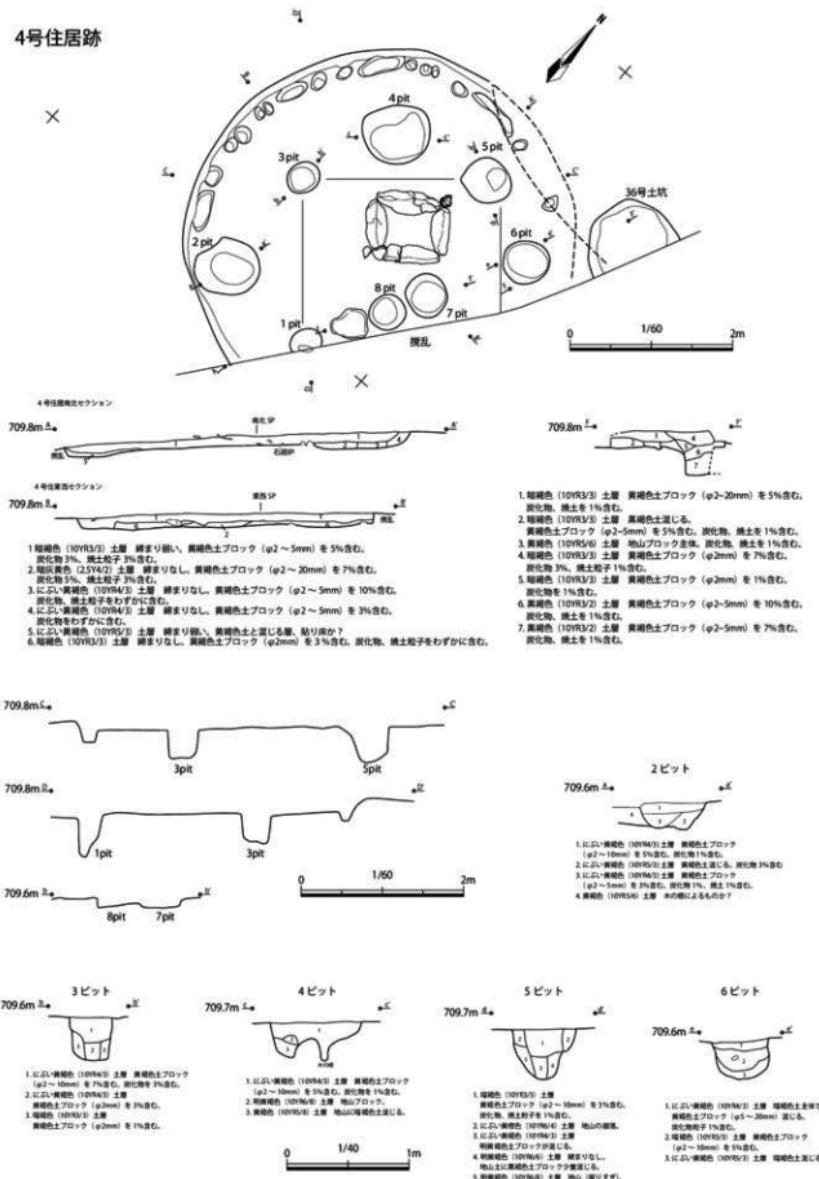


第8図 1号住居跡

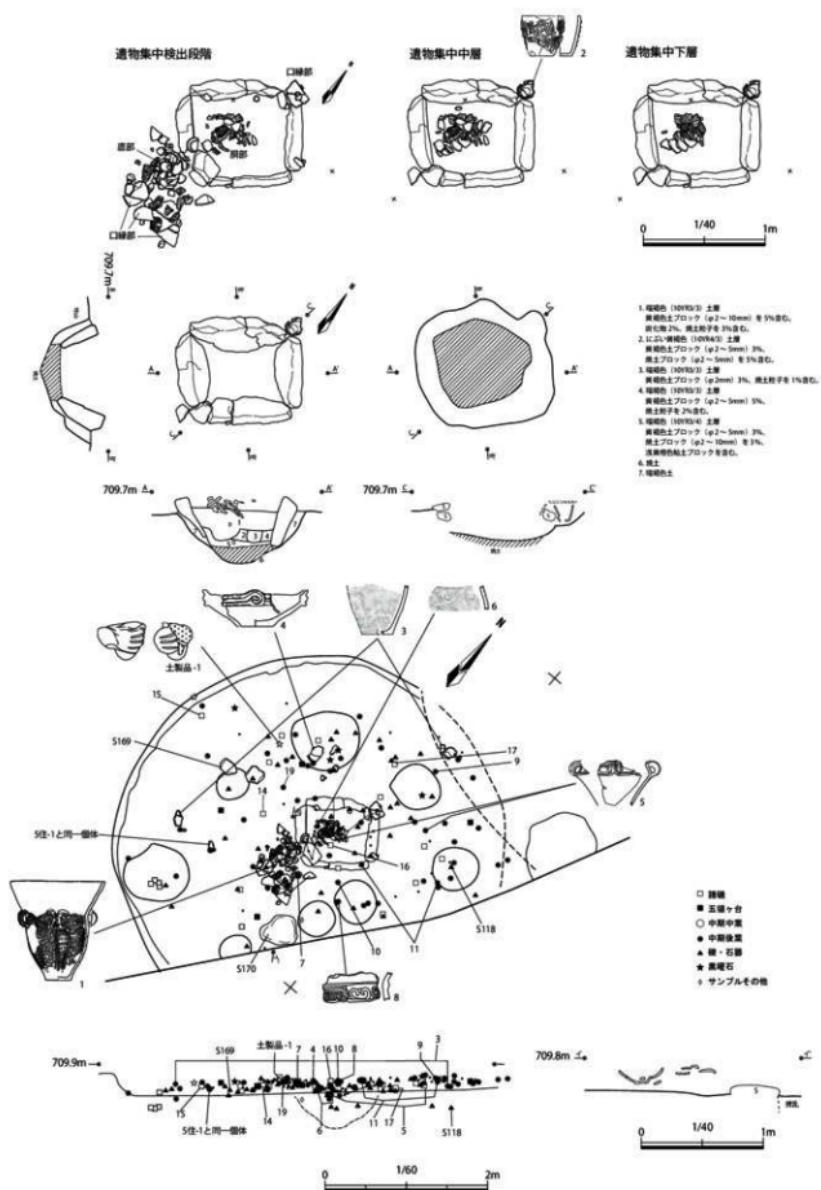


第9図 1号住居跡(2)

## 4号住居跡

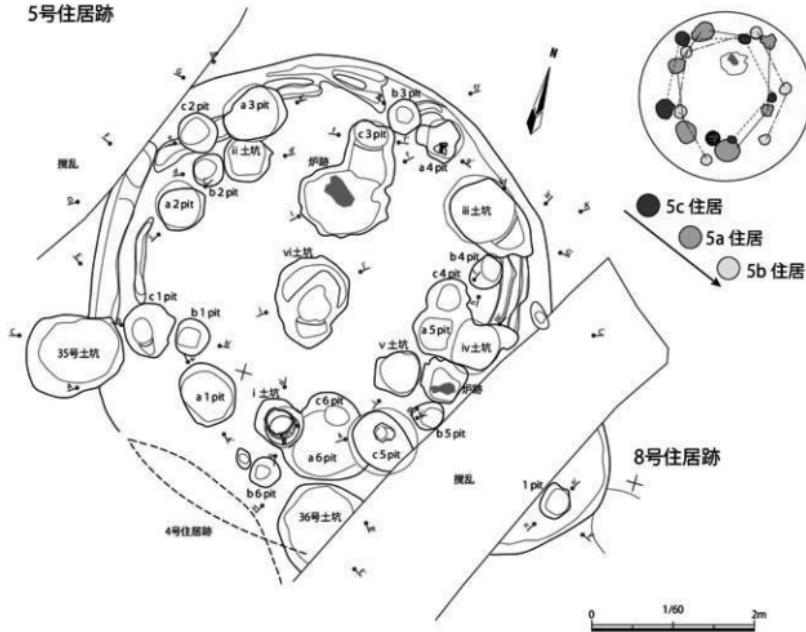


第10図 4号住居跡

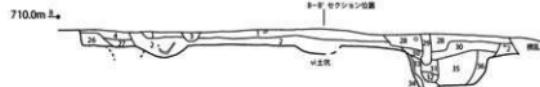


第11図 4号住居跡(2)

## 5号住居跡

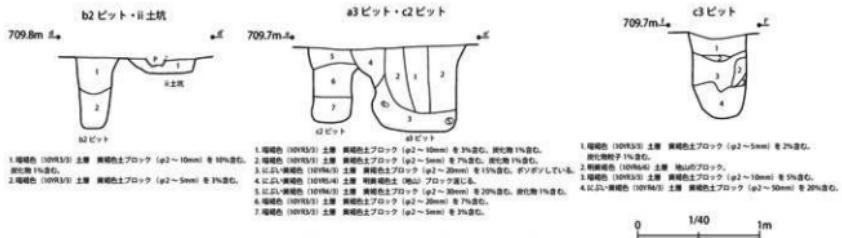
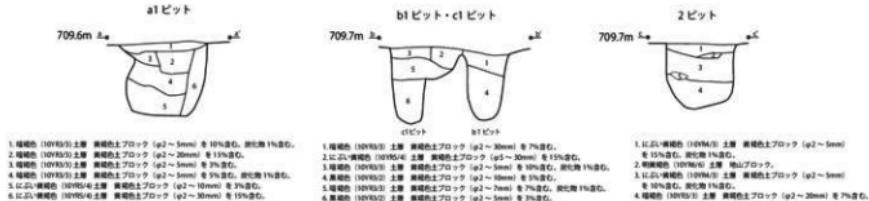
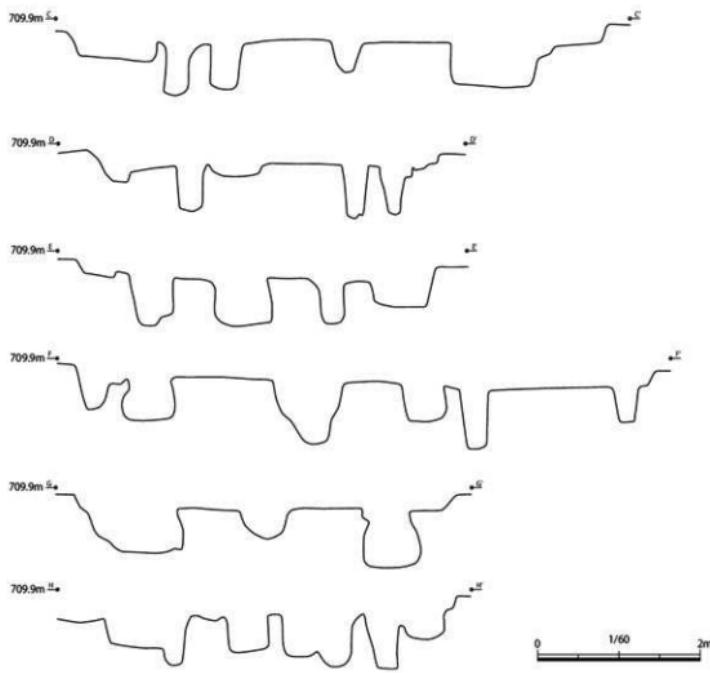


710.0m △  
A-E セクション位置

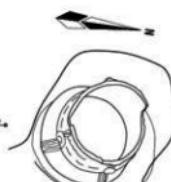
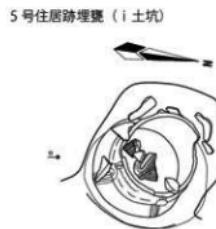
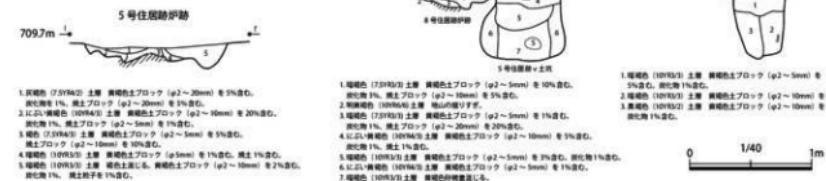


1. 黄褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 7%含む。炭化物粒子 3%、鐵土粒子を 5%含む。  
 2. 明褐色 (10YR3/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2mm 以下) を 10%。  
 3. 黄褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2mm) を 3%含む。炭化物、鐵土粒子を 1%含む。  
 4. にじみ黄褐色 (10YR4/3) 土層 こぶし大の黄褐色土ブロック混じる。河原土 (φ2mm 大) を 5%含む。炭化物、鐵土を 1%含む。  
 5. にじみ黄褐色 (10YR4/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 5%含む。炭化物、鐵土を 1%含む。  
 6. にじみ黄褐色 (10YR5/4) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 1%含む。  
 7. 黄褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 1%含む。炭化物、鐵土粒子を 1%含む。  
 上部の新しく特徴的な土坑の可能性あり。  
 8. 黄褐色 (10YR5/6) 土層 φ10mm 以下の黄褐色土ブロック主体で、暗褐色土が混じる。  
 9. 明褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 10%含む。炭化物粒子 1%、鐵土粒子を 3%含む。  
 10. にじみ黄褐色 (10YR5/4) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 20%含む。  
 11. 鐵 (10YR4/4) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-10mm) を 5%含む。炭化物、鐵土を 1%含む。  
 12. 黄褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 7%含む。  
 13. にじみ黄褐色 (10YR5/4) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 3%含む。  
 14. にじみ黄褐色 (10YR5/4) 土層 明褐色土ブロック (φ2-5mm) を 30%含む。炭化物 1%含む。  
 15. 明褐色 (10YR3/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-10mm) を 3%含む。  
 16. にじみ黄褐色 (10YR5/3) 土層 黄褐色土混じる。炭化物 1%含む。  
 17. 黄褐色 (10YR4/2) 土層 明褐色土ブロック (φ2-5mm) を 2%含む。炭化物、鐵土粒子を 1%含む。  
 18. 明褐色 (10YR3/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 5%含む。炭化物、鐵土粒子を 1%含む。
19. にじみ黄褐色 (10YR4/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-30mm) を 20%含む。炭化物粒子を 1%含む。  
 20. 明褐色 (10YR3/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2mm 以下) を 1%含む。炭化物 1%含む。  
 21. 明褐色 (10YR3/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 5%含む。  
 22. 黄褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 3%含む。炭化物 1%含む。  
 23. 黄褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-30mm) を 15%含む。  
 24. にじみ黄褐色 (10YR4/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2mm 以下) を 5%含む。炭化物 3%含む。  
 25. 明褐色 (10YR3/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-10mm) を 7%含む。炭化物 1%含む。  
 26. にじみ黄褐色 (10YR4/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-30mm) を 15%含む。  
 27. 黄褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-7mm) を 5%含む。鐵土粒子を 1%含む。  
 28. ～30. まで (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロックの土壤混在  
 31. 黄褐色 (10YR3/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2mm 大) を 7%、同 (φ5-20mm) を 3%含む。炭化物、鐵土を 1%含む。  
 32. にじみ黄褐色 (10YR5/4) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 10%含む。  
 33. にじみ黄褐色 (10YR4/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 5%含む。炭化物 1%含む。  
 34. にじみ黄褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 5%含む。原生植物粒子を 1%含む。  
 35. 明褐色 (10YR3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-15mm) を 7%含む。炭化物を 1%含む。  
 36. にじみ黄褐色 (10YR4/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2-5mm) を 5%含む。

第12図 5号住居跡・8号住居跡



第13図 5号住居跡・8号住居跡(2)



709.7m ↓

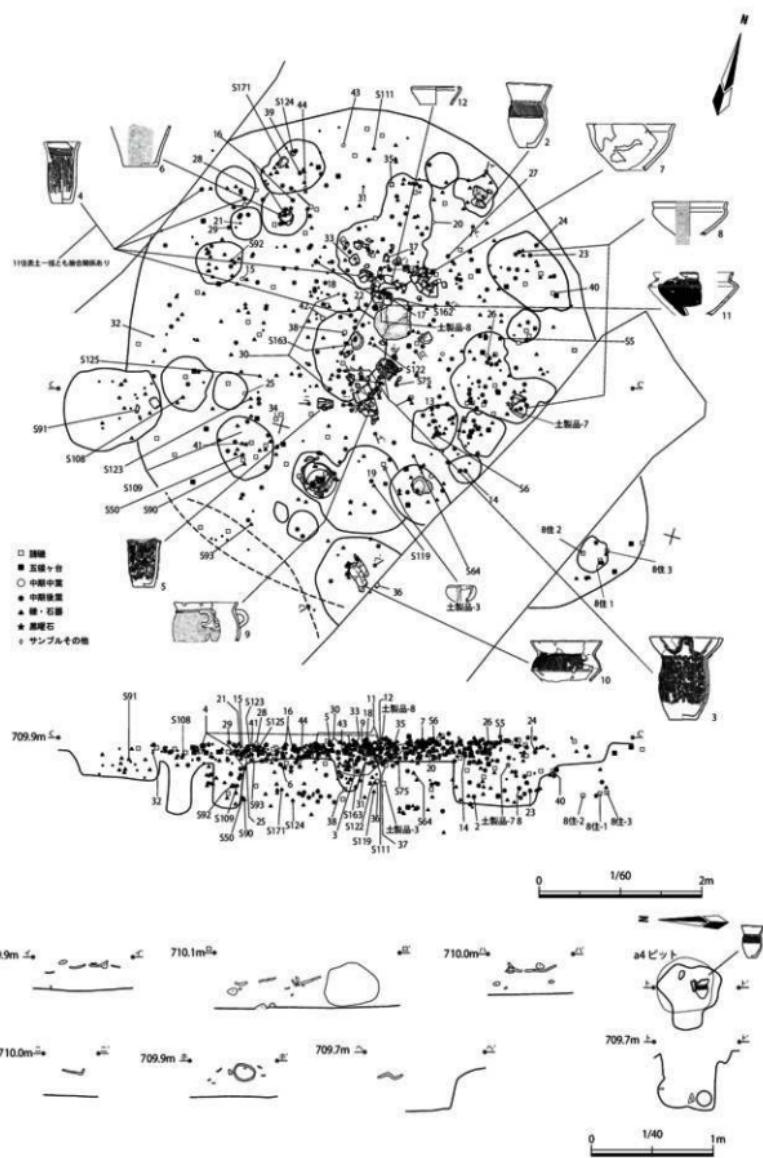
709.7m ↓

709.7m ↓

0 1/20 50cm

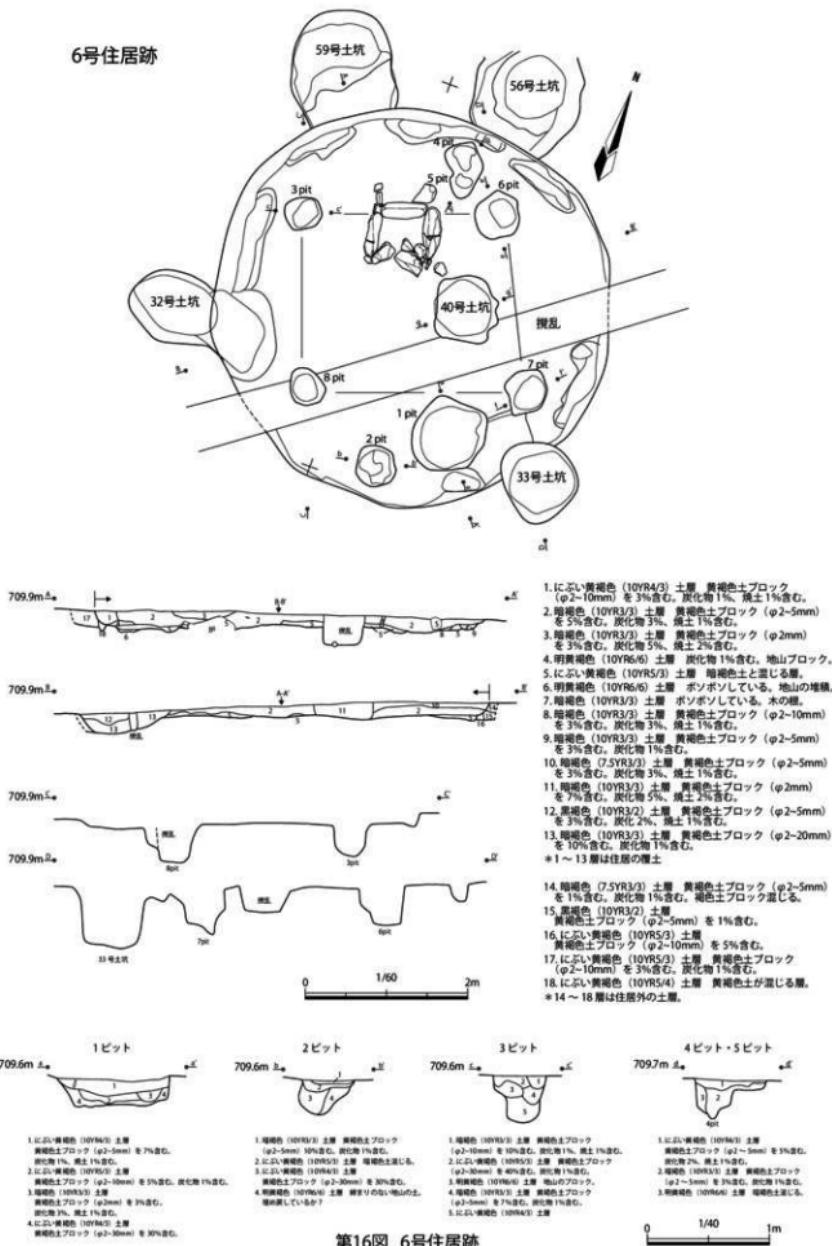
- 褐色色 (109/3/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2~5mm) 5%含む。
- 褐色色 (109/3/2) 土層 黄褐色土ブロック (φ2~5mm) 5%含む。
- にじ(褐色) (109/4/3) 土層 黄褐色土ブロック (φ2~5mm) 5%含む。

第14図 5号住居跡・8号住居跡(3)

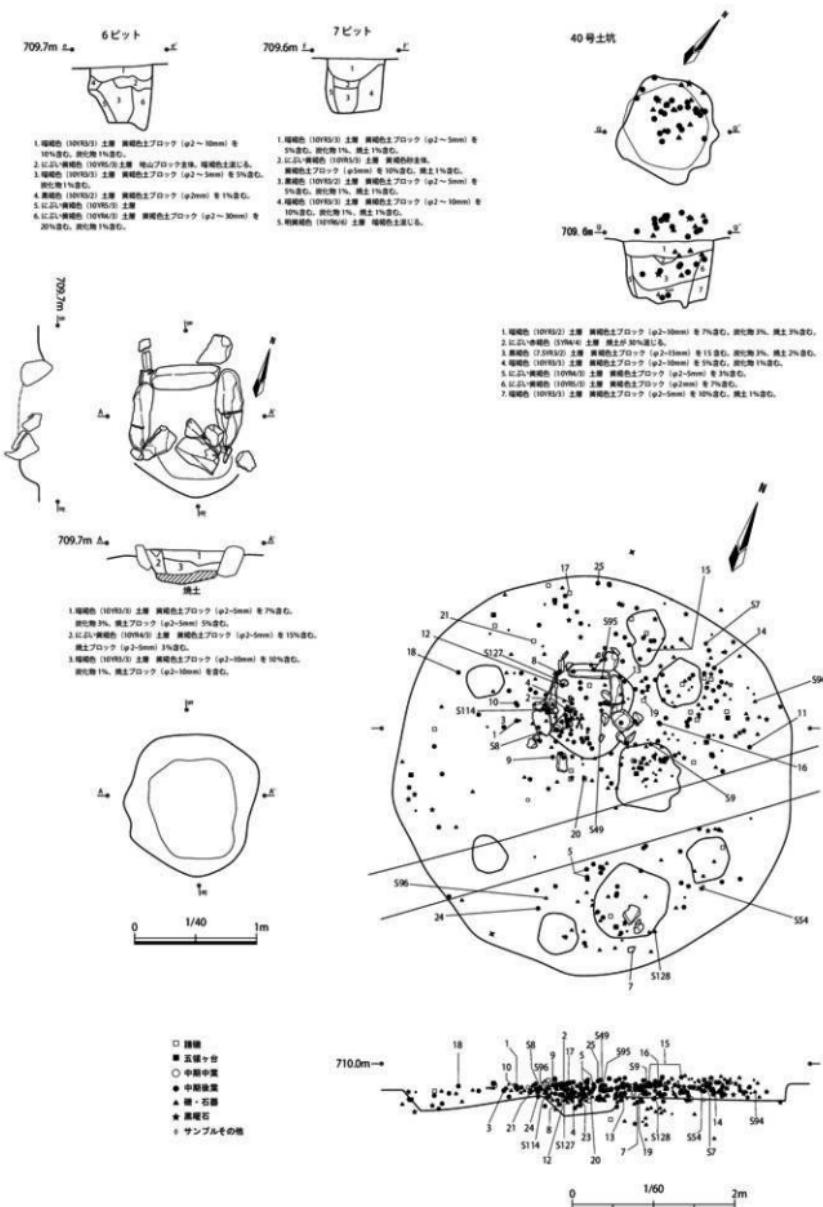


第15図 5号住居跡・8号住居跡(4)

## 6号住居跡

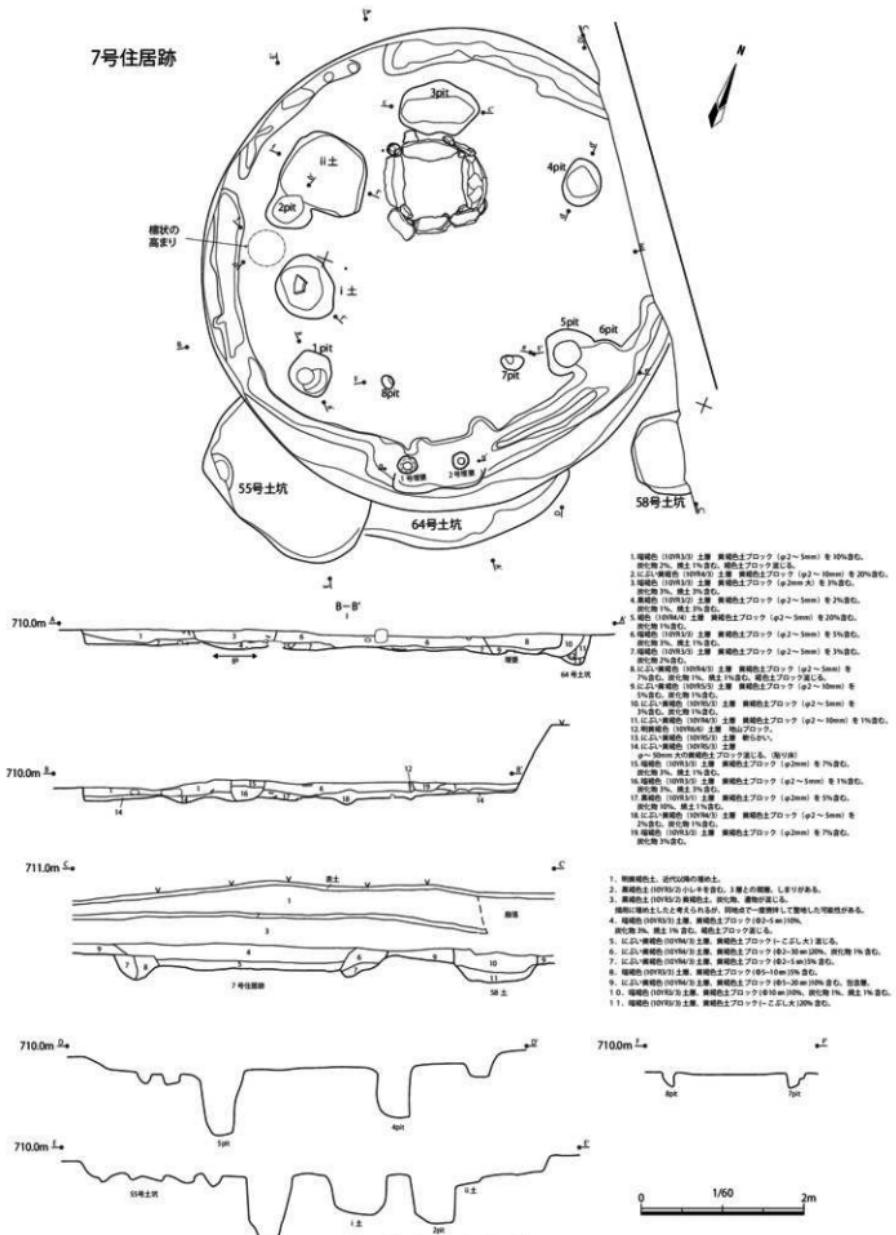


第16図 6号住居跡

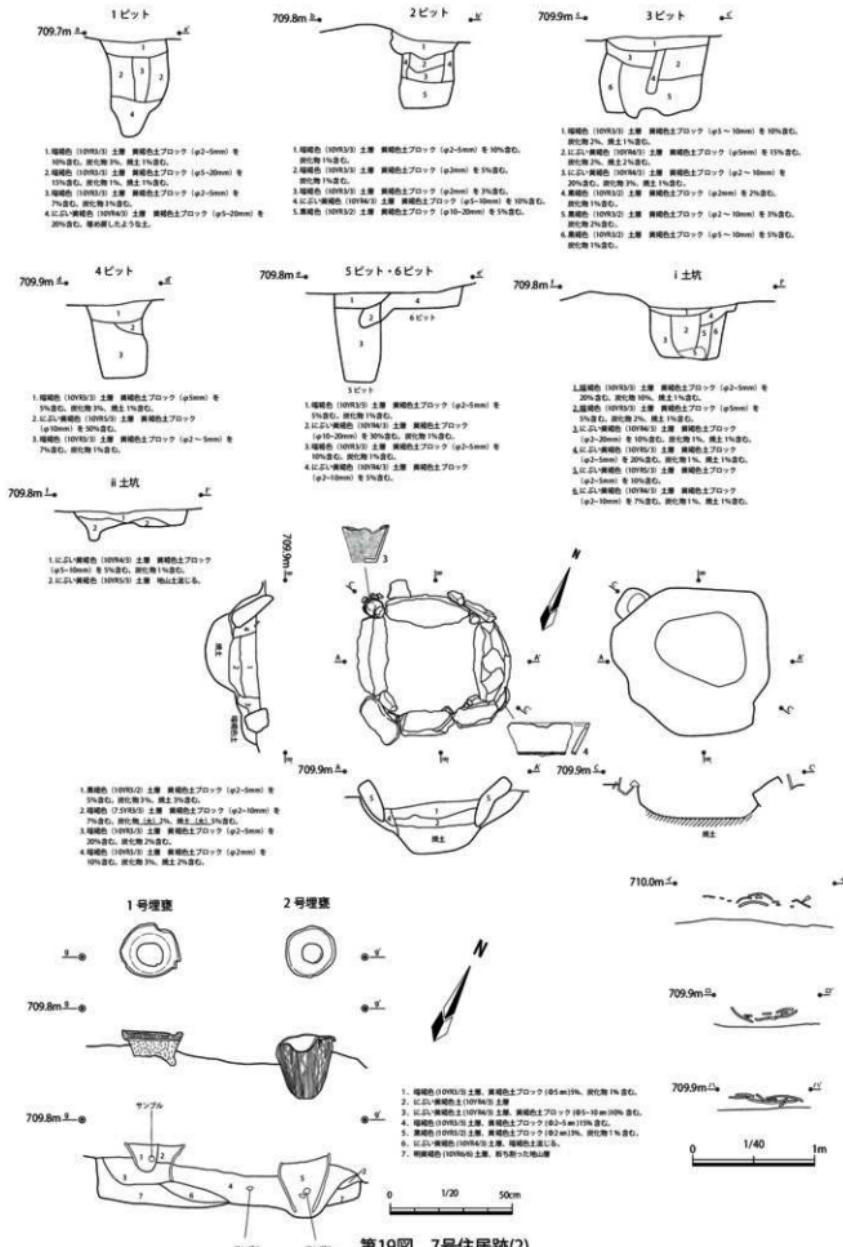


第 17 図 6 号住居跡 (2)

## 7号住居跡



第18図 7号住居跡



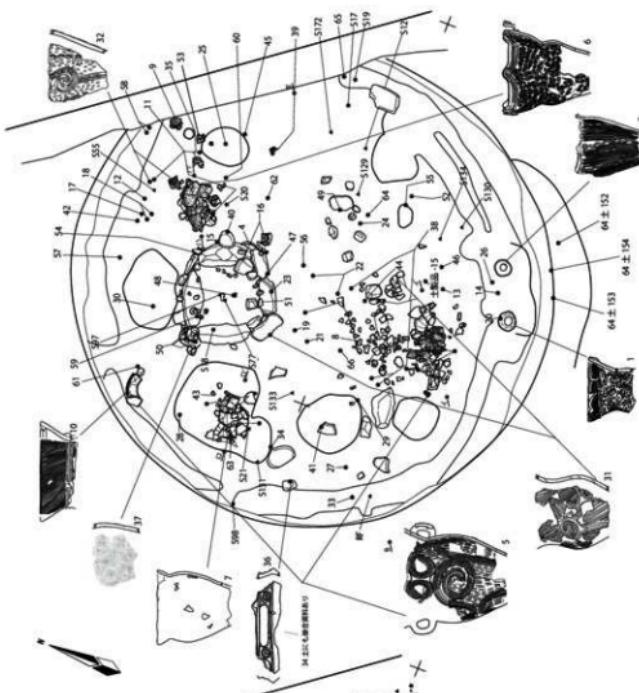
0 1/60 2m

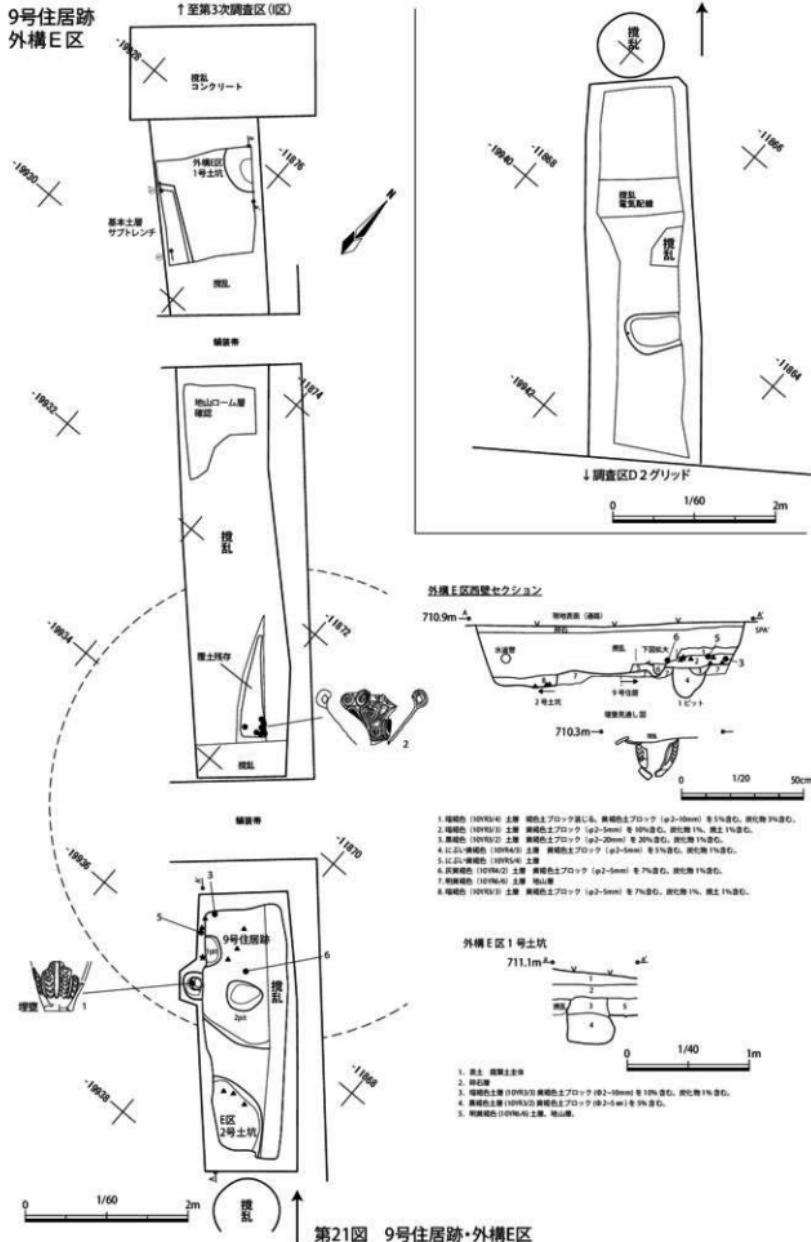
第20図 7号住居跡(3)

面積方向は1/20、水平方向は1/60

1/60

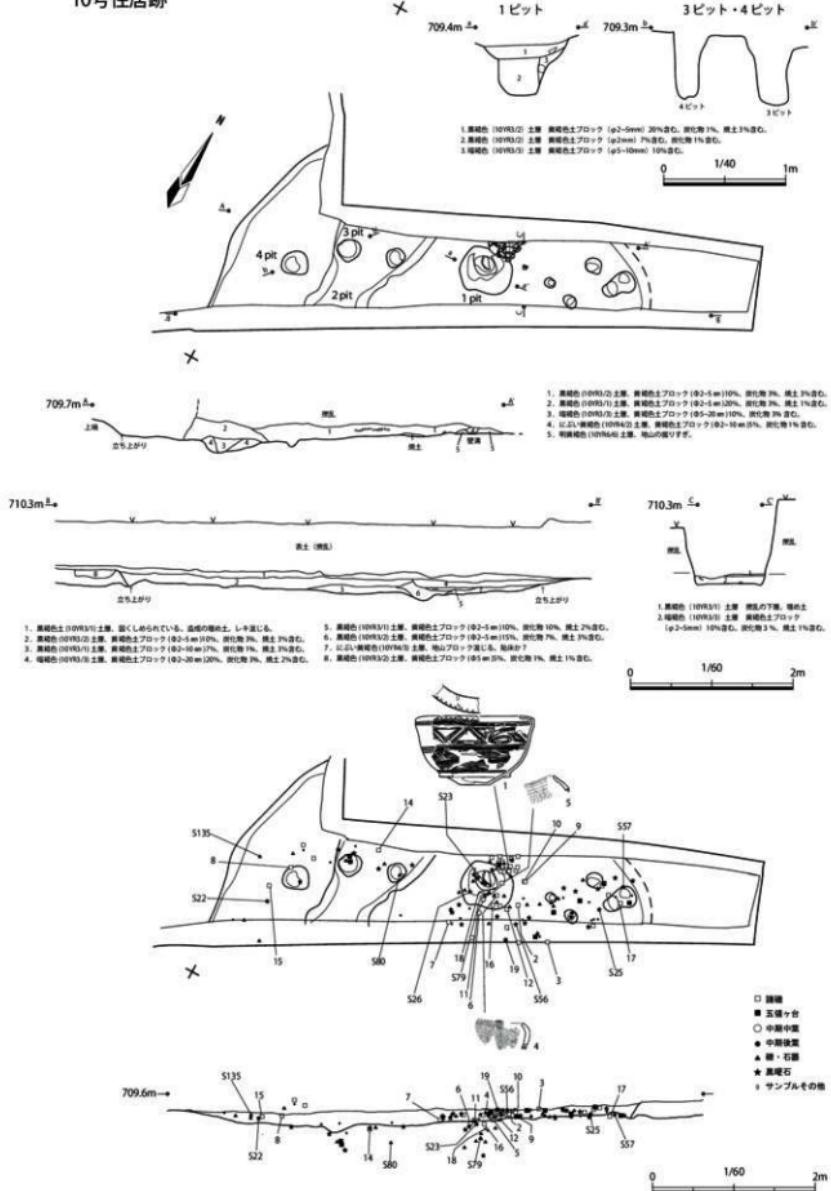
710.7m<sup>2</sup>  
710.6m<sup>2</sup>  
709.5m<sup>2</sup>





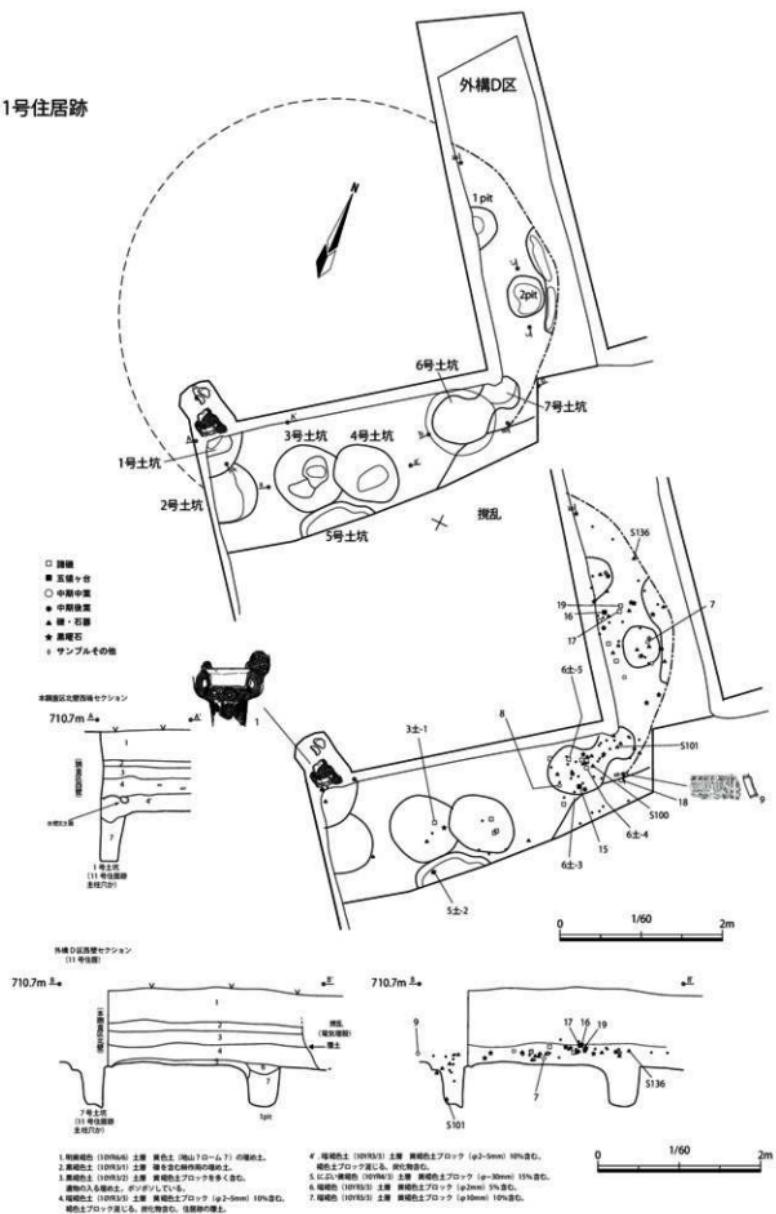
第21図 9号住居跡・外構E区

## 10号住居跡



第22図 10号住居跡

### 11号住居跡



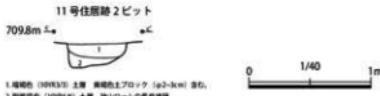
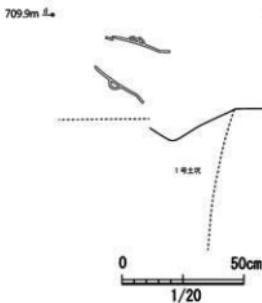
第23図 11号住居跡



1. 黒褐色 (10YR4/2) 土層 線状りなし、粘性度なし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) を10%含む。
2. 黄褐色 (10YR5/4) 土層 線状りなし、  
粘性度1.0以上。
3. 黄褐色 (10YR4/2) 土層 線状りなし、  
粘性度0.5以下。
4. 黄褐色 (10YR5/4) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) 5%含む。
5. 黄褐色 (10YR5/3) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) 3%含む。
6. 黄褐色 (10YR5/3) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) 2%含む。
7. 黄褐色 (10YR4/3) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) 1%含む。

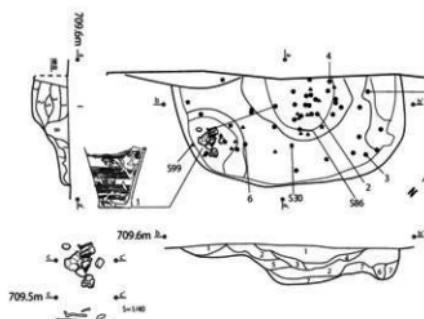


1. 黑褐色 (10YR4/2) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) 15%含む、  
粘性度0.5以上。
2. 黄褐色 (10YR5/3) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 5mm$ ) 3%含む。
3. 黄褐色 (10YR4/2) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 5mm$ ) 2%含む。



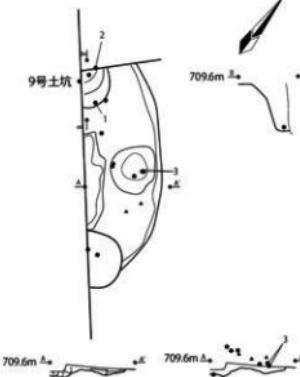
1. 黄褐色 (10YR5/3) 土層 黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) 3%含む。
2. 黄褐色 (10YR5/6) 土層 地ルームの底面。

### 1号竪穴状遺構

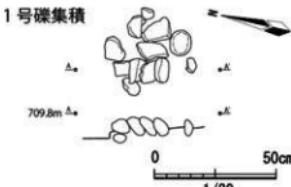
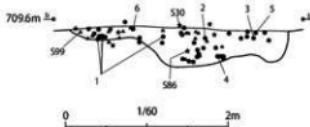


1. 黄褐色 (10YR5/7) 土層 線状りなし、黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) を10%含む。  
粘性度、地主子含む。
2. 黄褐色 (10YR5/4) 土層 線状りなし、黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) を30%含む、  
粘性度を含む。
3. 黄褐色 (10YR5/4) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 10mm$ ) 5%含む。
4. 黄褐色 (10YR5/6) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 20mm$ ) を10%含む。
5. 黄褐色 (10YR5/6) 土層 黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 20mm$ ) 2%含む。
6. 黄褐色 (10YR5/6) 土層 黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 20mm$ ) 8%含む。
7. 黄褐色 (10YR5/6) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 20mm$ ) 5%含む。
8. 黄褐色 (10YR5/2) 土層 線状りなし、  
黄褐色土ブロック ( $\varphi 2 \sim 5mm$ ) 5%含む。

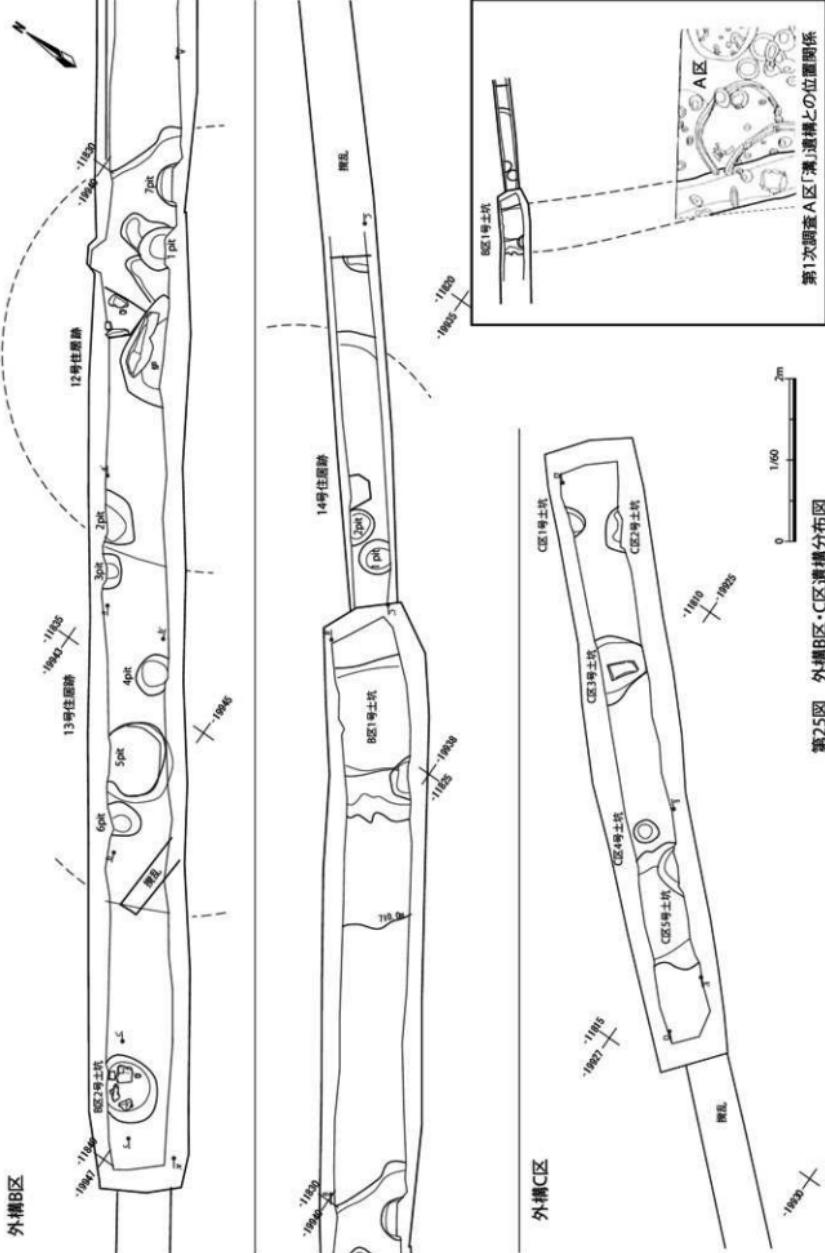
### 2号竪穴状遺構



1. 黄褐色 (10YR5/4) 土層 線状りなし、  
粘性度なし。
2. 黄褐色 (10YR5/6) 土層 線状りなし、  
粘性度、地主子含む。

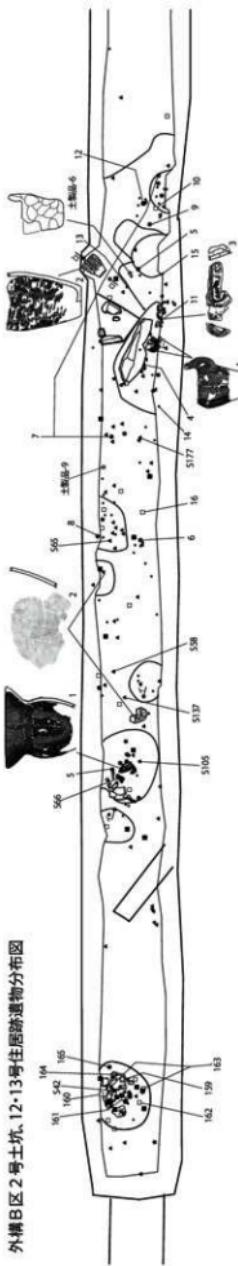


第24図 11号住居跡 1号・2号竪穴状遺構

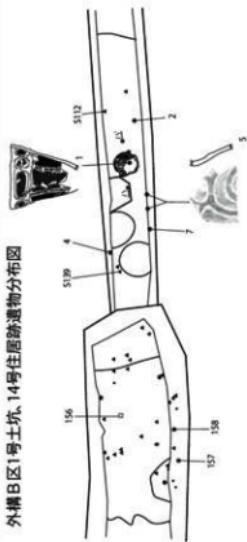


第25図 外構B区・C区遺構分布図

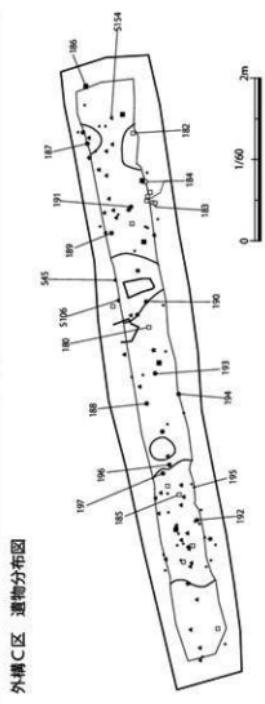
外構B区 2号土坑、12・13号住居跡遺物分布図



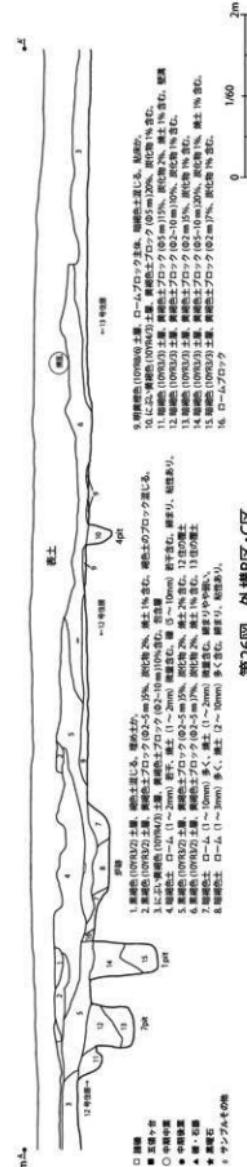
外構B区 南壁セクション(12・13号住居跡)



外構C区 遺物分布図

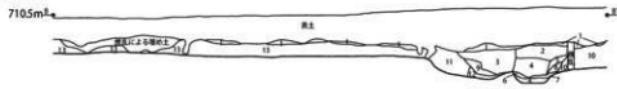


外構B区・C区



第26図 外構B区・C区

## 外構B区北壁セクション



1. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、砂質土層じる。薄土少々。
2. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、黄褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土ブロック含む。
3. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 7%。
4. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 11%。
5. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 9%。
6. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 9%。
7. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、青褐色土ブロック (0.5-1m) 20%。
8. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、青褐色土ブロック含むじる。
9. 褐色 (10YR5/4) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%。
10. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土ブロック含む。
11. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、青褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土ブロック含む。
12. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、青褐色土ブロック (0.5-1m) 10%。
13. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、青褐色土ブロック (0.5-1m) 10%含む。苔生層。

外構B区1号土坑 0 1/60 2m

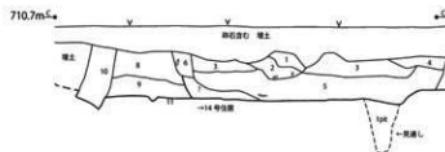


1. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、黄褐色土ブロック (0.5-1m) 15%、褐色土 1%、底土 1% SD。
2. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 20%、褐色土 1% SD。
3. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、黄褐色土ブロック (0.5-1m) 20%。



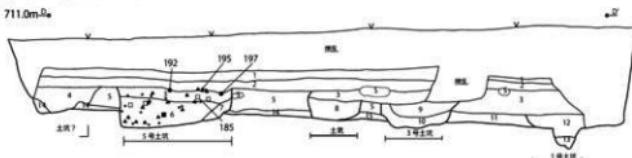
1. 褐色土 ローム粒子 (1~10mm) 少量含む。縛まりあり。粘性あり

## 14号住居跡 南壁セクション



1. 深褐色 (7.5YR8/4) 土壌、褐色土ブロック (0.2m) 3%、褐色土 3%、底土 10% 含む。
2. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、黄褐色土ブロック (0.2m) 3%、褐色土 1%、底土 5% 含む。[新しい堆積の土壠か?]
3. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.2m) 3%、褐色土 1%、底土 5% 含む。褐色土ブロック含む。
4. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、褐色土ブロック (0.2m) 3%、褐色土 1%、底土 5% 含む。
5. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.2-3mm) 5%、褐色土 1%、底土 1% 含む。褐色多く含む。
6. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.2-3mm) 5%、褐色土 1%、褐色土ブロック含む。
7. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.2-3mm) 5%、褐色土 1%、底土 1% 含む。
8. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.2-3mm) 5%、褐色土 1%、底土 1% 含む。
9. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、褐色土ブロック (0.2-3mm) 5%、褐色土 1%、底土 1% 含む。土壠の跡か?
10. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.2-3mm) 5%、褐色土 1%、底土 1% 含む。

## 外構C区 北壁セクション



## 外構C区 南壁セクション

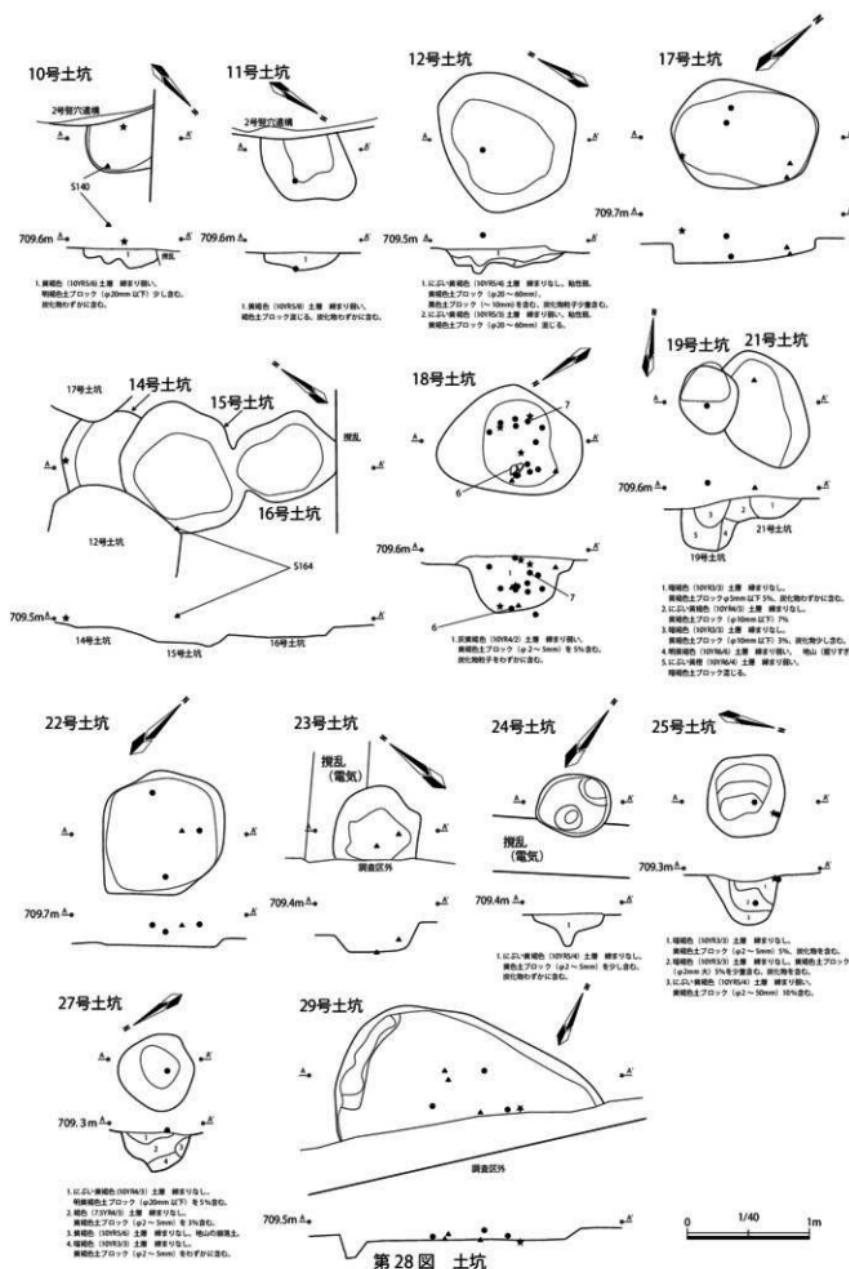


1. 塔頭層土層 ローム粒子 (1~10mm)。
2. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5m) 10%、褐色土 3%、底土 1%。
3. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5m) 10%、褐色土 2%、底土 1%、褐色土ブロック含む。
4. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、褐色土ブロック (0.5m) 10%、褐色土 1%、底土 1%。
5. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土 1%、底土 2%。
6. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土 1%、底土 1% 含む。土壠の跡。
7. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土 1%、底土 1% 含む。
8. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土 1%、底土 1% 含む。
9. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土 1%、底土 1% 含む。
10. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土 1%、底土 1% 含む。
11. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土 1%、底土 1% 含む。
12. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.5-1m) 10%、褐色土 1%、底土 1% 含む。
13. 塔頭層 土層。
14. にじみ青褐色 (10Y5/4) 土壌、褐色土 1%。
15. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌。
16. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、褐色土ブロック (0.10m) 10%、褐色土 1%。
17. 黄褐色 (10YR5/3) 土壌、黄褐色土ブロック (0.5m) 10%、褐色土 1%

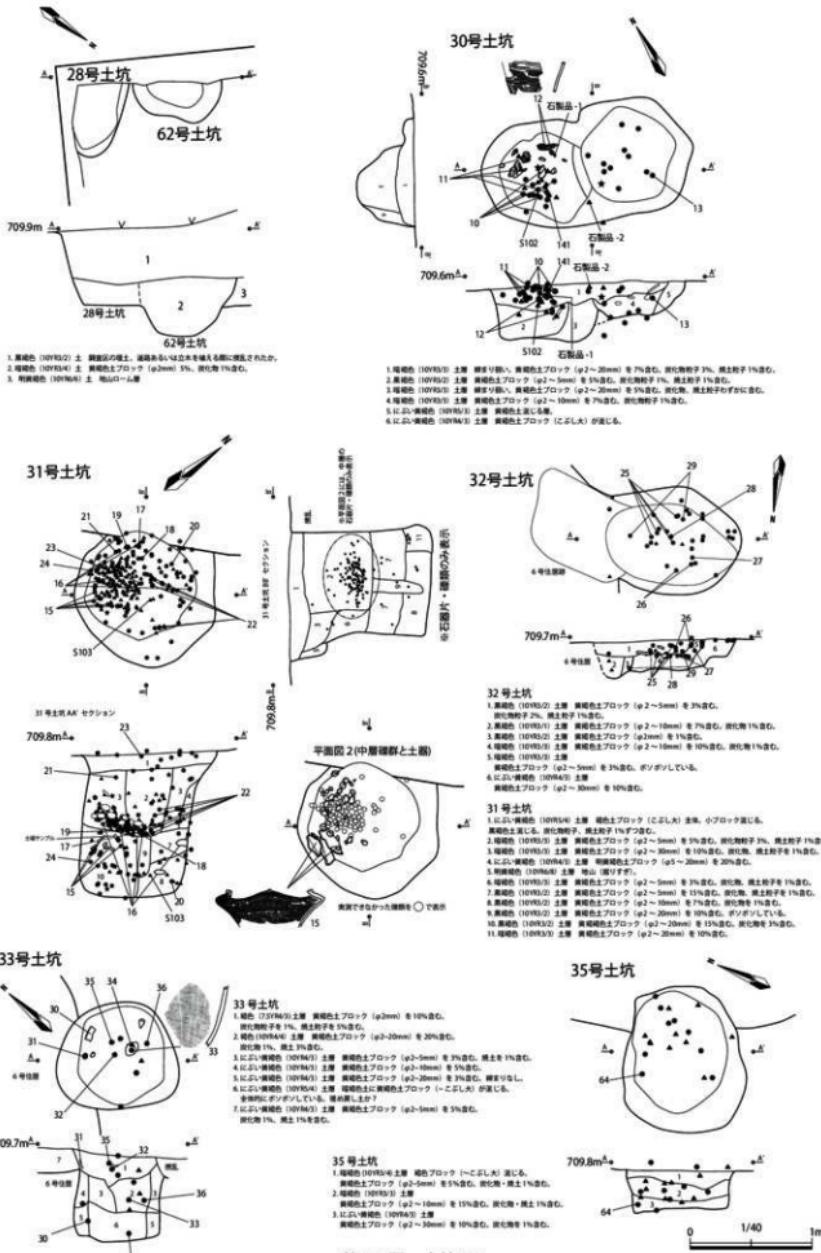
第27図 外構B区・C区(2)

第2表 土坑一覧表

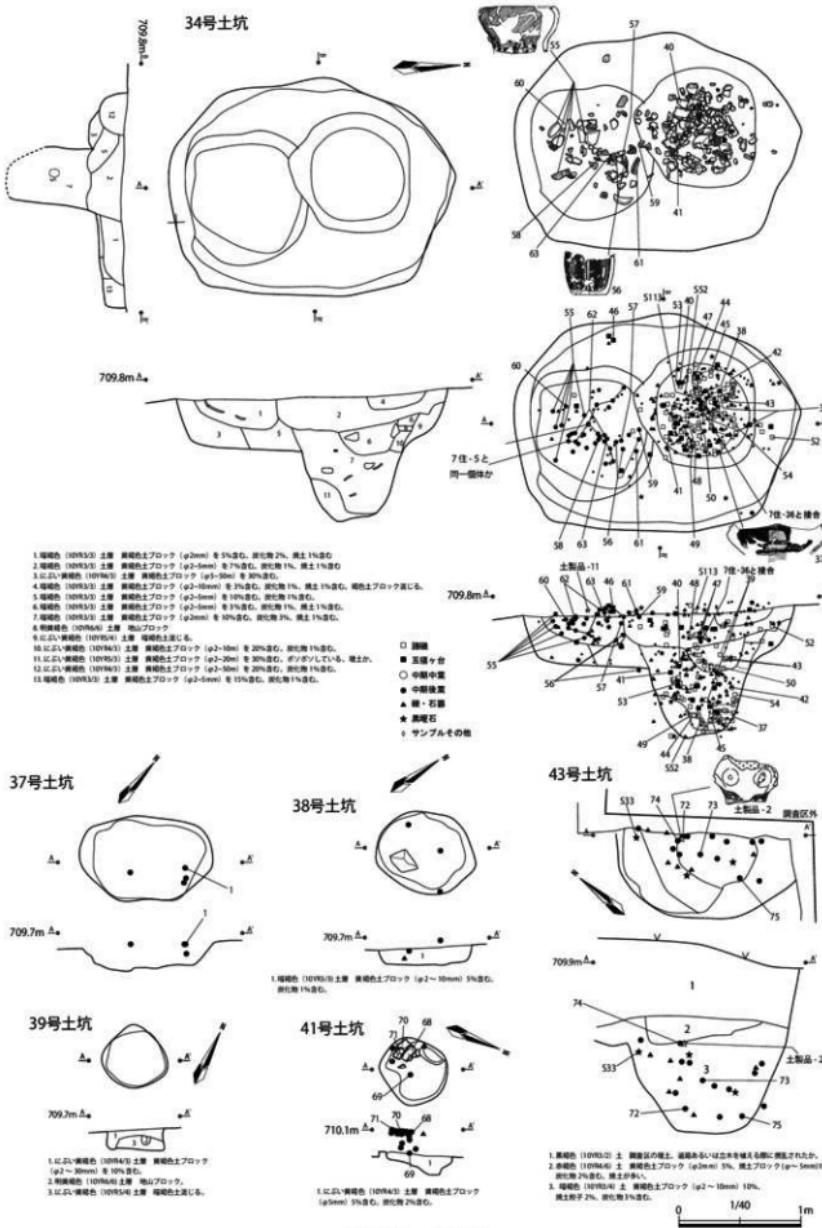
通横名	通横回数	遺物(土器)回数	位置	法量(cm)			備考
				長辺	短辺	深さ	
9号土坑	第24回	—	ASグリッド	残47	残31	57	
10号土坑	第26回	—	AS・BSグリッド	残52	残46	11	
11号土坑	第26回	—	B5グリッド	(87)	(63)	15	
12号土坑	第28回	—	B5グリッド	121	108	15	sondage
14号土坑	第26回	—	B5グリッド	(73)	(55)	3	
15号土坑	第26回	—	B5グリッド	113.	97	19	
16号土坑	第26回	—	B5・B6グリッド	70	69	5	
17号土坑	第26回	—	B5グリッド	121	88	22	sondage b
18号土坑	第26回	第50回	B5グリッド	119	89	45	sondage b
19号土坑	第26回	—	B5グリッド	55	48	43	sondage
21号土坑	第26回	—	B5グリッド	104	70	18	
22号土坑	第26回	—	B5グリッド	121	99	16	
23号土坑	第26回	—	B6グリッド	77	残56	34	sondage
24号土坑	第26回	—	C6グリッド	63	52	25	
25号土坑	第26回	—	C6・C7グリッド	72	62	35	sondage
26号土坑	—	—	B6グリッド	74	残28	16	
27号土坑	第26回	—	C6・C7グリッド	63	58	32	
28号土坑	第29回	—	D6グリッド	残61	残41	12	sondage
29号土坑	第26回	第50回	E5グリッド	(219)	残93	35	sondage
30号土坑	第29回	第50回	D5グリッド	173	94	50	sondage b 有孔石製品出土
31号土坑	第29回	第50・51回	C4グリッド	(121)	115	116	sondage b 土坑中間に集石。土壤分析あり
32号土坑	第29回	第51回	E4グリッド	(185)	86	32	sondage b
33号土坑	第29回	第51回	F4グリッド	99	86	70	曾利Ⅳ
34号土坑	第30回	第52・53回	D4・E4グリッド	235	178	100	sondage b、曾利Ⅱ 北側に sondage b式前の土坑、南側に曾利Ⅱ式前の土坑が重複
35号土坑	第29回	第53回	C4グリッド	127	108	37	戸戸尻・ sondage
37号土坑	第30回	第53回	D4・D5グリッド	109	70	23	sondage b
38号土坑	第30回	—	B4グリッド	82	65	15	
39号土坑	第30回	—	B4グリッド	54	50	18	
41号土坑	第30回	第53回	D1・E1グリッド	55	48	15	sondage b 有孔浅鉢
42号土坑	第31回	—	D1グリッド	54	50	39	sondage b
43号土坑	第30回	第54回	D6グリッド	残142	残67	74	sondage b
44号土坑	第31回	—	D6グリッド	50	43	16	
45号土坑	第31回	第54回	D6グリッド	(71)	残41	21	sondage b
46号土坑	第31回	—	D5グリッド	80	75	15	sondage
47号土坑	第31回	—	E5グリッド	63	52	18	
48号土坑	第31回	—	E5グリッド	85	残62.2	17	
49号土坑	第31回	—	E5グリッド	54	49	27	sondage
50号土坑	第31回	第54回	E5グリッド	113	98	45	曾利Ⅱ
51号土坑	第31回	—	E4グリッド	100	74	20	
52号土坑	第31回	第54回	E4グリッド	106	92	36	sondage b・c
53号土坑	第31回	第54・55回	E4グリッド	(142)	131	80	sondage b
54号土坑	第31回	第55回	E4グリッド	(123)	(108)	50	sondage b
55号土坑	第31回	第55回	E4グリッド	225	残110	29	sondage b主体で混在
56号土坑	第32回	第55・56回	F3グリッド	146	138	54	曾利Ⅳ 土器3個体を埋納。土壤分析あり
57号土坑	第32回	第57回	E3・F3グリッド	215	142	101	sondage b
58号土坑	第31回	第58回	E3グリッド	(99)	残62	29	sondage、曾利の混合
59号土坑	第32回	第58回	E3・E4グリッド	残130	123	40	sondage b
60号土坑	第32回	—	E3・E4グリッド	92	80	18	
61号土坑	第32回	第58回	E4グリッド	(138)	96	40	sondage b
62号土坑	第29回	—	D6グリッド	(71)	残38	24	
63号土坑	第32回	第58回	D6グリッド	93	77	30	sondage b けつ状耳飾り出土
64号土坑	第16回	第58回	E3グリッド	(262)	残48	36	sondage b
65号土坑	第32回	第58回	C2グリッド	121	102	27	sondage b
66号土坑	第32回	—	D2グリッド	128	99	32	
67号土坑	—	—	C2グリッド	(135)	残32	27	
68号土坑	—	—	D5グリッド	110	91	17	
2号土坑	第23回	—	—	(65)	残51	11	sondage
3号土坑	第23・24回	第50回	—	85	80	38	sondage
4号土坑	第23・24回	—	—	85	67	54	sondage b
5号土坑	第23回	第50回	—	(94)	残27	13	sondage b・藤内
6号土坑	第23・24回	第50回	—	65	64	92	sondage b
7号土坑	第23・24回	—	—	53	39	56	sondage b
1土坑	第12回	—	—	61	53	63	
11土坑	第12・13回	—	—	64	50	12	
111土坑	第12・14回	—	—	119	75	48	
IV土坑	第12・14	—	5号住居跡内	(65)	(60)	54	
V土坑	第12・14回	—	—	61	56	42	
VI土坑	第12・14回	—	—	114	89	74	
36号土坑	第12回	—	—	112	残73	32	
40号土坑	第17回	—	6号住居跡内	91	84	53	
1土坑	第18・19回	—	7号住居跡内	81	68	51	
II土坑	第18・19回	—	—	98	90	21	
B区1号・2号	第25・27回	第59回	外構B区	197	(96)	53	sondage・曾利混在、第1次調査A区の「溝」の続きか
B区2号土坑	第25・27回	第59回	—	85	残64	28	sondage b主体
C51号土坑	第25・27回	—	—	(39)	残19	22	
C52号土坑	第25・27回	—	外構C区	(57)	残21	21	
C53号土坑	第25・27回	—	—	(85)	残65	7	
C54号土坑	第25・27回	—	—	31	24	14	
C55号土坑	第25・27回	—	—	(158)	残54	77	
E51号土坑	第21回	—	外構E区	(59)	残31	27	
E52号土坑	第21回	—	—	残107	残60	16	



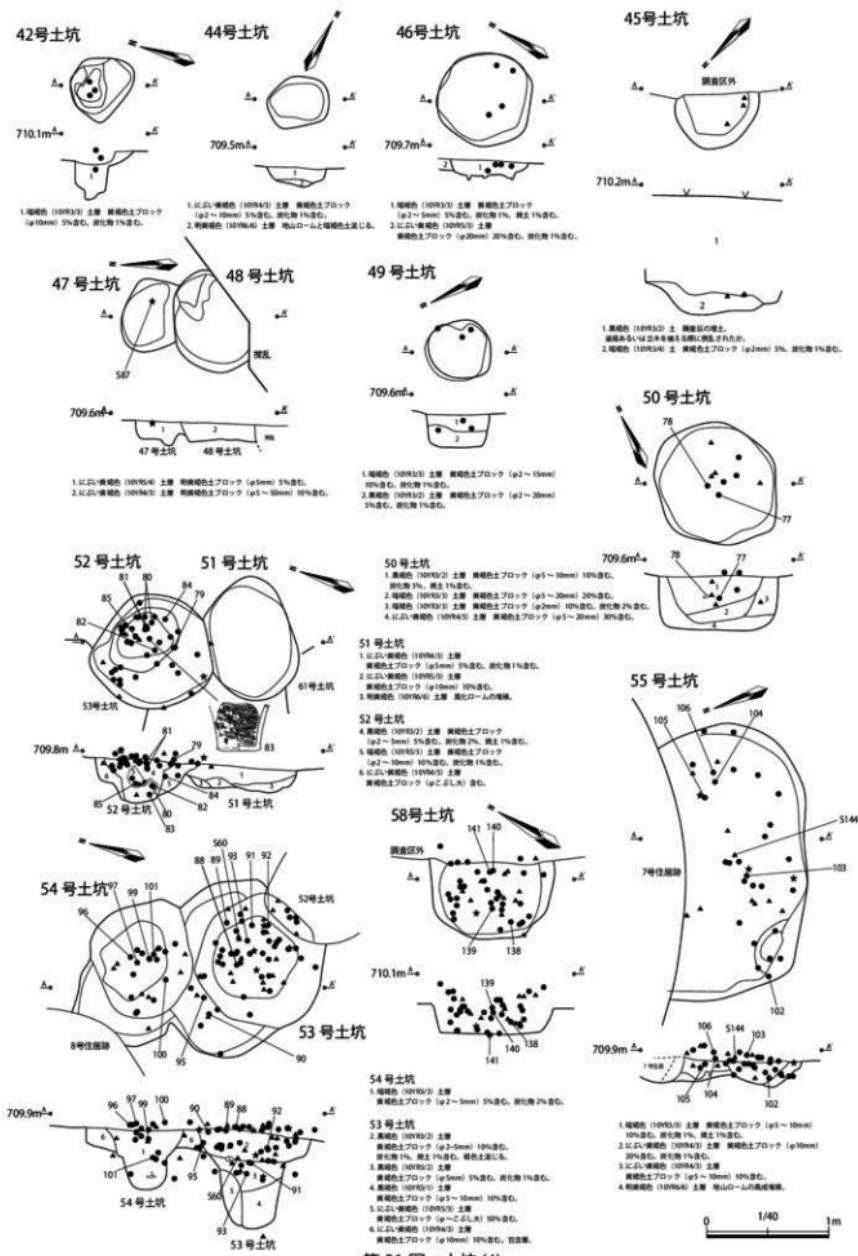
第28図 土坑



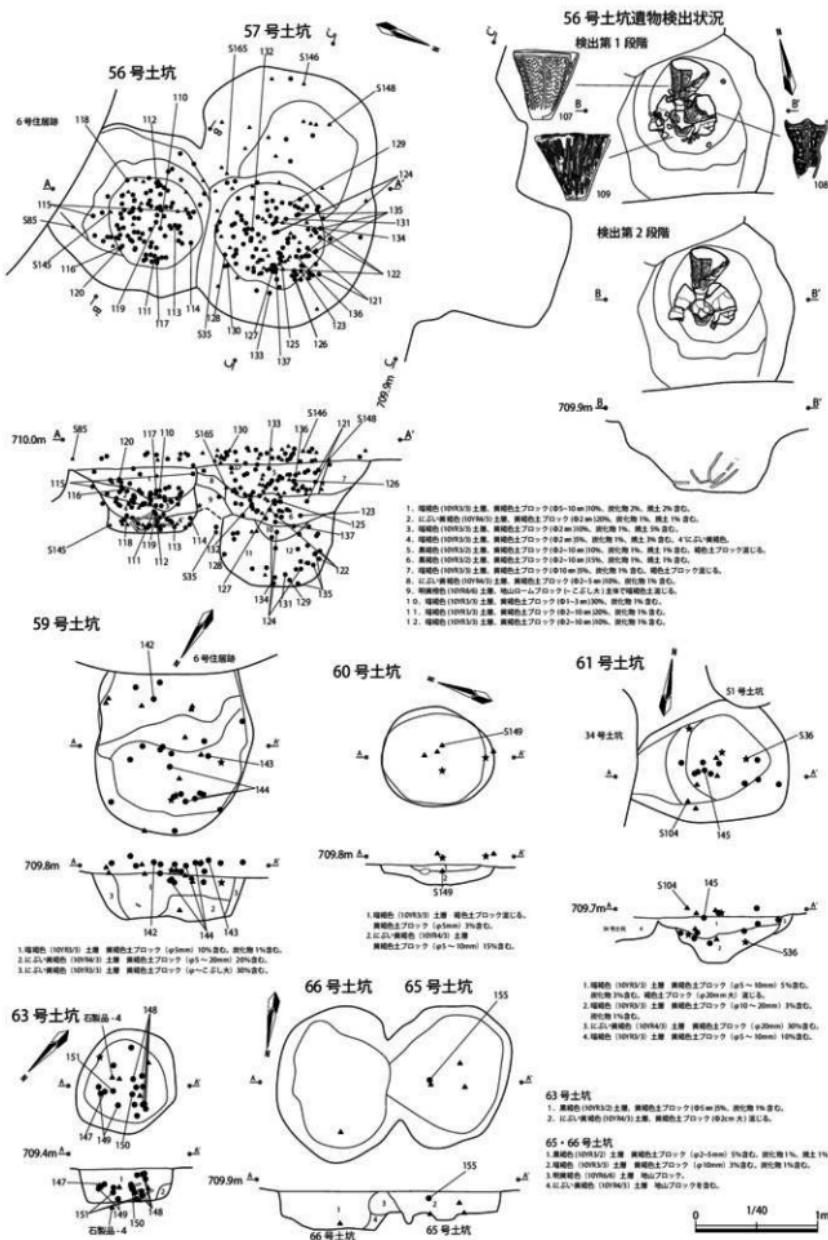
第29図 土坑 (2)



第30図 土坑(3)

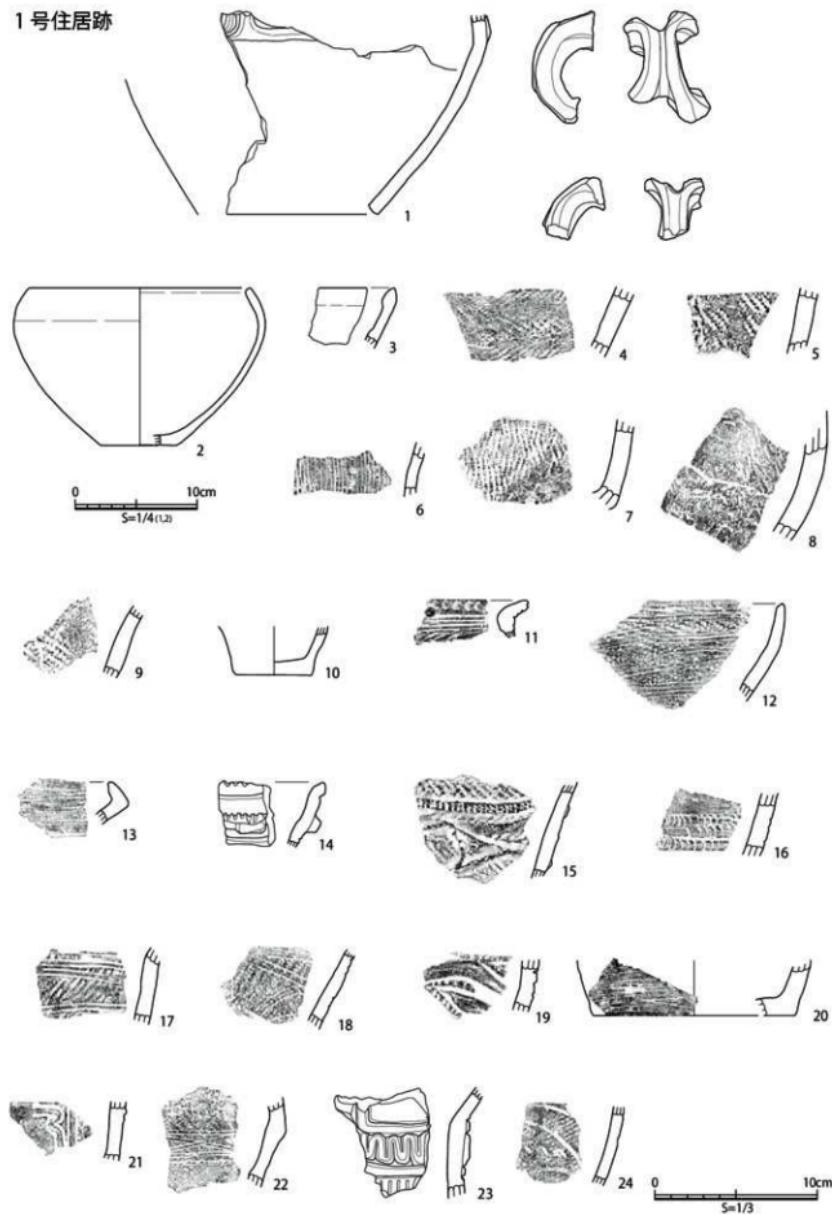


第31図 土坑(4)

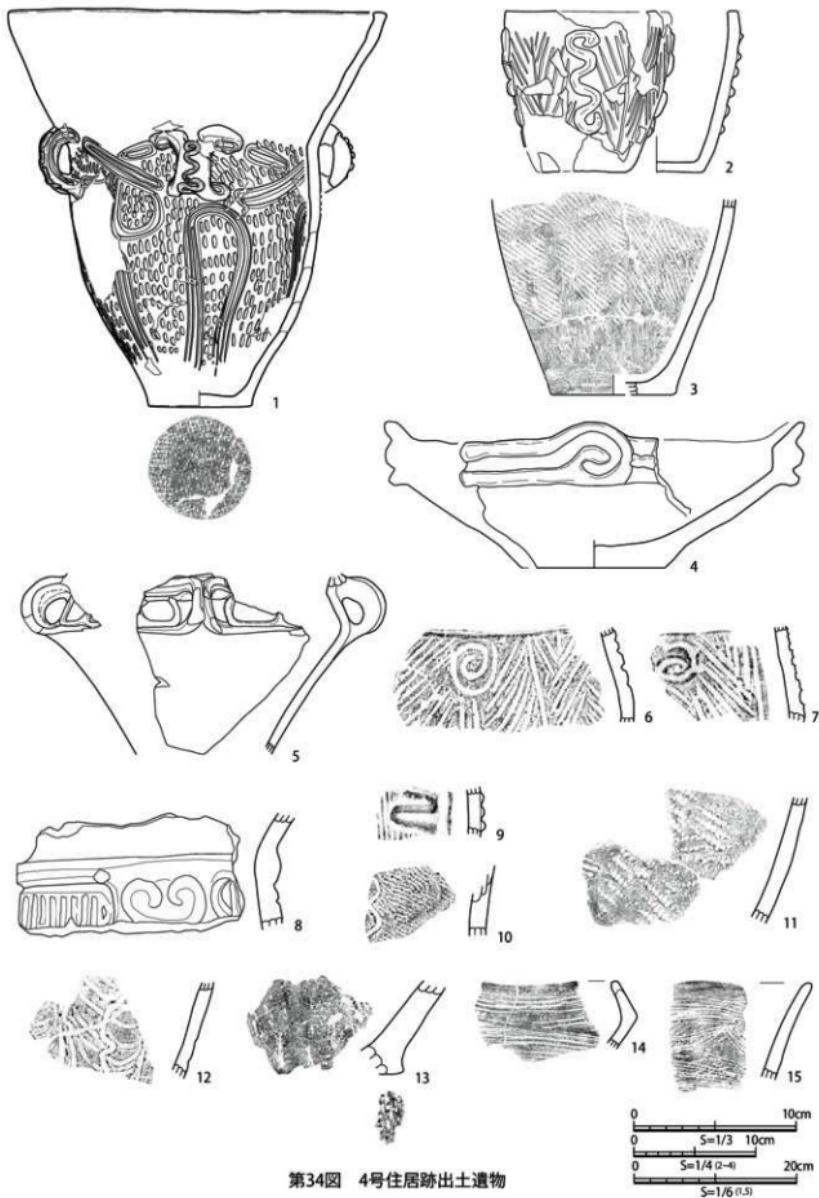


第32図 土坑(5)

1号住居跡

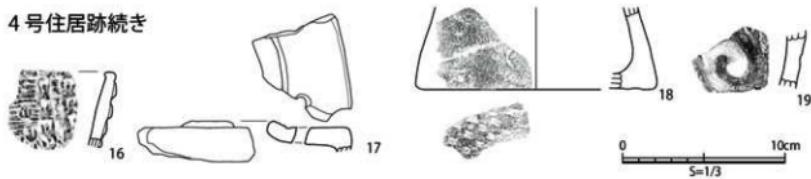


4号住居跡

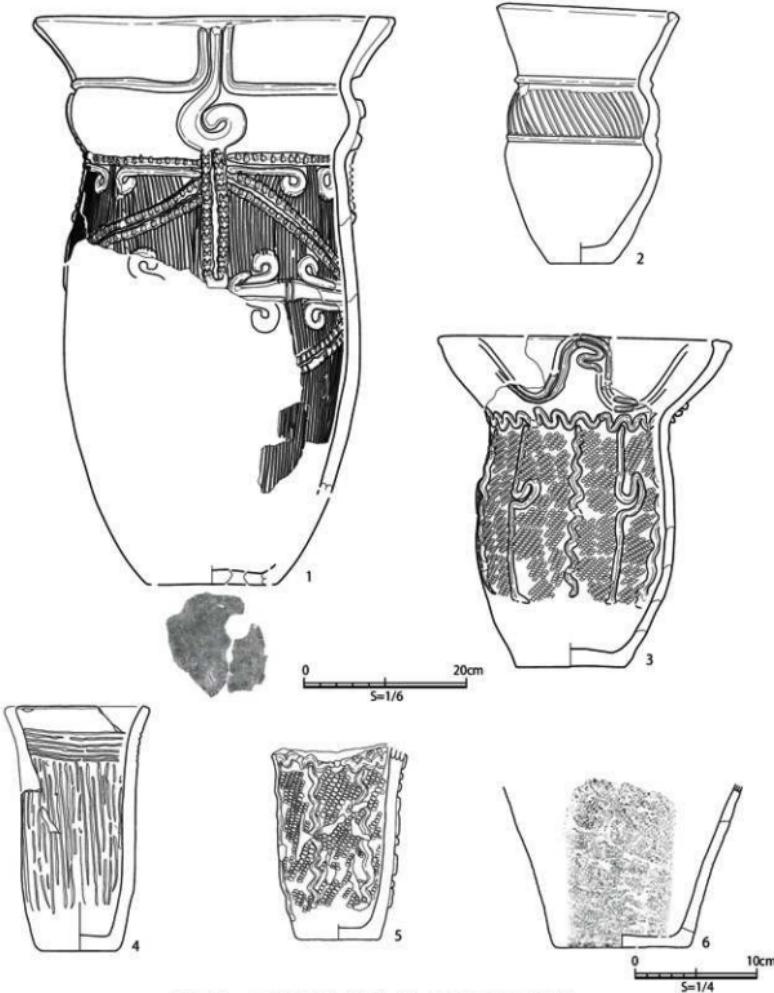


第34図 4号住居跡出土遺物

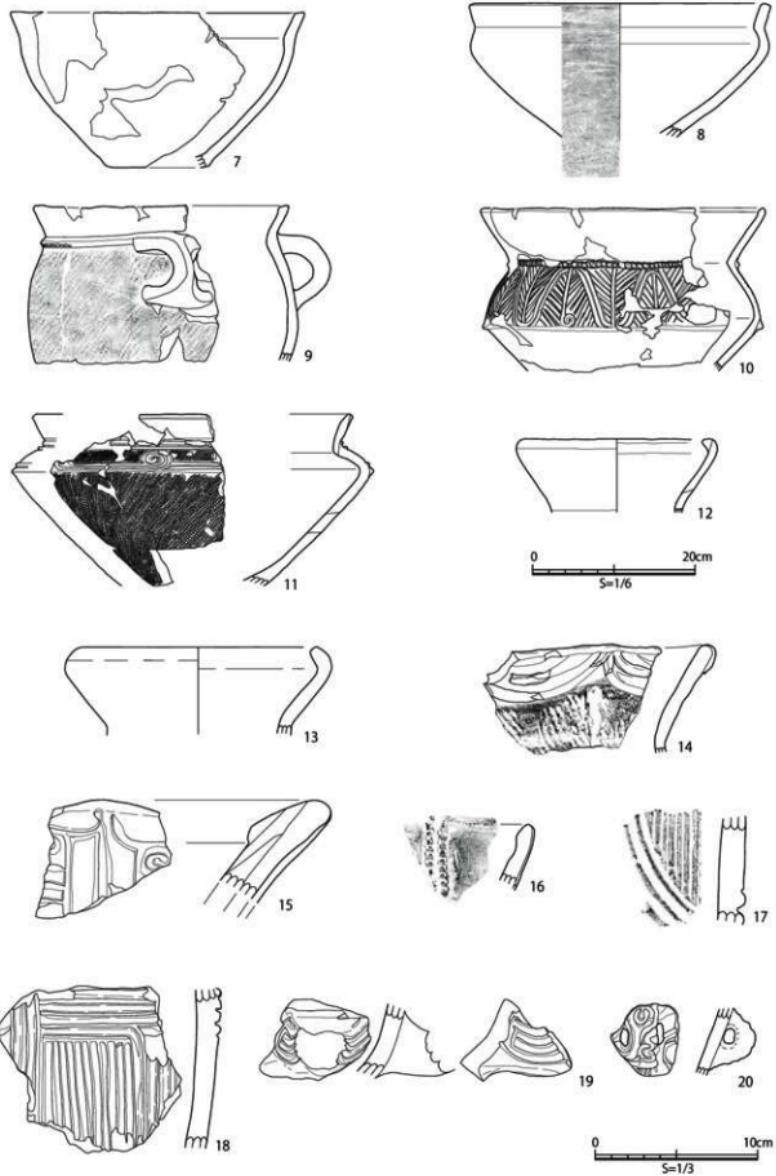
4号住居跡続き



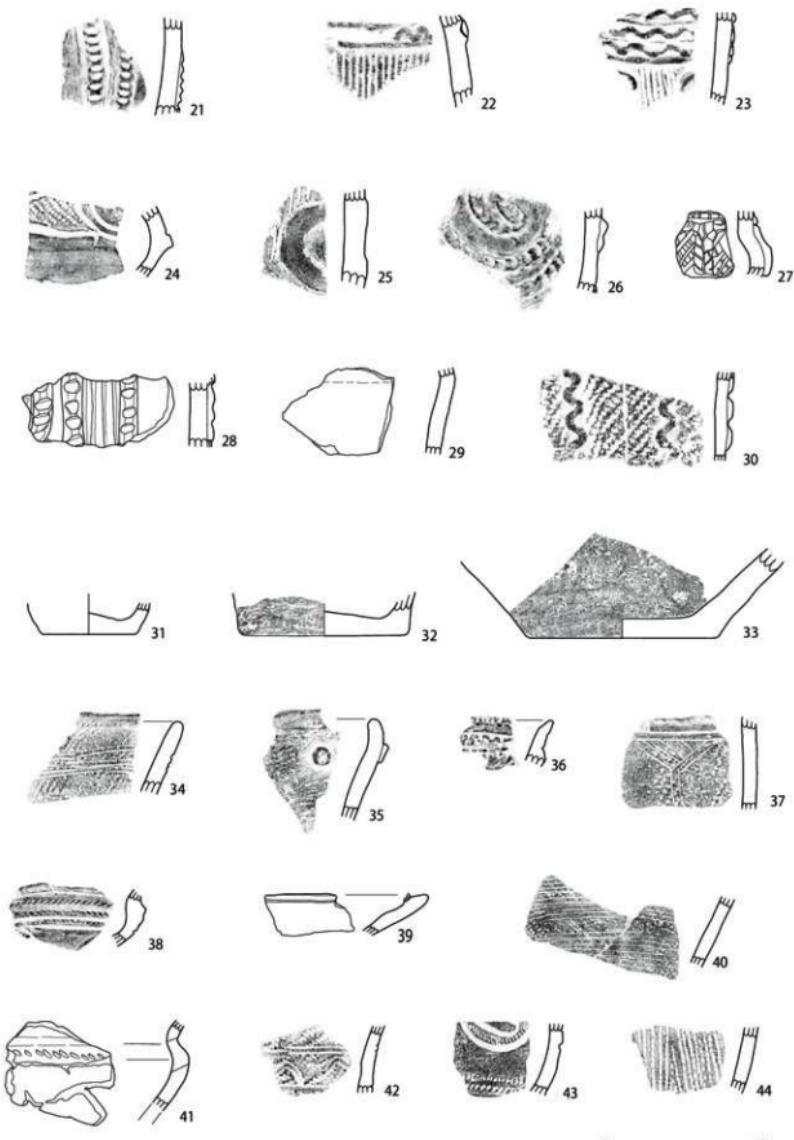
5号住居跡



第35図 4号住居跡出土遺物(2)・5号住居跡出土遺物

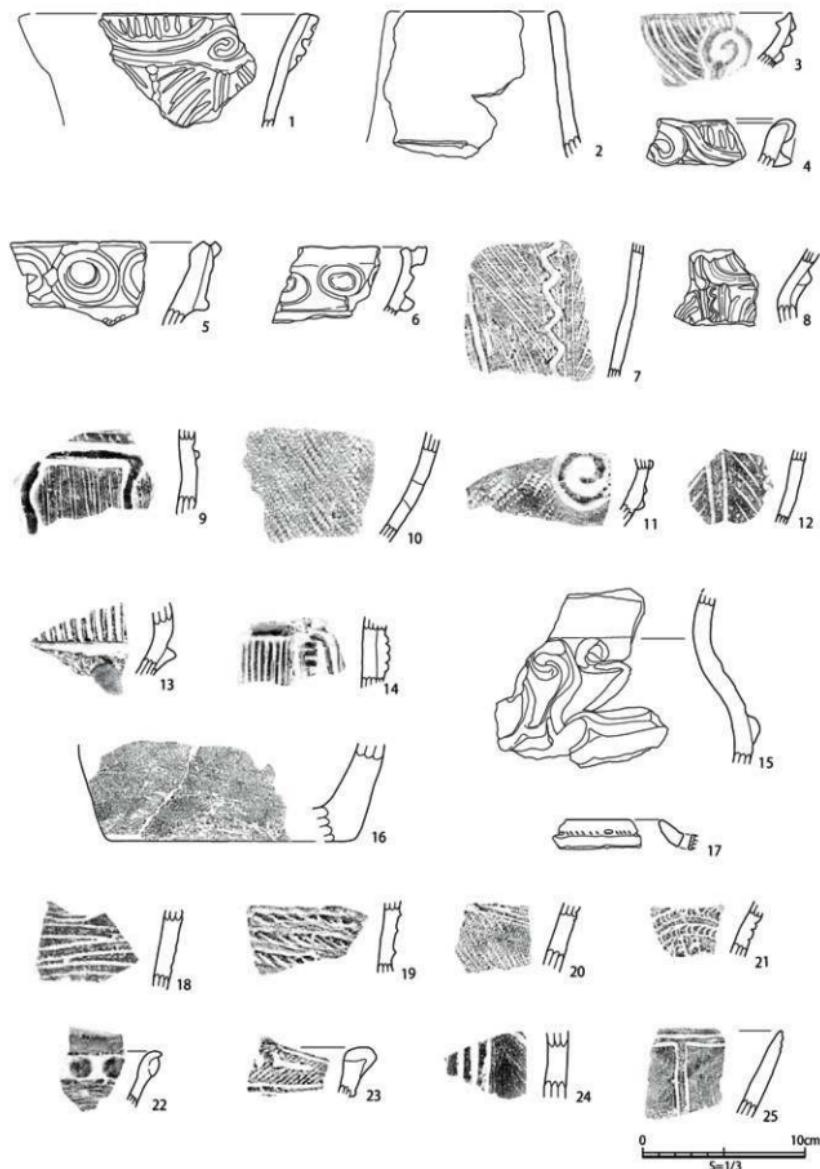


第36図 5号住居跡出土遺物(2)



第37図 5号住居跡出土遺物(3)

6号住居跡



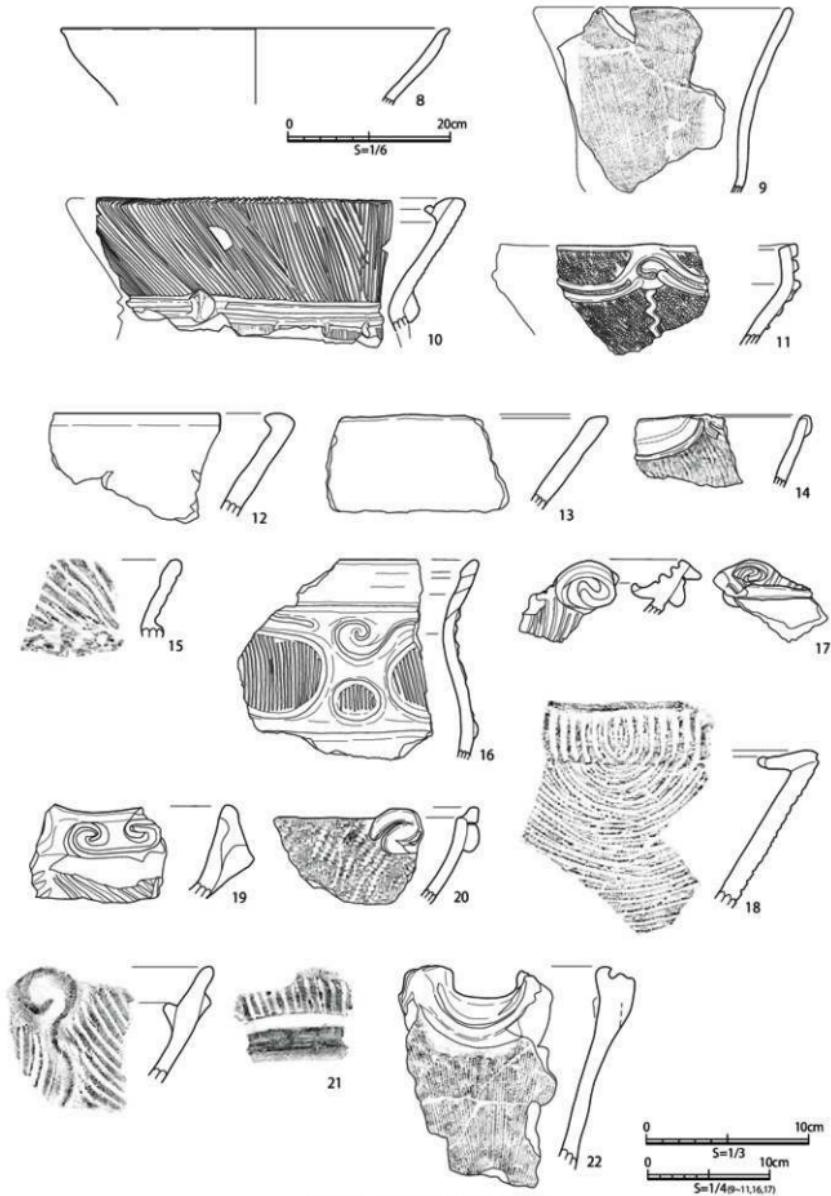
第38図 6号住居跡出土遺物

7号住居跡



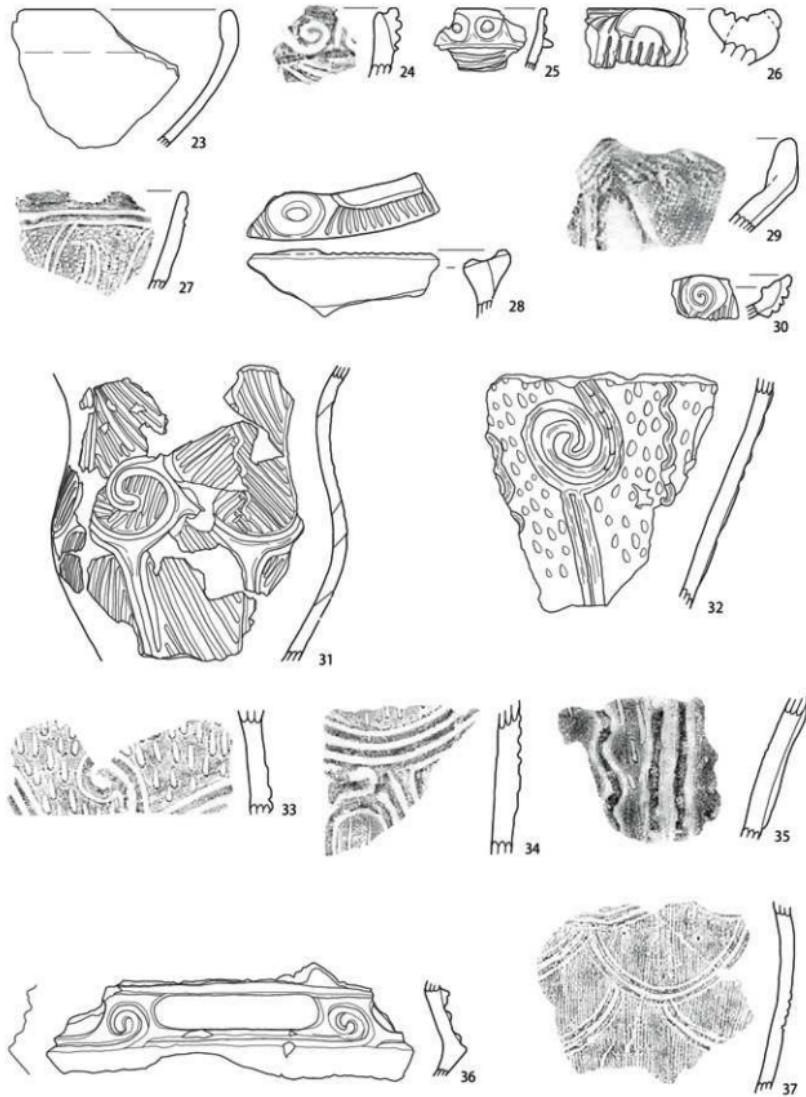
第39図 7号住居跡出土遺物

7号住居跡



第40図 7号住居跡出土遺物(2)

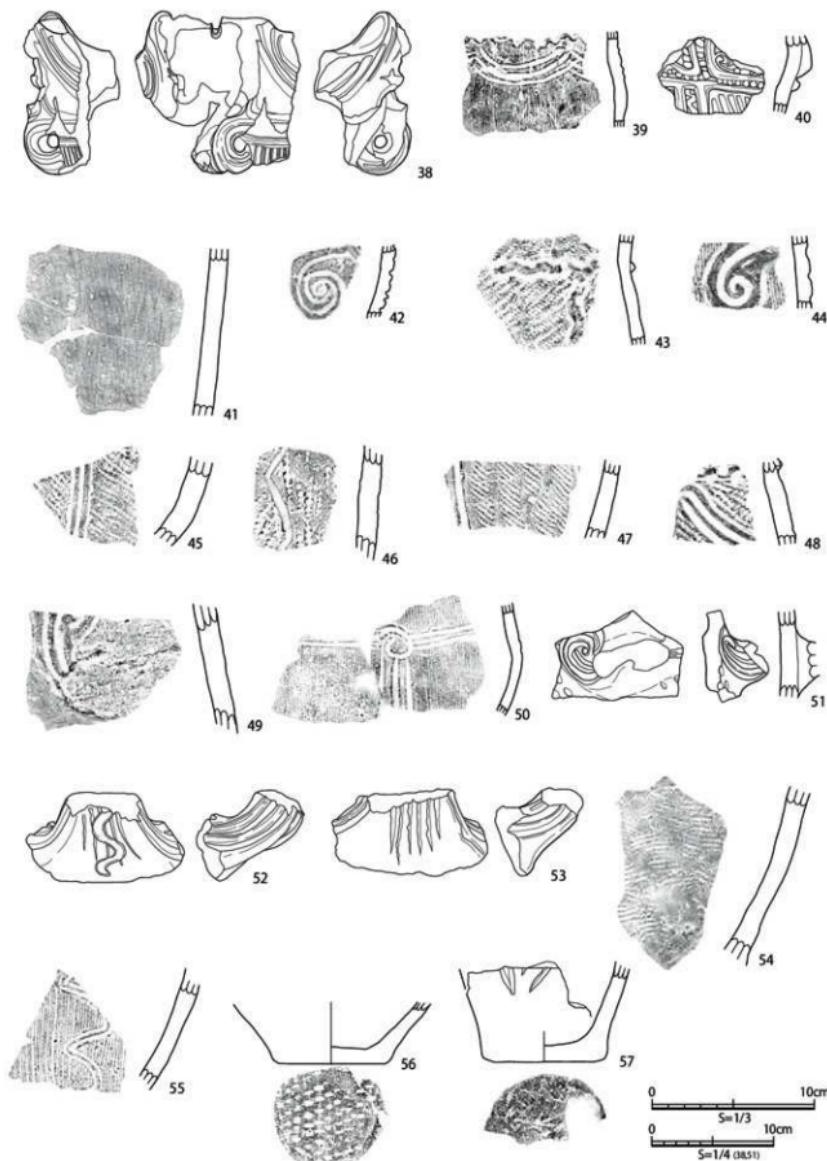
7号住居跡



0 10cm  
S=1/3  
0 10cm  
S=1/4 (31,32,36)

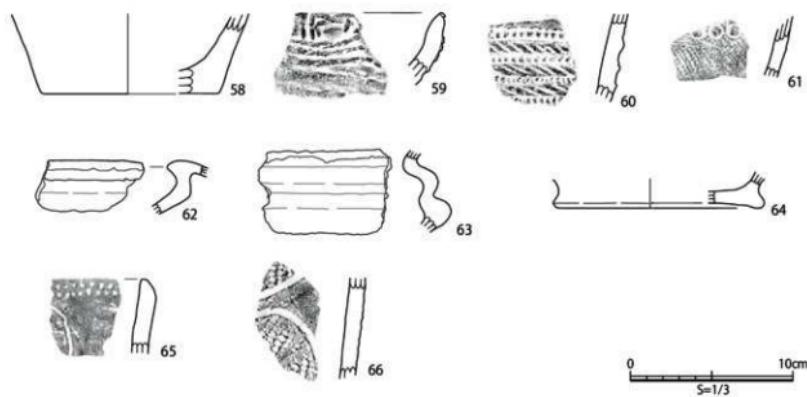
第41図 7号住居跡出土遺物(3)

7号住居跡



第42図 7号住居跡出土遺物(4)

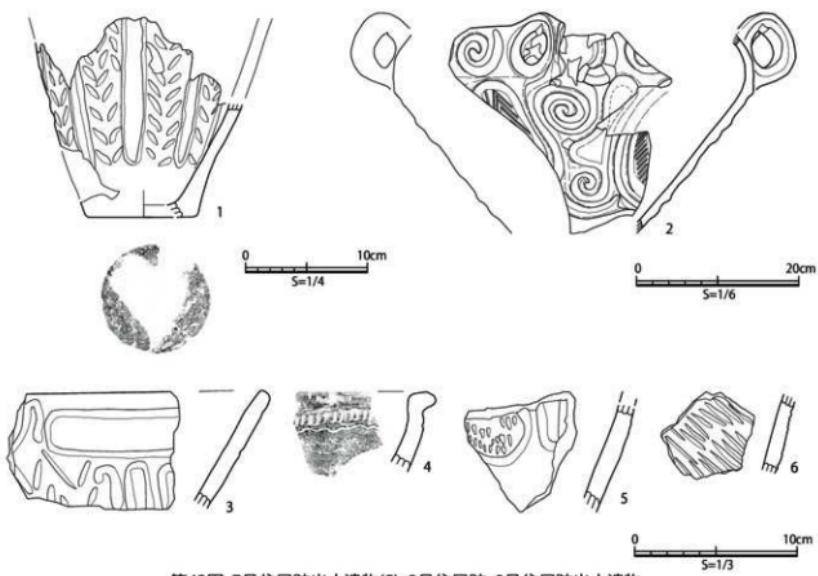
7号住居跡



8号住居跡

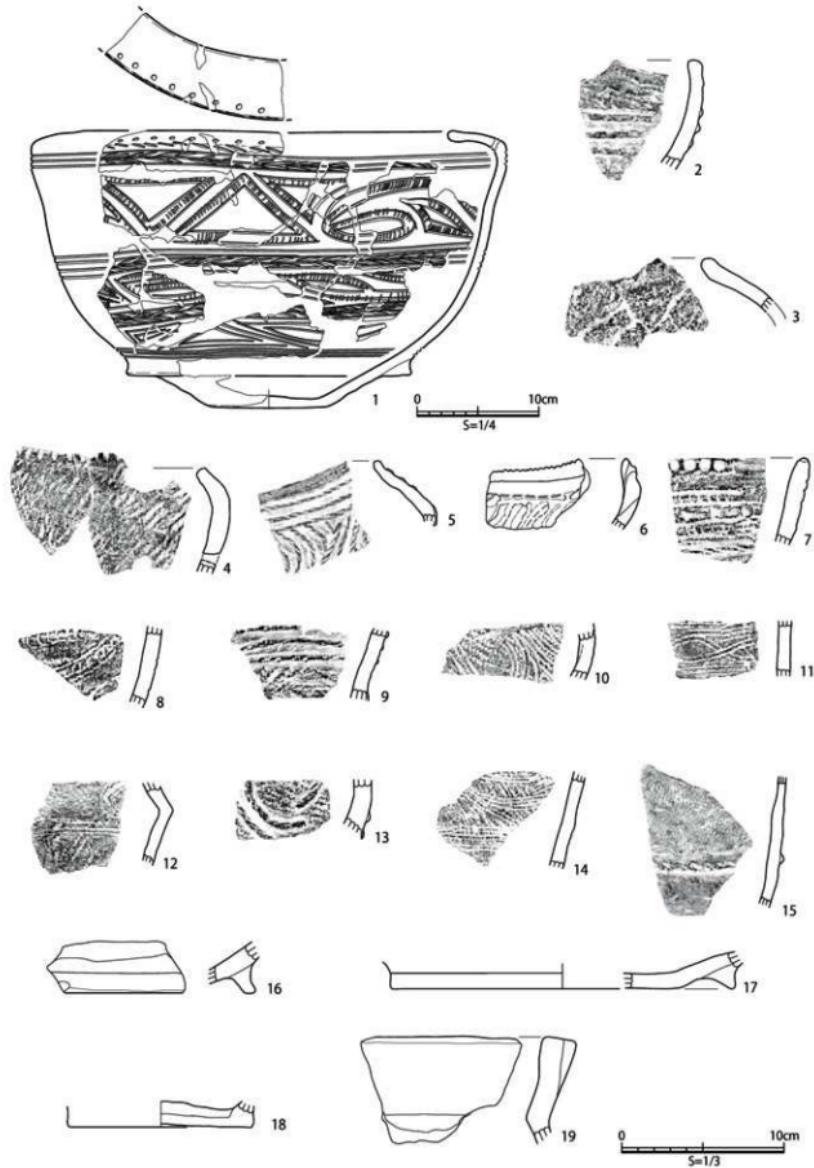


9号住居跡



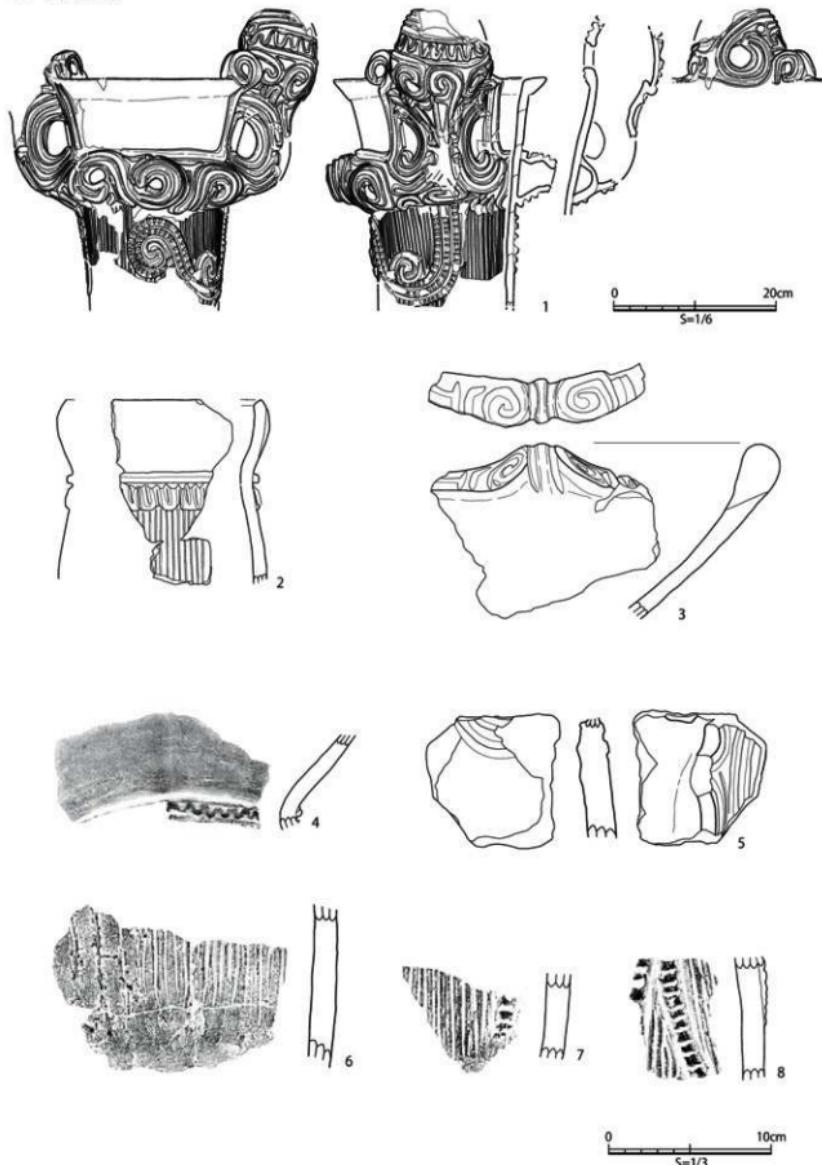
第43図 7号住居跡出土遺物(5)・8号住居跡・9号住居跡出土遺物

10号住居跡



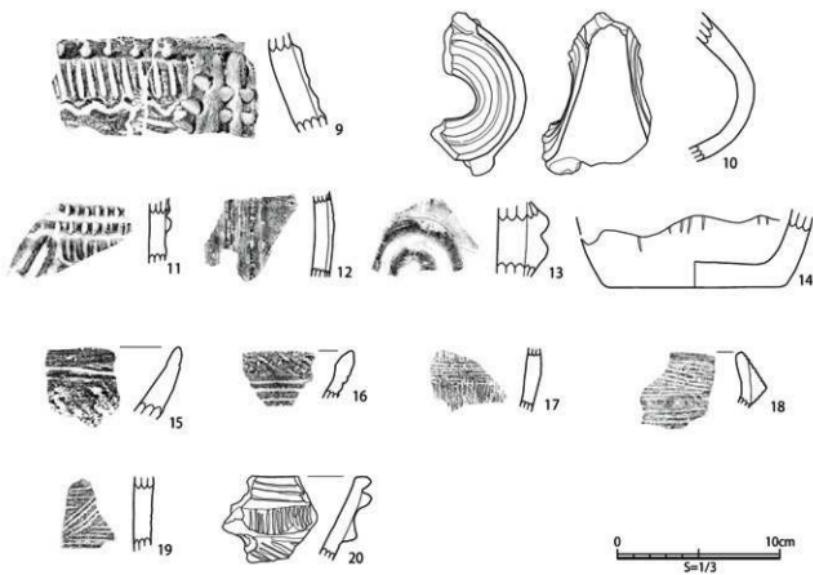
第44図 10号住居跡出土遺物

11号住居跡

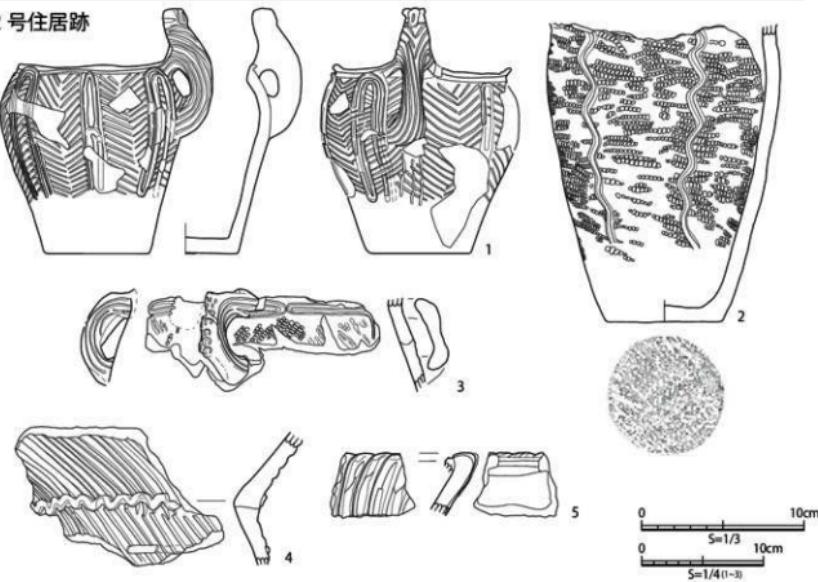


第45図 11号住居跡出土遺物

11号住居跡

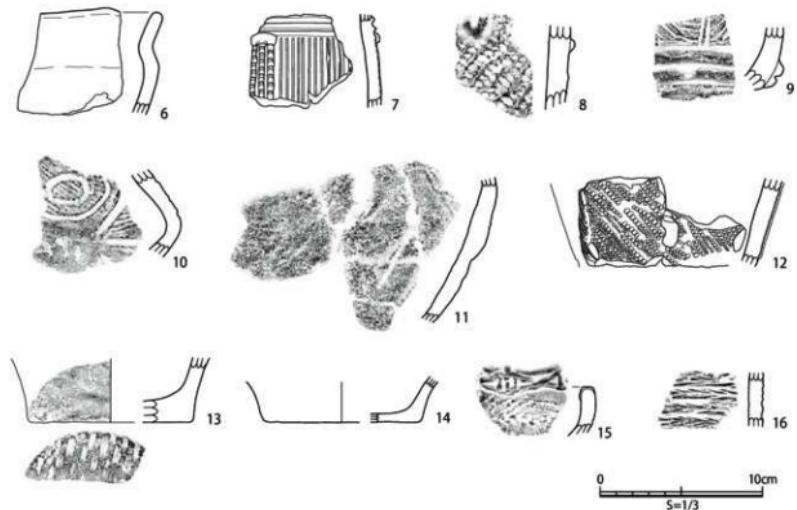


12号住居跡

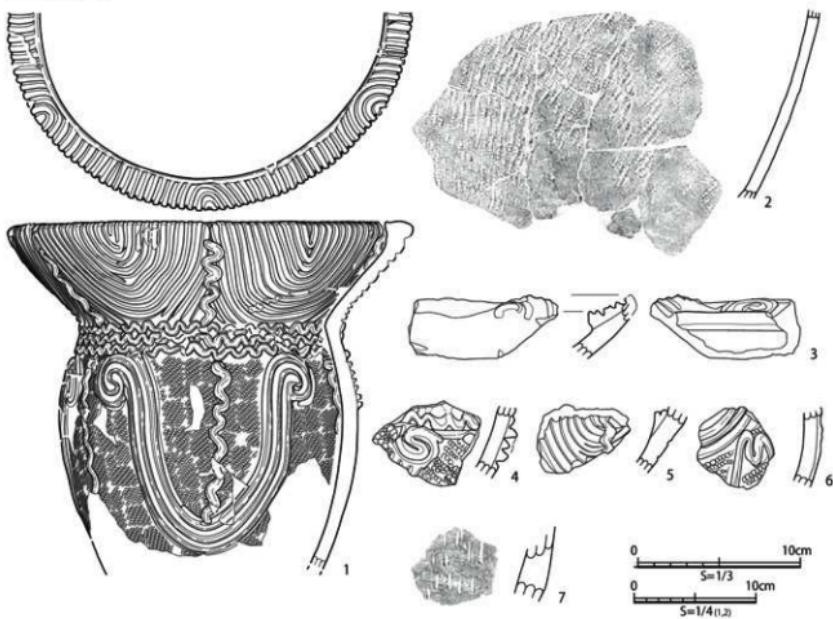


第46図 11号住居跡出土遺物(2)・12号住居跡出土遺物

12号住居跡

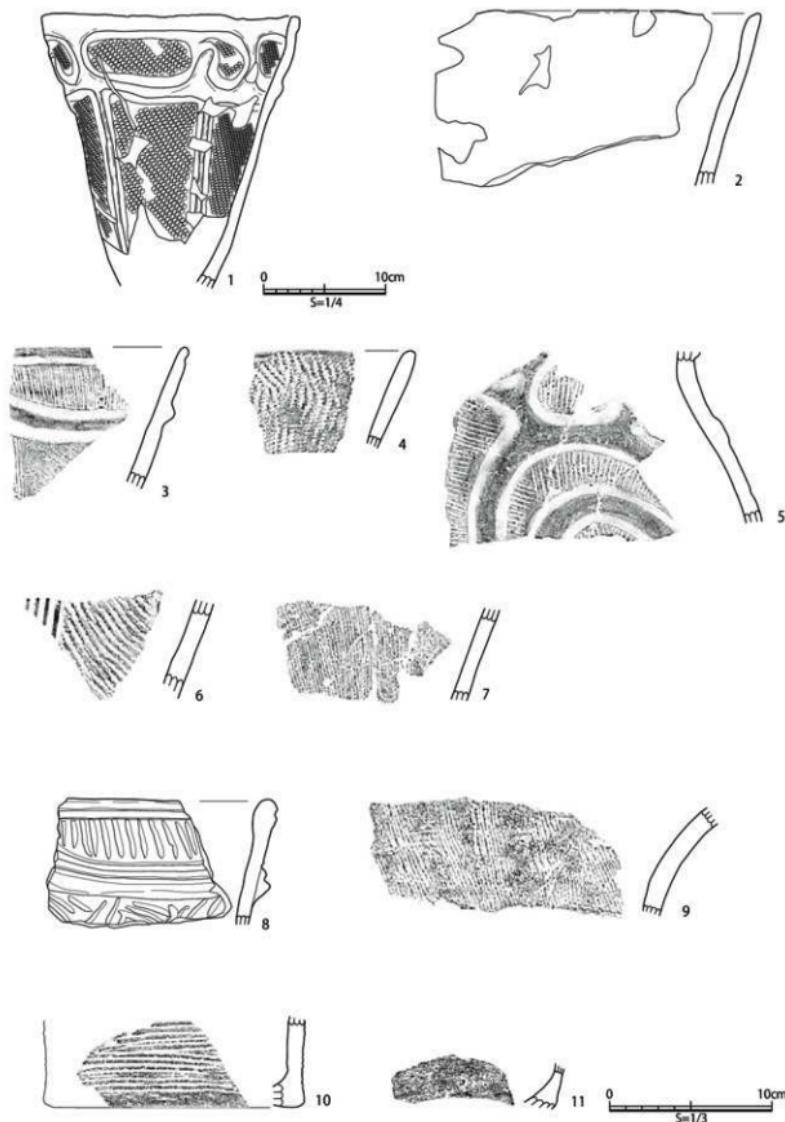


13号住居跡



第47図 12号住居跡出土遺物(2)・13号住居跡出土遺物

14号住居跡

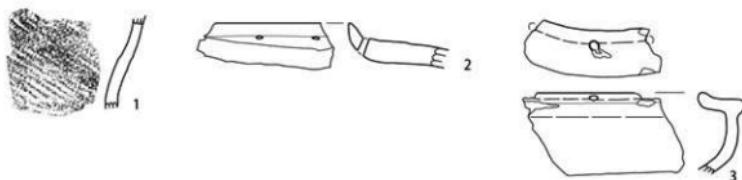


第48図 14号住居跡出土遺物

1号竪穴状遺構

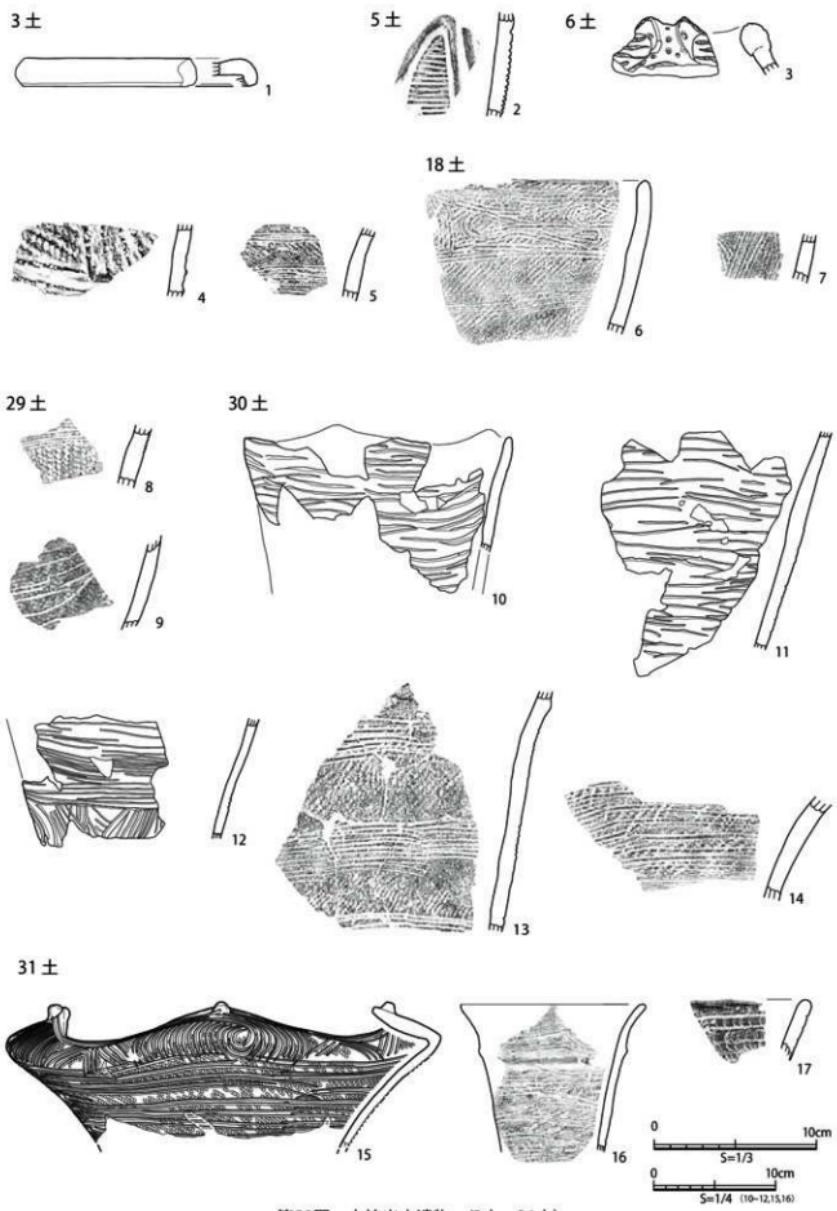


2号竪穴状遺構



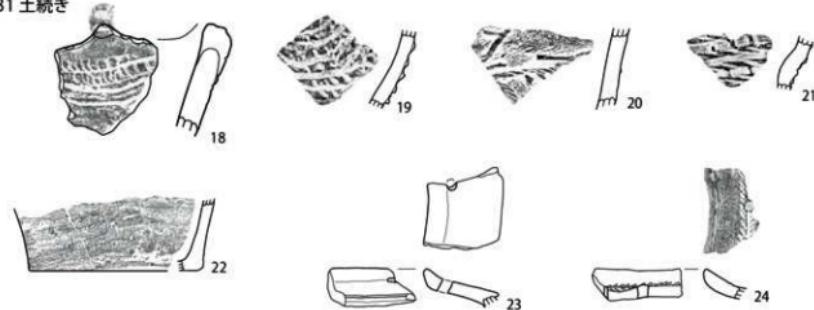
0 10cm  
S=1/3

第49図 1号竪穴・2号竪穴出土遺物

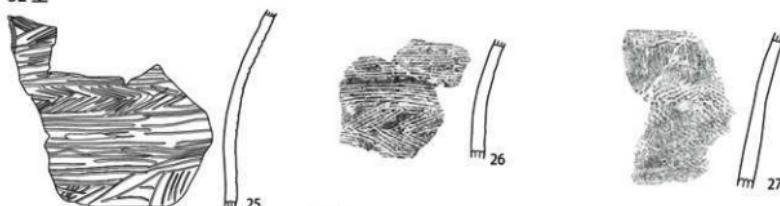


第50図 土坑出土遺物 (3土~31土)

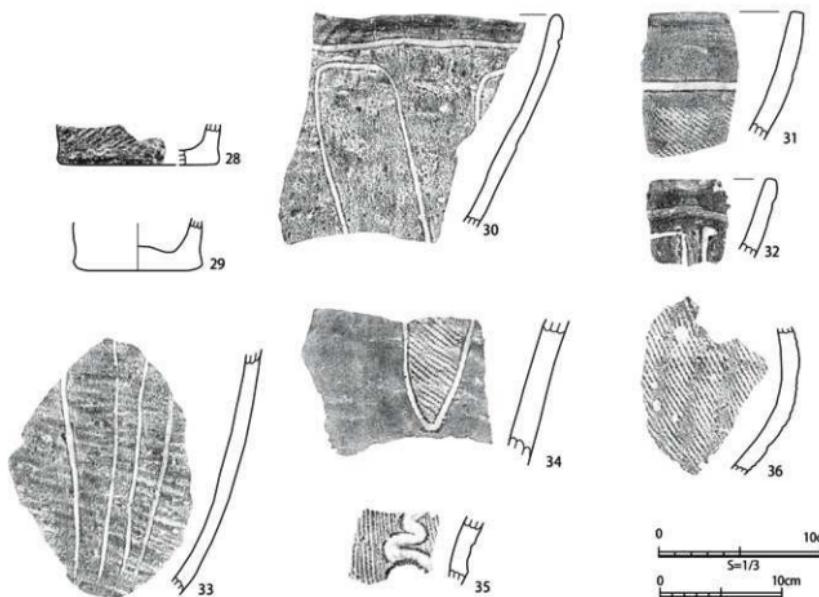
31 土続き



32 土



33 土

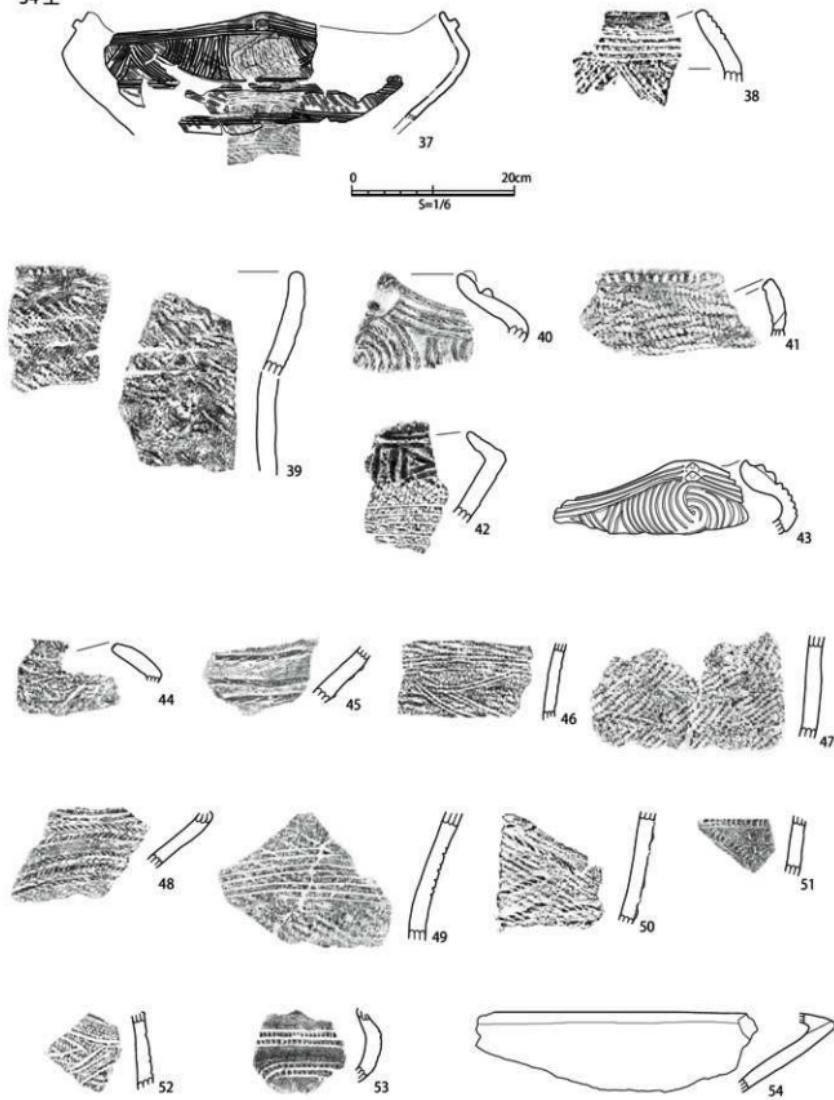


0  
S=1/3  
10cm

0  
S=1/4 (25.36)  
10cm

第51図 土坑出土遺物2 (31土～33土)

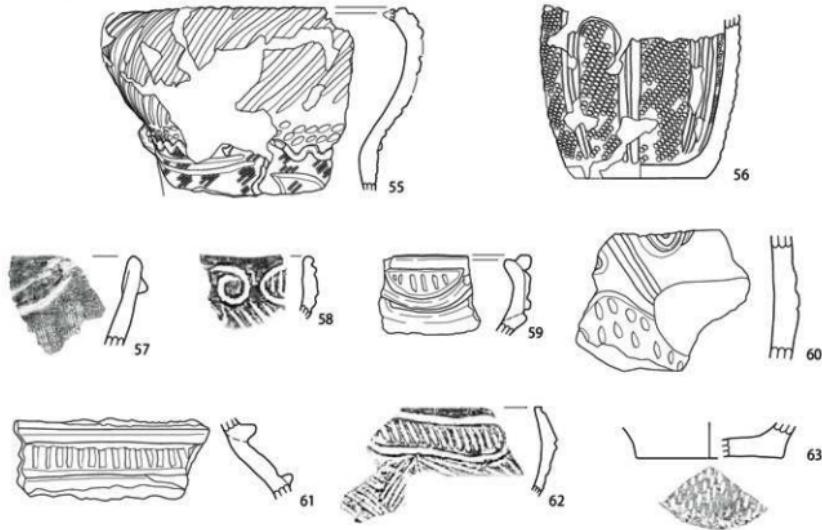
34 土



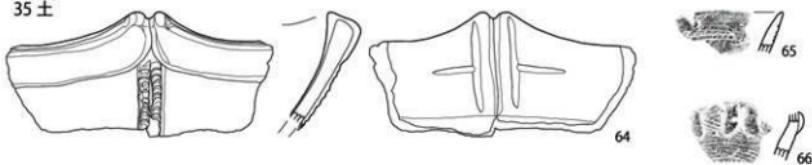
第52図 土坑出土遺物3 (34土)



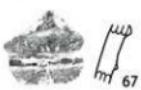
34 土続き



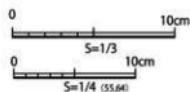
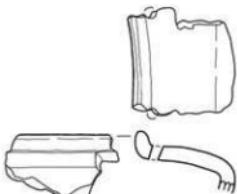
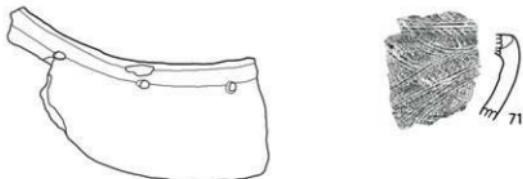
35 土



37 土



41 土



第53図 土坑出土遺物4 (34土~41土)

43 土



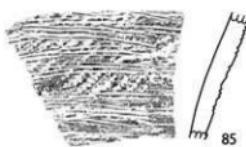
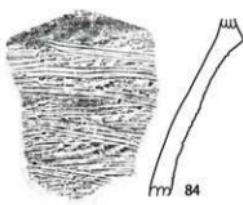
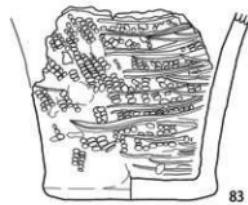
45 土



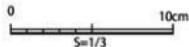
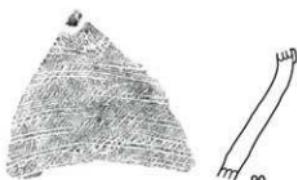
50 土



52 土

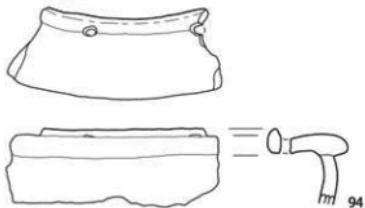


53 土

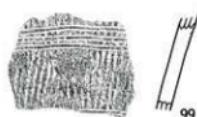
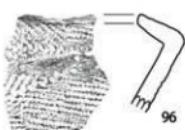


第54図 土坑出土遺物5 (43土～53土)

53 土続き



54 土



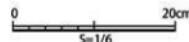
55 土



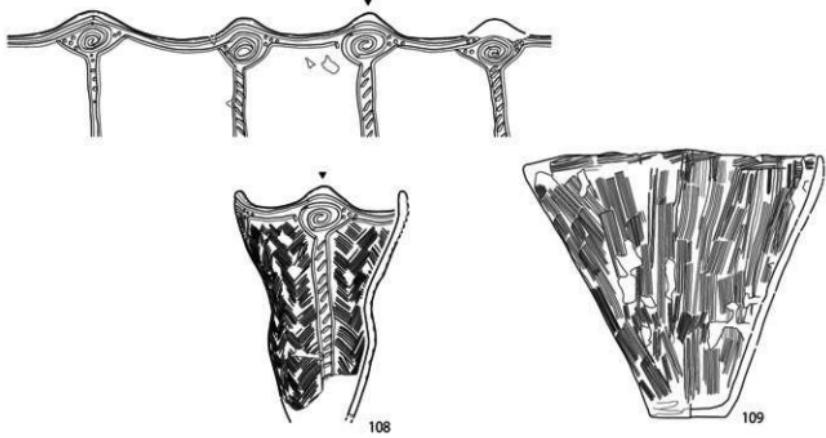
56 土



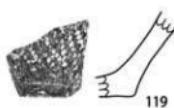
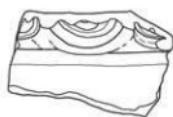
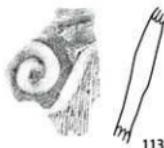
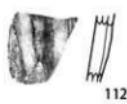
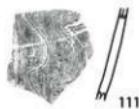
第55図 土坑出土遺物6 (53~56土)



56 土続き

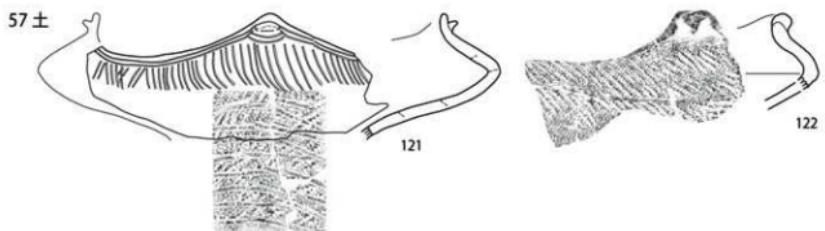


0  
S=1/6  
20cm



0  
S=1/3  
10cm

第56図 土坑出土遺物7 (56土)



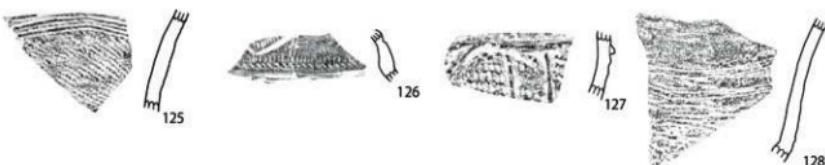
121

122

123

124

0  
S=1/4 10cm

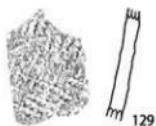


125

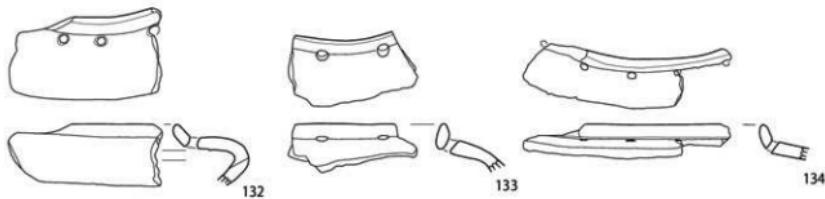
126

127

128



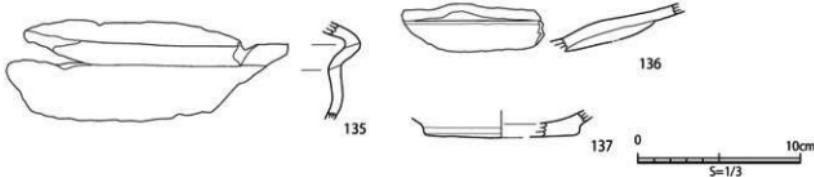
131



132

133

134



135

136

137

第57図 土坑出土遺物8 (57土)

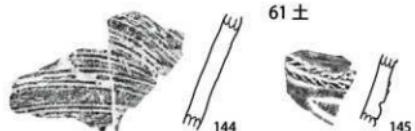
58 土



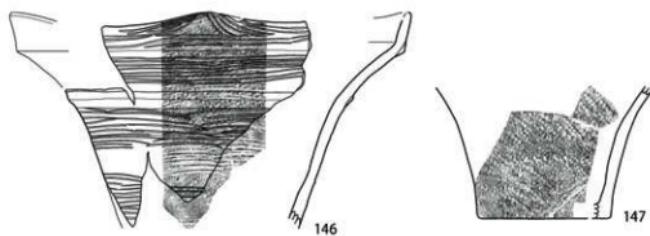
59 土



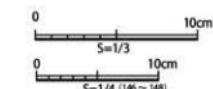
61 土



63 土



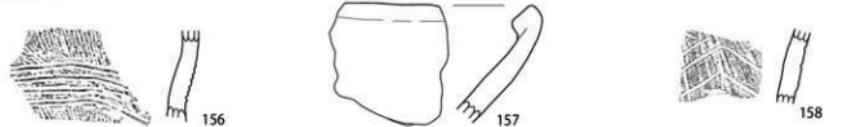
64 土



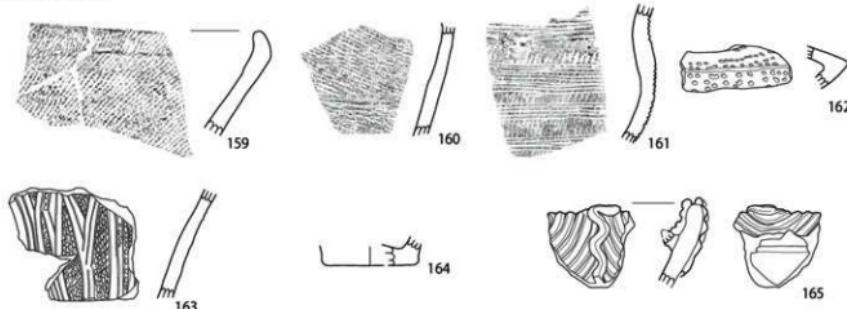
65 土

第58図 土坑出土遺物9 (58土~65土)

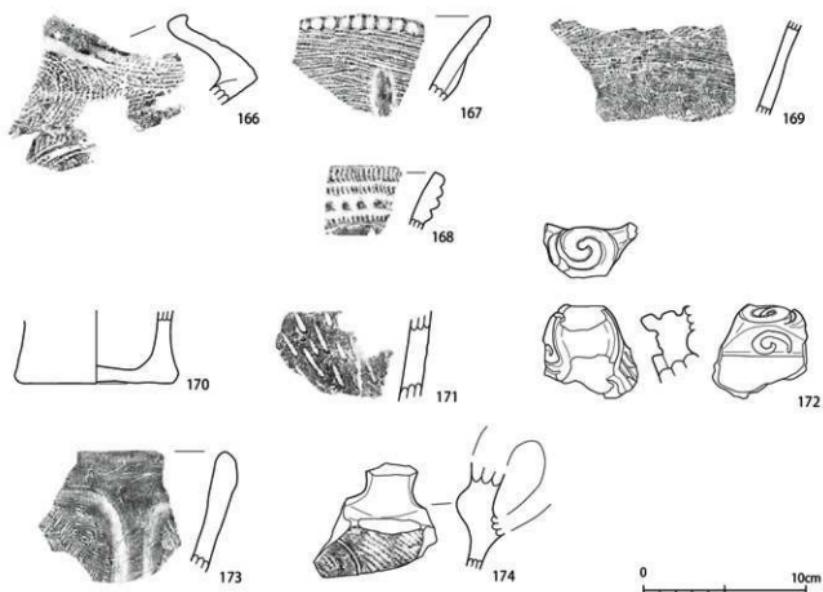
外構 B 区 1 土



外構 B 区 2 土

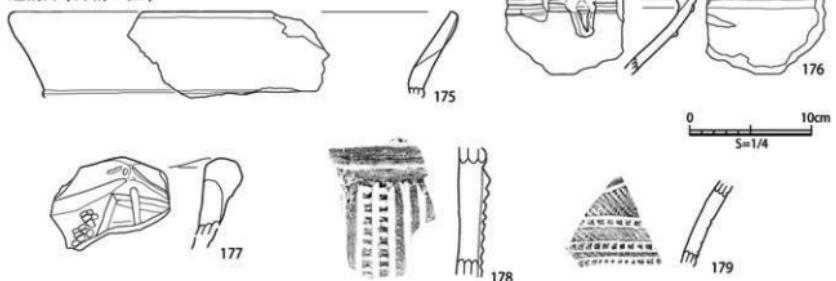


遺構外出土遺物

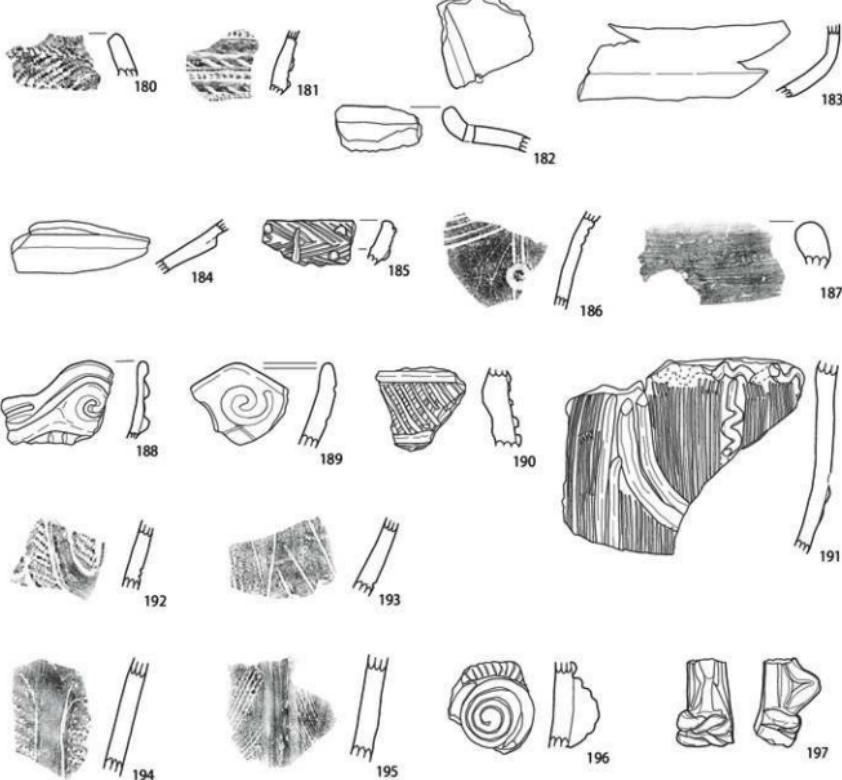


第59図 土坑出土遺物10・遺構外出土遺物

遺構外(外構B区)

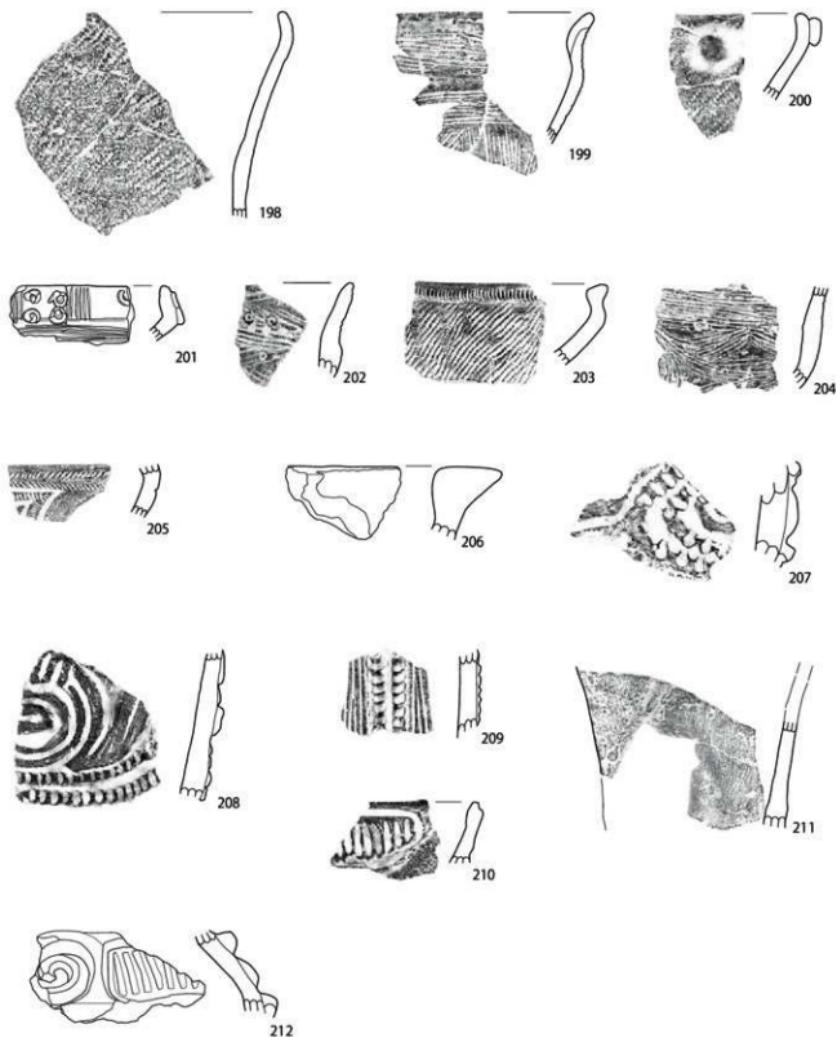


外構C区出土遺物



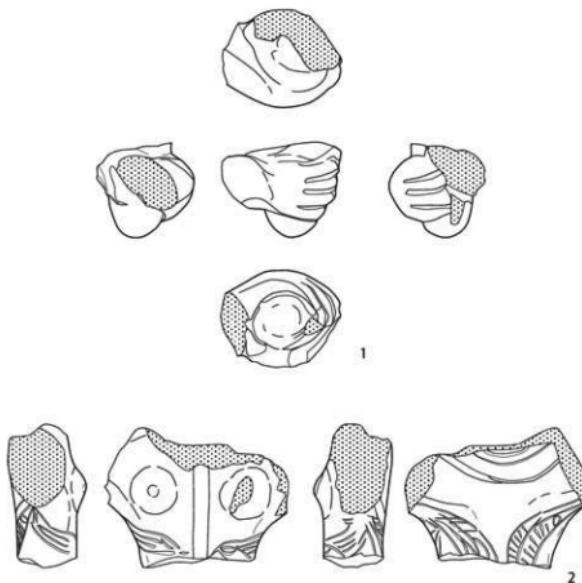
第60図 遺構外出土遺物・外構C区出土遺物

調査区一括

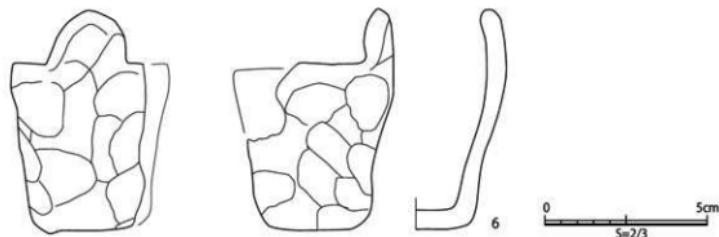
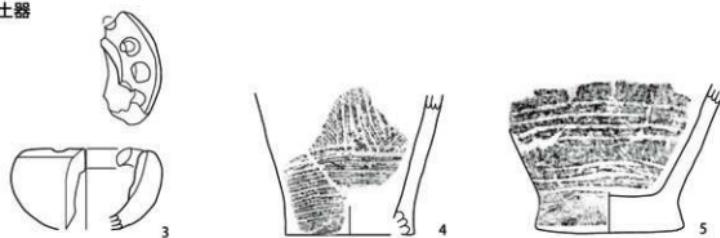


第61図 調査区一括出土遺物

土偶

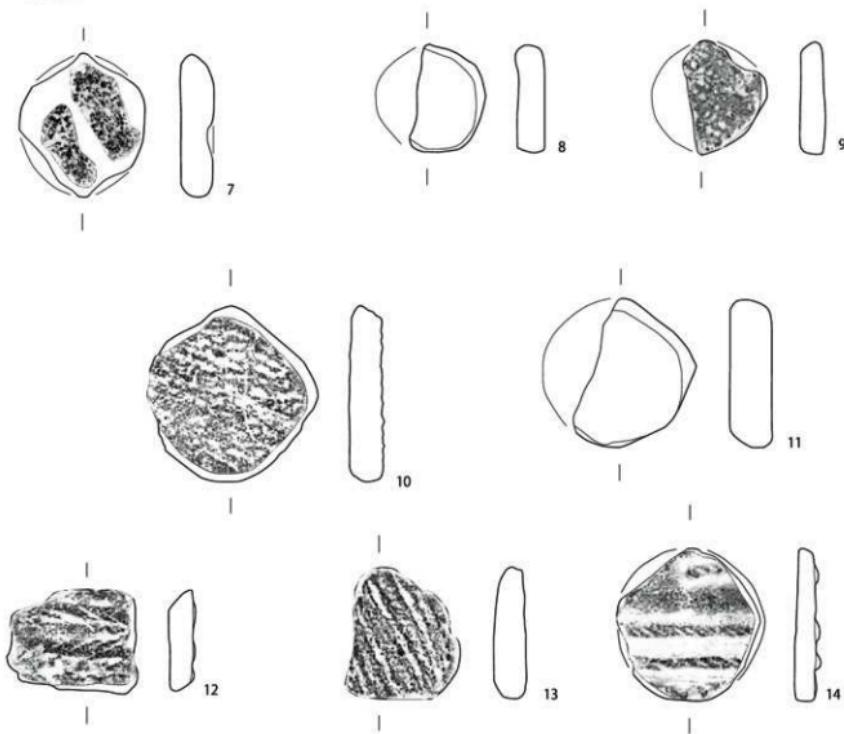


ミニチュア土器

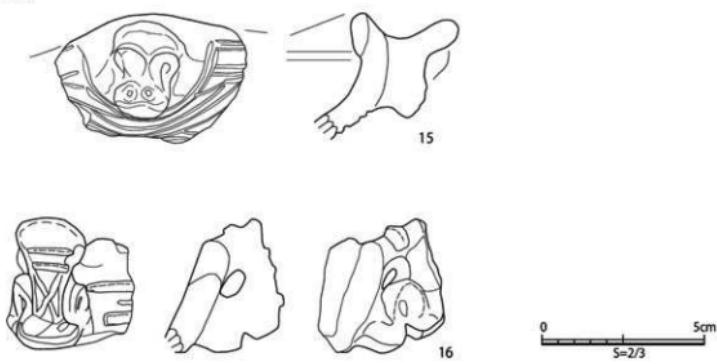


第62図 土製品(土偶・ミニチュア土器)

土製円盤



土製品(獸面把手)



第63図 土製品(土製円盤・獸面把手)

土製品



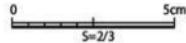
17



18

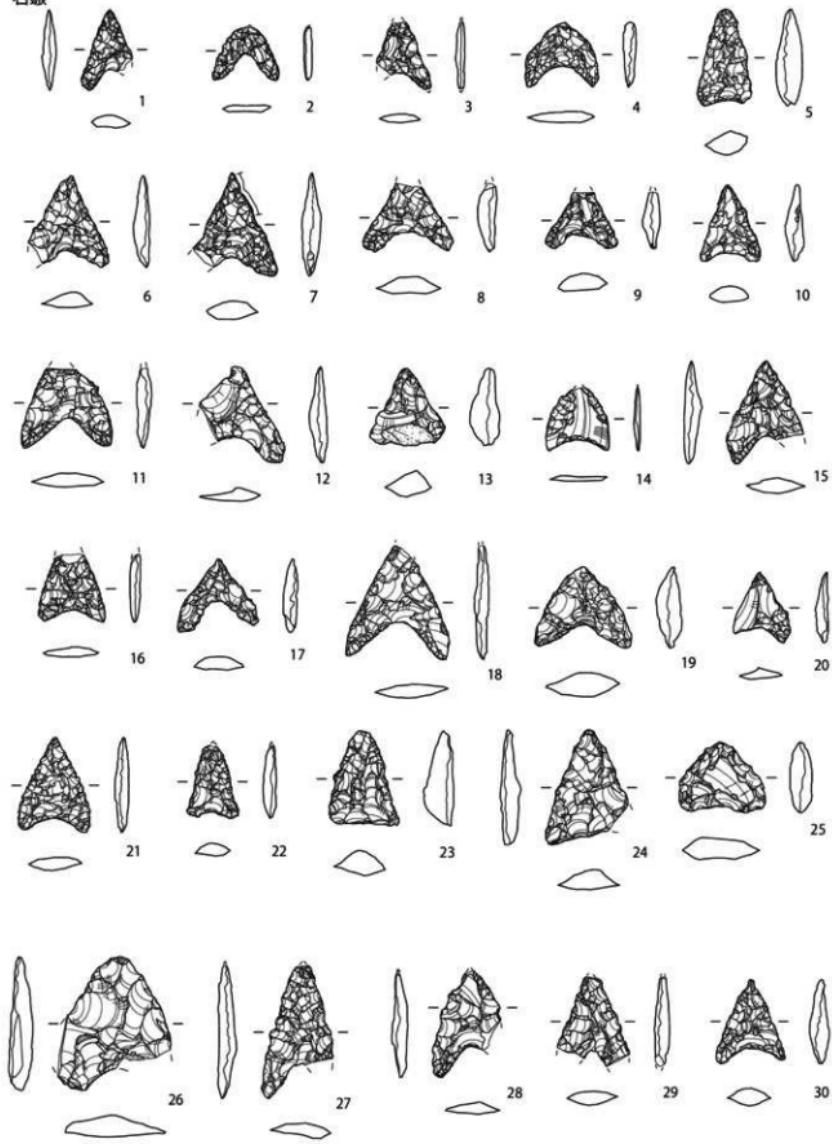


19



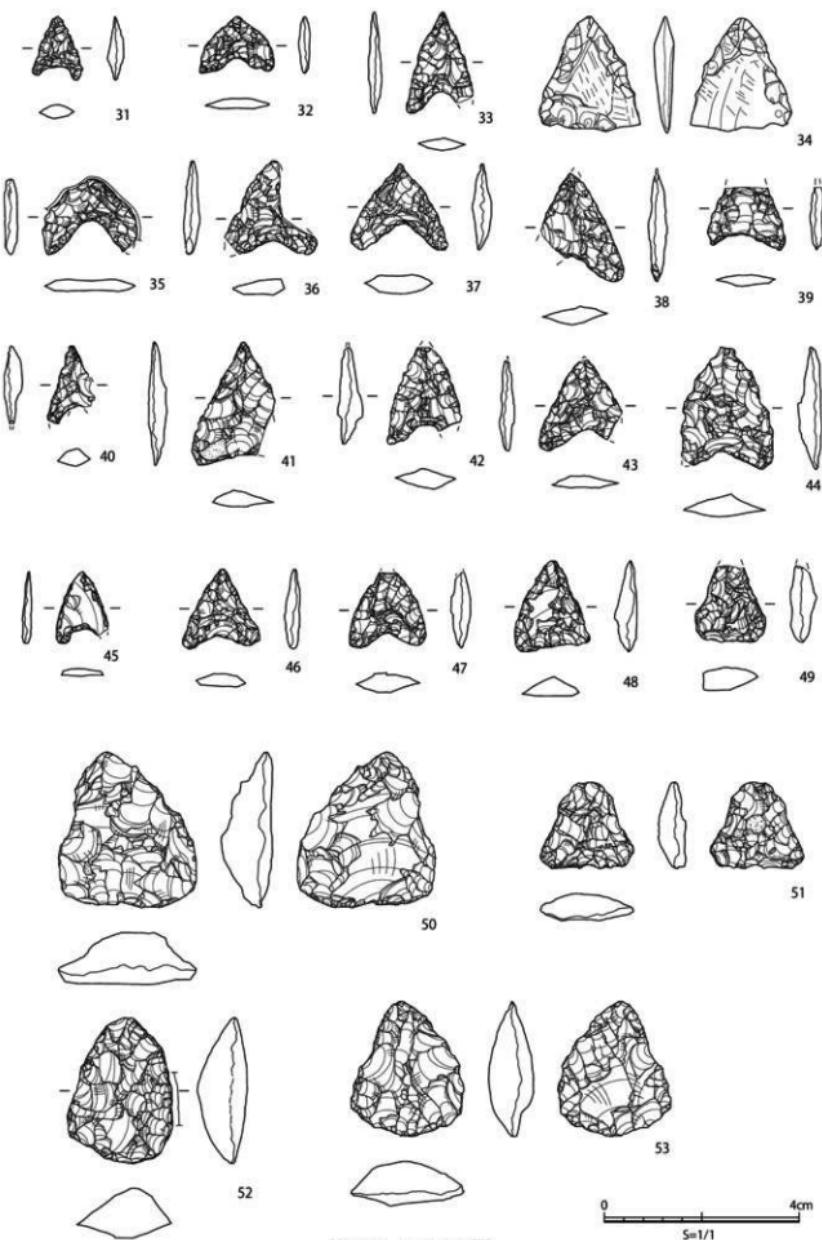
第64図 土製品(その他)

石器



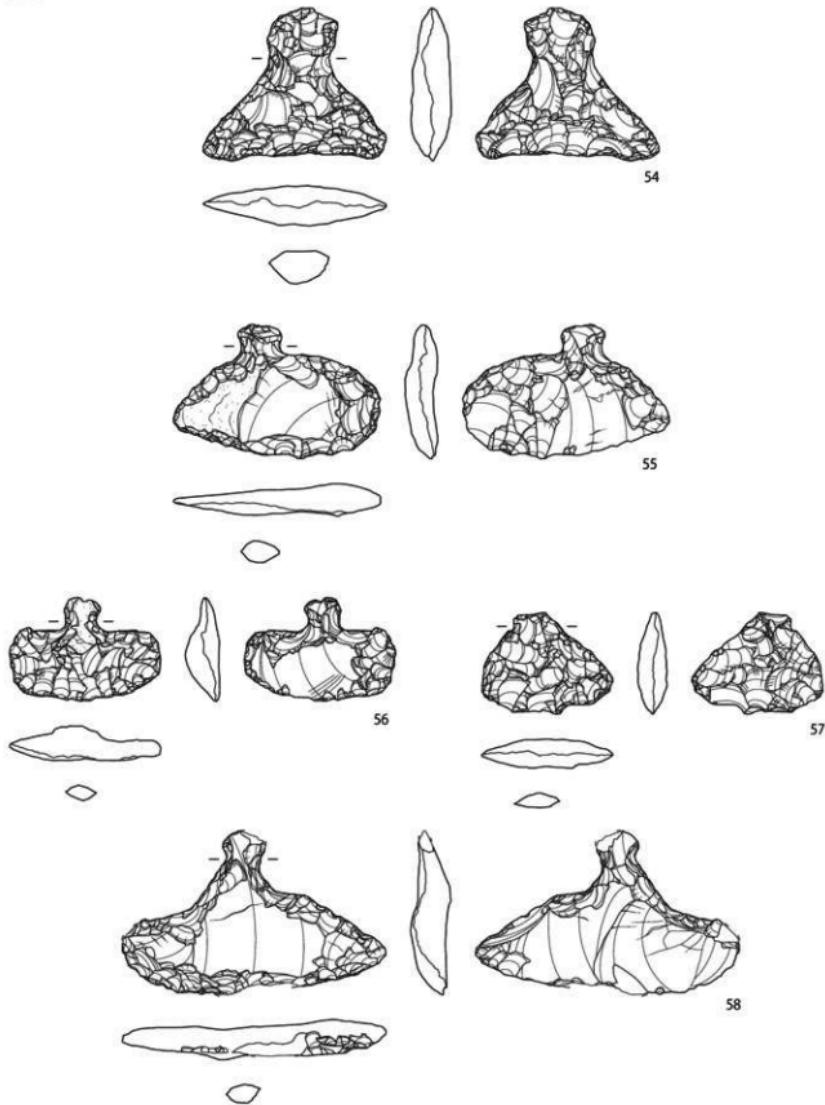
0 4cm  
5=1/1

第65図 石器1(石鎚)

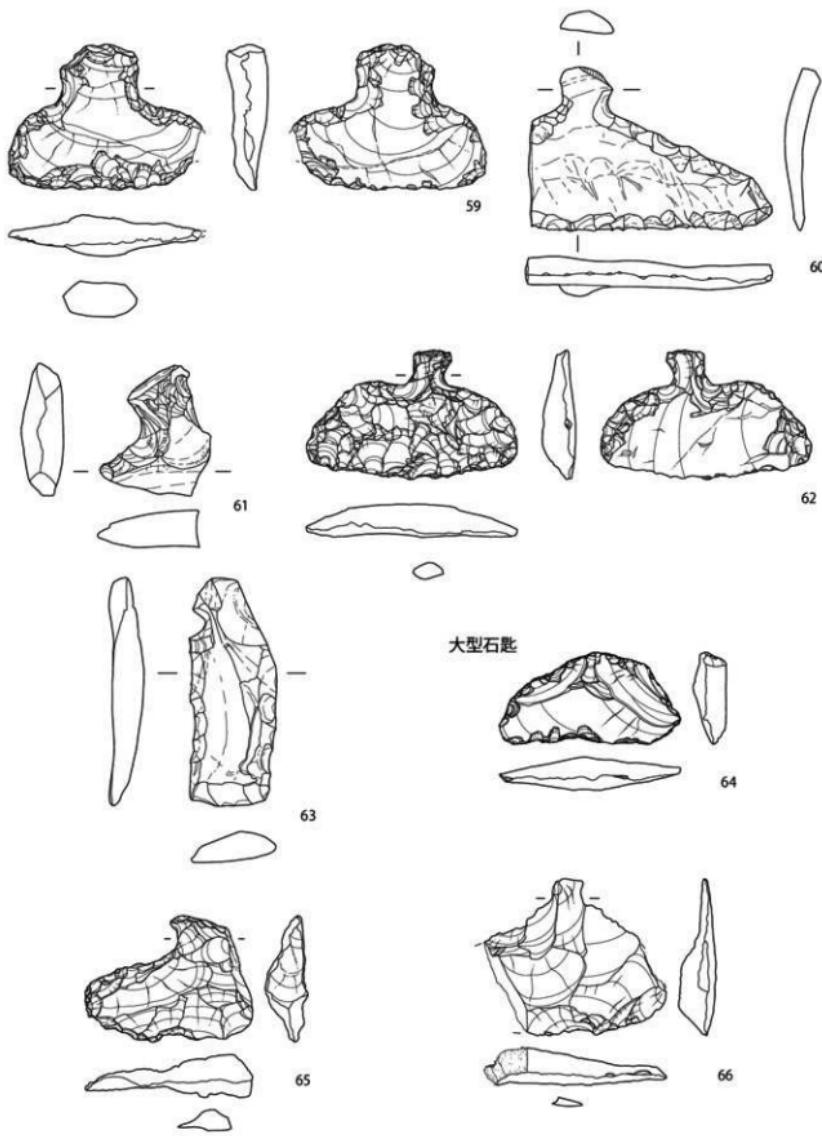


第66図 石器2(石錐)

石匙

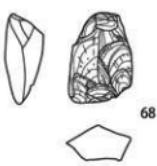
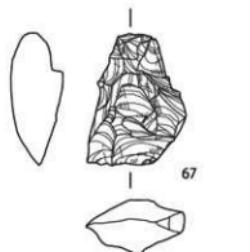


第67図 石器3(石匙)

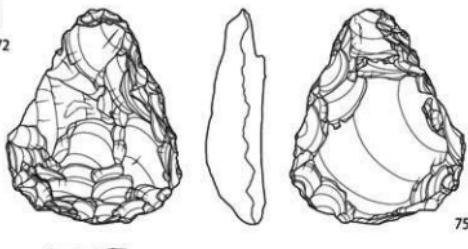
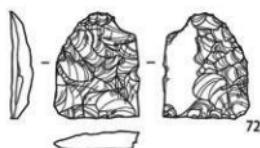
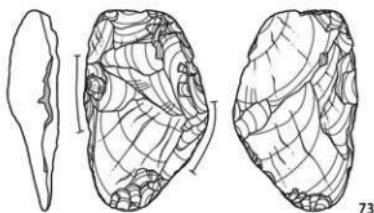
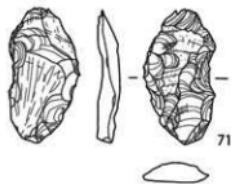
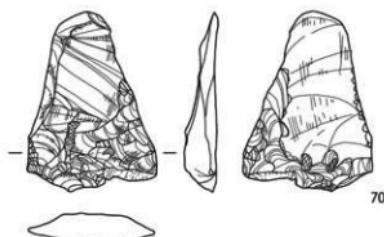
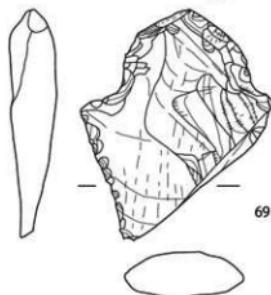


第68図 石器4(石匙)

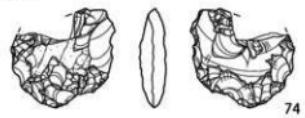
楔形石器



二次加工剥片



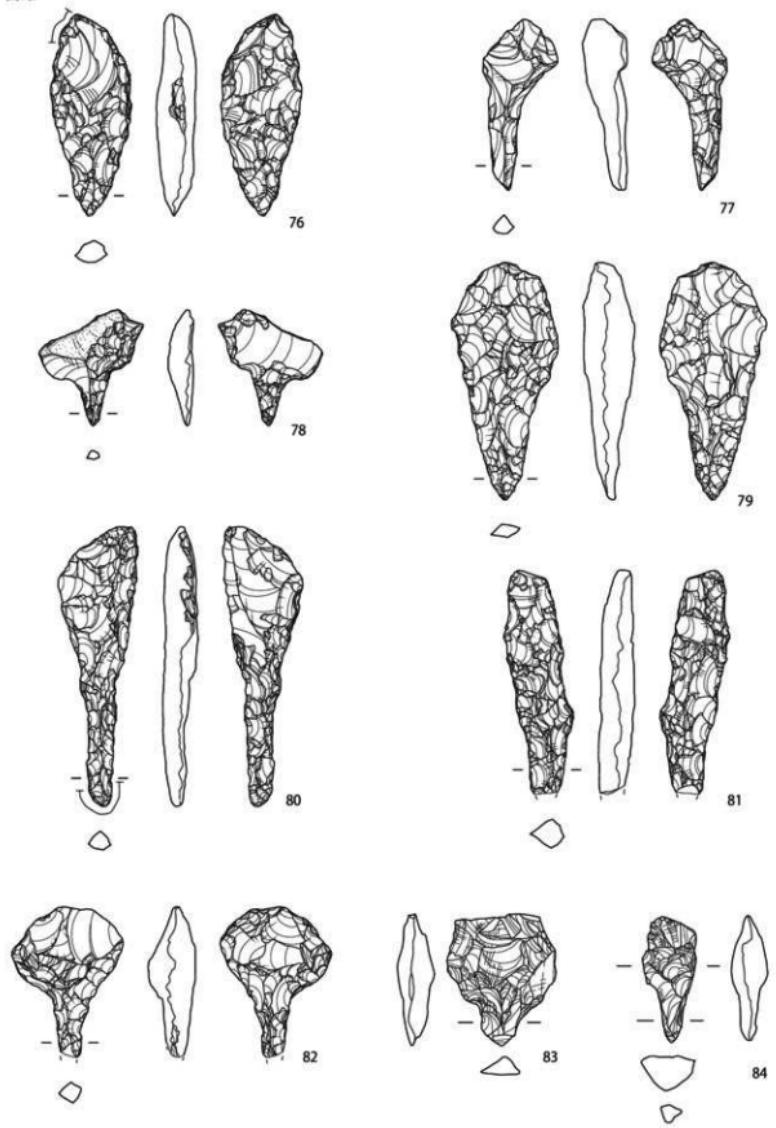
搔器



0  
S=1/1  
4cm

第69図 石器5(楔形石器・二次加工剥片・搔器)

石錐

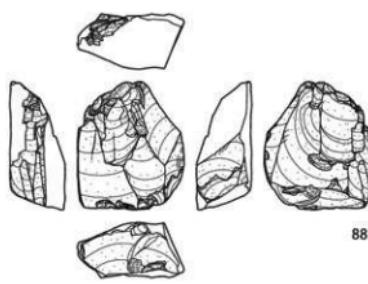
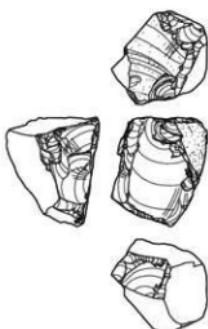
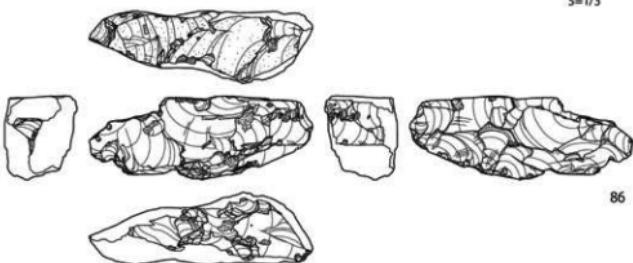


第70図 石器6(石錐)

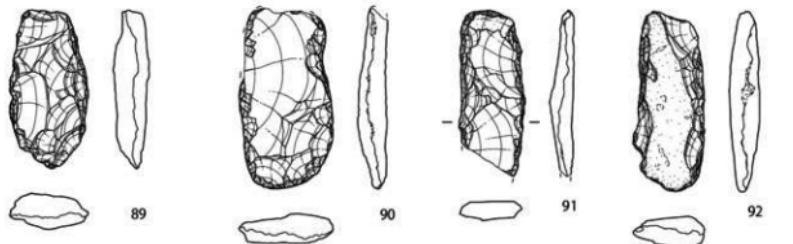
横刃型石器



原石・石核

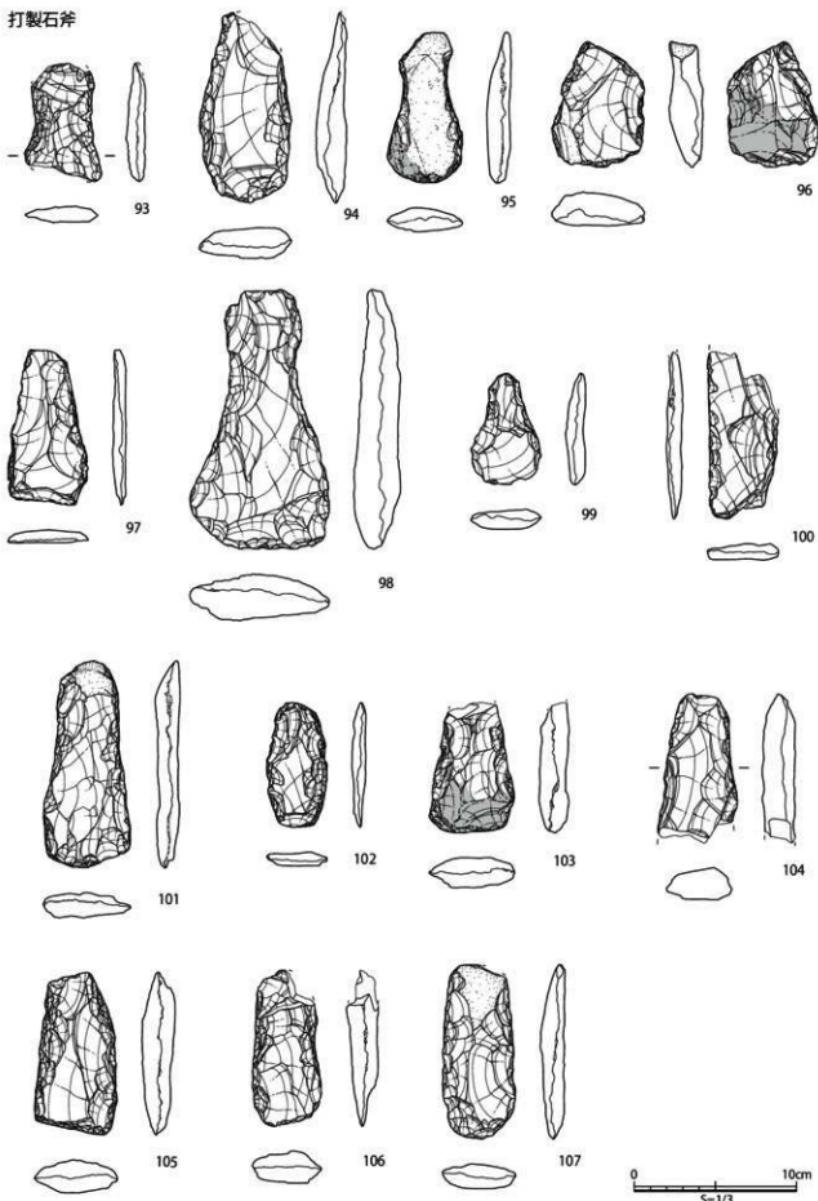


打製石斧



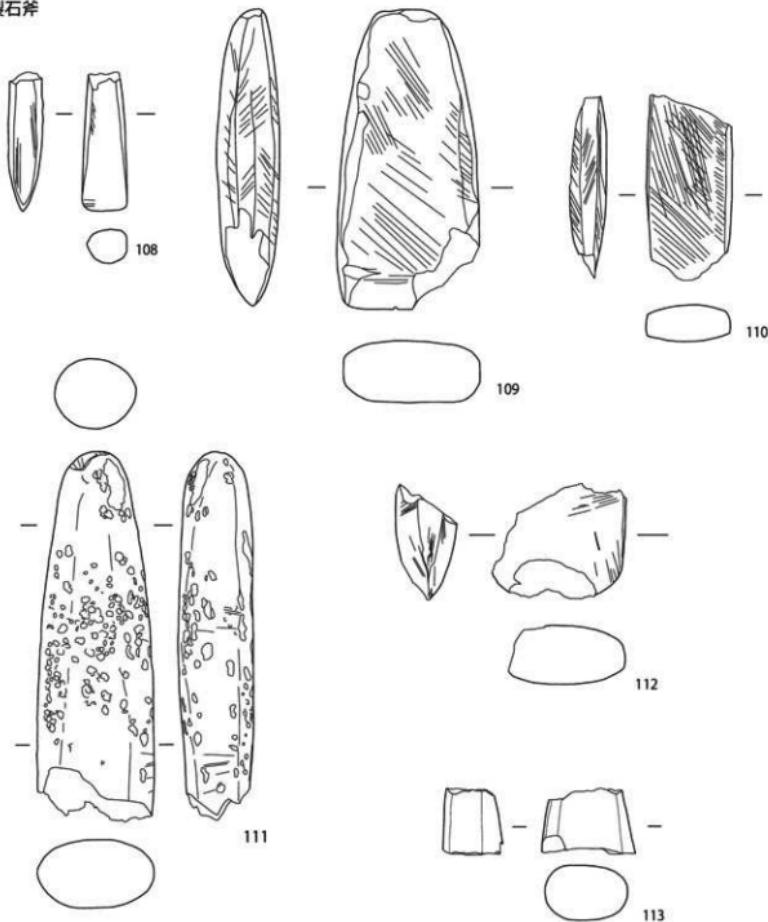
第71図 石器7 (横刃型石器・原石・石核・打製石斧)

打製石斧

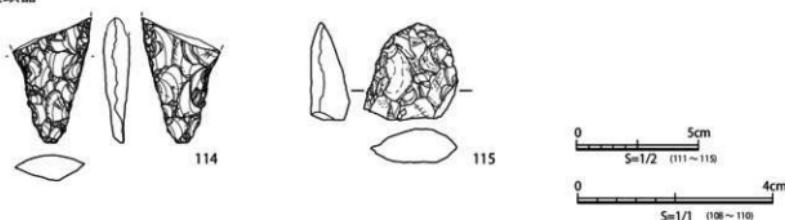


第72図 石器8(打製石斧)

磨製石斧

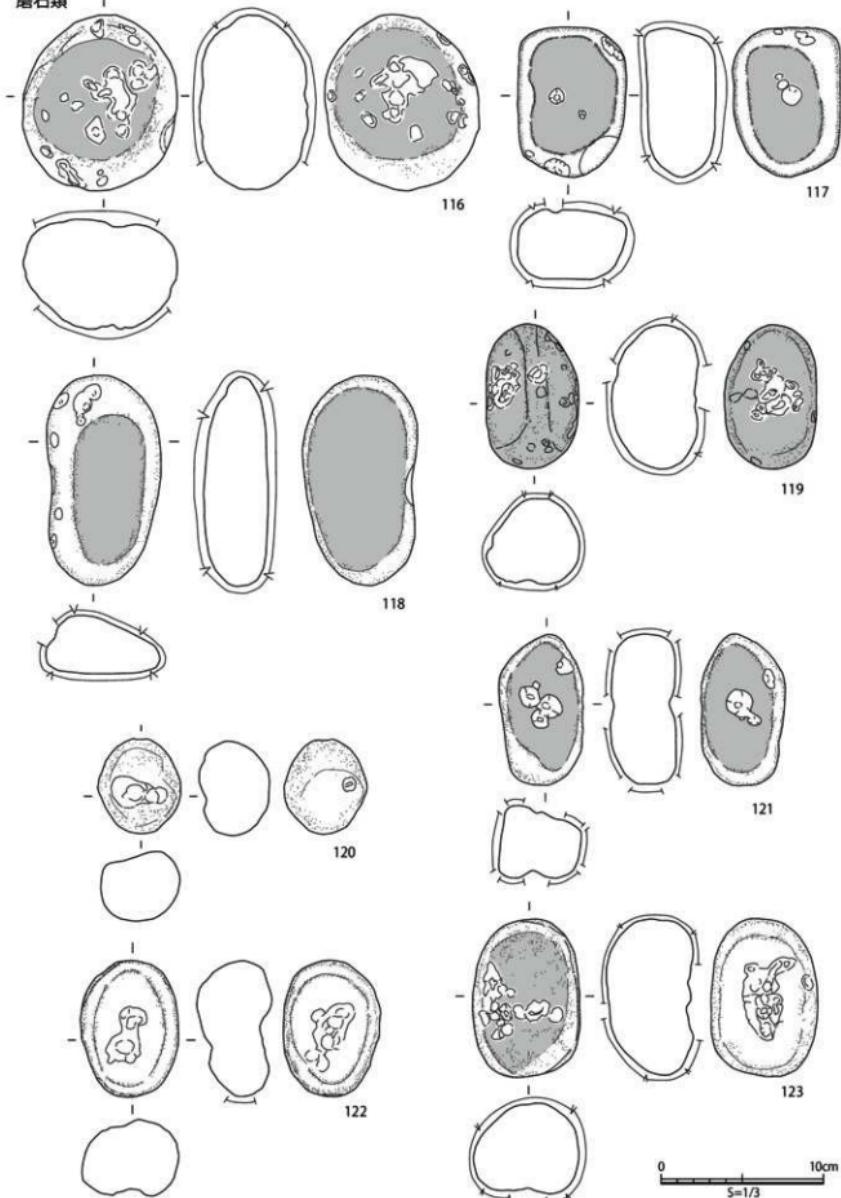


尖頭器

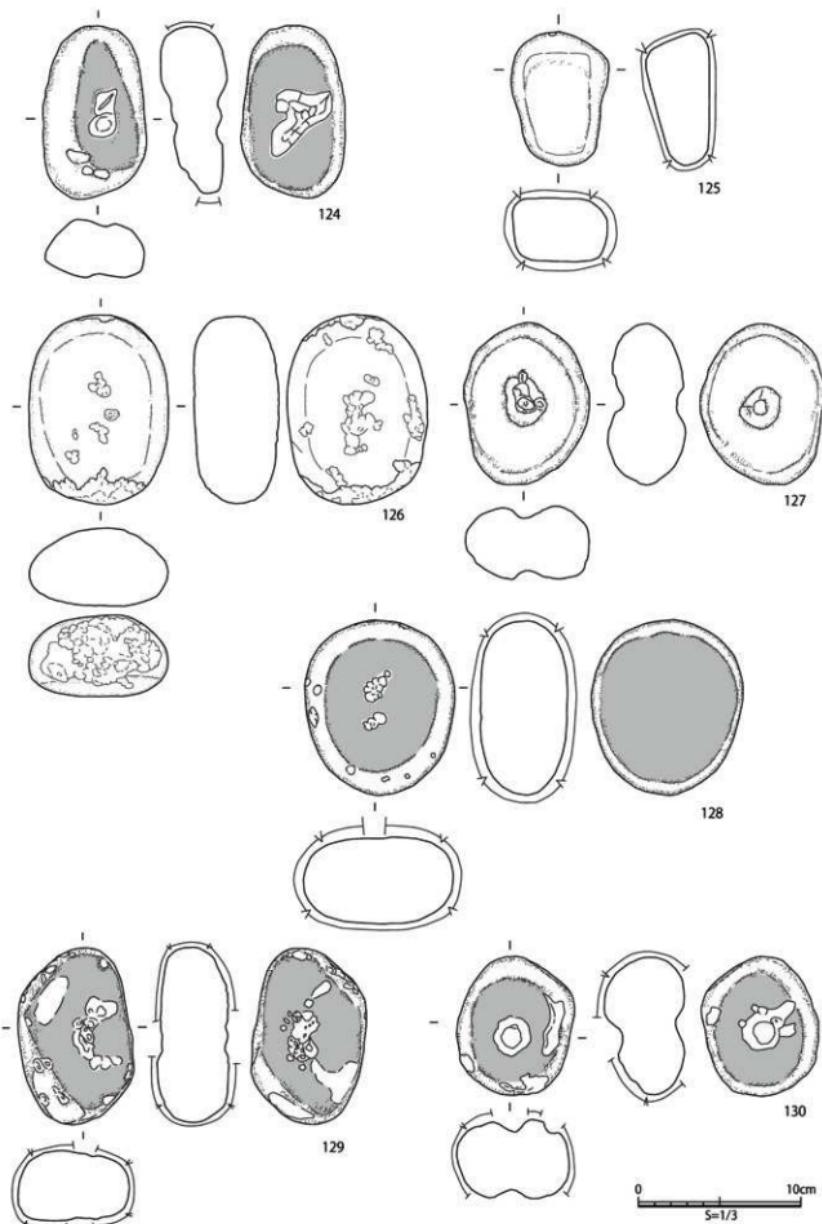


第73図 石器9(磨製石斧・尖頭器)

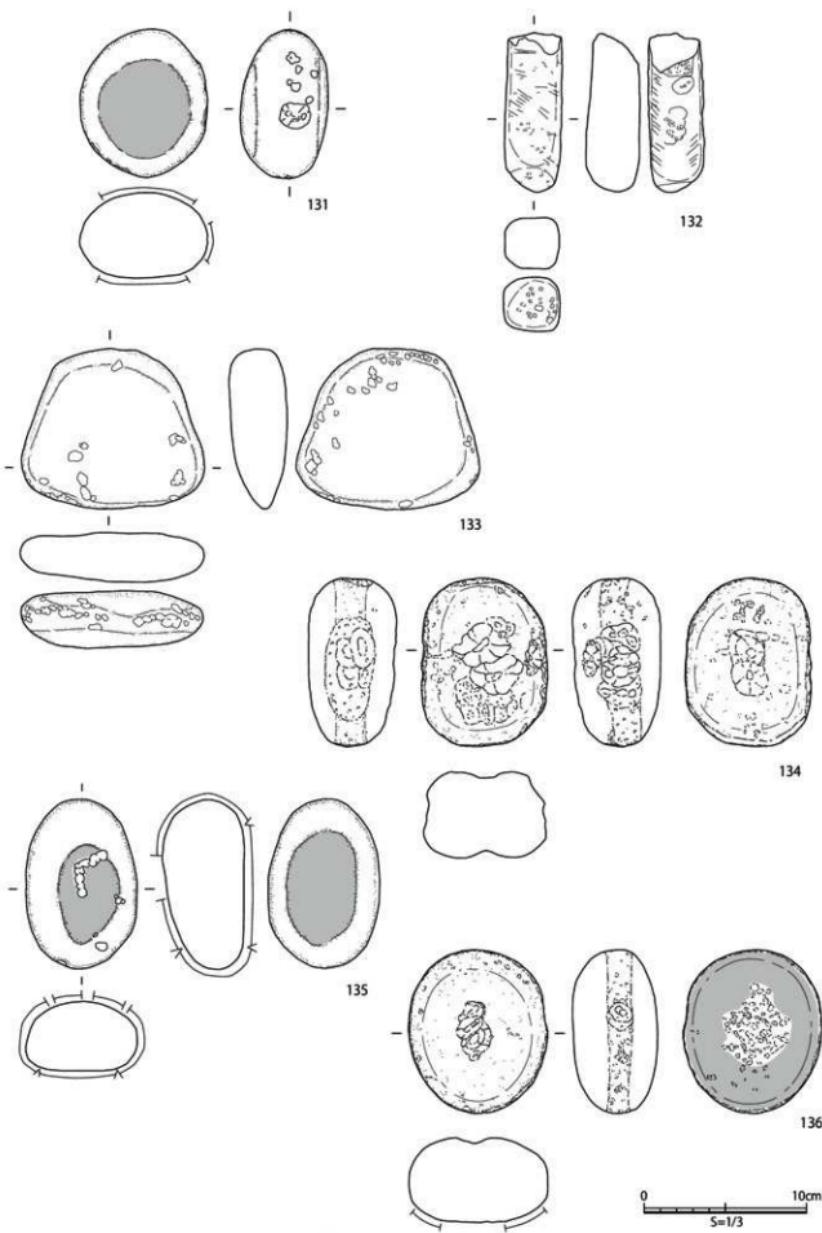
磨石類



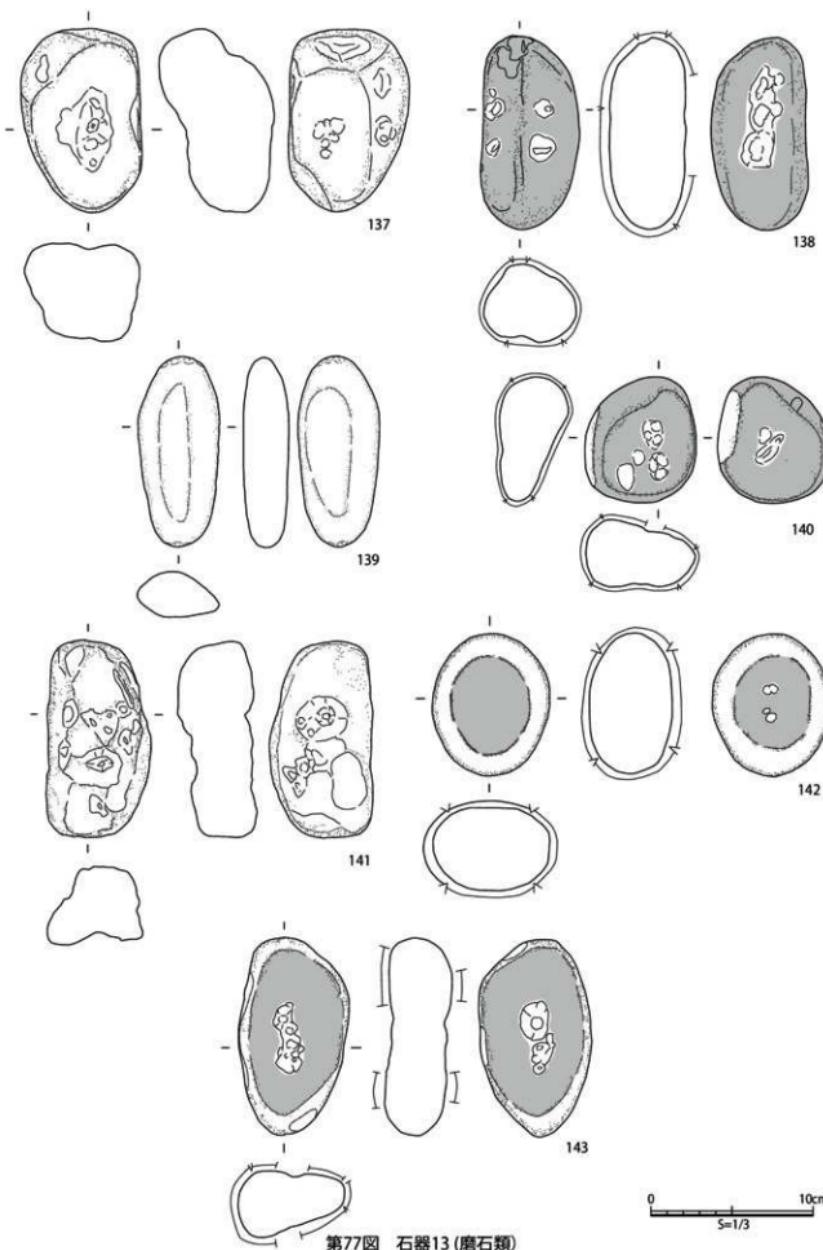
第74図 石器10(磨石類)



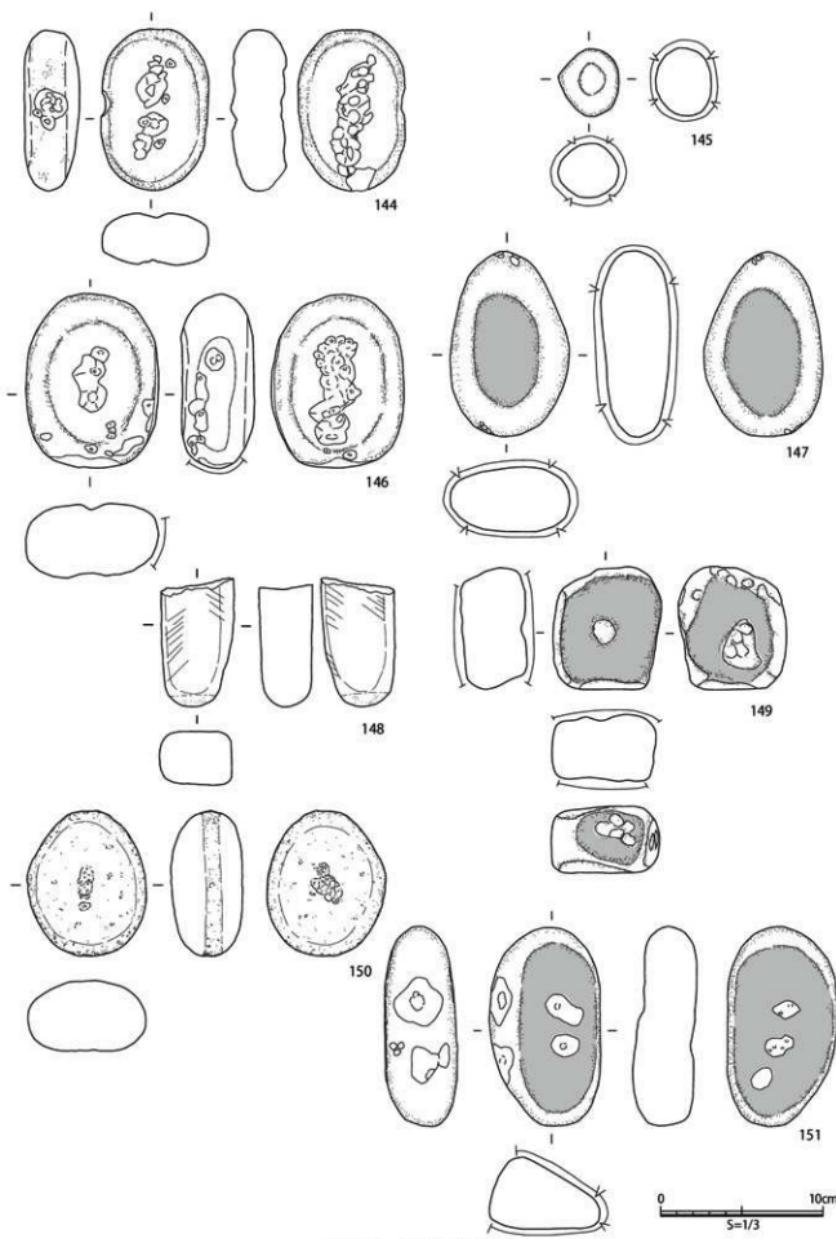
第75図 石器11(磨石類)



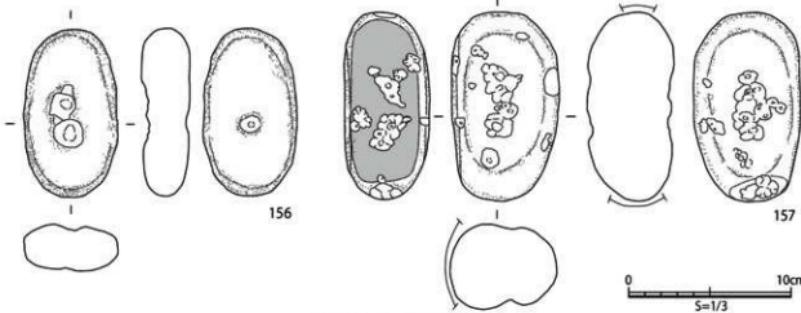
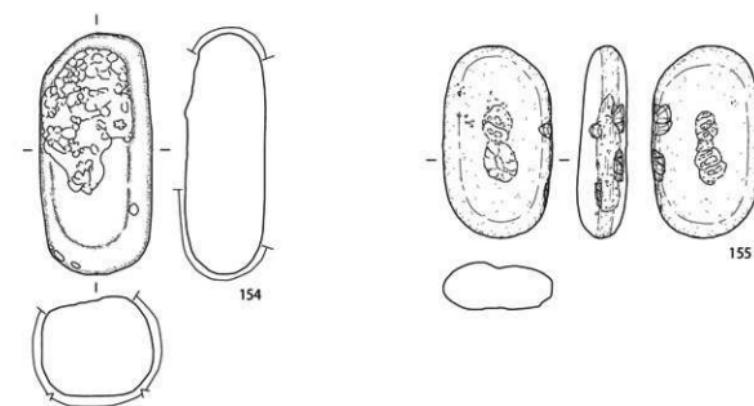
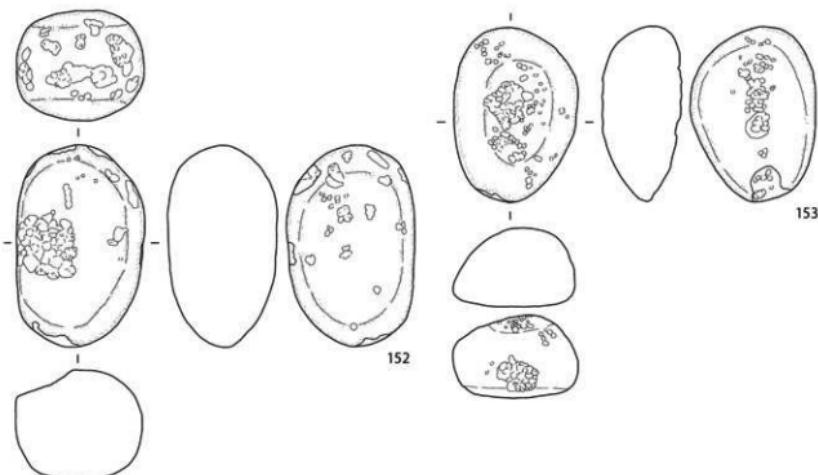
第76図 石器12(磨石類)



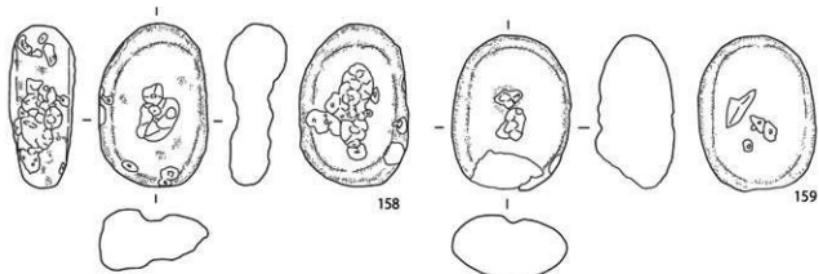
第77図 石器13(磨石類)



第78図 石器14(磨石類)

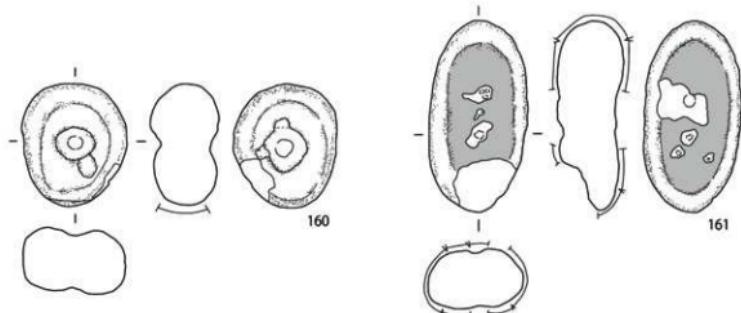


第79図 石器15(磨石類)



158

159

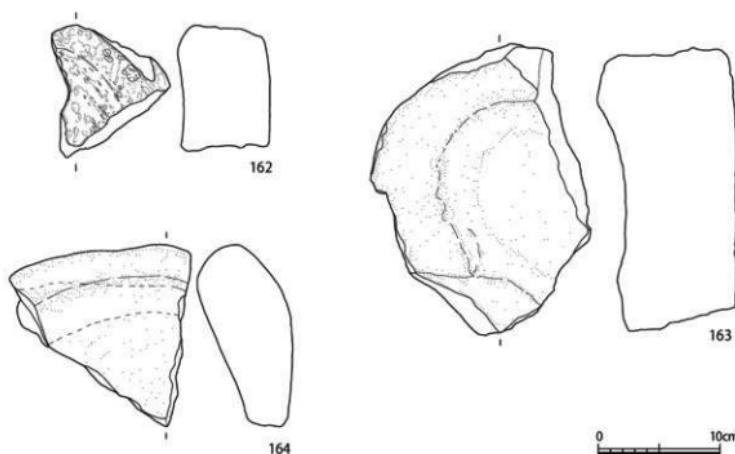


160

161

石皿類

0  
S=1/3  
10cm

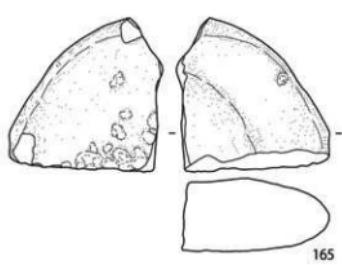


162

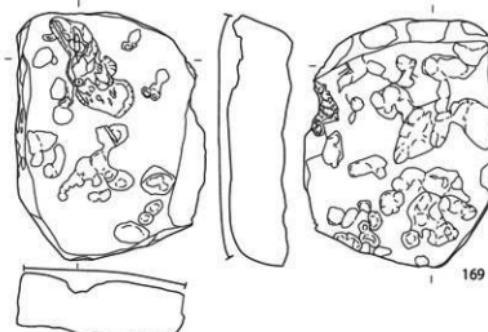
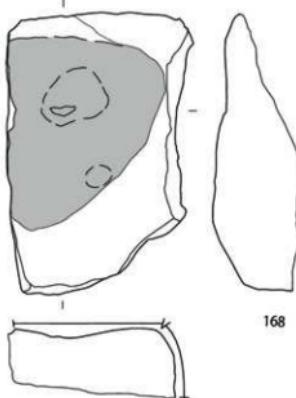
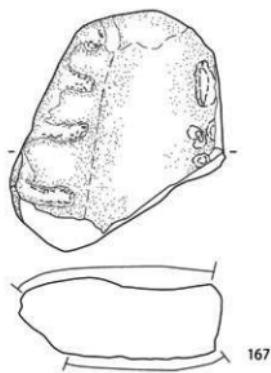
163

0  
S=1/4  
10cm

第80図 石器16(磨石類・石皿)

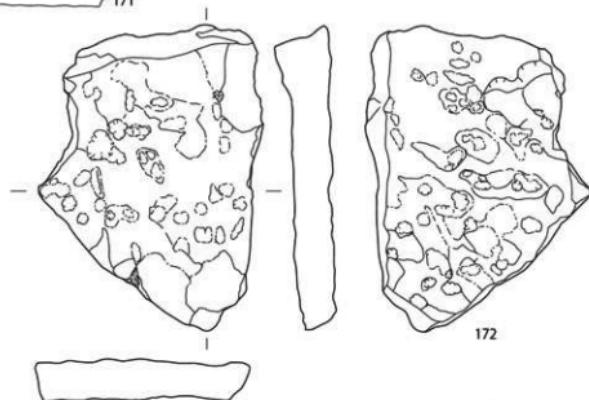
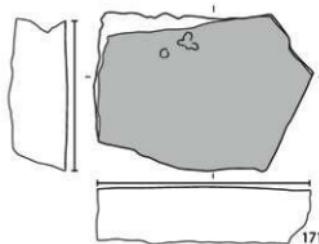
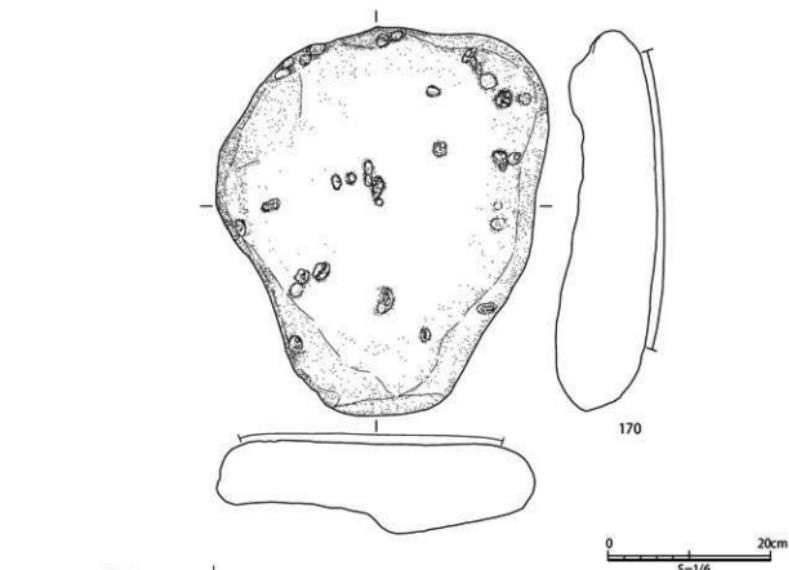


砾石皿

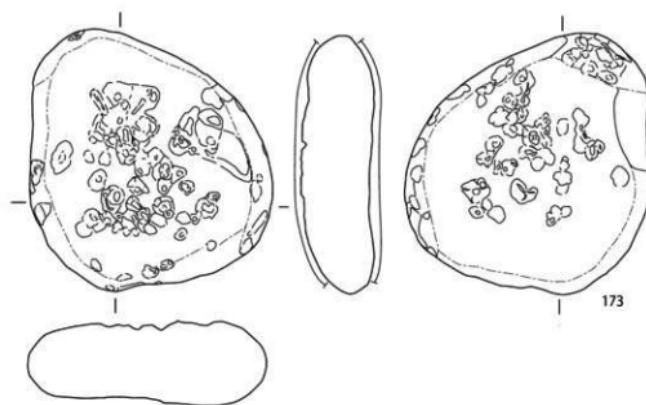


0  
S=1/4  
10cm

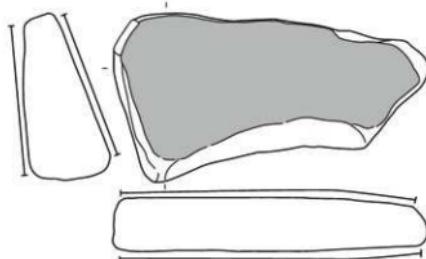
第81図 石器17(石皿・砾石皿)



第82図 石器18(砾石皿)



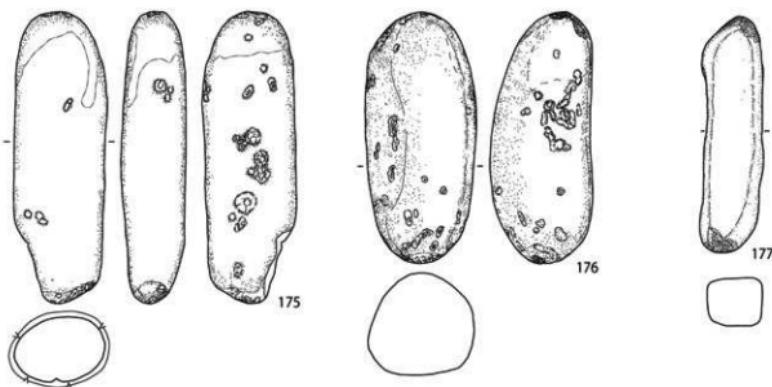
173



174

0  
S=1/4 (173,174)  
10cm

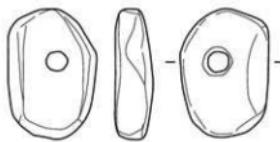
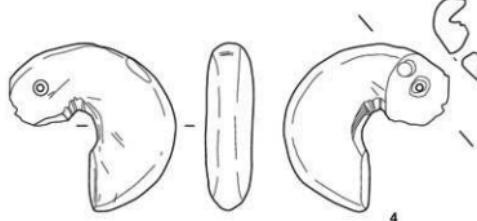
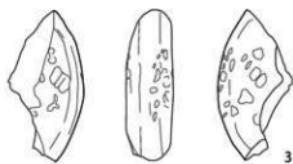
大型磨石



0  
S=1/6 (175~177)  
20cm

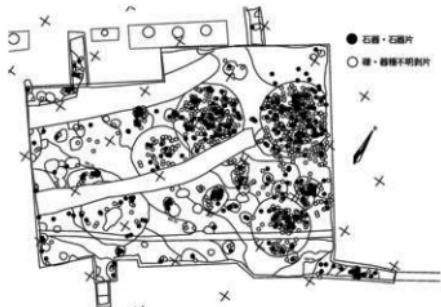
第83図 石器19 (砾石皿・大型磨石)

石製品

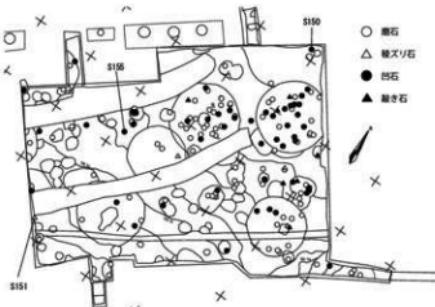


第84図 石製品

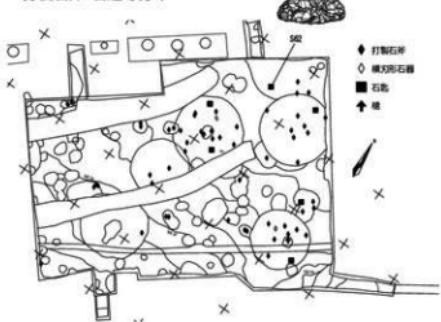
石器・礫分布



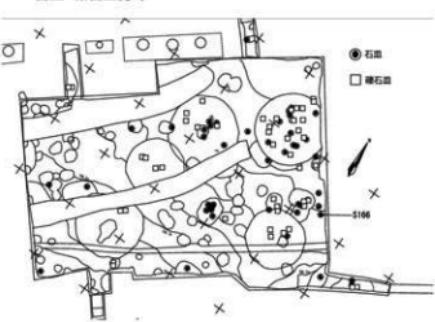
磨石類分布図



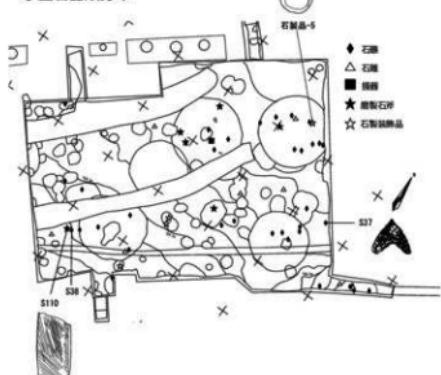
打製石斧・石匙等分布



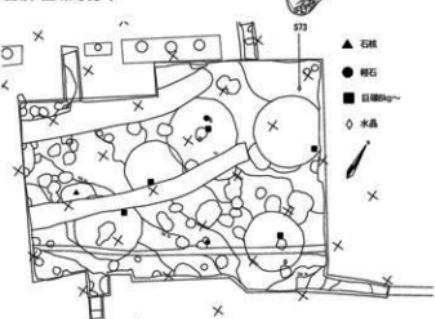
石皿・礫石皿分布



小型石器類分布



石核・巨礫等分布



第85図 石器・礫平面分布

0 10m  
1/400

第3表 出土遺物一覧表（土器）

頭面番号	図内 番号	出土地点	器種	口径・底径・高さ	色調		時代	備考
					輪形・施文法	輪形・施文法		
第33図	1	1号住居跡	両耳鉢	-(15.0) / 16.5 18.0 (0.4) / 12.9	黒褐色より区画線、算子文様は輪柱工芸上 り複数の条線を施す。文字状の記号がつく。	10187/4にぶる黄褐色	相・白色釉・石英・金雲母	晩古土器 中期Ⅳ
第33図	2	1号住居跡	深鉢	-/-3.3	口縁は内側する 等高線は三角形の断面となる	7.5YR6.8褐色	白色釉・金雲母	晩古土器Ⅳ~V
第33図	3	1号住居跡炉場	深鉢	-/-4.4	輪文施文、一期鍋リレ	7.5YR6.6褐色	相・白色釉・金雲母	晩古土器Ⅲ~IV
第33図	4	1号住居跡	深鉢	-/-4.0	輪文施文、一期鍋リレ	10182/3にぶる黄褐色	白色釉・石英	晩古土器Ⅲ
第33図	5	1号住居跡	深鉢	-/-3.4	輪文施文	10182/3にぶる黄褐色	相・白色釉	晩古土器Ⅲ
第33図	6	1号住居跡炉場	深鉢	-/-5.5	輪文施文、一期鍋リレ	10185/3にぶる黄褐色	相・白色釉	晩古土器Ⅲ
第33図	7	1号住居跡	深鉢	-/-8.6	輪文施文、一期鍋リレ	5YR6.4にぶる黄褐色	相・沙粒・白色釉	晩古土器Ⅲ
第33図	8	1号住居跡	深鉢	-/-4.4	輪文施文	5YR6.3にぶる黄褐色	相・沙粒・白色釉	晩古土器Ⅲ
第33図	9	1号住居跡	深鉢	-/-6.3/0	-	10186/4にぶる黄褐色	相・白色釉・金雲母	晩古土器Ⅲ
第33図	10	1号住居跡	小型の鉢皿	-/-4.2/0	口縁削輪み、横位立脚、輪筋は矢羽状の斜線	7.5YR3.0褐色	相・沙粒・白色釉	五個ヶ台
第33図	11	1号住居跡	深鉢	-/-2.4	口縁削輪み、横位立脚	7.5YR3.0褐色	相・沙粒・白色釉	五個ヶ台
第33図	12	1号住居跡	深鉢	-/-5.9	輪文施文に集合次輪	2.5YR5.6明褐色	相・白色釉・金雲母	津邊b 3
第33図	13	1号住居跡炉場	深鉢	-/-2.6	集合次輪	10184/3にぶる黄褐色	相・赤釉	津邊b
第33図	14	1号住居跡	深鉢	-/-3.8	口縁削輪み、沈底区画、突起あり	10182/1褐色	相・白色釉・石英多	五個ヶ台
第33図	15	1号住居跡	深鉢	-/-5.8	輪文施文に浮輪文	5YR5.2灰褐色	相・白色釉	五個ヶ台
第33図	16	1号住居跡	深鉢	-/-3.8	連輪文	1.5YR4.4にぶる褐色	相・沙粒・石英	五個ヶ台 b
第33図	17	1号住居跡	深鉢	-/-5.4	輪文施文に集合次輪	10184/3にぶる黄褐色	相・沙粒・白色釉	津邊a
第33図	18	1号住居跡	深鉢	-/-4.8	-	1.5YR5.4にぶる褐色	相・沙粒・石英	津邊b
第33図	19	1号住居跡	深鉢	-/-3.0	入輪水波文	1.5YR5.6田字褐色	相・沙粒・白色釉	津邊b
第33図	20	1号住居跡	深鉢	-/(12.6) / 3.4	集合次輪	10186/4にぶる黄褐色	相・白色釉・金雲母	津邊b
第33図	21	1号住居跡	深鉢	-/-3.4	平底付輪文による次輪文	5YR6.6灰褐色	相・石英・金雲母	五個ヶ台 b
第33図	22	1号住居跡	深鉢	-/-5.7	輪文施文、平底竹管による次輪文	10186/3にぶる黄褐色	相・石英・金雲母	津邊
第33図	23	1号住居跡	壺小鉢	-/-6.5	輪文の高い壁状輪、輪筋彫痕	1.5YR5.2灰褐色	相・白色釉	晩古土器Ⅰ
第33図	24	1号住居跡	深鉢	-/-3.8	輪文施文に次輪による母目輪	5YR4.2灰褐色	相・白色釉・金雲母	津邊b
第34図	1	4号住居跡	深鉢	-/-4.8	4等分のA字形手平、浅底粘土附斜付 輪文部は輪縁と斜面に竹管状の縦溝文 は部は輪縁と斜面に竹管状の縦溝文	10184/2灰褐色	砂粒・白色釉・赤色釉	晩古土器Ⅱ 内面オカリ 灰付土器
第34図	2	4号住居跡炉場	小堀	13.4 / 7.4 / 13.2	4等分のA字形手平、浅底粘土附斜付 輪文部は輪縁と斜面に竹管状の縦溝文 は部は輪縁と斜面に竹管状の縦溝文	5YR4.8灰褐色	相・少2等分の砂粒 白色釉・金雲母	晩古土器Ⅱ
第34図	3	4号住居跡	深鉢	-(10.4) / -	輪文施文地文	5YR5.6明褐色	砂粒・白色釉・石英	晩古土器Ⅱ
第34図	4	4号住居跡	深鉢	(25.6) / 9.0 / 8.9	口縁削輪み、輪筋によるつむぎ形文	1.5YR5.6明褐色	相・白色釉・石英	晩古土器Ⅱ
第34図	5	4号住居跡炉場	両耳鉢	-/-22.5	輪文施文地に焼円化の凹面、その主干筋輪か ら水平文系、次輪で底面文と周文	10186/4にぶる黄褐色	相・白色釉・石英・雲母	晩古土器Ⅱ
第34図	6	4号住居跡炉場	小堀	-/-5.8	底面文系、次輪で底面文と周文	10185/4にぶる黄褐色	相・石英・白色釉	晩古土器Ⅱ
第34図	7	4号住居跡	深鉢	-/-5.8	-	1.5YR5.3にぶる褐色	相・沙粒	晩古土器Ⅱ~III
第34図	8	4号住居跡	深鉢	-/-7.2	次輪区画、区画内に突出輪	10186/3にぶる黄褐色	砂粒・白色釉	晩古土器Ⅱ~IV
第34図	9	4号住居跡	深鉢	-/-3.2	象鼻形文に蛇行輪筋付	1.5YR5.6明褐色	相・白色釉	晩古土器Ⅱ
第34図	10	4号住居跡	深鉢	-/-4.3	輪筋文、蛇行次輪	1.5YR5.6明褐色	相・白色釉・石英	晩古土器Ⅱ~III
第34図	11	4号住居跡	深鉢	-/-7.7	輪筋文、尖底に小さな 輪筋文系、次輪で底面文と周文	5YR5.6明褐色	相・白色釉・石英	晩古土器Ⅱ~III
第34図	12	4号住居跡	深鉢	-/-5.7	次輪区画内に鋸歯文、その後蛇行次輪	5YR5.74にぶる褐色	相・沙粒・白色釉	晩古土器Ⅱ~III
第34図	13	4号住居跡	深鉢	-/-5.8	-	5YR5.6明褐色	相・沙粒・白色釉	晩古土器Ⅱ~III
第34図	14	4号住居跡	深鉢	-/-4.1	平行次輪	2.5YR2.7褐色	相・白色的裏面	晩古土器Ⅱ
第34図	15	4号住居跡	深鉢	-/-5.9	次輪区画文による次輪文	2.5YR4.1にぶる褐色	相・沙粒・石英	津邊b 3
第35図	16	4号住居跡	深鉢	-/-4.8	次輪区画文による次輪文	2.5YR4.1にぶる褐色	相・沙粒・白色釉	津邊c
第35図	17	4号住居跡	有孔洗鉢	-/-2.5	-	5YR4.4にぶる黄褐色	やや粗・白色釉	津邊b
第35図	18	4号住居跡	深鉢	-(14.8) / 5.0	輪文施文	5YR4.4にぶる黄褐色	砂粒・白色釉	五個ヶ台?

調査番号	出土地点	遺物	口径・底径・高さ	形態・施文技法	色調	胎土	施文	時期	備考
第35図	19 4号住居跡	深鉢	-/-3.6	張織物による墨書き	10704/3にぶい黒褐色	粗・白色粒・チャート	常利IV		
第35図	1 5号住居跡	長桶型	43.9/(17.3) / 10.0(6.6)	張織物による墨書き 縁部に墨書き、底面に墨書き。 工具による刻込み。(墨書き跡が不完全)	10706/3にぶい黒褐色	白色粒・赤色粒	常利I	埋設土器 実測委託	
第35図	2 5号住居跡	深鉢	14.4/5.2/21.2	口縁部に2本×1対の把手付。底盤は6巻筋の波状文。 底盤に墨書き付。断面は上部・下部でナデ痕有し。	57095/8黒褐色	粗・砂粒・赤色粒	常利I	埋設土器 実測委託	
第35図	3 5号住居跡	深鉢	24.0/9.0/21.3	底盤に把手付。底盤付近に把手、断面に把手付施す。	7.5YR5.2-5.5/1褐色	砂粒・白色粒	常利II		
第35図	4 5号住居跡	多角小鉢	11.1/6.2/20.0	底盤部に把手付。土台付近に把手、底盤に把手付施す。	2.5YR4.4-5.1赤褐色	粗・砂粒・白色粒・石英	常利II		
第35図	5 5号住居跡	条縫小鉢	-6.6/6.16.0	底盤部に把手付。土台付近に把手、底盤に把手付施す。	3.5YR6.1-6.5/1褐色	粗・白色粒・石英・雲母	常利II	内面コゲあり	
第35図	6 5号住居跡	深鉢	-9.0/9.3.4	内面に墨書き調整。	3.5YR6.1-6.5/1褐色	粗・石英・黑色粒	常利I		
第36図	7 5号住居跡	深鉢	36.0/11.0/19.1	内面に墨書き調整、内面ミガキなし。	7.5YR6.4-6.5/1褐色	白色多色	常利I		
第36図	8 5号住居跡	深鉢	35.2/16.8	内面に墨書き調整。	7.5YR6.4-6.5/1褐色	白色多色	常利I		
第36図	9 5号住居跡	圓筒耳鉢	(31.2)/-19.3	把手手はX字状とはならない。	7.5YR6.4-6.5/1褐色	粗・砂粒・白色粒・赤色粒	常利II		
第36図	10 5号住居跡	圓筒耳鉢	(34.2)/-20.4	柱状の柄子付。把手手はX字状とはならない。	10707/4にぶい黒褐色	やや粗・白色粒・金雲母	常利II	内外共に焼付焼	
第36図	11 5号住居跡	浅鉢	(38.4)/-17.4	縁部による墨書き。	10702/2黒褐色	粗・白色粒・石英	常利II		
第36図	12 5号住居跡	深鉢	(22.1)/-9.0	土台付近に墨書き。	10704/4にぶい黒褐色	やや粗・白色粒・赤色粒	常利I	内外共に焼付焼	
第36図	13 5号住居跡	深鉢(小要)	(14.0)/-5.4	内面に墨書き良好。	57094/3にぶい黒褐色	粗・白色粒・赤色粒	常利I		
第36図	14 5号住居跡	深鉢	-/-6.8	つるぎ吸水系、柄部墨書きを地文としたもの。	10707/3にぶい黒褐色	粗・砂粒	常利II		
第36図	15 5号住居跡	深鉢	-/-6.3	柄部墨書きによる施文。	57094/1黒褐色	粗・白色粒	常利I		
第36図	16 5号住居跡	深鉢	-/-6.4	口縁部に柄部の墨書き。	57095/3にぶい黒褐色	粗・白色粒	常利I		
第36図	17 5号住居跡	深鉢	-/-6.9	三本抜きによる墨書き。	57095/6黒褐色	粗・白色粒	常利I		
第36図	18 5号住居跡	深鉢	-/-6.9	柄部墨書きによる区画と手足付施す。	7.5YR6.4-6.5/1褐色	粗・白色粒・雲母	井戸尻~常利I		
第36図	19 5号住居跡	鉢	-/-4.3	縁部墨書き。	2.5YD/2黒褐色	粗・白色粒・雲母	井戸尻~常利I		
第36図	20 5号住居跡	把手手付土器の一部	-/-4.5	水惚手付土器の一部が、棒状工具による穴開け。	10703/2黒褐色	粗・白色粒・赤色粒	井戸尻~常利I		
第37図	21 5号住居跡	深鉢	-/-6.0	縁部墨書き付。	10703/4にぶい黒褐色	粗・砂粒・白色粒	井戸尻		
第37図	22 5号住居跡	深鉢	-/-5.5	底盤は横位断面内に土被状施設、断面は横位施設。	57097/4にぶい黒褐色	粗・砂粒・赤色粒	常利I		
第37図	23 5号住居跡	深鉢	-/-5.6	底盤は横位断面内に土被状施設、断面は横位施設。	10707/4にぶい黒褐色	粗・砂粒	常利I		
第37図	24 5号住居跡	深鉢	-/-4.7	棒状工具による次回区画、区画内側に	7.5YR6.1-6.5/1褐色	粗・白色粒・金雲母	常利I		
第37図	25 5号住居跡	深鉢	-/-6.1	縁部墨書き付後、底盤付近に墨書き。	10708/4にぶい黒褐色	粗・白色粒・赤色粒	井戸尻		
第37図	26 5号住居跡	深鉢	-/-5.4	底盤付近に墨書き。	7.5YR6.1-6.5/1褐色	粗・砂粒・白色粒	井戸尻		
第37図	27 5号住居跡	深鉢	-/-5.5	縁部、縫合による柄子。	2.5Y4.3オーフ褐色	粗・白色粒	常利I		
第37図	28 5号住居跡	深鉢	-/-4.6	縫合などをもつ一本棒状の墨書き。	10706/4にぶい黒褐色	粗・白色粒	井戸尻		
第37図	29 5号住居跡	深鉢	-/-5.0	-	10706/4にぶい黒褐色	粗・白色粒・石英	常利II		
第37図	30 5号住居跡	小鉢	-/-5.5	縫合墨書きによる墨書き文、縫文地文	10706/3にぶい黒褐色	粗・白色粒・白色	常利II		
第37図	31 5号住居跡	小鉢	-/-5.7	-	10706/3にぶい黒褐色	粗・白色粒・白色	常利II	内面こげあり	

箇所番号	圖面番号	出土地点	器種	口径・底径・高さ	断形・施文技法	色調	胎土	陶器	備考
第37図	32	5号住居跡	深鉢	-/-17.6 / -2.7	-	5795.8 明褐色	白地白	白地白	常利
第37図	33	5号住居跡	深鉢	-/8.5 / 5	網目織文あり	10182.1 黒褐色	白地白・石英	白地白	常利
第37図	34	5号住居跡	深鉢	-/-4.6	縄文地文に半軸竹管目による次綴	5795.4にぶる赤褐色	白地白・金富母	白地白	常利b
第37図	35	5号住居跡	深鉢	-/-6.5	縄文地文	5795.4にぶる赤褐色	白地白・石英	白地白	常利b
第37図	36	5号住居跡	深鉢	-/-2.9	口縁部刷毛、口縁部織文	2.74/1 黃褐色	白地白・石英	白地白	常利b
第37図	37	5号住居跡	深鉢	-/-4.6	当軸部管目による区画文、縄文地文	10185.3にぶる黄褐色	白地白・白色粒	五領ヶ台?	
第37図	38	5号住居跡	深鉢	-/-3.5	脛部もつ浮彫	7.373.6 黑褐色	白地白・金富母	白地白	常利?
第37図	39	5号住居跡	深鉢	-/-2.5	縄文地文に集合次綴	5794.6 紅褐色	白地白・鈍石粒	白地白	常利?
第37図	40	5号住居跡上層	深鉢	-/-4.4	縄文地文	5793.1 黑褐色	白地白・黑富母多い	白地白	常利b
第37図	41	5号住居跡上層	深鉢	-/-6.4	割裂による刷毛	10184.4 棕褐色	白・砂粒	白色粒	常利b
第37図	42	5号住居跡	深鉢	-/-4.2	縄文地文に半軸竹管目による次綴	5795.4にぶる赤褐色	白・砂粒	金富母	常利b
第37図	43	5号住居跡	深鉢	-/-4.4	次区画間に半軸竹管目による次綴	10185.4にぶる黄褐色	白・砂粒	金富母	井戸原
第37図	44	5号住居跡	深鉢	-/-4.1	押抜きによる刷毛	7.376.6 棕褐色	白・白色粒	井戸原	
第38図	1	6号住居跡	深鉢	(10.6) / -7.0	つぶれ文・素土器・口縁部刷毛文区画内には横山	10187.3にぶる黄褐色	やや粗・砂粒	白色粒	常利IV
第38図	2	6号住居跡	有孔瓦質土器	(10.6) / -9.0	の各部、縄彫は平行線状に斜め文	7.376.6 黑褐色	粗・砂粒	金富母	常利
第38図	3	6号住居跡	深鉢	-/-3.3	口縁部斜行条縫に際して浮彫文	7.373.3 黑褐色	粗・白色粒	金富母	常利IV
第38図	4	6号住居跡	深鉢	-/-3.0	つなぎ縫文、区画内斜縫	5794.6 黑褐色	砂粒	白色粒	常利b
第38図	5	6号住居跡上層	深鉢	-/-5.0	肥厚斜口縫、円形凹部、開底端	10185.4にぶる黄褐色	砂粒	白色粒	常利IV
第38図	6	6号住居跡	深鉢	-/-4.2	肥厚斜口縫	10184.3にぶる黄褐色	粗	白色粒	常利IV
第38図	7	6号住居跡	深鉢	-/-6.6	蛇形文様と斜め文	10185.4にぶる黄褐色	粗・白石丸	石英・金富母	常利IV
第38図	8	6号住居跡手前	深鉢	-/-4.5	唐草文系土器のくびれ部、腰部斜片による区	10185.4にぶる黄褐色	粗・白色粒	金富母	唐草文3
第38図	9	6号住居跡上層	深鉢	-/-5.2	腰部斜片による区画、区画内斜縫	10184.3にぶる黄褐色	粗・砂粒	白色粒・金富母	常利
第38図	10	6号住居跡	深鉢	-/-6.2	縄文地文	5794.4 棕褐色	粗・砂粒	白色粒	常利IV
第38図	11	6号住居跡	深鉢	-/-4.3	輪形斜口縫	5794.4 棕褐色	粗・砂粒	白色粒	常利IV
第38図	12	6号住居跡手前	深鉢	-/-4.6	腰部斜片縫	10186.4にぶる黄褐色	粗・砂粒	白色粒	常利IV
第38図	13	6号住居跡	両耳鉢か	-/-3.9	腰部斜片縫、刻みをもつ斬新的感文、区画内	7.3787.4にぶる赤褐色	粗・白色粒	白色粒	常利III~IV
第38図	14	6号住居跡	束縫小要	-/-3.1	区画内	7.3782.2 黑褐色	粗・砂粒	金富母	常利I
第38図	15	6号住居跡上層	深鉢 (周耳鉢か)	-/-11.0	腰部斜片縫による文様	10187.4にぶる黄褐色	やや粗・砂粒	白色粒	常利IV
第39図	16	6号住居跡	深鉢	-/-15.0 / 5.9	-	7.3784.4 棕褐色	粗・砂粒	白色粒・金富母	常利
第39図	17	6号住居跡	舟形土器	-/-1.9	穴形をもように刻み刷毛あり	2.74/6 明褐色	粗・白色粒	金富母	常利b
第39図	18	6号住居跡	深鉢	-/-4.9	複合文様	5795.4にぶる赤褐色	粗・砂粒・小團・白色・黒色	白地白	常利b
第39図	19	6号住居跡	深鉢	-/-4.1	縄文地文に刻み浮彫文	7.3784.4 棕褐色	砂粒	白色・金富母	常利b
第39図	20	6号住居跡	深鉢	-/-4.0	当軸部斜片縫	5795.4にぶる赤褐色	粗・砂粒	黑富母	常利b
第39図	21	6号住居跡	深鉢	-/-2.8	次区画間にボターン状突起付	2.7394.4にぶる赤褐色	粗・白色粒	金富母	常利a
第39図	22	6号住居跡	深鉢	-/-3.5	次区画間に半軸竹管目による文様	10184.4 紅褐色	粗・石英	金富母	五領ヶ台?
第39図	23	6号住居跡	深鉢	-/-3.2	縄文地文、口縁部斜片縫	10184.4 紅褐色	粗・白色粒	チャート・金富母	常利II
第39図	24	6号住居跡	深鉢	-/-4.2	棒工具による区画形	10184.4 棕褐色	粗・砂粒	白色粒	常利V?
第39図	25	6号住居跡	深鉢	-/-5.3	次区画による区画形	10188.3 黑褐色	粗・砂粒	白色粒	常利II
第39図	1	7号住居跡	深鉢	19.6 ~ 21.0 / -15.5	下縁部に引張り窓	5795.6 明褐色	白色粒・砂粒・金富母	常利	埋設土器1
第39図	2	7号住居跡	深鉢	-/-23.4	下縁部内側縫	7.3785.6 明褐色	白色粒・砂粒・金富母	常利II	埋設土器2

頭部番号	図内 番号	出土地点	器種	口径・底径・高さ	色調	胎土	輪郭	備考
第39図	3	7号住居跡	深鉢	-/7.3/12.1 (30.4)/-10.3	褐褐色系の地文、薄灰工質による3条の底線 墨書き文・4脚位	7.5YR5.6 明褐色	粗・砂粒・白色粘・金雲母	曾利Ⅱ～Ⅲ 伊付土器
第39図	4	7号住居跡	深鉢	-/-/5.0	4脚位のX字状把手、脇部降唇文に沿つて文 字書き文、次縁部文、竹刷状工具による底 文を有する。	10YR5.4/にぶい黃褐色	精・白色粘・黑色粘	曾利Ⅱ～Ⅲ 美濃土器から間接的に出土
第39図	5	7号住居跡	深鉢	-/-/50.2	口縁部に6脚位の突起がある。底部にRUR回転文 (施文方向が逆らつていている)、縁部降唇文による底 文を有する。底部に4脚位の墨書き文、底唇部に 代わり。	7.5YR6.4/にぶい黃褐色	粗・砂粒・白色粘・石英	曾利Ⅱ JAL土器から間接的に出土
第39図	6	7号住居跡	深鉢	41.3/-42.0/11.3 ~11.7/(42.6)	口縁部に6脚位の突起がある。底部にRUR回転文 (施文方向が逆らつていている)、縁部降唇文による底 文を有する。底部に4脚位の墨書き文、底唇部に 代わり。	10YR5.3/にぶい黃褐色	砂粒・白色粘・黑色粘・赤 色粘	曾利Ⅱ 美濃土器
第39図	7	7号住居跡	深鉢	36.3/-36.7	口内ナデ彫形	7.5YR5.6 明赤褐色	粗・砂粒・白色粘・赤色粘 細・白色粘・黑石粘・金雲母	曾利Ⅱ 外面ススあり 保面上り出土
第40図	8	7号住居跡	深鉢	47.4/-9.4	輪郭彫刻地文	7.5YR6.6 暗褐色	精・砂粒・白色粘・金雲母	曾利Ⅲ 保面上り
第40図	9	7号住居跡	深鉢	(20.6)/-15.1	輪郭彫刻地文	10YR6.4/にぶい黃褐色	精・砂粒・黑色粘	曾利Ⅱ～Ⅲ 保面上り
第40図	10	7号住居跡	深鉢	(31.0)/-10.8	輪郭彫刻による3条の底線、脇部降唇文	10YR6.2 黑褐色	精・砂粒・白色粘	曾利Ⅱ 保面上り
第40図	11	7号住居跡	深鉢	(24.2)/-9.0	腰部墨書き文、底唇部による墨書き文、斜 面部墨書き文、底部墨書き文	5YR6.4/にぶい黃褐色	精・砂粒・白色粘	曾利Ⅰ～Ⅱ 保面上り
第40図	12	7号住居跡上層	深鉢	-/-6.4	-	5YR6.3/にぶい黃褐色	精・黑色粘	曾利Ⅰ～Ⅱ 保面上り
第40図	13	7号住居跡上層	深鉢	-/-5.9	外輪部文	5YR6.3/にぶい黃褐色	精・砂粒・白色粘	曾利Ⅰ～Ⅱ 保面上り
第40図	14	7号住居跡上層	深鉢	-/-5.9	口縁部に6脚位の突起がある。輪郭彫刻地文	7.5YR7.3/にぶい黃褐色	精・砂粒・白色粘・金雲母	曾利Ⅱ 保面上り
第40図	15	7号住居跡上層	深鉢	-/-4.8	口縁部に6脚位の突起がある。輪郭彫刻地文	10YR6.3/にぶい黃褐色	精・砂粒・白色粘	曾利Ⅱ 保面上り
第40図	16	7号住居跡	深鉢	-/-16.3	腰部墨書き文による次縁部文、底唇部による墨書き文	5YR6.6 暗褐色	精・砂粒・白色粘	曾利Ⅱ 保面上り
第40図	17	7号住居跡上層	深鉢	-/-6.8	内縁部には次縁部によく施された墨書き文を施す	5YR5.6 暗褐色	精・砂粒・白色粘・黑色粘	曾利Ⅱ 保面上り
第40図	18	7号住居跡上層	深鉢	(38.0)/-9.7	墨書き文	7.YR4.2 暗褐色	精・砂粒・白色粘・赤色粘	曾利Ⅱ～Ⅲ 保面上り
第40図	19	7号住居跡	深鉢	-/-5.8	腰部墨書き文	7.5YR7.3/にぶい黃褐色	精・砂粒・白色粘・金雲母	曾利Ⅳ 保面上り
第40図	20	7号住居跡	深鉢	-/-6.0	縁部墨書き文、S字形把手付	7.5YR6.3/にぶい黃褐色	精・砂粒・黑色粘	曾利Ⅳ 保面上り
第40図	21	7号住居跡	深鉢	-/-7.2	墨書き文、口縁部外面に斜行墨書き	5YR4.2 黑褐色	精・白色粘	曾利Ⅱ 保面上り
第40図	22	7号住居跡	深鉢 (小要)	-/-13.0	一つなぎ墨書き文系、輪郭彫刻地文	2.5YR6.6 暗褐色	精・白色粘	曾利Ⅲ 保面上り
第41図	23	7号住居跡上層	深鉢	-/-5.5	腰部墨書き	7.5YR5.4/にぶい黃褐色	精・白色粘・金雲母	曾利Ⅱ 井戸原
第41図	24	7号住居跡	深鉢	-/-4.3	腰部墨書き	7.5YR3.3 暗褐色	精・白色粘・赤色粘	曾利Ⅱ 井戸原
第41図	25	7号住居跡上層	深鉢	-/-5.0	腰部墨書き	7.5YR4.6 暗褐色	精・白色粘・黑色粘	曾利Ⅲ 井戸原
第41図	26	7号住居跡上層	深鉢	-/-3.5	墨書き文口縁か	5YR6.6 暗褐色	精・白色粘・金雲母	曾利Ⅱ 井戸原
第41図	27	7号住居跡	深鉢	-/-5.9	腰部墨書き文。次縁部による墨書き文、円周部に沿つて斜 面部墨書き文	7.YR4.6 暗褐色	精・砂粒・白色粘・赤色粘	曾利Ⅱ 井戸原
第41図	28	7号住居跡	深鉢	(44.0)/-3.0	小孔の次縁部による墨書き文	7.YR3.7/3.にぶい黃褐色	精・白色粘・赤色粘	井戸原
第41図	29	7号住居跡	深鉢	-/-5.6	腰部墨書き文の他墨書き文、輪郭彫刻文	7.5YR7.3/にぶい黃褐色	精・白色粘・黑色粘	曾利Ⅱ 井戸原
第41図	30	7号住居跡	深鉢	-/-2.7	腰部墨書き文が崩壊へ伸びる	7.5YR7.6 暗褐色	精・白色粘・金雲母	曾利Ⅳ 井戸原
第41図	31	7号住居跡	深鉢	-/-24.2	腰部墨書きによる区画、(済文文など) 区画内 縁部墨書き文、腰書き文	7.5YR7.4/にぶい黃褐色	精・白色粘・金雲母	曾利Ⅲ 井戸原
第41図	32	7号住居跡	深鉢	-/-19.0	輪郭彫刻による墨書き文、輪郭彫刻の懸垂文、 斜面部墨書き文	5YR4.6 暗褐色	精・白色粘・黑色粘・赤色 粘	曾利Ⅱ 井戸原
第41図	33	7号住居跡上層	深鉢	-/-6.5	腰部墨書き文	10YR6.3/にぶい黃褐色	砂粒・白色粘・金雲母	曾利Ⅱ 井戸原
第41図	34	7号住居跡	深鉢	-/-9.5	半輪郭による墨書き文、区画内長めの窓孔 文	7.5YR6.4/にぶい黃褐色	精・白色粘・金雲母	曾利Ⅱ 井戸原
第41図	35	7号住居跡	深鉢	-/-8.9	輪郭彫刻、列点文	2.5YR4.4/にぶい黃褐色	粗・砂粒・黑色粘	曾利Ⅱ 井戸原

頭部番号	団内 番号	出土地点	器種	口径・底径・高さ	色調	地質	時期	参考
第41図	36	7号住居跡上層	深鉢	-/-9.5	黒褐色・漆面無し。陰帯に上る区画と油墨文、区 内側文	10785/3にぶい黃褐色	相・白色粒・金雲母	常利Ⅱ～Ⅲ
第41図	37	7号住居跡	深鉢	-/-11.7	把手手形・漆面無し器。阴刻捺文指揮棒	7.3YR6.4/-5.5褐色	砂粒・白色粒・金雲母	常利Ⅱ
第42図	38	7号住居跡上層	深鉢把手付土 器	-/-13.2	漆文無し。阴刻捺文。漆狀工具による墨跡	7.3YR6.4/-5.5褐色	相・白色粒・黑色 料	常利Ⅰ
第42図	39	7号住居跡上層	深鉢	-/-5.9	陽刻捺による区画。漆狀工具の刺突文、阴刻捺 文	10784/2 反黃褐色	相・白色粒	常利Ⅱ
第42図	40	7号住居跡上層	深鉢	-/-5.8	阴刻捺による区画。漆狀工具の刺突文、阴刻捺 文	7.3YR2/2 黃褐色	相・白色粒 金雲母	常利Ⅱ～Ⅲ
第42図	41	7号住居跡	深鉢	-/-10.2	阴刻捺による区画文	7.3YR4/-5.5褐色	相・白色粒	常利
第42図	42	7号住居跡	深鉢	-/-4.5	把手手形による油墨文	10785/4/-5.5褐色	相・赤色粒・金雲母	常利Ⅱ～Ⅲ
第42図	43	7号住居跡	深鉢	-/-7.0	漆文捺文。把手形捺文。把手形捺文	10785/4/-5.5褐色	相・沙粒・白色粒 金雲母	常利Ⅱ
第42図	44	7号住居跡	深鉢	-/-4.6	漆狀工具による墨跡。漆捺条縞	10785/4にぶい黃褐色	相・沙粒・白色粒	常利Ⅲ
第42図	45	7号住居跡上層	深鉢	-/-5.2	把手文・漆文。把手文による墨跡	2.5YR6.6 黄褐色	相・沙粒・白色粒	常利Ⅱ
第42図	46	7号住居跡	深鉢	-/-7.0	把手文による墨跡	5YR6.6 深赤色	相・白色粒 金雲母	常利Ⅲ～Ⅶ
第42図	47	7号住居跡上層	深鉢	-/-4.7	把手文・區画文。区内側文による墨跡	7.3YR6.6 褐色	相・白色粒	常利Ⅴ
第42図	48	7号住居跡	深鉢	-/-5.1	漆狀工具・器皿・阴刻捺文による墨跡	7.3YR4/3 棕色	相・沙粒・赤色粒	常利Ⅱ
第42図	49	7号住居跡	X字把手付鉢	-/-7.7	X字把手による区画文	5YR6.4にぶい褐色	相・沙粒・白色粒・石英・ 金雲母	常利Ⅱ
第42図	50	7号住居跡	深鉢	-/-7.0	漆狀工具による区画文	10785/6 黃褐色	相・沙粒・白色粒	常利Ⅱ～Ⅲ
第42図	51	7号住居跡	X字把手付鉢	-/-7.5	把手手形に次第文捺。阴刻捺点文	5YR7.3にぶい黃褐色	相・白色粒・赤色粒	常利Ⅱ
第42図	52	7号住居跡	X字把手	-/-5.7	把手手形中央に把手捺文	10786/2 反黃褐色	相・白色粒・石英・金雲母	常利Ⅱ
第42図	53	7号住居跡	X字把手	-/-5.4	把手手形で文捺	7.3YR6.8 深褐色	相・沙粒・黑色粒	常利Ⅱ
第42図	54	7号住居跡	深鉢	-/-10.8	漆文捺文	1.5YR6.3/-5.5褐色	相・白色粒	常利Ⅱ
第42図	55	7号住居跡	深鉢	-/-7.4	漆狀工具捺文による墨跡	2.5YR4/4 ナリーブル	相・白色粒・金雲母	常利Ⅱ
第42図	56	7号住居跡	深鉢	-/-7.0	把手文・漆文	10785/2 反黃褐色	白色粒・黑色粒・赤色粒	常利Ⅱ
第42図	57	7号住居跡上層	深鉢	-/-7.0	把手文・漆文	5YR6.6 深褐色	相・沙粒・白色粒・赤色粒	常利Ⅴ
第43図	58	7号住居跡上層	深鉢	-/-10.8/4.9	把手手形無文	10785/4にぶい黃褐色	相・白色粒・赤色粒	常利
第43図	59	7号住居跡	深鉢	-/-4.5	漆文捺文	1.5YR4/2 黄褐色	相・沙粒	漆繪b
第43図	60	7号住居跡上層	深鉢	-/-5.4	把手文捺文。竹管にぶい墨跡	5YR6.3にぶい黃褐色	相・白色粒・沙粒	漆繪b
第43図	61	7号住居跡上層	深鉢	-/-5.6	把手文捺文。竹管にぶい墨跡	5YR6.3にぶい黃褐色	相・白色粒・沙粒	漆繪a
第43図	62	7号住居跡	深鉢	-/-3.2	-	7.3YR3/2 黄褐色	相・沙粒	漆繪
第43図	63	7号住居跡上層	深鉢	-/-13.0	-	7.3YR3/4 黄褐色	相・沙粒	漆繪
第43図	64	7号住居跡	深鉢	-/-13.0	-	10783/1 黑褐色	相・沙粒	漆繪
第43図	65	7号住居跡上層	深鉢	-/-4.7	口部割裂点文捺。阴刻捺点文	5YR6.6 深褐色	相・白色粒	常利Ⅱ
第43図	66	7号住居跡上層	深鉢	-/-6.2	漆文捺文。区内側文	2.7YR4/1 黄褐色	相・白色粒・金雲母	常利V
第43図	67	7号住居跡	深鉢	-/-3.5	把手捺文。把手捺文	7.3YR7.8 深褐色	相・沙粒・白色粒	漆繪b
第43図	68	7号住居跡	深鉢	-/-3.1	把手捺文	5YR4/4 黄褐色	相・沙粒	漆繪b
第43図	69	7号住居跡	深鉢	-/-3.2	把手捺文	7.3YR2/1 黑褐色	相・白色粒・黑雲母	漆繪
第43図	70	7号住居跡	深鉢	-/-13.0	-	5YR6.6 深褐色	相・沙粒・白色粒・金雲母	常利Ⅴ
第43図	71	7号住居跡	深鉢	-/-21.1	把手手形捺文	7.3YR6.6 深褐色	相・白色粒・石英	埋設土器
第43図	72	9号住居跡	深鉢	-/-7.2	把手手形捺文	10787/3にぶい黃褐色	小石・黑雲母・白色粒	常利Ⅴ
第43図	73	9号住居跡	深鉢	-/-12.6/16.4	把手手形捺文	5YR6.4にぶい黃褐色	相・白色粒・赤色粒	常利Ⅴ
第43図	74	9号住居跡	深鉢	-/-21.1	把手手形捺文	5YR6.4にぶい黃褐色	相・白色粒・赤色粒	常利Ⅴ
第43図	75	9号住居跡	深鉢	-/-7.4	把手手形捺文	5YR6.4にぶい黃褐色	相・白色粒・赤色粒	常利Ⅴ
第43図	76	9号住居跡	深鉢	-/-5.3	把手手形捺文	5YR6.4にぶい黃褐色	相・白色粒	常利Ⅴ

頭面番号	図内 番号	出発地点	器種	口径・底径・高さ	基準	色調	脂質	輪郭	備考
第44図	1	10号住居跡	深鉢	(30.1) / (9.8) / (22)	口輪縁有孔、脚部(足跡)裏面又に半圓形切妻。 工具による到着と生糸組の回り洗練を施す。	7.5YR4.3褐色	砂粒・白色粒	繊維	施文法
第44図	2	10号住居跡	深鉢	-/-6.3	脚部のある深鉢	5YR4.3にぶい赤褐色	砂粒・白色粒・赤色粒	繊維	
第44図	3	10号住居跡	深鉢	-/-6.5	口輪縁有孔、脚部あり	10YR2.7黒褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	4	10号住居跡	深鉢	-/-6.5	口輪縁有孔、脚部あり	10YR3.0暗褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	5	10号住居跡	深鉢	-/-3.5	脚部有孔、深鉢文	5YR3.0明褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	6	10号住居跡	深鉢	-/-4.3	口輪縁有孔、深鉢文	5YR3.0暗褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	7	10号住居跡	深鉢	-/-5.4	口輪縁有孔工具で刷み出の輪郭。脚部連続状	10YR3.0暗褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	8	10号住居跡	鉢類	-/-5.0	深鉢爪筋文による本格的文	10YR3.0暗褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	9	10号住居跡	深鉢	-/-4.6	縦筋爪筋文。深鉢文	10YR4.2反褐色	砂粒・金属性	繊維	
第44図	10	10号住居跡	深鉢	-/-3.4	縦筋爪筋文。深鉢文にリリ手マークを施す	10YR3.0暗褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	11	10号住居跡	深鉢	-/-3.4	半輪縁有孔旋紋による横筋	7.5YR4.3褐色	砂粒・白色粒・金属性	繊維	
第44図	12	10号住居跡	深鉢	-/-5.0	縦筋爪筋文。深鉢文次第に波状の文様か	7.5YR4.3褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	13	10号住居跡	深鉢	-/-3.7	縦筋爪筋文。深鉢文上に刷毛文	10YR3.0暗褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	14	10号住居跡	深鉢	-/-6.0	縦筋爪筋文。深鉢文	10YR2.1黒色	砂粒・白色粒	繊維	
第44図	15	10号住居跡	深鉢	-/-8.0	浮遊文区画、区画上に刷毛文、下部は輪文	10YR5.3にぶい黄褐色	砂粒・白色粒	赤彩あり	
第44図	16	10号住居跡	深鉢	-/-3.2	-	5YR4.2灰褐色	金属性・白色粒	繊維	
第44図	17	10号住居跡	深鉢	-/-1.0 / 2.3	-	7.5YR4.3褐色	白色粒	繊維	
第44図	18	10号住居跡	深鉢	-/-11.2 / 1.6	-	7.5YR5.6明褐色	白色粒	繊維	
第44図	19	10号住居跡	深鉢	-/-6.6	-	10YR6.1にぶい黄褐色	白色粒	繊維	
第45図	1	11号住居跡	水槽土器把手	25.3 ~ 26.3 / -	脚部削り切妻による本格的文	10YR5.4にぶい黄褐色	砂粒・白色粒	常利 I	実測要註
第45図	2	11号住居跡	壺底小要器	(14.4) / -/11.4	口輪縁有孔、脚部削り切妻による本格的文	2.5YR5.6明褐色	砂粒・白色粒・黑色粒	常利 I	
第45図	3	11号住居跡上層	深鉢	-/-11.6	口輪縁有孔に次第によく文様	5YR4.4にぶい赤褐色	白色粒・石英・赤色	井戸尻	断面に摩耗面あり。二 次剥出
第45図	4	11号住居跡上層	深鉢	-/-8.5	脚部削り切妻	10YR3.6黄褐色	白色粒・黑色粒	常利 I	
第45図	5	11号住居跡	水槽土器把手	-/-8.3	棒状工具による次級	10YR7.6明褐色	白色粒	井戸尻	
第45図	6	11号住居跡	深鉢	-/-10.1	余分的文、脚部把手	7.5YR4.3褐色	白色粒・白色粒	井戸尻	
第45図	7	11号住居跡	深鉢	-/-5.3	余分的文、脚部把手	7.5YR4.3褐色	白色粒・白色粒	井戸尻	
第45図	8	11号住居跡	深鉢	-/-7.6	余分的文、脚部把手	5YR5.3にぶい赤褐色	白色粒・赤色粒	井戸尻	
第45図	9	11号住居跡上層	深鉢	-/-9.0	脚部削り切妻による次級	7.5YR7.6褐色	砂粒・白色粒	井戸尻	
第45図	10	11号住居跡	X字把手	-/-9.2	脚部削り切妻による次級	10YR5.3にぶい黄褐色	砂粒・白色粒	井戸尻	
第45図	11	11号住居跡上層	深鉢	-/-3.8	脚部削り切妻による次級	10YR4.3褐色	砂粒・白色粒	井戸尻	
第45図	12	11号住居跡	深鉢	-/-5.3	脚部削り切妻による次級	10YR6.3にぶい黄褐色	砂粒・白色粒	井戸尻	
第45図	13	11号住居跡	深鉢	-/-4.6	脚部削り切妻による次級	10YR5.6明褐色	砂粒・白色粒	井戸尻	
第45図	14	11号住居跡	深鉢	-/-8.8	余分的文、脚部把手	5YR5.3にぶい赤褐色	砂粒・白色粒	井戸尻 III ~ IV	
第45図	15	11号住居跡上層	深鉢	-/-4.4	-	10YR2.2黒褐色	砂粒・白色粒	五ヶ台	
第45図	16	11号住居跡	深鉢	-/-2.9	-	5YR5.6明褐色	砂粒・白色粒・金属性	五ヶ台	
第45図	17	11号住居跡	深鉢	-/-3.8	繊維三次織	7.5YR3.2暗褐色	砂粒・白色粒・赤色粒	繊維	
第45図	18	11号住居跡上層	深鉢	-/-3.4	次級地文	10YR4.2にぶい黄褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第45図	19	11号住居跡	深鉢	-/-4.5	次級地文	10YR4.2灰褐色	砂粒・白色粒	繊維	
第45図	20	11号住居跡	深鉢	-/-5.2	口輪づなぎ弘文、断続斜形文	7.5YR6.1にぶい褐色	砂粒・赤色粒	常利 II	

頭部番号	図内 番号	出発地点	器種	口径・底径・高さ	色調	鉢形	備考
第46図	1	12号生垣炉	深鉢	16.5/8.6/20.1	黒葉文墨器。把手が片付く。頭部は輪郭文と文様として、輪郭に区画される。輪郭は波打つ手形の陰陽文。	7.5YR5/6明黄色	白・白色粒・金露母 曾利Ⅲ
第46図	2	12号生垣炉	深鉢	-/9.4/4.5	絞込文。实行頭の垂直文	10YR5/3にぶる黃褐色	白・白色粒・赤色粒 曾利Ⅱ
第46図	3	12号生垣炉	X字把手鉢	-/-8.3	頭部斜交を施す鉢の垂直文。次脚位に垂直文	10YR7/4にぶる黃褐色	白・白色粒・砂粒 曾利Ⅱ
第46図	4	12号生垣炉	深鉢	-/-8.5	輪郭文口縁。頭部斜交横書き	7.5YR5/6明黄色	ほぼ均一・白色粒・赤色粒 曾利Ⅱ
第47図	5	12号生垣炉	深鉢	-/-4.0	輪行文口縁	10YR6/4にぶる黃褐色	ほぼ均一・白色粒・赤色粒 曾利Ⅱ～Ⅲ
第47図	6	12号生垣炉	鉢	-/-6.3	円筒面側に彎き 垂直文。实行頭の垂直文	10YR1/褐灰色	白・白色粒・赤色粒 曾利Ⅱ
第47図	7	12号生垣炉	深鉢	-/-5.8	垂直文。頭部把手を垂下	5YR4/3にぶる赤褐色	ほぼ均一 曾利Ⅰ
第47図	8	12号生垣炉	深鉢	-/-6.3	輪文文頭。頭部把手付	10YR4/6褐色	白・砂粒・白色粒 曾利Ⅱ
第47図	9	12号生垣炉	深鉢	-/-3.8	輪文文頭。沈鉢文様	10YR2/1黒褐色	白・砂粒・白色粒 曾利Ⅱ
第47図	10	12号生垣炉	深鉢	-/-5.3	浅鉢文頭による鉢文	1.5YR5/6明黄色	ほぼ均一・白色粒・白色粒 曾利Ⅲ
第47図	11	12号生垣炉	深鉢	-/-10.0	輪文文頭文	10YR6/4にぶる黃褐色	白・砂粒・白色粒 曾利Ⅳ
第47図	12	12号生垣炉	深鉢	-/-5.5	輪文文頭。实行段階	5YR6/4にぶる褐色	白・白色粒・石英・金露母 曾利Ⅱ
第47図	13	12号生垣炉	深鉢	-/-8.0	-	5YR6/4にぶる黃褐色	白・白色粒・石英・金露母 曾利Ⅱ
第47図	14	12号生垣炉	鉢	-/9.4/2.7	薄い質感	2.5YR6/4にぶる黃褐色	白・白色粒・石英 曾利Ⅱ
第47図	15	12号生垣炉	深鉢	-/-3.0	輪文文頭。口縁部斜行文點付	2.5YR5/6明黄色	やや白・砂粒 曾利Ⅱ
第47図	16	12号生垣炉	深鉢	-/-3.3	輪文文頭文の集合	5YR4/4にぶる黃褐色	白・白色粒・露母 曾利Ⅱ
第47図	1	13号生垣炉	深鉢	31.8～33.5/~/ (28.5)	口縁部に半軸竹管状文による6単位の垂直文 6単位の輪位垂直文。頭部に木本の垂直文	10YR4/2灰黃褐色	白・砂粒・白色粒 曾利Ⅱ
第47図	2	13号生垣炉	深鉢	-/-16.3	頭部斜交。底部付近は6輪位文か。内面の垂直文 頭部	10YR3/3にぶる黃褐色	ほぼ均一 外面部筋スス付 曾利Ⅱ～Ⅲ
第47図	3	13号生垣炉	深鉢	-/-3.9	口縁部から内面にかけて半軸竹管状文による 輪位垂直文。頭部の垂直文	10YR5/4にぶる黃褐色	ほぼ均一・白色粒・露母少 曾利Ⅲ
第47図	4	13号生垣炉	深鉢	-/-5.2	輪文文頭。輪位文の2倍以上。頭部の 輪文文頭。輪位文の2倍以上。頭部の	7.5YR5/4にぶる褐色	ほぼ均一 曾利Ⅱ
第47図	5	13号生垣炉	深鉢	-/-4.2	垂直文の中心に蛇形状輪文による恐れ文	7.5YR6/3にぶる褐色	ほぼ均一 曾利Ⅱ
第47図	6	13号生垣炉	鉢	-/-5.1	輪文文頭。輪位回転文による恐れ文 輪位回転文による恐れ文	7.5YR6/4にぶる褐色	ほぼ均一・砂粒 曾利Ⅱ
第47図	7	13号生垣炉	鉢	-/-4.7	頭部斜交の列点文	10YR6/6明黄色	砂粒・白色粒・赤色粒 曾利Ⅱ
第48図	1	14号生垣炉	深鉢	21.2/-22.2	加利3号系枝目頭。頭文を施文後に頭部5単位 位の輪位垂直文。頭部垂直文	10YR6/6明黄色	やや白・からら3cmのレ キ含む・金露母 曾利Ⅲ
第48図	2	14号生垣炉	深鉢	-/-10.5	-	1.5YR7/4にぶる褐色	白・砂粒・露母 曾利Ⅳ
第48図	3	14号生垣炉	深鉢	-/-8.8	口縁つなぎ弦文区画面 頭部垂直文	5YR3/4暗褐色	白・砂粒・露母 曾利Ⅲ
第48図	4	14号生垣炉	深鉢	-/-6.0	-	7.YR4/2暗褐色	白・砂粒少 曾利Ⅱ
第48図	5	14号生垣炉	深鉢	-/-11.2	輪部斜交による区画(漏參か)、区画内斜 線による区画	5YR5/6明黄色	白・白色粒・石英 曾利Ⅳ
第49図	6	14号生垣炉	深鉢	-/-5.8	輪文文頭。輪位垂直文	5YR5/4にぶる褐色	白・砂粒 曾利Ⅲ～Ⅴ
第49図	7	14号生垣炉	深鉢	-/-5.7	輪位各部位文	5YR4/6褐色	白・砂粒・小レキ・金露母 曾利Ⅳ
第49図	8	14号生垣炉立会	深鉢	-/-7.7	2本乳突文器、口縁部区面内輪位垂直文、頭 部把手文	7.YR7/4にぶる褐色	白・砂粒 曾利Ⅰ
第49図	9	14号生垣炉立会	深鉢	-/-2.9	1.5cm幅単位で頭文を施文	7.5YR5/6明黄色	白・石英・砂粒 曾利Ⅰ
第49図	10	14号生垣炉立会	深鉢	-/-16.0/5.7	半圓形輪文による頭部垂直文	10YR5/4にぶる黃褐色	白・白色粒・露母 曾利Ⅱ
第49図	11	14号生垣炉立会	鉢	-/(7.8/2.7)	外面ナメ	7.5YR5/6明黄色	白・白色粒・露母 曾利Ⅱ

頭部番号	団内番号	出土地点	器種	口径・底径・器高	断面・施文技法	色調	胎土	輪郭	備考
第49図	1	1号竪穴通構	深鉢	-/(11) 20/ 1	縦文陶文に横筋集合模	7.5YR 6.0暗褐色	面・白色地・石英・黒雲母	清徳 b 3	
第49図	2	1号竪穴通構	深鉢	-/-4.8	縦文陶文・刻みのあら浮雕文	7.5YR 6.0明褐色	粗・砂粒・石英	清徳 b	
第49図	3	1号竪穴通構	深鉢	-/-2.5	-	7.5YR 6.3に赤褐色	粗・白色地・石英	清徳 b	
第49図	4	1号竪穴通構	深鉢	-/-6.7	半筋竹管による弦文	7.5YR 6.0暗褐色	粗・白色地・石英	清徳 b	
第49図	5	1号竪穴通構	深鉢	-/-5.1	内・押出し・通筋爪彫文で、三重の円文、二つの方形容文	7.5YR 6.0赤褐色	粗・白色地・金雲母	五領ヶ台Ⅱ	
第49図	6	1号竪穴通構	鉢	-/(15.0) 4/ 4	横筋集合模	10YR 4.0に赤い黄褐色	粗・白色地	常利 V ?	
第49図	1	2号竪穴通構上層	深鉢	-/-2.7	外縁・底径	5YR 4.3に赤褐色	粗・白色地・石英・黒雲母	清徳 b	
第49図	2	2号竪穴通構	有孔浅鉢	-/-5.0	-	2.5YR 8.0明るい赤褐色	粗・白色地	清徳 b	
第49図	3	2号竪穴通構	深鉢	-/-1.3	脚文	5YR 3.2に赤褐色	粗・砂粒	清徳 b	
第50図	1	3号土坑上層	深鉢	-/-6.4	八角形土文器・区面印捺付集合文	5YR 6.4に赤褐色	粗・砂粒	厚内 3	
第50図	2	5号土坑上層	深鉢	-/-3.2	横筋竹管付後に縦文陶文	10YR 3.0に赤褐色	粗・砂粒	清徳 b	
第50図	3	6号土坑	深鉢	-/-4.5	横筋竹管付後に縦文陶文	10YR 3.0に赤褐色	粗・砂粒	清徳 b	
第50図	4	6号土坑	深鉢	-/-4.5	横文陶文	10YR 4.0に赤褐色	粗・砂粒	清徳 b	
第50図	5	6号土坑	深鉢	-/-9.5	横文陶文・半筋竹管による集合次輪で区画文	10YR 4.0に赤褐色	粗・砂粒	清徳 b 3	
第50図	6	10号土坑	深鉢	-/-3.0	横文陶文・半筋竹管による集合次輪で区画文	5YR 4.4に赤褐色	粗・砂粒	清徳 b	
第50図	7	18号土坑	深鉢	-/-3.7	横文陶文・半筋竹管による集合次輪	5YR 5.6 黒褐色	粗・砂粒	清徳 b	
第50図	8	29号土坑	深鉢	-/-5.6	横文陶文に次輪	5YR 6.0暗褐色	粗・砂粒	清徳 b	
第50図	9	29号土坑	深鉢	(22.0) -/-12.8	深窓口縁・棒状工具による横位次輪	7.5YR 2.0褐色	粗・砂粒	常利 V ?	
第50図	10	30号土坑	深鉢	-/-8.8	棒状工具による横位次輪	5YR 4.2灰褐色	粗・砂粒	常利 V ?	
第50図	11	30号土坑	深鉢	-/-9.8	棒状工具による次輪	2.5YR 4.4に赤褐色	粗・砂粒	常利 V ?	
第50図	12	30号土坑	深鉢	-/-9.8	横文陶文・半筋竹管による集合次輪で区画文	5YR 4.2灰褐色	粗・砂粒	常利 V ?	
第50図	13	30号土坑	深鉢	-/-15.0	横文陶文・半筋竹管による集合次輪	5YR 4.4に赤褐色	粗・白色地	常利 V ?	
第50図	14	30号土坑	深鉢	-/-7.0	横文陶文・半筋竹管による集合次輪	5YR 4.4に赤褐色	粗・白色地	常利 V ?	
第50図	15	31号土坑	深鉢	(25.0) -/-30.0/-/-	4輪位の深窓口縁・棒状工具による横位次輪	5YR 4.4に赤褐色	白色地	常利 V ?	
				(12.0)	R.横筋竹管断文として简化化・縦文施文(二重)		白色地	常利 V ?	
第50図	16	31号土坑	深鉢(小)	15.6 -/-12.1	半筋竹管による横位次輪	5YR 3.6暗褐色	粗・白色地	常利 V ?	
第50図	17	31号土坑	深鉢	-/-3.8	半筋竹管爪形	5YR 3.3赤褐色	粗・砂粒・金雲母	常利 b 1	
第51図	18	31号土坑	深鉢	-/-4.6	通筋爪形文(2条)・口縁割れ	5YR 3.2赤褐色	粗・白色地	常利 a	
第51図	19	31号土坑	深鉢	-/-4.7	馬のあら浮雕文・済済文のモチーフか	5YR 3.4暗褐色	粗・白色地	常利 b	
第51図	20	31号土坑	深鉢	-/-5.1	浮雕文	7.5YR 4.1に赤褐色	粗・砂粒	常利 b 2	
第51図	21	31号土坑	深鉢	-/-3.4	脚文のある浮雕文	7.5YR 4.7に赤褐色	粗・砂粒	常利 b	
第51図	22	31号土坑	深鉢	-/-2.3	-	5YR 4.6暗褐色	粗・白色地	常利 b	
第51図	23	31号土坑	有孔浅鉢	-/-1.8	粗筋脚文による浮雕文	7.5YR 4.7に赤褐色	粗・砂粒	常利 b	
第51図	24	31号土坑	深鉢	-/-16.2	横筋次輪状脚文	7.5YR 4.7に赤褐色	粗・白色地	常利 b	
第51図	25	32号土坑	深鉢	-/-7.3	半筋竹管による浮雕文	7.5YR 4.7に赤褐色	粗・白色地	常利 b	
第51図	26	32号土坑	深鉢	-/-9.6	横筋脚文	7.5YR 4.6暗褐色	粗・白色地	常利 b	
第51図	27	32号土坑	深鉢	-/10.0/-/2.5	横筋脚文	5YR 4.6赤褐色	粗・白色地	常利 b	
第51図	28	32号土坑	深鉢	-/8.0/-/3.3	-	5YR 4.4に赤褐色	粗・白色地	常利 b	
第51図	29	32号土坑	深鉢	-/-13.0	加賀郡E IV系・次輪区間文	10YR 6.0黄褐色	粗・砂粒	不明	
第51図	30	32号土坑	深鉢	-/-7.8	加賀郡E IV系・次輪区間文	7.5YR 4.7灰褐色	粗・砂粒	常利 V	
第51図	31	33号土坑	深鉢	-/-4.8	次輪区間文・区間に吹き抜き	10YR 4.2黒褐色	粗・砂粒	常利 V	
第51図	32	33号土坑	深鉢	-/-13.1	加賀郡E IV系・次輪区間文	5YR 4.7に赤褐色	粗・砂粒	常利 V	
第51図	33	33号土坑	深鉢	-/-6.9	加賀郡E IV系・次輪区間に吹き抜き文・象眼文	7.5YR 2.0褐色	やや粗・石英	常利 V	
第51図	34	33号土坑	深鉢	-/-6.9	他の当方半				

頭骨番号	図面番号	出土地点	器種	口径・底径・高さ	断面・施文法	色調	胎土	時間	備考
第51図	35	33号土坑	深鉢	-/-4.2	縦の垂直施文・底付焼(棒状工具)	2.5YR5/3にぶい黃褐色	やや粗・砂粒	常利Ⅲ~IV	
第51図	36	33号土坑	深鉢	-/-12.3	1.5cm幅単位の施文を複数に有す	(10YR5/3)にぶい黃褐色	粗・砂粒・石英	常利V?	
第52図	37	34号土坑	深鉢	(43.6)/-15.0	大き・口縁が開く・口は4単位の深狀(なじ)で、始頂部に突起が造り付けられる。胎脂は複数で文に複合體。	5YR5.4にぶい赤褐色	やや粗・白色粒	諸邊b 2	
第52図	38	34号土坑	深鉢	-/-4.8	縦文に次継	5YR5.6 明る褐色	砂粒・白色粒	諸邊b	
第52図	39	34号土坑	深鉢	-/-12.5	口端口唇部削み・文に縦文	10YR4.4にぶい赤褐色	粗・砂粒・金雲母	諸邊b	
第52図	40	34号土坑	深鉢	-/-4.0	口唇部足りあり・刻みの縦文	2.5YR4.4にぶい赤褐色	粗・砂粒・金雲母	諸邊b 2	
第52図	41	34号土坑	深鉢	-/-14.9	縦文に刻み・縦文と横文	7.5YR5.4にぶい褐色	白色粒・雲母	諸邊b	
第52図	42	34号土坑	深鉢	-/-5.3	口唇部・厚唇部付近突起・網状縦文と横文	7.5YR3.0 褐褐色	粗・砂粒・金雲母	諸邊b	
第52図	43	34号土坑	深鉢	-/-4.5	口唇部浅縫に2つの切欠・深めの次縫による	7.5YR3.0 褐褐色	粗・砂粒・金雲母	諸邊b 2	
第52図	44	34号土坑	深鉢	-/-2.3	円筒形に刻み・斜突	1.5YR5.6 褐褐色	やや粗・白色粒・雲母	諸邊	
第52図	45	34号土坑	深鉢	-/-3.5	浮文に刻み	10YR4.2にぶい赤褐色	粗・砂粒・黑雲母	諸邊b 2	
第52図	46	34号土坑上層	深鉢	-/-4.1	縦文に半脱竹管による次縫	10YR5.1 黑褐色	粗・石英	諸邊b	
第52図	47	34号土坑	深鉢	-/-6.4	縦文に刻み	5YR4.3にぶい赤褐色	粗・砂粒・石英	諸邊b	
第52図	48	34号土坑	深鉢	-/-3.6	縦文に刻み・斜突	1.5YR5.3にぶい褐色	粗・砂粒	諸邊b 2	
第52図	49	34号土坑	深鉢	-/-7.8	縦文に横割り刻み	2.5YR4.6 褐褐色	粗・砂粒	諸邊b	
第52図	50	34号土坑	深鉢	-/-6.9	縦文に刻み	7.5YR4.4 褐褐色	やや粗・白色粒	諸邊b 2	
第52図	51	34号土坑	深鉢	-/-3.7	浮文に浮文による区画・区画内の円筒竹管文	7.5YR5.6 褐褐色	砂粒・石英	諸邊b 1	
第52図	52	34号土坑	深鉢	-/-3.8	縦文地文に次縫	10YR4.3にぶい黄褐色	白色粒・雲母	諸邊b	
第52図	53	34号土坑	浅鉢小	-/-4.5	2巻の漸縮爪先部によるモチーフ	1.5YR4.4 褐褐色	粗・砂粒	諸邊b	
第52図	54	34号土坑	浅鉢	(腰長) 22/-4.9	横方向ヨガキ	5YR5.4にぶい赤褐色	白色粒・石英	赤彩痕・指向での正確	
第53図	55	34号土坑	深鉢	(23) 0/-15.0	口唇部斜め・底付焼及び形状施文	10YR5/3にぶい黄褐色	砂粒・白粉・雲母	常利II	
第53図	56	34号土坑	深鉢	-/-8.0/10.6	断面焼地文に蛇行する施文	2.5YR6.4にぶい褐色	粗・砂粒	常利II	
第53図	57	34号土坑	小要	-/-5.5	縦文をよぶたなびき文・網状縦位条縫 (ハケ状工具)	10YR5/3にぶい黄褐色	粗・砂粒・雲母	つなぎ粘文	
第53図	58	34号土坑	深鉢	-/-3.8	2巻の凹凸文系・網状縦位条縫	10YR5/4にぶい黄褐色	粗・砂粒	常利IV	
第53図	59	34号土坑	深鉢	-/-4.9	2巻の凹凸文系土器	1.5YR5.6 褐褐色	粗・砂粒	常利II	
第53図	60	34号土坑	深鉢	-/-7.6	把持部斜め・次縫位置に刻み	10YR6/3にぶい黄褐色	粗・白色粒・金雲母	常利II	
第53図	61	34号土坑	入字把持手鉢	-/-5.0	突起部斜め・区画内斜位条縫	5YR6.6 褐褐色	粗・白色粒	常利II	
第53図	62	34号土坑	鉢	-/-5.4	底付焼文系・区画内斜位の条縫	10YR4/1 海灰色	粗・白色粒	常利II	
第53図	63	34号土坑	鉢	-/(9.0) /2.2	底付焼地文	10YR6/4にぶい黄褐色	白色粒・雲母	常利II	
第53図	64	35号土坑	深鉢	-/-10.3	前面のみを特つ2本の溝を貼付・内面と口	7.5YR5.4にぶい褐色	やや粗・白色粒	常利I	
第53図	65	35号土坑	深鉢	-/-3.0	底付焼地文に次縫	5YR7/6 褐褐色	粗・砂粒	諸邊c	
第53図	66	35号土坑	深鉢	-/-2.8	底付焼地文に斜位条縫	5YR7/4 褐褐色	粗・白色粒・黑雲母	諸邊c	
第53図	67	37号土坑上層	深鉢	-/-4.6	浮文	2.5YR3.4にぶい赤褐色	粗・砂粒・赤色粒	諸邊b	
第53図	68	41号土坑	有孔深鉢	-/-3.4	外側ナチ子調整	1.5YR6.6 褐褐色	粗・砂粒・白色粒	諸邊b	
第53図	69	41号土坑	有孔深鉢	-/-3.8	-	5YR6.6 褐褐色	粗・砂粒・白色粒	諸邊b	
第53図	70	41号土坑上層	深鉢	-/-2.6	縦文地文に次縫	7.5YR5.6 褐褐色	粗・砂粒・石英	諸邊b	
第54図	71	41号土坑上層	深鉢	-/-5.2	底付焼地文に斜位浮文	7.5YR4.3 褐褐色	粗・砂粒	諸邊b	
第54図	72	43号土坑	深鉢	-/-3.9	底付焼地文に斜位浮文	7.5YR4.3 褐褐色	粗・砂粒	諸邊b	
第54図	73	43号土坑	深鉢	-/-3.8	-	-	-	-	-

測量番号	図内 出土地点 番号	出土地点 番号	器種	口径・底径・高さ	測量・施文技法	色調	土質	輪郭	備考
第54図	74	43 号土坑	深鉢	-/-/5.0	溝窓形文と割外縁部文。	7.YR5.4/-に=褐色	褐・白色の金富母	溝邊 b 1	
第54図	75	43 号土坑	深鉢	-/-/2.4	—	7.YR3.2 黒褐色	褐・白色の金富母	溝邊 b	
第54図	76	45 号土坑	深鉢	-/-/5.8	縫合工具による文部区画・区画内別文	7.YR3.4/-褐色	褐・白色の金富母	溝邊 b	
第54図	77	50 号土坑	深鉢	-/-/5.3	縫合工具による文部区画・区画内別文	7.YR5.4/-に=褐色	褐・白色の金富母	管利 III	
第54図	78	50 号土坑	深鉢	-/-/4.4	縫合工具による文部区画・区画内別文	7.YR4.4/-褐色	褐・白色的	管利 I	
第54図	79	52 号土坑上層	深鉢	-/-/6.2	縫合工具による文部区画・区画内別文	7.YR4.1 褐色	やや褐・白色的	溝邊 b	
第54図	80	52 号土坑	深鉢	-/-/4.2	手取式切付文・縫合工具文	5.YR3.1 黑褐色	相・白色的・石英多	溝邊 c	
第54図	81	52 号土坑	深鉢	-/-/3.1	手取式切付文・縫合工具文	5.YR3.1 黑褐色	相・白色的・石英多	溝邊 c	
第54図	82	52 号土坑	深鉢	-/-/3.3	手取式切付文	5.YR3.3 黑褐色	相・白色的・金富母	溝邊 b	
第54図	83	52 号土坑	深鉢	-/-/10.1/1.5	縫合工具による文部区画	7.YR3.6 褐色	相・白色的・白色粒・富母	溝邊 b	
第54図	84	52 号土坑	深鉢	-/-/10.9	縫合工具による文部区画	7.YR3.4/-に=褐色	白色粒・石英・金富母	溝邊 b	
第54図	85	52 号土坑	深鉢	-/-/8.8	縫合工具による文部区画	2.YR5.6/-に=褐色	白色粒・石英・金富母	溝邊 b	
第54図	86	52 号土坑上層	深鉢	-/-/6.1	縫合工具文・方彌	10.YR3.2 黑褐色	相・白色的	溝邊 b	
第54図	87	53 号土坑上層	片口付深鉢	-/-/3.5	縫合工具文による文部区画	2.YR5.6 黑褐色	相・白色的・金富母	溝邊 b	
第54図	88	53 号土坑上層	深鉢	-/-/3.9	縫合工具による文部区画	7.YR4.1 褐色	相・白色的	溝邊 c	
第54図	89	53 号土坑	深鉢	-/-/3.8	縫合工具文による文部区画	5.YR3.2 田字形	相・白色的・白色粒	溝邊 b	
第54図	90	53 号土坑	深鉢	-/-/8.5	縫合工具文による文部区画	2.YR4.2 田字形	相・白色的・白色粒	溝邊 b 3	
第54図	91	53 号土坑	深鉢	-/-/4.5	縫合工具文	1.YR4.4/-に=褐色	相・白色的・石英・富母	溝邊 b	
第54図	92	53 号土坑	深鉢	-/-/4.2	縫合工具文	2.YR5.6 黑褐色	相・白色的・白色粒・富母	溝邊 b	
第54図	93	53 号土坑	深鉢	-/-/3.8	縫合工具文による文部区画	5.YR4.1 黑褐色	相・白色的	溝邊 b	
第55図	94	55 号土坑	深鉢	-/-/4.7	縫合工具文による文部区画	2.YR5.6 田字形	相・白色的・白色粒	溝邊 b	
第55図	95	53 号土坑	深鉢	-/-/3.7	次段面内連続爪文・口唇突起	2.YR3.6 黑褐色	相・白色的・富母	溝邊 b	
第55図	96	54 号土坑上層	深鉢	-/-/6.1	縫合工具文	10.YR3.2 黑褐色	相・白色的・富母	溝邊 b	
第55図	97	54 号土坑上層	深鉢	-/-/5.4	縫合工具文	2.YR4.4/-褐色	相・白色的	溝邊 b	
第55図	98	54 号土坑	深鉢	-/-/6.5	縫合工具文・窓状口縁	10.YR4.1 棕褐色	相・白色的・赤色粒・金富母	溝邊 b	
第55図	99	54 号土坑	深鉢	-/-/4.7	縫合工具文による文部区画	7.YR3.2 黑褐色	相・白色的・石英	溝邊 b	
第55図	100	54 号土坑	深鉢	-/-/6.0	縫合工具文	7.YR3.2 黑褐色	相・白色粒	溝邊 b	
第55図	101	54 号土坑	深鉢	-/-/8.4/5	縫合工具文	5.YR5.6 田字形	相・白色的・石英・金富母	溝邊 b 2	
第55図	102	55 号土坑上層	深鉢	-/-/3.5	縫合工具文	5.YR5.3 に=褐色	相・白色的	溝邊 b	
第55図	103	55 号土坑	深鉢	-/-/5.4	縫合工具文	5.YR4.4/-に=褐色	相・白色的・富母	井戸尻	
第55図	104	55 号土坑	深鉢	-/-/3.5	キサビアビ文	5.YR6.4/-に=褐色	相・白色的	井戸尻	
第55図	105	55 号土坑	深鉢	-/-/3.1	縫合工具・刺突文	7.YR6.4/-に=褐色	相・白色的	井戸尻	
第55図	106	55 号土坑上層	深鉢	-/-/5.2	口唇や丁字形・次段面・区画内ハ文字・口唇突起による文部区画	10.YR6.4/-に=褐色	相・白色粒	井戸尻 V	(1号土器) 土壤サンプル採取
第55図	107	56 号土坑	深鉢	31/2/5/24.7	4 重位の波状口縁・深頂部による文部区画	7.YR6.4/-に=褐色	相・白色粒	井戸尻 V	(1号土器) 土壤サンプル採取
第56図	108	56 号土坑	深鉢	19.0/~/28.5	木の墨下文・竹管状工具による文部区画	7.YR6.3/-に=褐色	白色粒・黑色粒	管利 V	実測委託 (2号土器)
第56図	109	56 号土坑	深鉢	21.0/~/26.9/0	木の墨下文・部は白地である	10.YR6.4/-に=褐色	白色粒・富母	管利 V	(3号土器)
第56図	110	56 号土坑	深鉢	-/-/4.8	縫合工具文・区画内ハ文字	10.YR7.4/-に=褐色	白色粒	管利 V	
第56図	111	56 号土坑	深鉢	-/-/5.6	次段面区画・口唇突起	1.YR5.2 に=褐色	相・白色的・金富母	管利 V	
第56図	112	56 号土坑	深鉢	-/-/4.2	毛筆字による文部区画	10.YR7.4/-に=褐色	相・白色粒・富母	管利 V	
第56図	113	56 号土坑	深鉢	-/-/6.3	毛筆字による文部区画	10.YR7.4/-に=褐色	相・白色的・黑色粒	管利 V	
第56図	114	56 号土坑	深鉢	-/-/6.1	毛筆字による文部区画	10.YR6.6 田字形	相・白色粒	管利 V	
第56図	115	56 号土坑	深鉢	-/-/7.0	毛筆字による文部区画	10.YR6.6 田字形	相・白色粒	管利 V	

頭部番号	図内 番号	出土地点	器種	口径・底径・高さ	断面・施文技法	色調	胎土	焼成	備考	
第56図	116	56号土坑	深鉢	-/-5.3	縦彫多綱・蛇形次縹	10/96.6 黄褐色	やや粗・石英・砂	常利IV		
第56図	117	56号土坑	深鉢	-/-7.5	縦彫多綱による次縹	2. 10/96.4/-/-1.9 塗色	粗・白色粘・黑色料・金雲母	常利IV		
第56図	118	56号土坑	把手	-/-5.8	把手の一部・次縹による施文	10/96.3/-/-1.9 黄褐色	粗・砂粒・白色粘・チャート	常利I ~ II		
第56図	119	56号土坑	深鉢	-/-5.2	口縁に刷毛・半纏状實文	7. 10/95.6 黄褐色	粗・砂粒	常利?		
第56図	120	56号土坑	深鉢	-/-4.4	口縁に刷毛・半纏状實文	7. 10/95.6 黑褐色	粗・石英・金雲母	常利		
第57図	121	57号土坑	深鉢	(29) 0/-/10.4	口縁に刷毛・半纏状實文	5/95.6 黄褐色	粗・白色粘・金雲母	桂邊b 2		
第57図	122	57号土坑	深鉢	-/-7.8	口縁に刷毛・半纏状實文	10/96.6 明黄褐色	粗・白色粘・雲母	桂邊b		
第57図	123	57号土坑	深鉢	-/-6.9	把手の一部・次縹による施文	5/95.6 黄褐色	粗・白色粘・石英	桂邊b 2		
第57図	124	57号土坑	深鉢	-/-5.7	把手の一部・次縹による施文	7. 10/95.4/-/-1.9 黄褐色	粗・白色粘・石英・金雲母	桂邊b 2		
第57図	125	57号土坑	深鉢	-/-6.2	把手の一部・次縹による施文	5/93.1 黑褐色	粗・白色粘・金雲母	桂邊b		
第57図	126	57号土坑	深鉢	-/-3.2	把手の一部・次縹による施文	7. 10/94.4 黑褐色	粗・白色粘・白雲母・雲母	桂邊b		
第57図	127	57号土坑	深鉢	-/-4.3	把手の一部・次縹による施文	7. 10/95.3/-/-1.9 黄褐色	粗・白色粘・雲母	桂邊b		
第57図	128	57号土坑	深鉢	-/-8.8	把手の一部・次縹による施文	5/94.4/-/-1.9 黄褐色	粗・白色粘・チャート	桂邊b		
第57図	129	57号土坑	深鉢	-/-7.0	把手の一部・次縹による施文	5/94.4/-/-1.9 黄褐色	粗・白色粘・石英	桂邊?		
第57図	130	57号土坑	深鉢	-/-9.7	把手の一部・次縹による施文	5/94.6 黄褐色	粗・白色粘・石英・金雲母	桂邊b		
第57図	131	57号土坑	深鉢	-/-8.6	把手の一部・次縹による施文	2. 10/94.6 黑褐色	粗・白色粘・石英	桂邊b		
第57図	132	57号土坑	把手	(24) 0/-/3.7	-	5/93.2 黄褐色	手形	桂邊b		
第57図	133	57号土坑	把手	-/-3.0	-	10/94.3/-/-1.9 黄褐色	粗・白色粘・金雲母	内外圓に赤彩		
第57図	134	57号土坑	把手	-/-2.1	-	10/94.2 黄褐色	粗・白色粘・赤色鉻	桂邊b		
第57図	135	57号土坑	深鉢	-/-6.2	-	10/94.1 黄褐色	粗・白色粘・赤色鉻	桂邊b		
第57図	136	57号土坑	深鉢	-/-6.0	/3.0	-	10/92.1 黑褐色	やや粗・白色粘		
第57図	137	57号土坑	深鉢	(9) 0/-/1.7	-	10/93.4/-/-1.9 黄褐色	粗・白色粘	桂邊二重付着		
第58図	138	58号土坑	深鉢	-/-3.1	把手の一部・次縹による施文	粗・白色粘	粗・白色粘	芦戸原		
第58図	139	58号土坑	深鉢	-/-1.4	把手の一部・次縹による施文	粗・白色粘	粗・白色粘	桂邊C		
第58図	140	58号土坑	深鉢	-/-5.5	把手の一部・次縹による施文	5/95.6 黄褐色	粗・白色粘・黑雲母	常利V		
第58図	141	58号土坑	深鉢	-/-5.1	把手の一部・次縹による施文	10/96.3/-/-1.9 黄褐色	粗・白色粘・赤色鉻	桂邊c		
第58図	142	59号土坑上層	深鉢	-/-3.7	把手の一部・次縹による施文	7. 10/94.3 黑褐色	粗・砂粒・白色粘	桂邊c		
第58図	143	59号土坑上層	深鉢	-/-3.1	把手の一部・次縹による施文	10/92.2 黑褐色	粗・白色粘・石英・金雲母	桂邊b		
第58図	144	59号土坑上層	深鉢	-/-7.4	把手の一部・次縹による施文	7. 10/94.3 黑褐色	粗・砂粒・多孔・白色粘	桂邊b		
第58図	145	61号土坑	深鉢	-/-4.4	把手の一部・次縹による施文	10/92.3 黑褐色	やや粗・白色粘・雲母	桂邊b		
第58図	146	63号土坑	深鉢	(32) 4/-/17.7	把手の一部・次縹による施文	10/92.3 黑褐色	白黒色粘・雲母	桂邊b 3		
第58図	147	63号土坑	深鉢	-/-11.0	/10.7	把手の一部・次縹による施文	5/95.8 黄褐色	粗・白色粘・石英・黑雲母	桂邊b	
第58図	148	63号土坑	深鉢	-/-12.5	把手の一部・次縹による施文	10/95.8 黄褐色	粗・白色粘・石英・雲母	桂邊b	147と同一個体の可能性あり	
第58図	149	63号土坑	深鉢	-/-10.0	把手の一部・次縹による施文	10/92.3 黄褐色	粗・白色粘・チャート	桂邊b	147と同一個体の可能性あり	
第58図	150	63号土坑	深鉢	-/-10.6	把手の一部・次縹による施文	7. 10/95.4/-/-1.9 黄褐色	粗・白色粘・石英・雲母	桂邊b	147と同一個体の可能性あり	
第58図	151	63号土坑	深鉢	-/-5.0	把手の一部・次縹による施文	10/96.4/-/-1.9 黄褐色	粗・白色粘・チャート	桂邊b	147と同一個体の可能性あり	
第58図	152	64号土坑	深鉢	-/-7.0	把手の一部・次縹による施文	1. 10/94.6 黄褐色	やや粗・白色粘	桂邊b		
第58図	153	64号土坑	深鉢	-/-2.0	/3.3	-	10/95.4/-/-1.9 黄褐色	やや粗・白色粘		
第58図	154	64号土坑	把手	-/-14.8	/2.1	-	10/92.1 黑褐色	やや粗・白色粘		
第58図	155	65号土坑	深鉢	-/-6.2	把手	10/92.1 黑褐色	やや粗・白色粘	桂邊b		

断面番号	図内 番号	出土地点	器種	口径・底径・高さ	断面・施文技法	色調	胎土	焼成	備考
第59図	156	外構B区1号土坑	深鉢	-/-5.6	縦文斜文・半透竹割による多条文縞	7.5YR6.6褐色	褐色b	常利I	外面保付有あり
第59図	157	外構B区1号土坑	深鉢	-/-7.2	輪文・テ字調査あり	7.5YR6.4/-3.5褐色	妙利多・黒窓母	常利I	
第59図	158	外構B区1号土坑	深鉢	-/-6.4	八字文	7.5YR6.4/-3.5褐色	妙利多・白地	常利V	
第59図	159	外構B区2号土坑	深鉢	-/-6.4	縦文斜文	7.5YR6.6褐色	妙利V	常利b	
第59図	160	外構B区2号土坑	深鉢	-/-7.0	縦文斜文・横位文	7.5YR6.6褐色	妙利b	常利b	
第59図	161	外構B区2号土坑	深鉢	-/-7.0	縦文斜文・多条の斜位文	7.5YR6.6褐色	妙利b	常利b	
第59図	162	外構B区2号土坑	鉢類	-/-2.3	連続斜文	7.5YR6.4/-3.5褐色	妙利多	常利b	
第59図	163	外構B区2号土坑	深鉢	-/-6.6	縦文斜文・半透竹割によるレンズ状の穴縞文	10YR6.4/-3.5褐色	妙利多	常利b	
第59図	164	外構B区2号土坑	ミニニコアフカ	-/(5.1) / 1.8	輪文・外側手づくね	10YR6.3/-3.5褐色	妙利・白地	常利b	
第59図	165	外構B区2号土坑	深鉢	-/-5.0	縦文斜文(内面所引裏)	10YR6.3/-3.5褐色	妙利・白地・金窓母	常利II	
第59図	166	通槽外	深鉢	-/-5.5	縦文斜文(内面所引裏)	7.5YR6.6褐色	妙利・石突・チャート・金窓母	常利b	
第59図	167	通槽外	深鉢	-/-5.2	口縁部に斜めの溝	7.5YR6.6褐色	白色系多々	常利b	
第59図	168	通槽外	深鉢	-/-3.5	縫合による通槽爪形文	7.5YR6.3褐色	白色系多々	五頭台	
第59図	169	通槽外	深鉢	-/-5.8	平行通槽区画・区画内斜行文	7.5YR6.4/-3.5褐色	妙利b	常利b	
第59図	170	通槽外	深鉢	-/9.4	-	7.5YR6.6褐色	妙利b	常利b	
第59図	171	通槽外	深鉢	-/-5.2	美文	7.5YR6.3/-3.5褐色	妙利・白地・石突	常利II	
第59図	172	通槽外	深鉢	-/-4.8	つなぎ蜀土器の口縁斜形手・把手上面に凸	7.5YR6.3/-3.5褐色	妙利・チャート・窓母	常利III	
第59図	173	通槽外	深鉢	-/-7.4	口縁部に次縞によく添縞文	7.5YR6.6褐色	白色系・金窓母	常利V	
第59図	174	通槽外	深鉢	-/-6.6	耳形把手がつく・法螺区画面内擦痕縞文	10YR6.4/-3.5褐色	白色系・石突	常利V	外面に焼付有
第60図	175	通槽外(外構B区)	深鉢	(35.8) / -/7.0	口縫合文	10YR6.4/-3.5褐色	白色系・黒窓母	常利I	
第60図	176	通槽外(外構B区)	深鉢	(29.0) / -/7.1	口縫合點付文・口縫合面に斜行文	5YR5.4/-3.5褐色	白色系	井戸尻	
第60図	177	通槽外(外構B区)	深鉢	-/10.7	口縫合點付文・口縫合面に斜行文	10YR7.6褐色	白色系	常利b	
第60図	178	通槽外(外構B区)	深鉢	-/10.7	口縫合點付文・突起あり・口縫合面に斜行文	10YR4.2灰褐色	妙利一・妙利・白色粘	常利V	
第60図	179	通槽外(外構B区)	深鉢	-/10.5	口縫合點付文・斜位点縫	5YR4.3/-3.5褐色	妙利・白色粘	常利V	
第60図	180	外構C区	深鉢	-/10.0	口縫合點付文・斜位点縫	10YR6.4/-3.5褐色	妙利・白色粘	常利b	
第60図	181	外構C区	深鉢	-/14.0	口縫合點付文・斜位点縫	5YR4.1/-3.5褐色	妙利・白色粘	常利b	
第60図	182	外構C区	有孔洗鉢	-/-2.7	鉢文	10YR6.4/-3.5褐色	妙利・白色粘	常利b	
第60図	183	外構C区	深鉢	-/-4.4	-	10YR6.3/-3.5褐色	妙利・白色粘母	常利b	
第60図	184	外構C区	深鉢	-/-3.8	-	2.5YR4.1赤灰色	妙利・白色粘	常利b	
第60図	185	外構C区	深鉢	(17.4) / -/2.8	失傳斜縞文による次縞・棒状點付文	5YR5.4/-3.5褐色	妙利・白色粘	常利b	
第60図	186	外構C区	深鉢	-/-2.6	半透竹割による次縞・折タン状突起	10YR6.4/-3.5褐色	妙利・妙利・白色粘	常利b	
第60図	187	外構C区	深鉢	-/-2.9	ナラ板痕	10YR4.6褐色	妙利・妙利	常利IV	
第60図	188	外構C区	深鉢	-/4.8	口縫合・輪文(内面)	10YR6.3/-3.5褐色	妙利・妙利	常利V	
第60図	189	外構C区	深鉢	-/-5.2	裏面縫合による底面文	7.5YR6.3/-3.5褐色	妙利・妙利	常利V	
第60図	190	外構C区	深鉢	-/-5.2	縫合痕新による縫合文	10YR6.4/-3.5褐色	妙利・妙利	常利II	
第60図	191	外構C区	深鉢	-/-2.1	ハサウエ工具による縫合文の底・底状跡等	7.5YR5.4/-3.5褐色	妙利・白色粘	常利II	
第60図	192	外構C区	深鉢	-/-4.2	法螺区面・縛文	5YR6.4/-3.5褐色	妙利E IV供行	常利V	
第60図	193	外構C区	深鉢	-/-4.4	八字文	5YR5.4/-3.5褐色	妙利V	常利V	
第60図	194	外構C区	深鉢	-/-6.8	次縞区面に縛文	5YR6.4/-3.5褐色	妙利・妙利	常利IV	
第60図	195	外構C区	深鉢	-/6.5	輪文・縫合状の茎縞	7.5YR6.4/-3.5褐色	妙利・妙利	常利IV	内面コゲアリ
第60図	196	外構C区	深鉢	-/-4.2	縫合・済き跡	10YR6.3/-3.5褐色	妙利・妙利	常利I	
第60図	197	外構C区	深鉢把手手口	-/-5.4	把手手か・底付文による装飾	10YR6.3/-3.5褐色	井戸尻	外面に保付	

測量番号	図内 番号	出土地点	器種	口径・底径・高さ	断面・施文技法	色調	胎土	陶種	備考
第61図	198	鹿児島区一活 - 掘孔	深鉢	-/-12.7	縦文地文	10/R1 / 黒褐色	黒・白色地 石英・チヤード	普通 b	
第61図	199	鹿児島区一活 - 砂土	深鉢	-/-9.4	地文なし・口縁横位置刻・開口部位・削付文	7.5/YR3.2 黒褐色	やや暗・白色	普通 b	
第61図	200	鹿児島区一活 - 掘孔	深鉢	-/-5.3	縦文地文にボタン状點突起	5/R2 / 黒褐色	白色地 石英・黒雲母	普通 b	
第61図	201	鹿児島区一活 - 砂土	深鉢	-/-3.4	口縁横ボタン状點突起	7.5/R5.4 / にら・褐色	白色地 チヤード	普通 c1	
第61図	202	鹿児島区一活 - 砂土	鉢	-/-5.8	縦文地文に円形點突起	10/R5.4 / にら・褐色	白色地 背面	普通 b	
第61図	203	鹿児島区一活 - 砂土	浅鉢	-/-5.0	縦文地文・口縁部二重點突起	10/R2 / 黑褐色	白色地 背面	普通 b	面内?
第61図	204	鹿児島区一活 - 砂土	深鉢	-/-6.3	地文なし・半底竹割・点々次縞文	10/R2 / 2 黑褐色	稍・赤色地	普通 b	
第61図	205	鹿児島区一活 - 掘孔	深鉢	-/-3.3	交差斜突文	5/R4.6 細褐色	粗・白色地 黄母	普通 b	
第61図	206	鹿児島区一活 - 砂土	鉢	-/-4.5	-	10/R6 / 2 強黒褐色	やや暗・白色	普通 b	
第61図	207	鹿児島区一活 - 砂土	深鉢	-/-6.8	鉢内側断面の點付文	10/R6.3 / にら・黒褐色	やや暗・白色地	普通 b	
第61図	208	鹿児島区一活 - 砂土	深鉢	-/-9.3	鉢内側断面の地文・縦帶による地文	10/R6.3 / にら・黒褐色	黒・白色地	普通 b	
第61図	209	鹿児島区一活 - 掘孔	深鉢	-/-5.4	条状地文・2本並書(跡み)	2.5/R5.6 6 黑褐色	白色地 チヤード	普通 b	
第61図	210	鹿児島区一活 - 掘孔	深鉢	-/-4.7	口縁つなぎ地文	10/R2 / 黑褐色	粗・白色地 黄母	普通 b	
第61図	211	鹿児島区一活 - 砂土	深鉢	-/-10.6	地文なし・強黒褐色	10/R7 / 2 / にら・黒褐色	やや暗・白色	普通 b	
第61図	212	鹿児島区一活 - 掘孔	浅耳鉢	-/-5.5	き文	10/R7 / 4 / にら・黒褐色	粗・白色地 黑色	普通 b	

第4表 出土遺物一覧表（土偶・土製品）

土偶	図内 番号	出土地点	部位	長さ・幅・厚さ (cm)	参考
第62図	1	4号住居跡・土壇	頭部	2.4/1.6/3.0	左脚を右手で抱えている。次第に出土するが、頭部中央に深い切れ込みがある正中縫。頭部下から背面にかけて施された縫合線（フラス）で支撑を施す。
第62図	2	43号土坑	頭部	4.3/5.6/2.2	

ミニチュア土偶

図版番号	出土地点	口径・底径・高さ (cm)	参考
第62図	3 5号住居跡	(2.4) / - / 2.5	口唇部付・孔4つあり・有孔焼鉢のミニチュアか
第62図	4 53号土坑	- / (4.0) / 4.3	頭部二眼・頭部片付・頭部下から背面に施された縫合線
第62図	5 1号窑穴遺構	- / 4.4 / 4.9	焼成土窯跡のミニチュアか、1眼位の把手が手口縫につく。
第62図	6 四隅外	5.3/2.6/6.8	把手によく接する

土製円盤

図版番号	出土地点	長さ・幅・厚さ (cm)・重さ (g)	参考
第63図	7 5号住居跡	4.7/3.8/1.0/12.8	側面に施縫あり・墨文の土器片利用
第63図	8 5号住居跡	3.3/2.0/0.8/7.5	墨文の土器片利用
第63図	9 12号住居跡	3.5/1.5/0.1/6.9	側面に施縫あり・墨文のある土器片利用
第63図	10 12号住居跡	5.4/3.5/1.30/7	側面に施縫あり・墨文のある土器片利用
第63図	11 34号土坑	4.6/4.1/4.22/7	側面に施縫あり・墨文のある土器片利用
第63図	12 56号土坑	3.4/4.0/0.8/12.5	側面に施縫あり・墨文のある土器片利用
第63図	13 56号土坑	4.0/0.2/1.0/14.0	側面に施縫あり・墨文のある土器片利用
第63図	14 掘孔	4.7/4.0/0.8/14.9	側面に施縫と打ち欠き跡あり・洋銀文のある土器片利用

その他の土製品

図版番号	出土地点	器種	長さ・幅・厚さ (cm)	参考	色調	胎土	時期	備考
第63図	15 7号住居跡・窓	灰陶把手	3.7(器高)	イノシシモチゲーフの灰陶把手・窓部は焼成又未焼成に次線を施す	5TR6/1 男赤褐色	粗・砂粒・金雲母	播磨 b	内外面に焼付層
第63図	16 10号住居跡	灰陶把手	4.1(器高)	イノシシモチゲーフの灰陶把手・頭部に浮雕状を施す	5TR6/4 にぶい赤褐色	粗・砂粒・金雲母	播磨 b	
第64図	17 4号住居跡	灰陶把手	4.3(長) / 3.9(短)	指頭風景を残る・整形された焼成粘土焼成	10TR4/1 地灰褐色	粗・白色粒・金雲母	重さ 54.6g	
第64図	18 5号住居跡	把手部分	4.9/3.2/2.2	全面に施縫を施す・曾利Y式の把手の可能性	7.5TR6/4 にぶい褐色	白色粒		
第64図	19 1号窯穴遺構	把手部分	4.8/5.2/2.5	曾利Y式の把手の可能性	10TR6/6 明褐色	砂粒・白色粒		
			2.5/7.3 灰褐色					

第5表 出土遺物一覧表(石器・石製品)

通し番号	器種	遺構番号	版面番号	縮尺	石材	所見	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
1	石鎚	1号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	C類	17.0	11.0	3.0	0.3
2	石鎚	1号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	D類	11.0	14.0	2.0	0.2
3	石鎚	1号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	B類	14.0	11.0	2.0	0.2
4	石鎚	1号住居跡2pit	第65図	1/1	黒曜石	A類	13.3	15.1	2.7	0.4
5	石鎚	5号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	C類	19.9	11.2	5.4	1.0
6	石鎚	5号住居跡D区	第65図	1/1	黒曜石	C類	18.8	16.5	3.4	0.7
7	石鎚	6号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	B類	21.0	17.0	4.0	0.9
8	石鎚	6号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	C類	14.0	19.0	4.0	0.6
9	石鎚	6号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	C類	12.0	15.0	4.0	0.5
10	石鎚	6号住居跡上層	第65図	1/1	黒曜石	C類	15.7	12.4	3.9	0.5
11	石鎚	6号住居跡電気炉内	第65図	1/1	黒曜石	A類	16.5	18.7	3.1	0.7
12	石鎚	7号住居跡	第65図	1/1	滑石	C類	19.7	17.6	3.8	0.8
13	石鎚	7号住居跡	第65図	1/1	黒曜石		16.0	16.0	0.6	1.0
14	石鎚	7号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	A類	13.0	13.0	1.0	0.2
15	石鎚	7号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	A類	21.0	16.0	4.0	0.7
16	石鎚	7号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	B類	14.0	14.0	2.0	0.4
17	石鎚	7号住居跡上層	第65図	1/1	黒曜石	C類	15.0	16.7	3.0	0.4
18	石鎚	8号住居跡上層	第65図	1/1	黒曜石	A類	23.4	21.3	3.0	0.9
19	石鎚	9号住居跡上層	第65図	1/1	黒曜石	A類	21.7	19.9	5.4	1.2
20	石鎚	10号住居跡上層	第65図	1/1	黒曜石	A類	14.5	11.8	2.8	0.2
21	石鎚	7号住居跡2pit	第65図	1/1	黒曜石	C類	19.5	14.8	2.9	0.6
22	石鎚	10号住居跡上層	第65図	1/1	黒曜石	C類	15.0	10.7	2.8	0.3
23	石鎚	10号住居跡1pit	第65図	1/1	黒曜石	未製品か	19.4	14.4	6.2	1.3
24	石鎚	10号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	A類	23.6	16.9	4.3	1.1
25	石鎚	10号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	D類	14.5	17.7	4.6	1.2
26	石鎚	10号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	D類	27.4	23.3	5.1	2.4
27	石鎚	11号住居跡上層	第65図	1/1	黒曜石	B類	27.0	15.0	4.0	1.0
28	石鎚	12号住居跡	第65図	1/1	黒曜石	A類	22.0	14.0	3.0	0.7
29	石鎚	14号住居跡	第65図	1/1	黒曜石		18.0	15.0	3.0	0.6
30	石鎚	1号竪上層	第65図	1/1	黒曜石	A類	17.3	14.2	4.1	0.6
31	石鎚	17号土坑上層	第66図	1/1	黒曜石	C類	13.1	10.4	3.4	0.2
32	石鎚	35号土坑	第66図	1/1	黒曜石	D類	12.0	15.0	2.0	0.3
33	石鎚	43号土坑	第66図	1/1	黒曜石	A類	20.8	13.6	2.8	0.5
34	石鎚	43号土坑	第66図	1/1	チャート		23.5	21.0	4.0	1.6
35	石鎚	57号土坑	第66図	1/1	黒曜石	D類	16.0	19.0	3.0	0.7
36	石鎚	61号土坑	第66図	1/1	黒曜石	C類	19.0	19.0	3.0	0.7
37	石鎚	遺構外	第66図	1/1	黒曜石	D類	17.7	19.9	4.0	0.7
38	石鎚	遺構外	第66図	1/1	黒曜石	C類	22.3	17.0	3.9	0.9
39	石鎚	E26	第66図	1/1	黒曜石		12.9	16.0	2.8	0.5
40	石鎚	E26	第66図	1/1	黒曜石	B類	16.0	9.9	3.8	0.8
41	石鎚	外横B区	第66図	1/1	黒曜石	C類	25.0	17.0	4.0	1.1
42	石鎚	外横B区2号土坑	第66図	1/1	黒曜石	A類	19.9	15.2	5.2	0.9
43	石鎚	外横B区3・西側	第66図	1/1	黒曜石	C類	19.0	17.0	3.0	0.5
44	石鎚	外横C区	第66図	1/1	黒曜石	A類	25.0	19.0	5.0	1.7
45	石鎚	外横C区	第66図	1/1	チャート	D類	15.0	11.0	2.0	0.3
46	石鎚	表土	第66図	1/1	黒曜石	C類	17.0	16.0	3.0	0.6
47	石鎚	搅乱	第66図	1/1	黒曜石	D類	16.0	16.0	4.0	0.7

通し番号	器種	道横	図版番号	縮尺	石材	所見	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
48	石鎚	立会調査11月19日	第66図	1/1	黒曜石	D類	19.0	16.0	5.0	1.0
49	石鎚未製品	6号住居跡	第66図	1/1	黒曜石		16.0	15.0	5.0	1.1
50	石鎚未製品	5号住居跡	第66図	1/1	黒曜石		32.0	28.4	10.7	7.6
51	石鎚未製品	5号住居跡	第66図	1/1	黒曜石		17.9	19.2	5.7	1.6
52	石鎚未製品	34号土坑	第66図	1/1	黒曜石		30.0	22.0	10.0	5.6
53	石鎚未製品	道横外	第66図	1/1	黒曜石		27.8	23.2	9.2	4.4
54	石鎚	6号住居跡上層	第67図	1/1	黒曜石	両刃で直刃。辺は直線で三角形状を呈す	31.4	37.6	8.3	6.5
55	石鎚	7号住居跡上層	第67図	1/1	チャート	片刃で凸刃。側辺は丸みをおびる	27.6	42.5	6.7	6.0
56	石鎚	10号住居跡	第67図	1/1	黒曜石	両刃で凸刃。肩が張り長方形を呈す	21.3	31.1	7.1	3.1
57	石鎚	10号住居跡	第67図	1/1	黒曜石	両刃で凸刃。側辺は直線と凸状	20.9	27.0	6.1	2.7
58	石鎚	13号住居跡	第67図	1/1	安山岩	片刃で凸刃。側辺は直線と凸状	33.6	54.1	8.3	9.2
59	石鎚	35号土坑	第68図	1/1	チャート	両刃で直刃。肩が張り長方形を呈す	30.0	40.0	9.0	7.7
60	石鎚	53号土坑	第68図	1/1	ホルンフェルス	両刃で凸刃。側辺は残存部直線	33.5	50.0	4.5	8.1
61	石鎚	57号土坑	第68図	1/1	珪質頁岩	つまみ部のみ残存	27.0	22.0	8.5	4.7
62	石鎚	道横外	第68図	1/1	チャート	片刃で凸刃。側辺は丸みをおびる	26.6	43.3	7.0	7.0
63	楕形石鎚	外横B区一括	第68図	1/1	ホルンフェルス	片刃で直刃	42.0	17.0	5.0	5.6
64	石鎚(大型)	5号住居跡	第68図	1/2	流紋岩	両刃で凸刃。側辺は丸みをおびる	37.9	74.5	13.7	32.2
65	石鎚(大型)	12号住居跡	第68図	1/2	ホルンフェルス	ほぼ全面を利用	51.8	68.7	17.7	36.4
66	石鎚(大型)	13号住居跡	第68図	1/2	ホルンフェルス	片刃で直刃	64.3	74.7	15.4	46.1
67	楔形石器	B6グリッド	第69図	1/1	黒曜石	両極打撃痕	21.5	19.5	10.5	4.3
68	楔形石器	E2グリッド	第69図	1/1	黒曜石	両極打撃痕	18.0	13.0	8.0	1.7
69	二次加工剥片	1号住居跡	第69図	1/1	粘板岩	つまみ部の加工と刃部を形成	47.0	39.0	9.0	13.6
70	二次加工剥片	6号住居跡	第69図	1/1	黒曜石	表面面に剝離痕と刃部を形成	36.0	26.5	5.5	4.2
71	二次加工剥片	外横B区	第69図	1/1	黒曜石	側片の一つは内渦し、刃部を形成	23.5	18.0	3.5	1.3
72	二次加工剥片	E2グリッド	第69図	1/1	黒曜石	押圧剝離による形成。石鎚未製品か	21.5	17.0	3.5	1.5
73	二次加工剥片	道横外	第69図	1/1	水晶	一部で刃部を形成。使用痕あり	41.2	25.6	10.6	11.2
74	搔器	5号住居跡	第69図	1/1	黒曜石	横円形刃部と形成抉り部あり	20.4	21.3	5.4	2.0
75	搔器	5号住居跡	第69図	1/1	チャート	二刃に刃部を形成	44.1	35.9	12.3	18.1
76	石錐	1号住居跡3·4pit	第70図	1/1	黒曜石	レンズ状断面	41.4	16.7	8.2	5.0
77	石錐	7号住居跡炉跡	第70図	1/1	流紋岩	つまみ部左右非対象。断面三角形	35.1	15.4	9.3	2.5
78	石錐	7号住居跡	第70図	1/1	黒曜石	つまみ部左右非対象。断面三角形	24.0	21.0	5.0	1.4
79	石錐	10号住居跡1pit	第70図	1/1	凝灰岩	レンズ状断面	48.7	22.0	10.7	9.0
80	石錐	10号住居跡3pit	第70図	1/1	流紋岩	つまみ部左右非対象。断面三角形	57.4	16.5	7.3	5.2
81	石錐	道横外	第70図	1/1	黒曜石	棒の形態。断面四角形	46.0	14.4	7.6	3.9
82	石錐	外横B区	第70図	1/1	チャート	つまみ部左右非対象。断面四角形	31.0	23.0	10.0	4.5
83	石錐	A4·B4グリッド	第70図	1/1	黒曜石	断面四角形。先端破損	27.0	22.0	7.5	3.8
84	石錐	E2グリッド	第70図	1/1	黒曜石	断面三角形	20.5	11.0	6.5	1.2
85	横刃形石器	6号住居跡炉跡	第71図	1/3	頁岩	長辺に片刃を形成	51.4	32.2	10.6	12.8
86	原石・石核	1号豎穴道横	第71図	1/2	黒曜石	一部自然風化面	35.0	92.0	30.0	88.0
87	原石・石核	47号土坑	第71図	1/2	黒曜石	一部自然風化面	45.0	39.0	38.0	52.9
88	原石・石核	擾乱	第71図	1/2	黒曜石	一部自然風化面	53.0	44.0	23.0	52.2
89	打製石斧	4号住居跡炉跡上部	第71図	1/3	ホルンフェルス	短冊形	97.5	48.5	22.4	105.9
90	打製石斧	5号住居跡	第71図	1/3	砂岩	短冊形	111.0	56.0	18.0	128.5
91	打製石斧	5号住居跡	第71図	1/3	ホルンフェルス	短冊形	102.0	41.0	15.0	69.8
92	打製石斧	5号住居跡	第71図	1/3	砂岩	短冊形。側面敲打痕	111.0	44.0	19.0	100.8
93	打製石斧	5号住居跡vi土	第72図	1/3	ホルンフェルス	分鏡形	73.0	48.0	12.0	42.9
94	打製石斧	6号住居跡	第72図	1/3	ホルンフェルス	短冊形	117.0	57.0	19.0	132.0
95	打製石斧	6号住居跡	第72図	1/3	流紋岩	バチ形	93.0	46.0	15.0	68.9

通し番号	器種	遺構	図版番号	縮尺	石材	所見	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
96	打製石斧	6号住居跡上層	第72図	1/3	真岩	長台形	77.4	57.2	21.0	92.9
97	打製石斧	7号住居跡	第72図	1/3	真岩	長台形	95.7	49.6	8.3	42.2
98	打製石斧	7号住居跡上層	第72図	1/3	ホルンフェルス	短冊形	159.6	85.9	29.0	351.1
99	打製石斧	1号竪穴	第72図	1/3	ホルンフェルス	バチ形	69.0	44.0	12.0	36.5
100	打製石斧	6号土坑	第72図	1/3	砂岩	短冊形	103.0	44.0	10.0	47.7
101	打製石斧	7号土坑	第72図	1/3	凝灰岩	長台形	128.0	54.0	16.0	114.6
102	打製石斧	30号土坑	第72図	1/3	砂岩	短冊形	77.0	37.0	9.0	26.6
103	打製石斧	31号土坑	第72図	1/3	砂岩	長台形	80.0	53.0	19.0	86.5
104	打製石斧	61号土坑	第72図	1/3	砂岩	長台形	91.8	49.1	20.6	107.5
105	打製石斧	外横A区	第72図	1/3	砂岩	短冊形	100.0	51.0	21.0	118.1
106	打製石斧	外横C区	第72図	1/3	砂岩	短冊形	96.0	43.0	20.0	81.6
107	打製石斧	外横E区	第72図	1/3	ホルンフェルス	短冊形	107.0	45.0	15.0	84.3
108	磨製石斧	5号住居跡	第73図	1/1	緑色岩		28.5	10.0	7.0	3.1
109	磨製石斧	5号住居跡	第73図	1/1	緑色岩		61.5	29.5	13.0	37.5
110	磨製石斧	這様外	第73図	1/1	蛇紋岩		37.0	17.5	7.5	8.1
111	磨製石斧	5号住居跡	第73図	1/2	緑色岩	乳棒状	152.0	48.0	39.0	381.0
112	磨製石斧	14号住居跡	第73図	1/2	緑色岩		47.0	54.5	27.0	81.0
113	磨製石斧	34号土坑上層	第73図	1/2	硬質細粒凝灰岩		27.0	38.0	22.5	38.6
114	尖頭器	56号土坑上層	第73図	1/2	チャート		31.5	74.3	11.1	27.7
115	尖頭器	10号住居跡1pit	第73図	1/2	チャート		40.0	36.0	13.5	24.1
116	磨石類	1号住居跡	第74図	1/3	安山岩	円形縦。全体に敲打痕及び磨面	108.0	95.0	68.0	847.0
117	磨石類	1号住居跡	第74図	1/3	安山岩	方形縦。両面に磨面。小口面に敲き痕	92.0	67.0	42.0	461.0
118	磨石類	4号住居跡	第74図	1/3	安山岩	棱磨石。全体に磨面	130.0	70.0	40.0	533.0
119	磨石類	5号住居跡	第74図	1/3	安山岩	断面三角形。各面に敲打痕	89.0	56.0	52.0	313.0
120	磨石類	5号住居跡	第74図	1/3	安山岩	円形縦。片面に敲打痕	58.0	51.0	43.0	114.0
121	磨石類	5号住居跡	第74図	1/3	安山岩	方形縦。全体に磨面。両面に敲打痕	93.0	52.0	44.0	285.0
122	磨石類	5号住居跡vi土	第74図	1/3	安山岩	円形縦。両面に敲打痕	84.0	58.0	46.0	291.0
123	磨石類	5号住居跡	第74図	1/3	安山岩	円形縦。全体に磨面。両面に敲打痕	98.0	66.0	55.0	467.0
124	磨石類	5号住居跡	第75図	1/3	安山岩	不整形縦。両面に敲打痕	106.0	64.0	41.0	329.0
125	磨石類	5号住居跡	第75図	1/3	安山岩	方形縦。全体に磨面	82.0	59.0	39.0	305.0
126	磨石類	5号住居跡	第75図	1/3	安山岩	円形縦。両面と小口に敲打痕	116.0	86.0	52.0	752.0
127	磨石類	6号住居跡	第75図	1/3	安山岩	円形縦。両面に敲打痕	99.0	78.0	47.0	397.0
128	磨石類	6号住居跡	第75図	1/3	安山岩	円形縦。全体に磨面	107.0	92.0	53.0	853.0
129	磨石類	7号住居跡	第75図	1/3	安山岩	不整形縦。全体に磨面。両面に敲打痕	109.0	71.0	44.0	474.0
130	磨石類	7号住居跡	第75図	1/3	安山岩	円形縦。全体に磨面。両面に敲打痕	85.0	70.0	49.0	378.0
131	磨石類	7号住居跡	第76図	1/3	安山岩	円形縦。全体に磨面。側面に敲打痕	91.0	78.0	54.0	493.0
132	磨石類	7号住居跡	第76図	1/3	砂岩	棒状方形縦。小口に敲打痕	98.0	35.0	33.0	203.0
133	磨石類	7号住居跡	第76図	1/3	安山岩	始形縦。刃部状の敲き部	99.0	112.0	34.0	573.0
134	磨石類	7号住居跡上層	第76図	1/3	安山岩	円形縦。両面・側面に敲打痕	103.8	77.7	54.5	585.9
135	磨石類	10号住居跡	第76図	1/3	花崗岩	円形縦。全体に磨面	104.0	68.0	50.0	512.0
136	磨石類	11号住居跡上層	第76図	1/3	安山岩	円形縦。表面と側面に粗い敲打痕。裏面に細かい敲打痕	100.7	85.9	52.5	558.3
137	磨石類	13号住居跡	第77図	1/3	安山岩	不整形縦。三面に敲打痕	112.0	73.0	65.0	694.0
138	磨石類	14号住居跡	第77図	1/3	安山岩	断面三角形。全体に磨面。三面に敲打痕	118.0	59.0	46.5	503.0
139	磨石類	14号住居跡	第77図	1/3	花崗岩	小口に敲打痕	117.0	49.0	28.0	221.0
140	磨石類	10号土坑上層	第77図	1/3	安山岩	方形縦。全体に磨面。両面に敲打痕	77.0	68.0	42.0	278.0
141	磨石類	26号土坑	第77図	1/3	安山岩	不整形縦。両面に敲打痕	121.0	63.0	48.0	391.0
142	磨石類	35号土坑	第77図	1/3	安山岩	円形縦。全体に磨面。	87.0	72.0	51.0	484.0

通し番号	器種	遺構	図版番号	縮尺	石材	所見	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
143	磨石類	52号土坑	第77図	1/3	安山岩	縦磨石。全体に磨面。両面に敲打痕	122.0	65.0	41.0	431.0
144	磨石類	55号土坑上層	第78図	1/3	安山岩	円形縦。両面・側面に敲打痕	99.0	66.0	32.0	296.0
145	磨石類	56号土坑上層	第78図	1/3	砂岩	小型の円形縦。全体に磨面	42.0	39.0	34.0	70.0
146	磨石類	57号土坑上層	第78図	1/3	安山岩	円形縦。両面に敲打痕。小口に研き痕	107.0	82.0	45.0	554.0
147	磨石類	57号土坑	第78図	1/3	花崗質砂岩	横磨石。全体にも磨面	114.0	78.0	40.0	446.0
148	磨石類	57号土坑	第78図	1/3	砂岩	方形棒状縦。小口に敲打痕	79.0	44.0	33.0	223.0
149	磨石類	60号土坑	第78図	1/3	砂岩	方形縦。両面と小口に敲打痕	76.0	66.0	41.0	328.0
150	磨石類	遺構外	第78図	1/3	安山岩	円形縦。両面に敲打痕	89.6	73.4	44.1	348.3
151	磨石類	遺構外	第78図	1/3	安山岩	横磨。三面に敲打痕	123.0	68.0	44.0	481.0
152	磨石類	遺構外	第79図	1/3	安山岩	円形縦。片面と小口面に敲打痕	124.0	79.0	67.0	934.0
153	磨石類	外横B区	第79図	1/3	安山岩	不整形縦。片面と小口面に敲打痕	108.0	76.0	49.0	527.0
154	磨石類	外横C区	第79図	1/3	安山岩	方形棒状縦。小口に敲打痕	148.0	69.0	61.0	1088.0
155	磨石類	C46	第79図	1/3	安山岩	円形縦。両面と側面に敲打痕	118.3	67.6	30.8	333.9
156	磨石類	表土	第79図	1/3	安山岩	円形縦。両面に敲打痕	103.0	57.0	39.0	229.0
157	磨石類	1号トレンチ試掘	第79図	1/3	安山岩	円形縦。両面と側面に敲打痕	115.0	65.0	52.0	587.0
158	磨石類	2号トレンチ	第80図	1/3	安山岩	円形縦。両面と側面に敲打痕	110.0	67.0	37.0	322.0
159	磨石類	搅乱	第80図	1/3	花崗岩	円形縦。両面に敲打痕	94.0	72.0	48.0	481.0
160	石皿	搅乱	第80図	1/3	安山岩	円形縦。両面に敲打痕	76.0	55.0	41.0	236.0
161	石皿	立食 (H29-10-24)	第80図	1/3	安山岩	円形縦。両面に敲打痕	118.0	60.0	40.0	377.0
162	石皿	5号住居跡	第80図	1/4	安山岩		105.0	84.0	73.0	805.0
163	石皿	5号住居跡	第80図	1/4	安山岩		180.0	238.0	112.0	6000.0
164	石皿	15号土坑	第81図	1/4	安山岩	被熱、煤付着	148.0	149.0	72.0	1674.0
165	石皿	57号土坑	第81図	1/4	安山岩	多孔石か	126.0	121.0	60.0	1191.0
166	石皿	遺構外	第81図	1/4	デイサイト	裏面凹形	139.0	178.0	93.0	1614.0
167	石皿	搅乱 (5号住居内)	第81図	1/4	安山岩	加工溝あり	170.0	181.0	66.0	2750.0
168	縫石皿	4号住居跡	第81図	1/4	安山岩		227.0	152.0	69.0	3300.0
169	縫石皿	4号住居跡	第81図	1/4	安山岩		202.0	155.0	46.0	2413.0
170	縫石皿	4号住居跡	第82図	1/6	安山岩	疊らに敲打痕あり	457.0	392.0	110.0	30500.0
171	縫石皿	5号住居跡	第82図	1/4	安山岩		179.0	128.0	48.0	1933.0
172	縫石皿	7号住居跡	第82図	1/4	安山岩		220.0	175.0	45.0	2552.0
173	縫石皿	7号住居跡	第83図	1/4	安山岩	多孔石	211.0	199.0	69.0	3800.0
174	縫石皿	外横B区	第83図	1/4	安山岩		258.0	138.0	67.0	3054.0
175	大型磨石	1号住居跡炉石	第83図	1/6	安山岩	炉石に再利用。凹み部・敲き部あり	360.0	114.0	80.0	4750.0
176	大型磨石	1号住居跡炉石	第83図	1/6	安山岩	炉石に再利用。凹み部・敲き部あり	310.0	136.0	126.0	6600.0
177	大型磨石	外横B区	第83図	1/6	花崗質砂岩	小口に敲打痕	291.0	76.0	59.0	2444.0

#### 石製品一覧

通し番号	器種	遺構	図版番号	縮尺	石材	所見	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
1	有孔石製品	30号土坑	第84図	1/1	漂石	2mm程度の円孔が2つ	19.0	20.0	5.0	2.9
2	有孔石製品	30号土坑	第84図	1/1	漂石	2mm程度の円孔が2つ	17.0	22.0	3.0	1.4
3	けつ伏耳飾か	31号土坑	第84図	1/1	チャート	表面に敲打状の痕跡	31.0	15.5	9.0	4.9
4	けつ伏耳飾	63号土坑	第84図	1/1	漂石	裏裏面両方から孔を空けようとした痕跡、未真通の孔あり。	34.0	34.0	10.0	12.1
5	石製装飾品	7号住居跡上層	第84図	1/1	瑪瑙 (翡翠)	片側より4.5mm程度の孔を空けている	27.0	18.5	8.0	7.1

# 第4章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

酒呑場遺跡(北杜市長坂町長坂上条所在)は、標高712m前後の丘陵地に広がる縄文時代の集落を中心とした遺跡である。今回は、炭化物(炭化材と土器付着炭化物)の樹種同定と年代測定を実施し、遺構、遺物の年代に係る資料を得るとともに、炉石付着物の由来を調べるために赤外分光分析と炭素・窒素同位体分析を実施する。また、埋蔵等土壤に関して、遺体埋納の痕跡を調べるためにリン・カルシウム・炭素分析と脂質分析を行う。

## 第1節 炭化物の分析

### 1. 試料

分析試料は、試料番号1(1住 炭化材 C-002)、試料番号2(4住-1 p-1656付着炭化物)、試料番号3(7住炭化材-1)の3点である。年代測定は3点全て、炭化材同定は試料番号1と3、顕微鏡観察は試料番号2を行う。

### 2. 放射性炭素年代測定

#### (1)分析方法

試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lであるが、試料番号3は、炭素の損耗を防ぐため、アルカリの濃度を薄く(0.1mol/L)して処理する(AaAと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

δ13Cは試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3.2(Bronk,2009)を用いる。較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)を用いる。

#### (2)結果・考察

結果を第6表、第86図に示す。今回の試料は状態が良く、測定に必要な炭素量は十分回収できている。同位体補正を行った測定値は、試料番号1(1住 炭化材 C-002)は $3,220 \pm 25\text{BP}$ 、試料番号2(4住-1 p-1656付着炭化物)は $4,205 \pm 30\text{BP}$ 、試料番号3(7住炭化材-1)は $4,165 \pm 30\text{BP}$ である。

暦年較正は、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、その後訂正された半減期(14Cの半減期 $5,730 \pm 40\text{年}$ )を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差 $2\sigma$ の暦年代は、試料番号1(1住 炭化材 C-002)は3,544~3,377calBP、試料番号2(4住-1 p-1656付着炭化物)は4,845~4,628 calBP、試料番号3(7住炭化材-1)の4,830~4,585calBPである。暦年較正値でみると、3,450年前後の試料番号1と4,700年前の試料番号2と3の2つのグループに分かれる。

第6表 放射性炭素年代測定結果

試料	種別/ 性状	方法	緯年較正代 (緯年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	緯年較正年代				Code No.
					年代値			確率	
試料番号1 1号住居跡 炭化材 C-002	炭化材 (クリ)	IW (AAA)	3220±25 (3218±26)	-25.7 ±0.5	σ cal BC 1506 - cal BC 1450 3455 - 3399 cal BP	0.682	TKA- 18991	pai- 11097	
					2σ cal BC 1595 - cal BC 1589 3544 - 3538 cal BP	0.011			
					cal BC 1532 - cal BC 1428 3481 - 3377 cal BP	0.943			
試料番号2 4住道跡-1 p-165付着 炭化材 (オコゲ)	木基	IW (AAA)	4205±30 (4204±28)	-24.3 ±0.5	σ cal BC 2887 - cal BC 2864 4836 - 4813 cal BP	0.229	TKA- 18992	pai- 11098	
					cal BC 2808 - cal BC 2760 4755 - 4709 cal BP	0.426			
					cal BC 2717 - cal BC 2713 4666 - 4662 cal BP	0.027			
					2σ cal BC 2896 - cal BC 2848 4845 - 4797 cal BP	0.294			
					cal BC 2814 - cal BC 2679 4763 - 4628 cal BP	0.660			
試料番号3 7号住居跡 炭化材-1	炭化材 (クリ)	0.1M (AAU)	4165±30 (4167±28)	-25.4 ±0.4	σ cal BC 2875 - cal BC 2852 4824 - 4801 cal BP	0.122	TKA- 18993	pai- 11099	
					cal BC 2728 - cal BC 2695 4677 - 4644 cal BP	0.381			
					2σ cal BC 2881 - cal BC 2833 4830 - 4782 cal BP	0.196			
					cal BC 2819 - cal BC 2662 4768 - 4611 cal BP	0.735			
					cal BC 2649 - cal BC 2636 4598 - 4585 cal BP	0.022			

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定期間 $\sigma$  (測定期間の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAAは酸・アルカリ・湿処理、AAUはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。

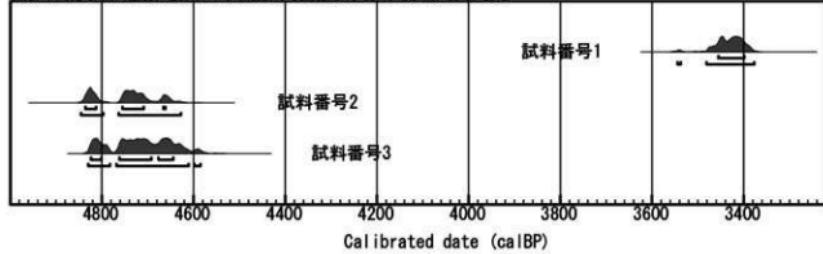
5) 年齢の計算には、0xCal v4.3.2を使用

6) 年齢の計算には、補正年代に0で緯年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。

7) 術目を丸めるのが慣例だが、校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$ が68.2%、 $2\sigma$ が95.4%である

0xCal v4.3.2 Brock Ramsey (2017); r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)



第86図 历年較正結果

### 3. 炭化材同定

#### (1) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

#### (2) 結果・考察

樹種同定結果を第7表に示す。炭化材は2点とも広葉樹のブナ科クリ属クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) である。形態的特徴は、環孔材で、孔隙部は3-4列、孔隙外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高。

1号住居跡は、覆土から炭化材が多量に出土しており、焼失住居あるいは焼失部材を投棄した可能性が考えられている。同定を実施した炭化材は重木の可能性があるとされる。一方、7号住居跡の炭化材は、覆土内から出土しているが、状況や形状の詳細は不明である。これ

らの炭化材は、いずれも広葉樹のクリに同定された。クリは二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が

第7表 樹種同定結果

番号	遺構	試料名	状態	形状等	種類
1	1号住居跡	炭化材 C-002	炭化材	柾目状	クリ
3	7号住居跡	炭化材-1	炭化材	板目状	クリ

高い。材質を考慮すれば、強度が高く腐りにくいクリ材を意図的に垂木などの建築部材に利用したことが推定される。

酒呑場遺跡では、これまでの調査でも縄文時代中期とされる竪穴住居跡のpit内から出土した炭化材がクリに同定されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2005)。また、酒呑場遺跡が位置する岐北地域では、上ノ原遺跡(旧須玉町)の縄文時代後期とされる住居跡出土炭化材でクリが優占する結果が得られているほか、上北田遺跡(旧白州町)の縄文時代前期とされる竪穴住居跡出土炭化材、社口遺跡(旧高根町)の縄文時代中期後半とされる竪穴住居跡出土炭化材、宿尻遺跡(若崎市)の縄文時代後期とされる竪穴住居跡出土炭化材等でもクリが確認されている(伊東・山田2012)。今回の結果は、既存の報告例とも整合的である。

#### 4. 顕微鏡観察（写真図版22）

##### (1)分析方法

土器（4号住居遺物-1）付着炭化物をマクロレンズによる接写、マイクロスコープによる観察・撮影を行うとともに、付着炭化物の破片を電子顕微鏡で観察する。

##### (2)結果・考察

土器付着物は、炭化した鱗茎が複数個(10個前後?)付着した状態である。ほとんど鱗茎の形状をなしていないものから、断面形状が観察できるものまであるが、保存状態は全体的に悪い。の中でも保存のよい個体をみると、鱗茎は黒色、広卵形で、7mm×5mm程度。崩れているが、構成する薄い葉が中軸から層状に巻いて重なる構造が確認される。形状や鱗茎葉肉部の細胞形状をみると、佐々木ほか(2016)等でいわれている「ツルボ型」に似るが、保存状態が悪いため、種類を特定することは難しい。縄文土器に付着した炭化鱗茎は、県内では水呑場北遺跡など数例が認められている。

### 第2節 炉石付着物の分析

#### 1. 試料

試料は1号住居跡の炉石（南側）に付着した黒色物(試料番号4)である。調理等の痕跡の可能性があり、赤外分光分析(フーリエ変換赤外線吸収スペクトル法、FT-IR)と安定同位体分析を実施する。

#### 2. 赤外分光分析

##### (1)分析方法

微量採取した黒色物をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微FT-IR装置（サーモエレクトロン（株）製Nicolet Avatar 370,Nicolet Centaurus）を利用して、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アバーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IRスペクトルと共に図中に併記しているので、そちらを参照されたい。

##### (2)結果・考察

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて(すなわち吸収されて)、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数(波長の逆数cm<sup>-1</sup>で示す)、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるか調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標本化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、

## 測定情報

サンプルスキャン回数: 128  
 バックグラウンドスキャン回数: 64  
 分解能: 4.000  
 サンプル ゲイン: 8.0  
 ミラー速度: 1.8988

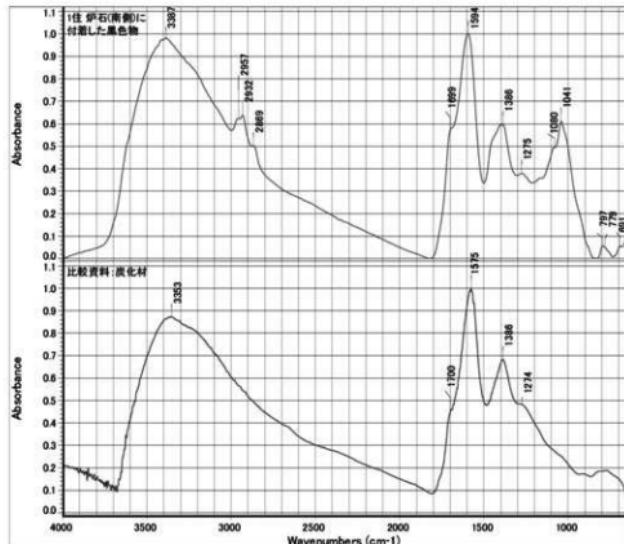
## 光学系の構成

検出器: MCT/A  
 ビームスプリッタ: KBr  
 光源: IR

## 備考

ダイヤモンドエクスプレス成型  
 複数透過法  
 可変アバーチャ使用

ベースライン補正  
 スムーズィング処理  
 ヨーク正規化



第 87 図 FT-IR スペクトル

未知物質の同定をすることもできる(山田, 1986)。

FT-IRスペクトルを第87図に示す。なお、図中には、比較資料として炭化材の実測スペクトルを併記している。

黒色物の赤外線吸収特性は、3400cm<sup>-1</sup>付近の幅広い吸収帯のほか、1594cm<sup>-1</sup>、1386cm<sup>-1</sup>、1041cm<sup>-1</sup>の強い吸収帯や2957cm<sup>-1</sup>、2932cm<sup>-1</sup>、2869cm<sup>-1</sup>、1699cm<sup>-1</sup>、1275cm<sup>-1</sup>、1080cm<sup>-1</sup>、797cm<sup>-1</sup>、779cm<sup>-1</sup>、691cm<sup>-1</sup>の吸収帯によって特徴付けられる。このうち、3400cm<sup>-1</sup>付近の吸収帯はO-H伸縮振動、2957cm<sup>-1</sup>、2932cm<sup>-1</sup>、2869cm<sup>-1</sup>の吸収帯はメチル基およびメチレン基のC-H伸縮振動、1699cm<sup>-1</sup>の吸収帯はC=O伸縮振動、1594cm<sup>-1</sup>の吸収帯はC=C伸縮振動、1386cm<sup>-1</sup>の吸収帯はC-O伸縮振動あるいはO-H変角振動と予想される。なお、797cm<sup>-1</sup>、779cm<sup>-1</sup>のダブレット吸収と691cm<sup>-1</sup>の吸収は石英に特有の振動で、1041cm<sup>-1</sup>付近の極大吸収はSi-O伸縮振動と判断される。

パリノ・サーヴェイ(株)では試料の出所が既知の物質について、同一測定条件で赤外線吸収スペクトルを測定した例がいくつあるが(未公表)、遺跡で検出される有機質遺物の代表としては漆、天然アスファルト、松脂、動植物油、炭化物などの調査例がある。これらは、いずれも固有の吸収帯があり、漆では3400、2930、2860、1720、1620、1450、1270cm<sup>-1</sup>、天然アスファルトでは2960、2920、2860、1700、1610、1460、1380cm<sup>-1</sup>と脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯に特徴がある。また、松脂は1700cm<sup>-1</sup>、動植物油は1740cm<sup>-1</sup>付近に特徴的な吸収帯があり、炭化物は3400cm<sup>-1</sup>、1600cm<sup>-1</sup>、1390cm<sup>-1</sup>付近に見られる極大吸収によって特徴付けられる。

黒色物の赤外線吸収特性には、2957cm<sup>-1</sup>、2932cm<sup>-1</sup>、2869cm<sup>-1</sup>にメチル基およびメチレン基のC-H伸縮振動による吸収が僅かに見られるものの、基本的には3387cm<sup>-1</sup>、1594cm<sup>-1</sup>、1386cm<sup>-1</sup>付近の極大吸収のほかには珪酸塩鉱物に関連した1041cm<sup>-1</sup>および797cm<sup>-1</sup>、779cm<sup>-1</sup>、691cm<sup>-1</sup>の吸収が確認されるのみである。赤外線吸収特性から材質を判断することは難しいが、これまでに実測した各種有機化合物の中では、比較試料として掲げた炭化材のスペクトルパターンに類似する。黒色物が何らかの有機物が炭化したものである可能性が評価されるものの、赤外分光分析では元の物質まで言及することは難しい。

### 3. 炭素・窒素同位体分析

#### (1)分析方法

測定は、東京大学総合研究博物館タンデム加速器分析室の協力を得た。使用機器は、安定同位体比質量分析装置（EA-IRMS：元素分析計／質量分析計、元素分析計：EuroEA3028-HT（EuroVector社製）、質量分析計：IsoPrime(Micromass社）である。

試料をスズカプセルに入れて封入し、機器にセットする。スズカプセル中の試料は、自動的に加熱された燃焼管に投入される。燃焼管内では、酸素ガスを瞬間に導入することによって、スズの燃焼熱を利用して瞬間に高温(一千度前後)となり、一瞬にして試料を燃焼させる。燃焼によって発生した気体を、キャリアガス(He)とともに還元管を通す。これによって、最終的に試料中の炭素は二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)に、窒素は窒素ガス(N<sub>2</sub>)にそれぞれ変化する。これをカラムに通すことで両者は分離し、熱電対検出器にクロマトグラム(分離された信号)として検出される。この信号をもとに、クロマトグラムの面積計算を行い、元素含有率を求める。この段階で、炭素含量、窒素含量、C/Nを測定できる。分離された窒素ガスと二酸化炭素は、順に質量分析計に導入される。質量分析計では、試料をイオン化して加速させ、強い磁力の中を通して進路を曲げることで、わずかに重さの違う同位体を分離する。ここで、窒素安定同位体比(15N/14N)、炭素安定同位体比(13C/12C)を測定する。このように、1回の試料の導入によって、炭素含量、窒素含量、C/N、窒素安定同位体比、炭素安定同位体比を測定可能だが、付着炭化物に含まれる炭素量は窒素量より圧倒的に多い。このため、炭素安定同位体比の検出用に試料の分量を合わせると、窒素量は出力不足となり、窒素安定同位体比を正確に求めることができなくなる。そこで、まず1回目の測定で炭素含量、窒素含量、C/N、炭素安定同位体比を求める、その際求められた窒素含量から、窒素安定同位体比を求めるのに必要な試料量を計算し、試料を増やして、再度分析し、窒素安定同位体比を求めている(2回測定している)。今回は、1回目の測定では試料を0.5mg、2回目の測定では試料を10mg使用している。

#### (2)結果・考察

分析の結果を第8表、第88図

第8表 安定同位体分析結果

に示す。炭素の安定同位体比を示すδ13Cは、食物連鎖の各系列において、最下位の植物か

試料番号	遺構	試料	δ13C (‰)	δ15N (‰)	C (%)	N (%)	C/N
4	1号住居跡	炉石(南側)に付着した黒色物	-25.8	3.8	33.9	0.8	48.9

ら高位の動物まで大きな変化がないのが特徴である。産業革命前の陸上の植物は、δ13Cが-28～-24%程度のC3植物と、-11～-9%程度のC4植物に大きく分けられる。大部分の植物質食料はC3植物で、日本列島のC4植物は、ヒエ・アワ・キビなど雑穀類が主なメンバーになる。栄養源としてC3植物を摂取した動物のδ13Cは、C3植物とほぼ同程度の値となる。他方、C3植物とC4植物の双方を摂取した動物は、その摂取割合に応じて、δ13CがC3植物寄りかC4植物寄りになる。このように、試料のδ13Cと、食物連鎖系一次生産者のδ13Cを比較することで、試料の由来物がどの食物連鎖の系列に属するものであるのか、また試料の由来物の栄養源がどこにあったのかを推定できる。

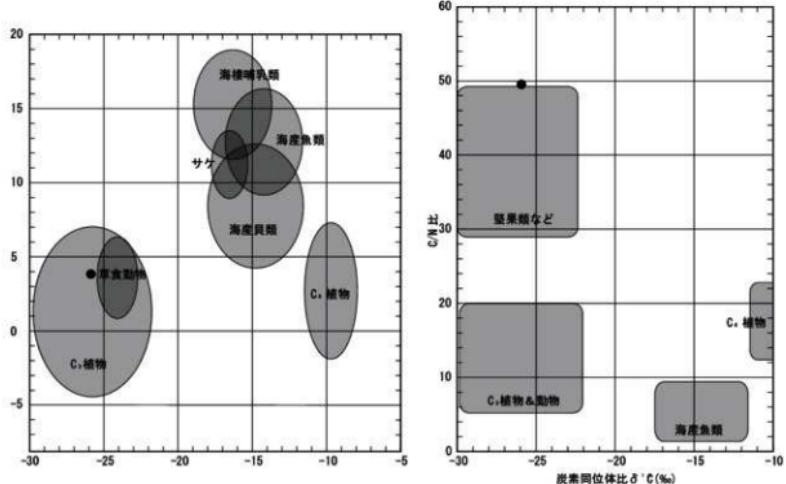
産業革命以後、δ13Cが小さい化石燃料の大量消費により現代の大気中の二酸化炭素のδ13Cは低下し続けている(C13-Suess効果)。現代の大気中の二酸化炭素のδ13Cは8.0%程度であるが、産業革命以前は、-6.4%程度と見積もられている(Friedli et al.,1986)。この差の分だけ、産業革命以前の陸上動植物のδ13Cは、現代に比べると大きくなる。

海水中の食物連鎖系一次生産者である、海産植物プランクトンや底生珪藻類、産業革命以前のδ13Cは不明である。現代の温帯海域では-20%程度で、C3植物とC4植物の中間的な値となっている。日本近海を含む北太平洋では、現代の表層海洋のδ13Cは、産業革命以前に比べて0.8～1.0%程度小さくなっていると推算されている(Eide et al.,2017)。海洋におけるC13-Suess効果は、陸上に比べるといふんか小さいようである。

第88図は、遺跡出土の動植物遺物と現生の食材を用いて作成した日本列島における食料資源の炭素窒素同位体比である。現生食材のδ13Cは、C13-Suess効果を踏まえた補正を行なっている。窒素の安定同位体比を示すδ15Nは、食物連鎖の系列において、高位になるほど大きくなっていくのが特徴である。よって、δ15Nからは、試料の由来物の食物連鎖の栄養段階が推定できる。また、海洋中は陸上よりも食物連鎖の段階数が多いので、海洋生物の食物連鎖上位者

は陸上の食物連鎖上位者よりも  $\delta^{15}\text{N}$  が大きいという特徴もある。窒素はタンパク質に由来するので、総炭素原子数/総窒素原子数 (C/N比) も、試料の由来を推定する尺度となる。つまり、タンパク質を豊富に含んだ肉・魚類は窒素を多く含むので、C/N比が比較的小さく、タンパク質が少ない堅果類や果実、海藻類などは、C/N比が大きくなる。C3植物とC3植物を摂取した草食動物は、 $\delta^{13}\text{C}$  と  $\delta^{15}\text{N}$  では区別できないところがあるが、C/N比によって堅果類などを分離することができる。これら  $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 、C/N比の3つの指標について、試料とC3植物、C3植物を摂取した草食動物、C4植物、海産小型魚、海産大型魚、海棲哺乳類などのグループが持つ範囲を比較することで、炭化物試料の由来について推定することができる。

炭化物の由来は、 $\delta^{13}\text{C}$  が-26‰程度であること、C/N比が30を超えることから、タンパク質の少ないC3植物由来と推定される。付着物が植物質食糧由来であれば、図が示すように堅果類のような穀粉質のものが考えられる。ただし、微粉となった炭化材や燃料材に由来する煤なども同様な値になることが予想されるため、食糧由来かどうかを決めることは難しい。



第88図 測定結果と食材の比較

### 第3節 埋設土器等の土壤の分析

#### 1. 試料

試料は、試料番号5(5住-1 埋甕内部の土)、試料番号6(5住-1 埋甕 表外の土)、試料番号7(5住-2 P-3305(個体土器混入土)、試料番号8(7住-1 1号埋甕内の土)、試料番号9(7住-2 2号埋甕内の土)、試料番号10(7住 住居覆土の土)、試料番号11(31号土坑 繰集中層と土器集中層の中間の土)、試料番号12(56号土坑-107(土器内中間・底付近))、試料番号13(56号土坑 土坑内堆積土壤)の9点である。リン・カルシウム・炭素分析は全点、脂質分析は試料番号7と12の2点について行う。

#### 2. リン・カルシウム・炭素分析

##### (1) 分析方法

有機炭素はチューリン法、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解一バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法(土壤環境分析法編集委員会,1997、土壤標準分析・測定法委員会,1986)に従った。以下に各

項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105°Cで4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

有機炭素は、粉碎土試料0.100~1.000gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アソニウム液で滴定する。滴定値および加热減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

リン酸、カルシウム含量は、粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO<sub>3</sub>)約10mlを加えて加热分解する。放冷後、過塩素酸(HClO<sub>4</sub>)約10mlを加えて再び加热分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P2O5)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干涉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加热減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P2O5mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

## (2)結果・考察

土壤化学分析結果を第9表に示す。野外土性(ペドロジー学会編、1997)は、全試料でSiC(シルト質埴土)であり、土色は10YR2/2黒褐色~10YR3/2黒褐色と土質に大きな差はない。腐植含量は4.48~5.50%であり土質に相応し大きな差はない。全リン酸は7住の1号埋蔵土の土、住居覆土の土で3.90~3.97mg/gと分析試料中では相対的に少ない。これに対して5住の遺物番号2(P3305)混入土、31土坑の礫集中層と土器集中層の中間の土、56土坑の遺物番号107(土器内中間・底付近)では6.93~7.44mg/gと相対的に多い。他の試料は4.33~5.97mg/gであり、リン酸含量が全体的に多く保持される。カルシウム含量は1.82~3.68mg/gとリン酸含量に比べると全体的に少ない傾向があり、リン酸含量との間に相関関係は示されない。

一般的に炭素含量は、主に植生繁茂の指標として用いられ、その炭素の集積量は主に植物遺体供給量に規定される。気候的要因による植生の繁茂状態が、炭素含量に大きく影響を与えるとされる。そして、リン酸の多くが植物に由来することが知られている。

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄やアルミニウム

第9表 土壤化学分析結果

試料名		土色	土性	有機炭素C(%)	腐植(%)	全リン酸P2O5(mg/g)	全カルシウムCaO(mg/g)	
5	5号住居跡 遺物-1	埋蔵部内部の土	10YR2/2 黒褐	SiC	2.90	5.00	5.12	2.32
6		埋蔵部外の土	10YR3/2 黒褐	SiC	2.60	4.48	4.33	2.02
7	5号住居跡 遺物-2	P-3305(個体土器) 混入土	10YR2/2 黒褐	SiC	3.12	5.38	7.44	2.91
8	7号住居跡 遺物-1	1号埋蔵土の土	10YR3/2 黒褐	SiC	2.61	4.50	3.90	3.68
9		2号埋蔵土の土	10YR3/2 黒褐	SiC	2.68	4.62	4.54	2.41
10	遺物-2	住居覆土の土	10YR3/2 黒褐	SiC	2.88	4.97	3.97	2.18
11	31号土坑	礫集中層と土器集中層の中間の土	10YR3/2 黒褐	SiC	2.97	5.12	6.93	2.45
12	56号土坑	遺物番号107(土器内中間・底付近)	10YR2/2 黒褐	SiC	3.19	5.50	7.06	2.26
13		土坑内堆積土壤	10YR3/2 黒褐	SiC	2.92	5.03	5.97	1.82

## 備考

(1) 土性: 土壌調査ハンドブック改訂版(ペドロジー学会編、1997)の野外土性による。

SiC...シルト質埴土(粘土25~45%、シルト45~75%、砂0~30%)

(2) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

と難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壤や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壤中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが(Bowen,1983; Bolt・Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g(川崎ほか,1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では6.0mg/gを超える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1~50mg/g(藤賀,1979)といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壤中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壤中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

今回の分析調査では、全試料がリン酸の天然賦存量である3.0mg/gを超える特徴的に多い試料である。腐植に伴うリン酸含量の増加とも考えられるが、上述したように6.0mg/gを超えるリン酸含量を保持する試料が、5住-2混入土、31土坑の礫集中層と土器集中層の中間の土、56号土坑-107(土器内中間・底付近)の3点で示され、カルシウム含量は付随していないものの特徴的に多い。また、比較試料である56号土坑の土坑内堆積土壤では、6.0mg/gには届かないものの5.97mg/gと多く保持する。統いて遺構毎の比較試料と比較してみると、5住-1の埋蔵内部の土、5住-2の混入土、7住-2の2号埋蔵土の土、31土坑の礫集中層と土器集中層の中間の土、56号土坑-107(土器内中間・底付近)でリン酸が顕著に多いことが示され、リン酸含量の結果からは墓としての利用がされたと考えられる。ただし、遺跡全体をみると7住ではリン酸の保持量が特徴的ではないと考えられるため、今回の分析結果からは不明瞭である。また、カルシウム含量が全試料で少ないとから、墓坑以外の使用目的として利用された可能性も挙げられるが、これについては言及することは出来ない。

したがって、今回の分析調査では5住、31号土坑、56号土坑では墓として利用されたなど人為的影響の可能性がある。しかし、これらの試料では脂質が未検出であること、酪農試験場の牧草地として使われていた経緯などから、後代の影響が及んでいる可能性もあるため、詳細な検討は今後の課題としたい。

### 3. 脂質分析

#### (1)分析方法

分析は、坂井ほか(1996)に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。土壤試料が浸るに十分なクロロホルム:メタノール(2:1)を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバボレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸-メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セッパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャビラリーカラム(ULBON,HR-SS-10、内径0.25mm、長さ30m)を装着したガスクロマトグラフィーを使用した。注入温度は250°C、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャビラリーカラム(J&W SCIENTIFIC,DB-1、内径0.36mm、長さ30m)を装着する。注入温度は320°C、カラム温度は270°C恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

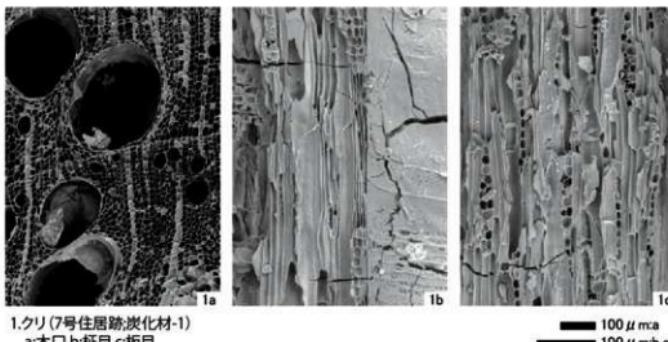
#### (2)結果・考察

分析の結果、試料番号7(5住-2混入土)、試料番号12(56土坑-107(土器内中間・底付近))とともに、脂肪酸・ステロールが未検出である。このため、今回の脂肪酸の結果から由来を知ることは難しい。

#### 引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信,1991.中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28-36.
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.1980.土壤の化学.岩田進午・三輪齊太郎・井上隆弘・陽 捷行訳.学会出版センター,309p.

- Bowen H.J.M., 1983. 環境無機化学 - 元素の循環と生化学 - . 浅見輝男・茅野充男訳、博友社. 297p.
- Bronk RC., 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 土壤標準分析・測定法委員会編, 1986. 土壤標準分析・測定法. 博友社. 354p.
- Eide, M., Olsen, A., Ninnemann, U.S., Eldevik, T., 2017. A global estimate of the full oceanic  $^{13}\text{C}$  Suess effect since the preindustrial: Full Oceanic  $^{13}\text{C}$  Suess Effect. Global Biogeochemical Cycles 31, 492-514.
- Friedli, H., Loetscher, H., Oeschger, H., Siegenthaler, U., Stauffer, B., 1986. Ice core record of the  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  ratio of atmospheric CO<sub>2</sub> in the past two centuries. Nature 324, 237-238.
- 藤賀 正, 1979. カルシウム. 地質調査所化学分析法, 52, 57-61.
- 林 昭三, 1991. 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所. 81-181.
- 伊東隆夫, 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所. 66-176.
- 伊東隆夫, 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所. 83-201.
- 伊東隆夫, 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所. 30-166.
- 伊東隆夫, 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所. 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社. 449p.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久, 1991. 九州地域の土壤型別蓄積量の形態別計量. 農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積量の再生循環利用技術の開発, 23-27.
- 農林省林水産技術会議事務局監修, 1967. 新版標準土色帖.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2005. 酒呑場遺跡における自然科学分析. 「酒呑場遺跡(第1~3次) - 豊農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書 - (遺物編・本文編)」. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第216集. 山梨県教育委員会. 101-109.
- ペドロジ学会編, 1997. 土壌調査ハンドブック改訂版. 博友社. 169p.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas L., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Stuiver RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- 坂井良輔・小林正史・藤田邦雄, 1996. 灯明皿の脂質分析. 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)第二分冊. 財團法人 富山県文化振興財團. 24-37.
- 佐々木由香・米田恭子・小林和貴, 2016. 繩文時代から弥生時代の出土炭化鱗茎同定の試み. 日本国文化科学会第33回大会研究発表要旨集, 30-31.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982. 図説木材組織. 地球社. 176p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977. Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of  $^{14}\text{C}$  Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998. 广葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤智之・佐伯 浩(日本語版監修). 海青社. 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山田富貴子, 1986. 赤外線吸収スペクトル法, 機器分析でのびき第1集. 化学同人. 1-18.



1.クリ(7号住居跡:炭化材-1)

a:木口,b:粧目,c:板目

第89図 炭化材顕微鏡写真

## 第5章 総括

### 第1節 酒呑場遺跡の集落変遷

今回の調査によって、酒呑場遺跡の集落の一端が明らかとなった。改めて既往の発掘調査結果を照らし合わせて、主に縄文時代中期後半を主体とした集落の変遷について見ていただきたい。

縄文時代の集落の変遷過程については、野代幸和氏によって、5段階にまとめられている（野代2001）。すなわちⅠ期（前期：中越式・諸磯式）、Ⅱ期（中期前葉：五領ヶ台式から新道式）、Ⅲ期（中期中葉：藤内・井戸尻式）、Ⅳ期（中期後葉：曾利式）、Ⅴ期（後期前葉：称名寺式）である。Ⅰ期は台地の中心部に35軒ほど、Ⅱ期は北西部の台地縁辺部から中央部を中心に67軒、沼沢式期から徐々に環状に分布し始める。Ⅲ期になると台地中央北側を中心で大規模な環状集落が形成され始め、藤内式期41軒、井戸尻式期43軒と、最盛期を迎える。Ⅳ期の曾利式期は35軒と規模が縮小し、Ⅴ期にはA区に1軒のみと集落がみられなくなる（第1次～4次までの住居跡軒数）。

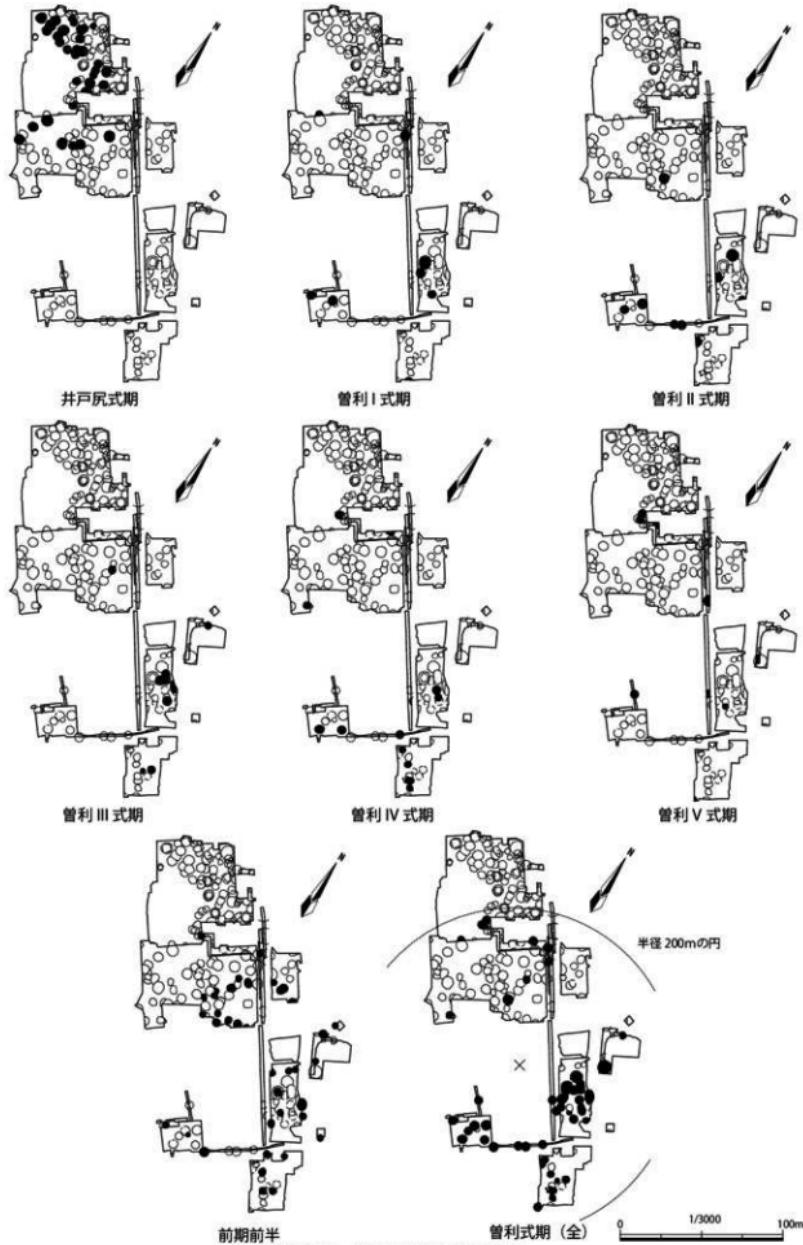
今回の調査では、Ⅰ期（諸磯b式）の住居跡2軒（1号住居跡を含めれば3軒）、Ⅳ期の住居跡10軒が見つかった。本調査区ではⅠ期の住居跡はまばらだが、該期の多くの土坑が検出されており、集落域として機能していたとみてよいだろう。Ⅱ期では、五領ヶ台式の土器が遺構覆土内から出土しているが、遺構に帰属すると考えられるものはない。Ⅱ期からⅢ期の沼沢式から藤内式までの土器はほとんど出土がなく、若干藤内式の土器が含まれる程度であった。

さて、Ⅲ期の後半に該当する井戸尻式から、Ⅳ期の曾利式期にかけて、丁寧にみていただきたいと思う（第90図）。井戸尻式期の集落分布は、台地北部の環状集落のやや中央よりにまとまる傾向を示す。今回の第5次調査区地点からは、曾利Ⅰ式期の土器が主体の住居跡（5号住居跡、11号住居跡）覆土内より井戸尻式の土器が出土し、曾利Ⅰ式でも古相・過渡期的な位置づけとなりうる。既往の調査事例において曾利Ⅰ式期は、A区1軒、B区4軒、C区とG区に1軒ずつと、それまでの井戸尻式期の住居跡分布域から突然地点を変え、台地のやや南部寄りにボツボツと認められるようになる。5号住居跡の埋設土器は井戸尻式期の最終段階の面影をよく残しており、曾利式期の集落形成の先駆けとして評価することができるかもしれない。曾利Ⅱ式期は本調査区で4軒（4号住居跡、7号住居跡、12号住居跡、13号住居跡）、A区1軒、B区3軒、1区で1軒確認できる。曾利Ⅰ式期でまばらに拡散した居住域のなかを埋めていくように展開していく。曾利Ⅲ式は、本調査区ではⅡ式の住居跡の覆土内に一部含まれるもの、帰属する遺構はない。ただし、A区2軒、B区4軒、1区とJ区で1軒ずつと、台地の東側では継続的に展開している様子が分かっている。曾利Ⅳ式は、本調査区より3軒（1号住居跡、6号住居跡、14号住居跡）、A区4軒、B区2軒、C区2軒、G区1軒、1区1軒となる。本調査区やA区に分布がやや多く、台地の南側に集中していた可能性もある一方で、C区にも2軒認められるところから、再び集落が外側へと拡大していった状況が想定される。曾利Ⅴ式は本調査区、A区、B区で1軒ずつ、G区で2軒と、南側では減少傾向が認められるが、C区では近接して3軒分布している。いずれかに集中する傾向ではなく、曾利式期の集落が形成された時期（曾利Ⅰ式）の分布域とほぼ同じように、散在する傾向が認められる。なお、1区では曾利Ⅳ式期の配石遺構なども確認される。

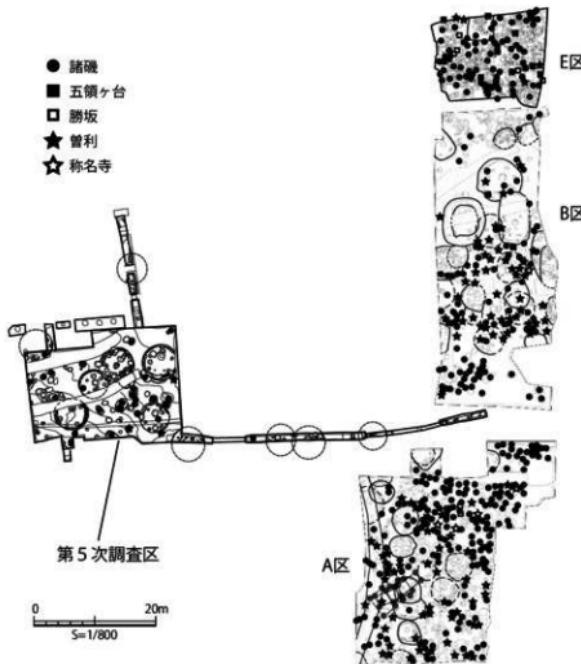
Ⅷ期（称名寺式）になると、遺構はほとんど認められず、本調査区では遺物の出土もない。A区で住居跡1軒や数基の土坑が検出されており、集落の展開は台地の南部から長坂上条遺跡にかけてへと再度変遷していくと思われる。

第91図は酒呑場遺跡のA区・B区・E区、今回の第5次調査区のみを取り上げた遺構分布図で、このうち時期の判明している土坑を時期ごとに重ねてプロットしたものである。酒呑場遺跡の過去の調査区における土坑の検討は、同じく野代氏がまとめている（野代2008）。今回の調査区は、過去の調査区に比較すると土坑の分布は希薄だが、そのほとんどが諸磯b式期を占めている。過去の調査区においても、曾利式期の住居跡の軒数に対して曾利式期の土坑基数の比率は小さく、各期において土坑を用いる傾向が異なるという見解が見いだされている。また、住居跡の展開する領域と土坑の展開する領域も原則連動している様子で、Ⅱ期からⅢ期にかけての土坑は本調査区・A区・B区ではほとんど認められない。

今回の調査成果から再度当遺跡の集落展開についてまとめると、Ⅰ期（前期）の集落は本調査区の北東域を中心に環状的に集落を展開、Ⅱ期・Ⅲ期では台地の北側で環状集落を形成する。Ⅳ期では台地南側に集落の拠点は移動する。現状で確認されている曾利式期の遺構はA区・B区・本調査区に密度が高いが、第3次調査（I区）の所見では、浅いレ



第 90 図 酒呑場遺跡集落の変遷



第91図 酒呑場遺跡 台地南部域の土坑分布

ペルにあった曾利式期の遺構・遺物が耕作によって搅乱されている可能性が指摘されている。このことも踏まえて、Ⅱ期・Ⅲ期のものを超える大規模な環状集落が、本調査区とB区の中間に形成されていた可能性はますます高くなったといえる。

## 第2節 石窯について

今回の調査区では、炉石が残存する屋内石窯が合計5基確認された。基本的に残存率はよいが、中でも注目される①号住居跡の炉、②号住居跡・7号住居跡の炉についてそれぞれ所見を述べたい。

### ①号住居跡の炉跡について

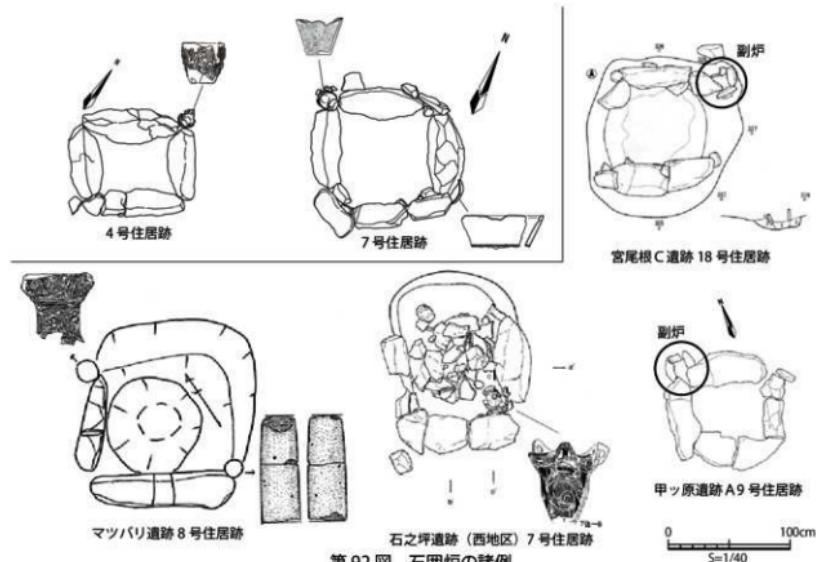
1号住居跡は埋設土器の年代観から曾利IV式期の所産と考えられる。石窯炉は北半分を搅乱により欠失しているが、側辺の炉石と住居入口側の炉石は良好に残存している。東側辺の炉石は2段で組まれており、1段目に凹み石が再利用されている。住居入口側の炉石は平坦面を上にむけており、この炉石と側辺の炉石のそれぞれの隅角部には、石棒状の大型磨石類（第83図175、176）を埋めて樹立させる。石窯炉に石棒や円柱状の櫛を用いる事例はまれにあり、火を伴う祭祀行為とする見方があるほか、柳原功一氏は“柱の象徴性”とみている（柳原2011）。

さて、1号住居跡の炉石には、燃焼部側の縁に黒色物質がべったりと付着していた。この黒色物質については、從来その存在のみ指摘されていたが、分析・考察がおろそかになっていることが腰原綾氏によって問題視されている（腰原1999）。今回、第4章の報告にあるように、この黒色物については赤外分光分析と安定同位体分析による理化学分析

を実施した。まず、赤外分光分析からは、これらが松脂や植物油脂などの由来となる可能性は低く、炭化物と推定された。さらに、安定同位体分析からは、炭化材と仮定した場合、堅果類などの澱粉質のものに由来する可能性が指摘できるようになった。黒色付着物は、タールの可能性も指摘されていたが、今回の分析結果ではその可能性は低いと推定される。澱粉質に由来するということだが、堅果類をペーストにしたものを炉石に貼り付けがを燃焼し、加熱を伴う簡単な調理をしたのだろうか。同様の事例の化学分析の増加が待たれる。

#### ②4号住居跡・7号住居跡の炉跡について

4号住居跡と7号住居跡はいずれも曾利Ⅱ式新段階の住居跡と推定される。4号住居跡の石圓炉は4辺を斜めに立てて置き、炉石はほとんどないもので、7号住居跡のものは入口側以外の3辺を斜めに立て、炉石を用いるタイプのものである。いずれの炉跡も注目されるのが隅角部外側に据えられた小型の土器である。4号住居跡は完形のものを北東隅に、7号住居跡は上半部を欠く土器を北西隅に配置している。なお、7号住居跡では、対角となる南東隅に深鉢の口縁部の破片を炉石に咬ませて配置している。



第92図 石圓炉の諸例

これらは炉体土器を伴う石圓炉とは異なり、あくまで炉の外部に設置されるもので、土器の外面には被熱の痕跡やスズは認められない。同様の事例は管見の限り県内ではなく、長野県木曾町のマツバリ遺跡8号住居跡の例がある（日義村教育委員会1995）。マツバリ遺跡の事例も、やはり奥側、がの北西隅に下半部を欠く土器を配置しており、柳原功一氏はこれらの土器を「副炉」と同様の施設と推定する（柳原2011）。副炉とは「中期後半の方形石圓炉の右奥、あるいは左奥の隅に小形石圓い施設を設け」るもので（柳原前掲）、南信などをを中心にみられるようである。山梨県内においてもわずかではあるが副炉の存在が認められる。宮尾根C遺跡18号住居跡は石圓炉右奥に（北杜市教育委員会2009）、甲ヶ原遺跡A区9号住居跡では石圓炉左奥に認められる（山梨県教育委員会1998）。宮尾根C遺跡のものは曾利Ⅱ式、甲ヶ原遺跡では曾利Ⅲ式の年代観が与えられており、本遺跡の事例もほぼ同時期の所産である。

また、石之坪遺跡（西地区）7号住居跡では、炉内手前右隅にほぼ完形の土器が正位で出土している。閑間俊明氏はこれを廃棄行為パターンの一つとしている（閑間2008）が、本遺跡の事例も住居廃絶後に持ち出すことなくその場に

留めていることから、類似する状況としてもよいかもしれない。

土器の位置・向き問わず完形の土器が炉内に放置・遺棄される事例は柳原氏も指摘されている（柳原2001）。4号住居跡の炉内および炉外にかけては、ほぼ完形の深鉢（4住-1）が部位を異にして遺棄されており、意図的な行為と捉えることができる。繰り返しになるが2例のが跡に付設された小型の土器も、住居廃棄時に持ち去られたのではなく、あえて住居内に残したまま住居を手放していることは注意が必要で、なんらかの祭祀行為が伴っている可能性も考えられよう。

翻って、そもそも副炉の意義や、あえて土器を用いる理由、その用途（石畳炉内燃焼中に、何か物を置くなどの行為があったのか）については、十分な検討ができなかった。今後の課題としておきたい。

### 第3節 その他の遺構・遺物について

#### ①屋内土器埋設遺構（埋甕）について

住居内における土器埋設遺構は、本調査区内から5事例確認された。いずれも中期後半曾利式段階の所産である。なお、このうち7号住居跡では、2個体の土器を並列して埋設している。

第94図に、酒呑場遺跡の第1次～第4次調査までで確認された屋内土器埋設遺構の遺構図と埋設土器の実測図を用意した。既往の調査では、A区1号住居跡、10号住居跡、B区3号住居跡、4号住居跡、8号住居跡、16号住居跡、17号住居跡、C区85号住居跡、I区58号住居跡に認められている。ただし、B区4号住居跡は3号住居跡との重複部分からの出土であるため、遺構の帰属を判断するのは困難である。また、B区12号住居跡でも入口部付近出土の土器が埋設土器であった可能性を指摘されている。

埋設土器の属性には埋設場所、埋設姿勢、埋設部位（欠損状態）、土器の器種・法量などがあり、これらの属性分析から地域的特性などが論じられてきた。酒呑場遺跡のものは第1次～第4次調査までのものはすべて正位のものだったが、今回曾利1式期の5号住居跡から逆位に埋設された底部穿孔の長胴甕（5住-1）が発見された。同時期の屋外埋設土器遺構にも同様の事例があり（市川三郷町宮の前遺跡、甲州市殿林遺跡、山梨市上コブケ遺跡B区など）、比較検討の余地があるだろう。

ここで注目されるのが、5号住居跡a4ピット内から出土した小型の甕（5住-2）である。この土器は、ピット内の底に横位でほぼ完形のまま出土した。ピットの位置は住居跡の奥壁側で、入口側に埋設された長胴甕とは対立する位置にある。これらの土器間の型式差は小さく、併存していた可能性もある。近年東日本を中心に屋内埋設土器の集成および属性を検討した菊池祥宏氏によれば（菊池2016）、横位に埋設する事例は中期末以降に増加するとされている。なお、第4章土壤の化学分析では、5号住居跡、7号住居跡の埋設土器に含まれていた土壤のうち、5住-2が最もリン酸値の高い結果を示しており、土器棺墓としての利用も想定できる。

#### ②56号土坑出土土器について

56号土坑は曾利V式の土坑で、3個体の深鉢が底に埋納されていた（第55図107、第56図108、109）。107は胸部に打ち欠いたような痕跡があり、土器内の土壤分析の結果は高いリン酸値を示しているが、土坑の覆土自体も比較的リン酸値が高い。状況からすれば土坑墓と想定しうるが、土器は副葬品と土器棺いずれの可能性も考えられる。

注目されるのが108の深鉢である。胸部は綾杉文を地文とし、曾利IV式新段階からV式古段階に相当する型式である。底部は欠失しているが、それ以外の欠損は少なく、意図的なものと推定される。土器は4単位の波状口縁となり、2条の沈線が垂下し胸部を区画する。しかし、右側の1条はつなぎ弧文のように口縁部文様帶の次の単位へと続き、波頂部で渦巻文となる。胸部を区画する2条の沈線の間には斜行する沈線が連続的に刻まれるが、4単位のうち一つは円形の連続刺突（6個）となる。また、この円形刺突はそれぞれの渦巻文の左右に認められる。

円形刺突の数は、それぞれの渦巻文によって異なる。例えば、胸部の沈線間に円形刺突を施す箇所を始点として、土器を左回転させたときに正面に来る単位の刺突文数を（渦巻文左側・右側）で示すと、（4・2）、（2・4）、（0・4）、（4・4）となる。ただし、（4・4）となる単位の波頂部が一部欠失しており、4以上の数となる可能性も考えられる。なお、始点とした単位において胸部の沈線間に認められる円形刺突の数は6個であり、渦巻文

の左右（4・2）の和となっている。いずれも「2・4・6・8」の偶数により規定された数値となるが、これらから数列的法則性を読み解くことはできなかった。いずれにしても、偶数単位について曾利式期の土器群の単位（把手の数など）として普遍的に認められるものであり、このような“数”へのこだわりが、なんらかの物語性をもって土器に表されている可能性も考えられよう。

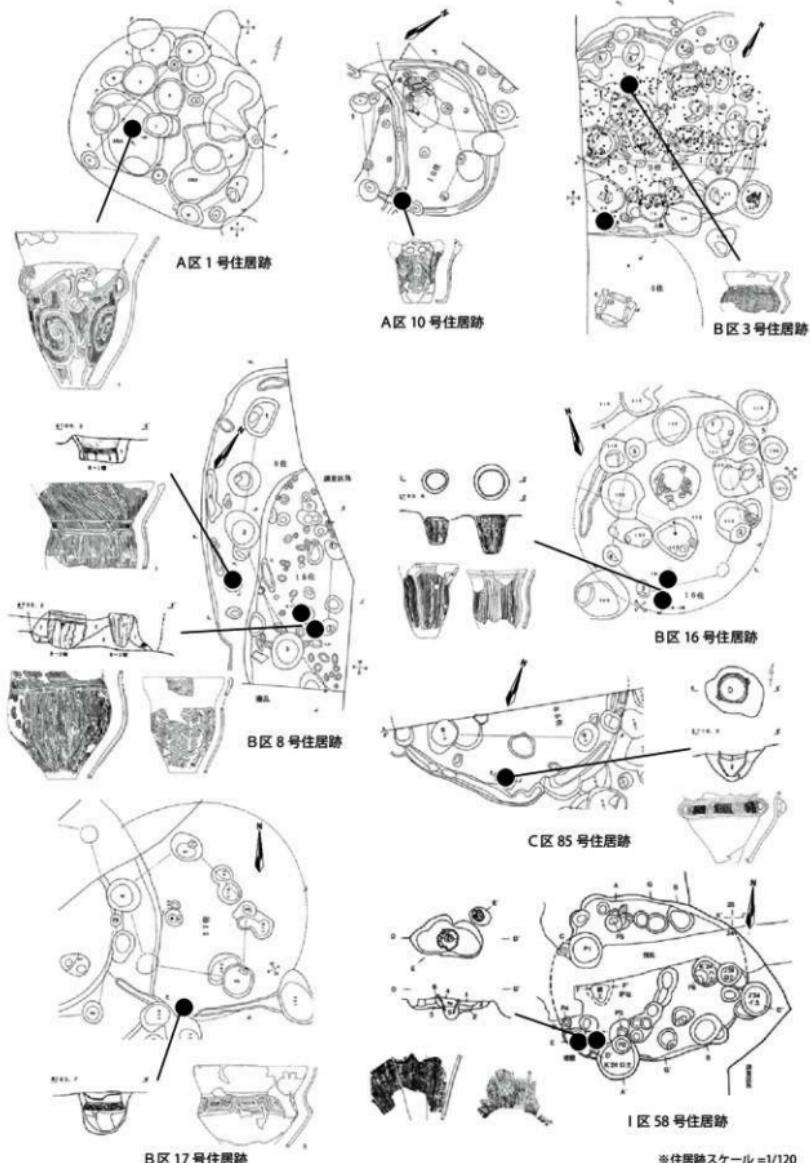
藤田富士夫は、縄文時代の「数」認識に関する資料について紹介しているが、いずれも土偶や土版・土製品に確認されるものが多く、土器の事例は少ない（藤田2006・2007）。しかし、多くの事例は同様に円形刺突で施されるものであり、藤田氏は「小石の記数法」と表現する。土器に刻まれた数が何を意味するかを直ちに説明することは困難だが、貴重な事例の一つとしてここに報告し、今後の研究に寄与したい。

#### 【参考文献】

- 間間俊明 2008 「屋内がるの関わる廐棄土器について」『考古学ジャーナル』第 578 号 ニューサイエンス社
- 菊池祥宏 2016 「縄文時代住居内埋設土器の展開」『Archaeo-Clio』第 13 号 東京学芸大学考古学研究室
- 柳原功一 2001 「方に放置された土器」『帝京大学山梨文化財研究所報』第 41 号 帝京大学山梨文化財研究所
- 柳原功一 2011 「石団炉の象徴性」『帝京大学文化財研究所研究報告』第 15 集 帝京大学山梨文化財研究所
- 柳原功一 2013 「奥壁側に山形の布石をもつ方形石団炉の系譜」『山梨県考古学協会誌』第 22 号 山梨県考古学協会
- 腰原綾 1999 「中部山岳地帯における屋内がるの変遷について」『天理大学考古学研究室紀要』3
- 野代幸和 2001 「酒呑場遺跡の集落変遷」『山梨県考古学協会誌』第 12 号 山梨県考古学協会
- 野代幸和 2008 「北杜市(旧長坂町)酒呑場遺跡の土坑について—第 1 ~ 2 次調査(A ~ E 区)を中心にして—」『研究紀要』24 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 日義村教育委員会 1999 『マツバリ遺跡』日義村の文化財 11
- 藤田富士夫 2006 「縄文時代の自然数列に関わる「数字」認識について」『考古学論究』第 11 号 立正大学考古学会
- 藤田富士夫 2007 「縄文人の記数法と“算術”的発見」『列島の考古学Ⅱ』 渡辺誠先生古稀記念論文集刊行会
- 北杜市教育委員会 2009 『宮尾根 C 遺跡』北杜市埋蔵文化財調査報告第 30 集
- 山梨県教育委員会 1998 『甲ヶ原遺跡Ⅳ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 145 集



第93図 56号土坑出土遺物に表現される“数の認識”



第94図 酒呑場遺跡の屋内土器埋設遺構

\*住居跡スケール=1/120

写真図版 1



調査区遠景 北東から釜無川方面を望む



調査区および遺跡全体 垂直撮影

写真図版 2



1号住居跡 検出状況（東から）



1号住居跡 土層断面（東西ベルト）



1号住居跡炉跡 検出状況



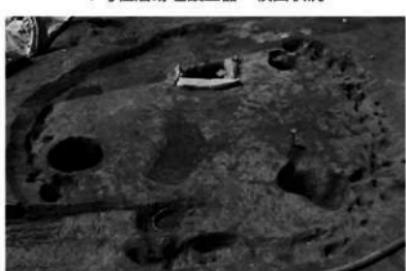
1号住居跡炉跡 完掘状況



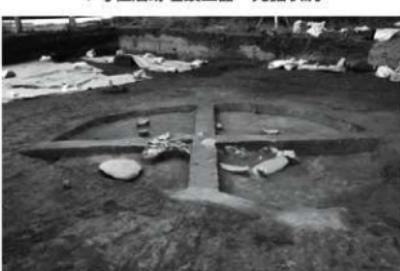
1号住居跡埋設土器 検出状況



1号住居跡埋設土器 完掘状況



1号住居跡 完掘状況（南から）



4号住居跡 土層断面（南北ベルト）

写真図版 3



4号住居跡 ピット検出状況



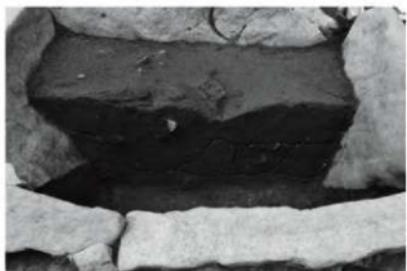
4号住居跡 完掘状況



4号住居跡 遺物出土状況



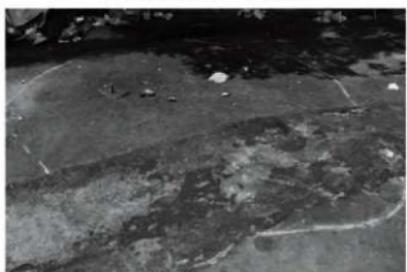
4号住居跡炉跡 検出状況



4号住居跡炉跡 半裁状況



4号住居跡炉跡 完掘状況



5号住居跡・8号住居跡 検出状況

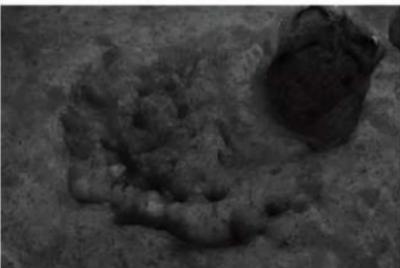


5号住居跡 遺物分布状況

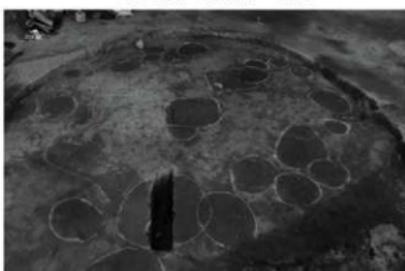
## 写真図版 4



5号住居跡 遺物出土状況



5号住居跡炉跡 完掘状況



5号住居跡 ピット検出状況



5号住居跡炉跡 完掘状況



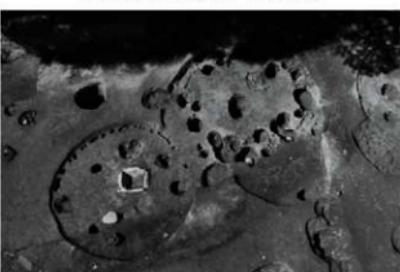
5号住居跡埋設土器 検出状況



5号住居跡埋設土器 完掘状況



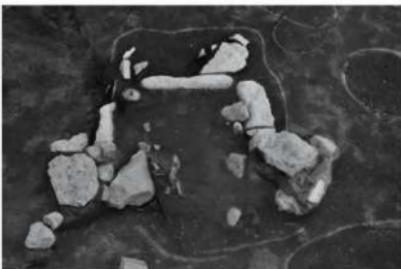
5号住居跡ピット内遺物 出土状況



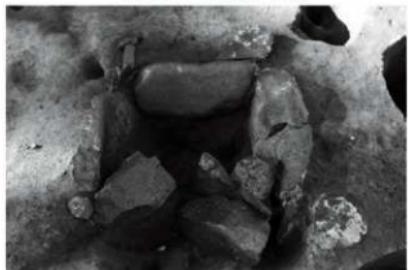
5号住居跡周辺 空中撮影



6号住居跡 遺物出土状況



6号住居跡炉跡 检出状況



6号住居跡炉跡 完掘状況



6号住居跡 完掘状況



7号住居跡 遺物出土状況

写真図版 6



7号住居跡 遺物出土状況



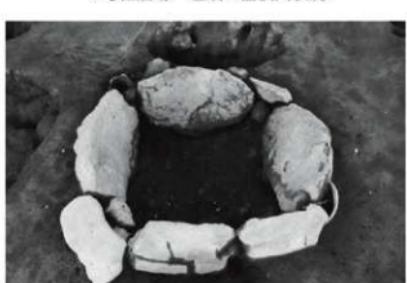
7号住居跡炉跡 壁面土層



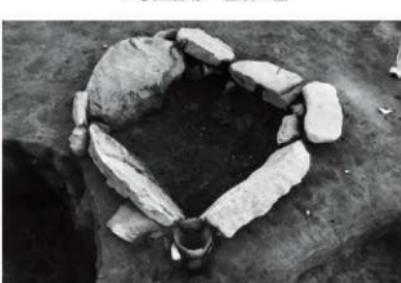
7号住居跡 埋設土器検出状況



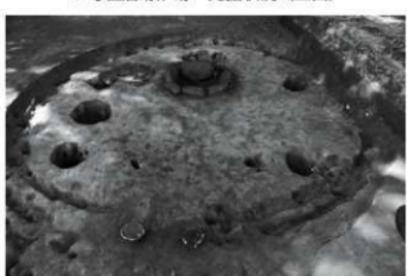
7号住居跡 埋設土器



7号住居跡炉跡 完掘状況（正面）



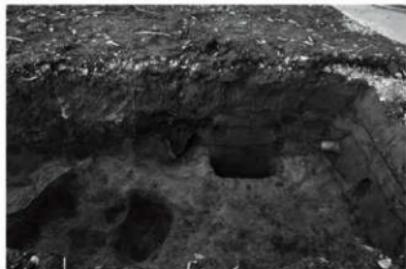
7号住居跡炉跡 付設土器



7号住居跡 完掘状況



7号住居跡周辺 空中撮影



9号住居跡 完掘状況



9号住居跡 埋設土器



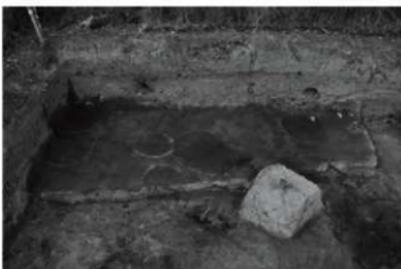
10号住居跡 検出状況



10号住居跡 完掘状況



11号住居跡 水煙文把手土器



11号住居跡（1～7号土坑）検出状況



11号住居跡 完掘状況



12号住居跡 完掘状況

写真図版 8



12号住居跡炉跡 完掘状況



13号住居跡 遺物出土状況

外構 B 区地点 完掘状況



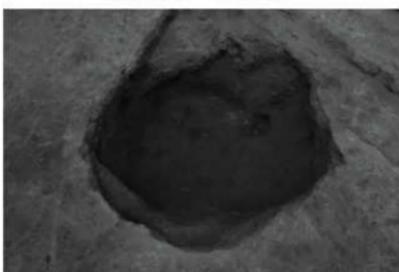
外構 B 区 2号土坑



外構 C 区 4・5号土坑



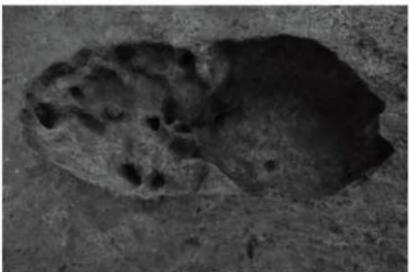
外構 C 区 地点 完掘状況



18号土坑 完掘状況



30号土坑 遺物出土状況



30号土坑 完掘状況



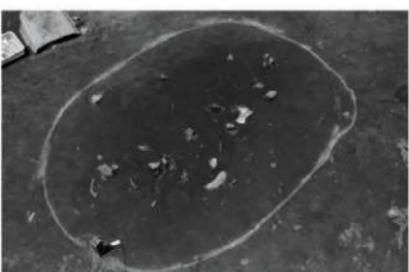
31号土坑 集石検出状況



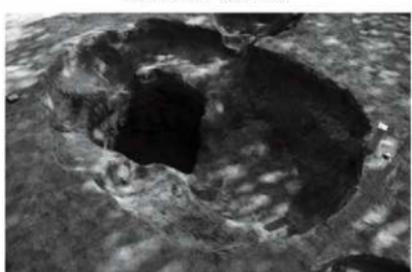
31号土坑 遺物出土状況



33号土坑 完掘状況



34号土坑 検出状況



34号土坑 完掘状況



41号土坑上層 遺物出土状況

写真図版 10



43号土坑周辺 完掘状況



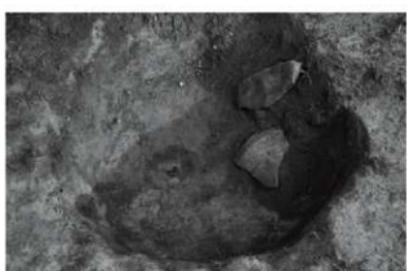
53号土坑周辺 完掘状況



56号土坑 遺物出土状況（北西から）



56号土坑・57号土坑



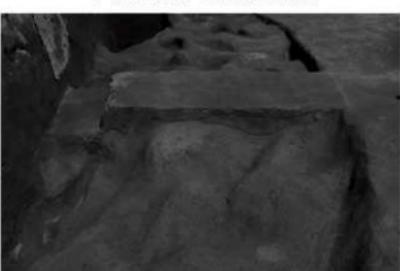
63号土坑 遺物出土状況



1号竪穴遺構 遺物出土状況



1号竪穴遺構 完掘状況



2号竪穴遺構



発掘調査風景



R Cヘリ空中写真撮影



発掘体験セミナーの開催



遺跡見学会の開催



給水管工事立会 追加調査の実施



ケヤキ抜根作業立会 追加調査の実施

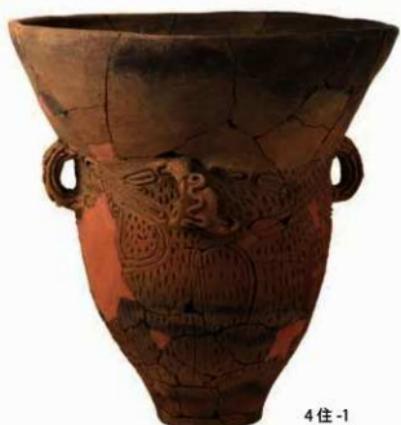


電気配管埋設工事立会 14号住居跡の調査



14号住居跡 遺物出土状況

写真図版 12



4住-1



1住-1

1住-2

4住-4

4住-2

5住-2



5住-1



5住-7

5住-9

5住-10

写真図版 13



5住-11



7住-1



7住-2



7住-5



7住-6



7住-7



7住-8



7住-10



7住-31



9住-1



9住-2

写真図版 14



10 住-1



12 住-1



12 住-2



11 住-1



13 住-1



14 住-1



31 土-15



33 土-37



56 土-107



56 土-108



56 土-109



土偶 1



土偶 2



ミニチュア土器 3



ミニチュア土器 5



ミニチュア土器 6



土製品 15



土製品 16



54



55



76



79



80



56



62



108



109



110



111



1



2



3



112



113

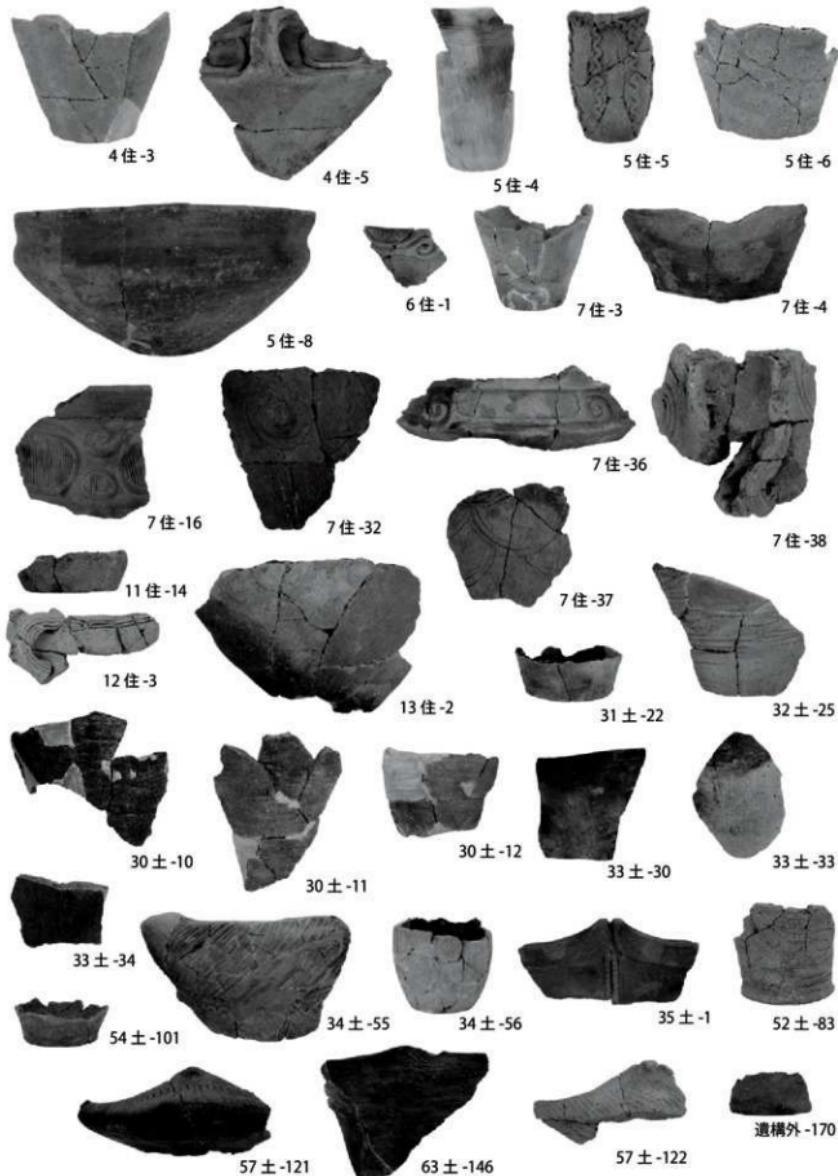


4

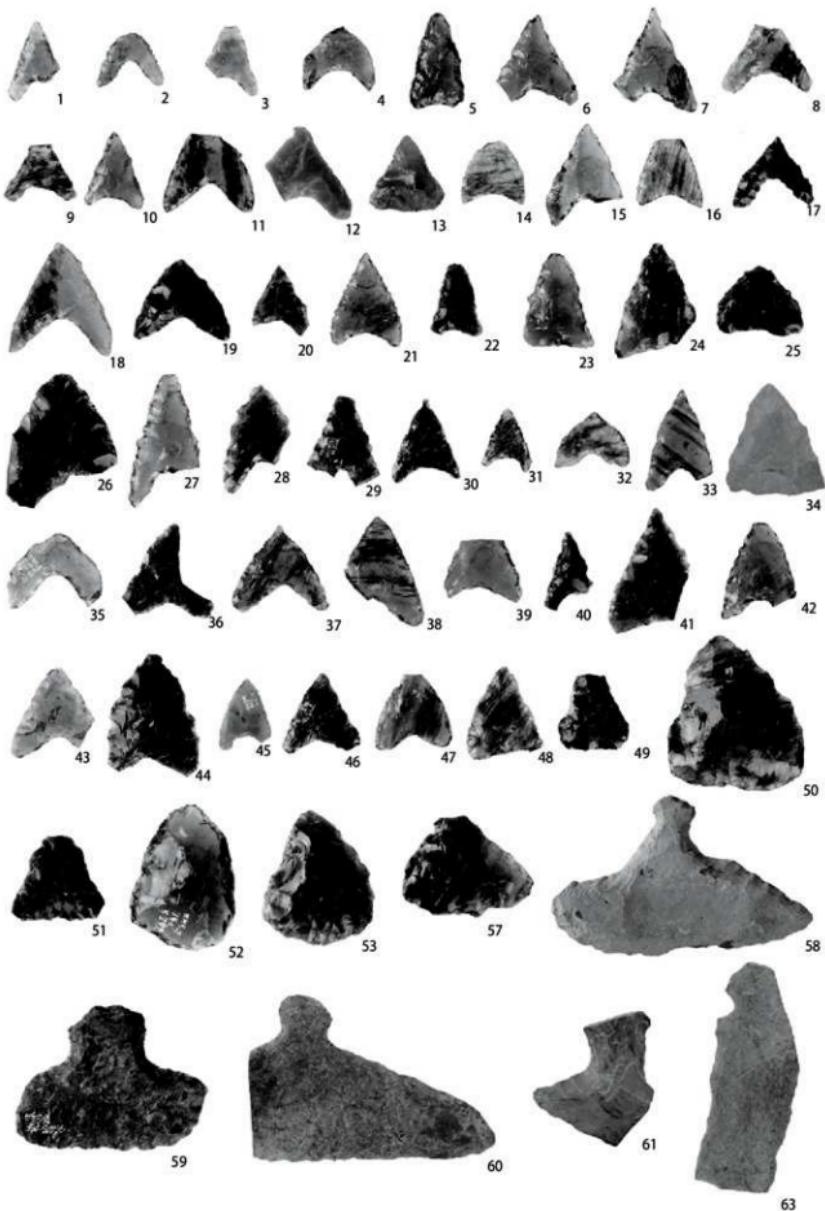


5

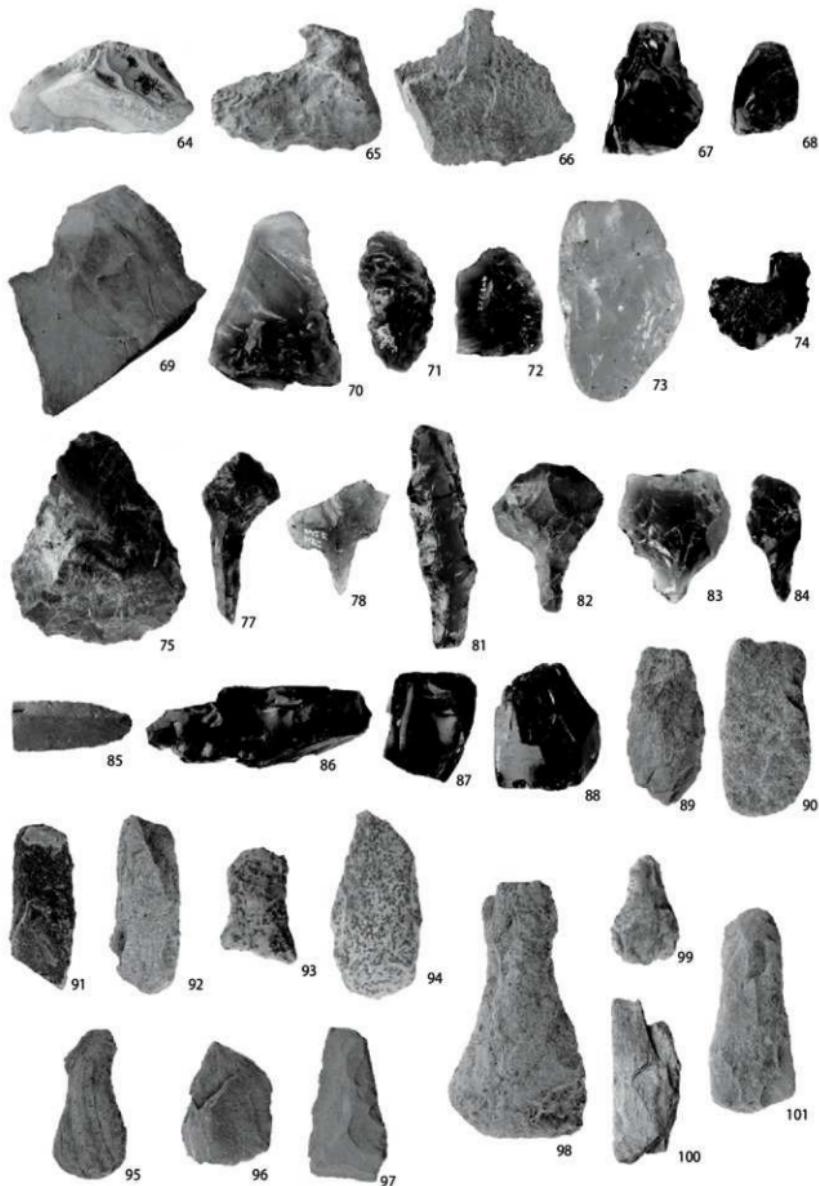
写真図版 16



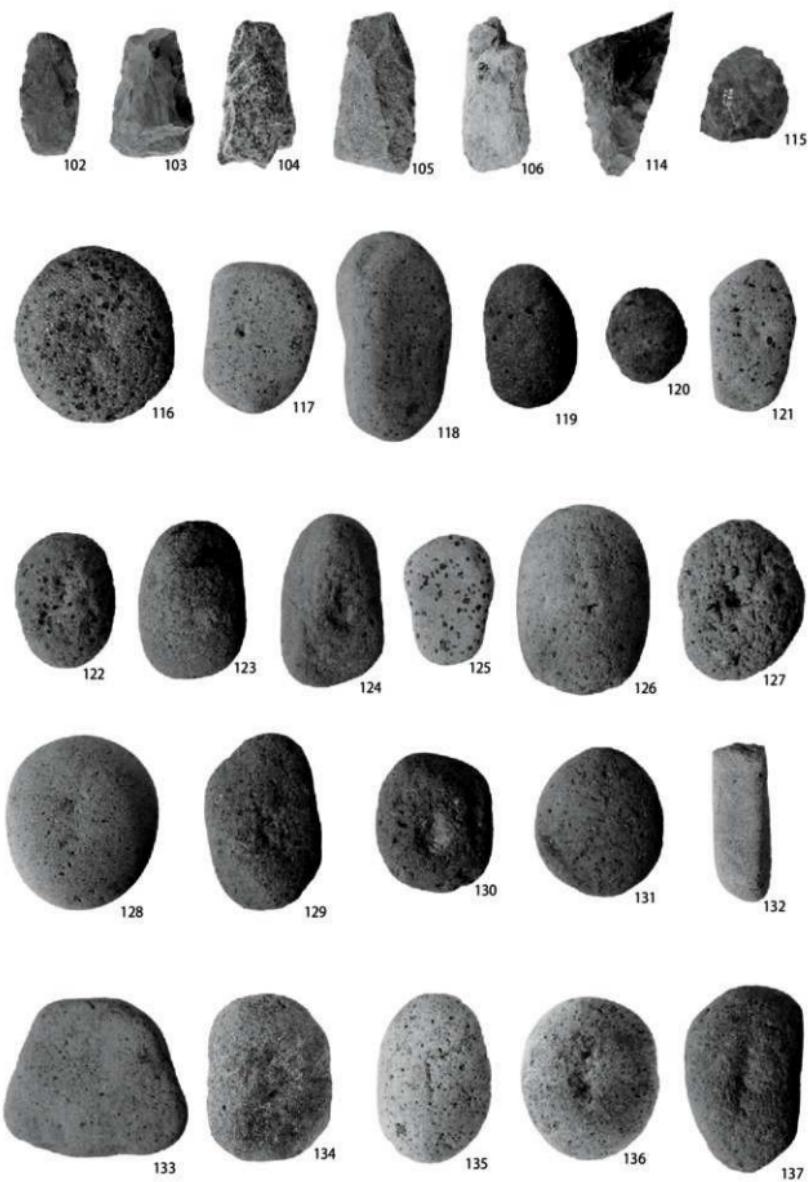
写真図版 17



写真図版 18

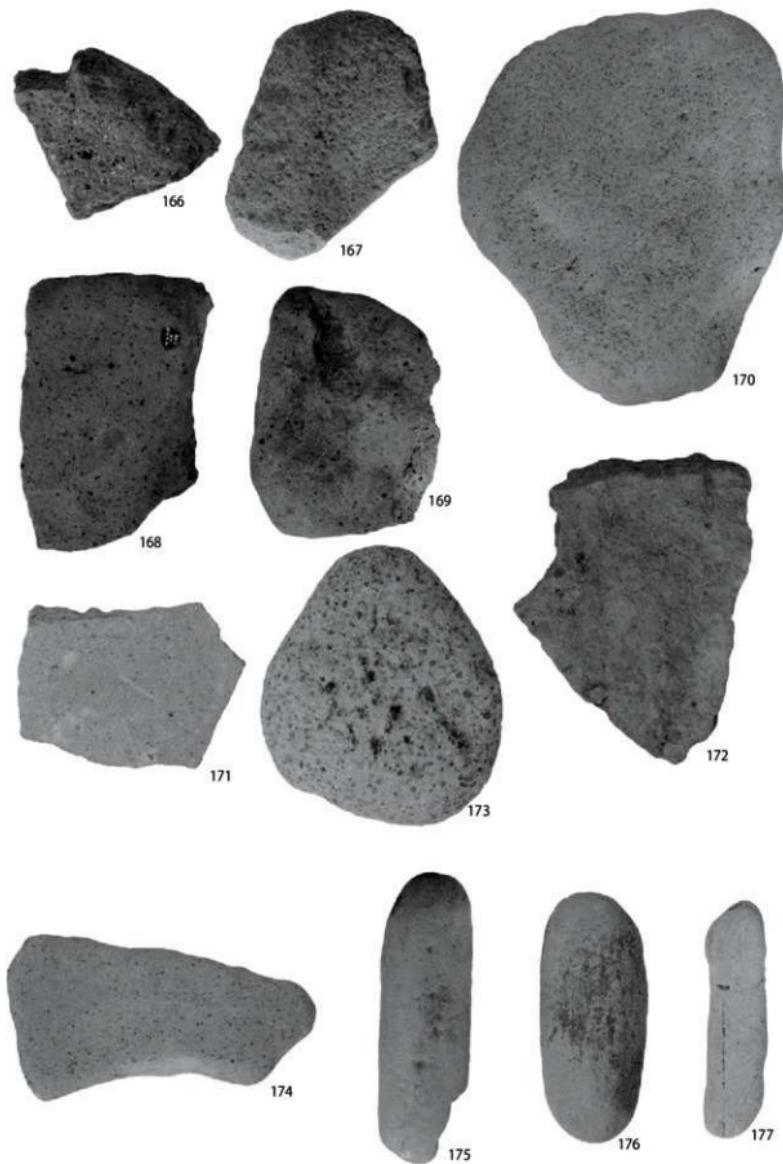


写真図版 19



写真図版 20



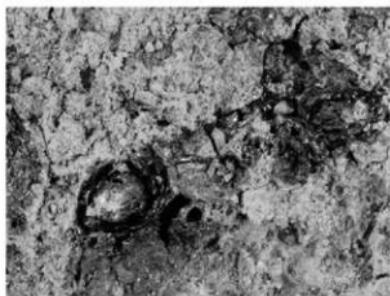


写真図版 22



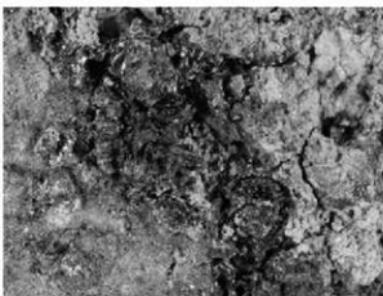
近接撮影

2cm



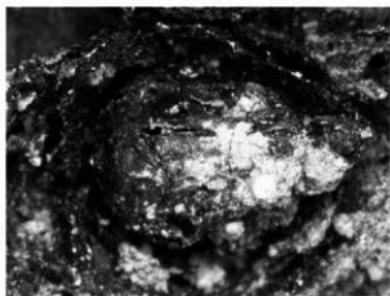
近接撮影

5mm



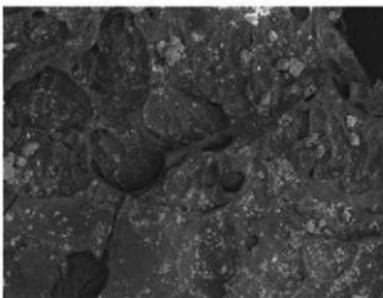
近接撮影

5mm



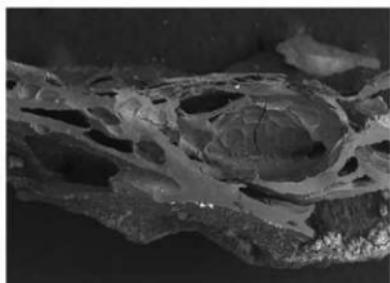
マイクロスコープ像

1mm



電子顕微鏡像

0.5mm



電子顕微鏡像

0.5mm

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	さけのみばいせき（だい5じ）							
書名	酒呑場遺跡（第5次）							
副書名	畜産酪農技術センター長坂支所施設等整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第320集							
編著者名	熊谷晋祐・岩永祐貴・浅川一郎・パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL055-266-3016							
発行機関	山梨県教育委員会・山梨県農政部							
発行日	2019年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さけのみばいせき 酒呑場遺跡	山梨県北杜市長坂町長坂上条621-2	19209	4-102	35° 48' 58"	138° 22' 16"	20170509 ～ 20170922 追加立会調査あり	474m <sup>2</sup>	建物
	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
	集落跡	縄文時代	縄文時代前～中期の住居跡12軒。竪穴遺構2基、縄文時代の土坑89基			縄文時代前期後半～中期後葉の土器・石器・土製品（土器・土製円盤・ミニチュア土器など）・石製品（装飾品など）	第5次調査。縄文時代中期後半：曾利式期の環状集落の一部を調査。炉石に付着した黒色物の分析を実施。	
要約	<p>酒呑場遺跡は、北杜市長坂町長坂上条に位置する遺跡で、これまでに当センターでは4回の発掘調査を行っている。今回は、遺跡内に位置する畜産酪農技術センター長坂支所の施設等整備事業に伴うもので、第5次調査となる。過去の調査では10,000m<sup>2</sup>以上が調査され、縄文時代前中期から中期にかけての大集落を形成していること判明していたが、今回の調査においても集落域の継続を確認し、その広がりが分かるようになった。</p> <p>調査で検出された竪穴住居跡は12軒。竪穴状遺構2基。土坑89基となり、住居跡は中期後葉の曾利式期が多く、土坑は曾利式期のものが大半である。曾利式期の5軒の住居跡からは、良好に残存する石器が見つかり、そのうち2基はかに小型の土器を付設する特殊なものであった。また、4軒の住居跡からは土器埋設遺構が見つかり、うち1基は大型の長胴瓶を逆位で埋設するものである。多数見つかった土坑のうちのいくつかは、墓坑の可能性がある。曾利式最終段階に位置付ける土坑の一つからは、ほとんど完形の深鉢が3個出土した。</p> <p>過去の調査資料の再整理等を含め、曾利式期の集落の広がりや変遷について考えていく必要がある。</p>							

### 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第320集

## 酒呑場遺跡（第5次）

畜産酪農技術センター長坂支所施設等整備事業に伴う発掘調査報告書

印 刷 2019年3月7日

發 行 2019年3月15日

編 集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055-266-3016

maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

發 行 山梨県教育委員会・山梨県農政部

印 刷 株式会社 峡南堂印刷所

